

内閣府食品安全委員会事務局
平成16年度食品安全確保総合調査

食品の安全性に係るリスクコミュニケーション等に関する調査

報告書

平成17年3月

 UFJ総合研究所

〔目次〕

I. 調査の背景と目的	1
1. 調査の背景と目的.....	1
2. 調査事項.....	1
(1) カナダやオランダにおけるリスクコミュニケーションの事例等を把握するための調査.....	1
(2) リスクコミュニケーションの効果・検証に関する調査.....	2
II. カナダやオランダにおけるリスクコミュニケーションの事例等を把握するための調査	3
1. 国際ワークショップの運営、助言の取りまとめ.....	3
(1) はじめに.....	3
(2) 国際ワークショップの開催目的.....	3
(3) 参加者.....	4
(4) プログラム.....	6
(5) 国際ワークショップにおける主な議論.....	7
(6) 提言.....	10
2. 「現状と課題」についての諸外国有識者からのコメントの取りまとめ等.....	19
(1) はじめに.....	19
(2) コメント概要.....	20
(3) 各有識者からのコメント.....	22
III. リスクコミュニケーションの効果・検証に関する調査	26
1. BSE、鳥インフルエンザ発生時の国民の消費行動の把握.....	26
(1) はじめに.....	26
(2) 調査方法.....	26
(3) 調査結果.....	29
(4) 考察.....	60
2. 意見交換会におけるアンケート調査の企画、設計.....	63
(1) はじめに.....	63
(2) 各調査項目の設定とその目的.....	63
(3) 調査票.....	64
3. 鳥インフルエンザ発生に伴う社会的影響の定量化.....	67
(1) はじめに.....	67
(2) 分析方法.....	67
(3) 分析結果.....	71
(4) 考察.....	78
(5) 引用文献.....	78
IV. おわりに	79

V. 資料編	81
1. BSE、鳥インフルエンザ発生時の国民の消費行動の把握	81
(1) インターネットアンケート調査票	81
(2) 自由回答	87
(3) クロス集計	100
2. 意見交換会におけるアンケート調査の企画、設計	202
(1) アンケート調査結果	202
3. 国際ワークショップの運営、助言の取りまとめ	204
(1) 傍聴者からのコメント（リスクコミュニケーション専門調査会 三牧国昭 委員）	204
4. 「現状と課題」についての諸外国有識者からのコメントの取りまとめ等	207
(1) 「現状と課題」（英文）	207

1. 調査の背景と目的

1. 調査の背景と目的

平成15年7月の食品安全基本法施行後、食品安全委員会においては、これまでにリスクコミュニケーション専門調査会（以下、「専門調査会」という）における審議等をまとめた「食の安全に関するリスクコミュニケーションの現状と課題」（以下、「現状と課題」という）を作成したほか、全国各地で消費者や食品関連事業者等を対象とした意見交換会を実施してきているところである。しかしながら、これらの取組は我が国として初めての試みであり、その実施に際しては、リスクコミュニケーションの効果的な実施方法の検討やその効果検証が必要と考えられる。

そこで、本調査では、海外におけるリスクコミュニケーションの事例等を把握すると共に、リスクコミュニケーションの効果検証を行うことを目的とする。

2. 調査事項

(1) カナダやオランダにおけるリスクコミュニケーションの事例等を把握するための調査

①国際ワークショップの運営、助言の取りまとめ

海外有識者と国内有識者を招き、「現状と課題」を検討材料とし、各有識者から我が国における食品安全のリスクコミュニケーションに関する提言を取りまとめた。

具体的には、カナダ、オランダからリスクコミュニケーションの担当者を招き、我が国のリスクコミュニケーションの有識者を交え、各国のリスクコミュニケーションの現状及び課題について意見を交換する「食品安全のリスクコミュニケーションに関する国際ワークショップ」（以下、「国際ワークショップ」という）を開催した¹。

国際ワークショップでは、「現状と課題」の内容に沿って、各国のリスクコミュニケーションの現状と課題、リスクコミュニケーションの方法、これまで実施されてきたリスクコミュニケーションの各国間での相違や成功事例、失敗事例とその原因なども含め、各有識者の知見や経験に基づいて各国の意見を取りまとめ、「現状と課題」の各項目等を参考としながら、今後の我が国における食品安全のリスクコミュニケーションに関する提言を取りまとめた。

¹ 対象国は、我が国において国民の関心が高いBSEや鳥インフルエンザの発生の経験を有するカナダとオランダとした。

②「現状と課題」についての諸外国有識者からのコメントの取りまとめ等

「現状と課題」の本文及び参考資料の英語翻訳を行い、諸外国有識者から「現状と課題」に対するコメントを取りまとめた。

(2) リスクコミュニケーションの効果・検証に関する調査

①BSE、鳥インフルエンザ発生時の国民の消費行動の把握

我が国においてインターネットによるアンケート調査を行った。その際、BSE、鳥インフルエンザ発生に伴う国民の消費行動及びその行動の原因が特定できるように集計、分析を行った。

②意見交換会におけるアンケート調査の企画、設計

食品安全委員会が行うリスクコミュニケーションの効果を検証するために、今年度実施予定の意見交換会において実施するアンケート調査を企画、設計した。その際、意見交換会の出席によって出席者の理解度、信頼度がどのように変化したのかを特定できる調査票を作成した。

③鳥インフルエンザ発生に伴う社会的影響の定量化

2004年に国内で発生した鳥インフルエンザに関して、食品の安全性の観点から計量モデルビルディングするとともに、鶏卵、鶏肉の価格及び数量等経済データを用いて計量経済分析を実行し、鳥インフルエンザ発生における社会的影響の定量化を行った。定量化にあたっては、金額ベースで把握することとし、その金額については、①のアンケート調査等を活用し、リスクコミュニケーションによって抑制できる金額・割合等を推計した。

II. カナダやオランダにおけるリスクコミュニケーションの事例等を把握するための調査

1. 国際ワークショップの運営、助言の取りまとめ

(1) はじめに

平成 17 年 1 月 26 日から 28 日にかけて、カナダ、オランダからリスクコミュニケーションの担当者を招き、我が国のリスクコミュニケーションの有識者を交え、各国のリスクコミュニケーションの現状及び課題について意見を交換する国際ワークショップを開催した。以下では、国際ワークショップの開催内容及び我が国における食品安全のリスクコミュニケーションに関する提言の取りまとめ結果について示す。

(2) 国際ワークショップの開催目的

国際ワークショップの主な目的は、「①リスクコミュニケーションの実施方法（理論と実践）」、「②BSE/鳥インフルエンザの経験を踏まえ、今後どのような取組を我が国（食品安全委員会）が実施すべきか」の 2 点について議論を行い、我が国に対する提言としてとりまとめることである。

(3) 参加者

有識者及び傍聴者のリストは以下に示すとおりである。国際ワークショップでは、これら 5 名の有識者を中心に取組事例の紹介や提言策定に向けた討論が行われた。また、多数の傍聴者からも、積極的な発言があり、それにより有用な議論が展開された。

図表 1：国際ワークショップ 参加者（有識者）

■有識者

<Canada> (カナダ)

- Ms. Sandra Lavigne サンドラ ラヴィーン
Executive Director - Public Affairs, Canadian Food Inspection Agency
カナダ食品検査庁 広報部長
- Mr. Steve Malcolm スティーブ マルコム
Special Advisor to the Director General, Food Directorate, Health Products and Food Branch, Health Canada
カナダ保健省 スペシャルアドバイザー

<the Netherlands> (オランダ)

- Ms. Irene E. van Geest-Jacobs イレーネ E ファンヘースターヤコブ
Director of Communication and Information, The Dutch Food and Consumer Product Safety Authority
オランダ食品・消費者・製品安全機関 コミュニケーション・情報部長

<Japan> (日本)

- Prof. Shoji Tsuchida 土田 昭司
Professor, Department of Psychology, Faculty of Sociology, Kansai University
関西大学社会学部社会学科 産業心理学専攻 教授
- Mr. Masamichi Saigo 西郷 正道
Director, Risk Communication, Food Safety Commission, Cabinet Office, Japan
内閣府食品安全委員会事務局 リスクコミュニケーション官

[司会者]

- Dr. Rhohei Kada (Coordinator) 嘉田 良平
Adviser & Principal of Policy Research & Consulting Division, UFJ Institute Ltd.
株UFJ 総合研究所 顧問、放送大学客員教授、女子栄養大学客員教授

図表 2 : 国際ワークショップ 参加者 (傍聴者)

■傍聴者

- Canadian Embassy カナダ大使館
- Dutch Embassy オランダ大使館
- Commissioners of Food Safety Commission 食品安全委員会委員
- Members of Risk Communication Expert Committee, Food Safety Commission
リスクコミュニケーション専門調査会専門委員
(石崎 美英 氏、唐木 英明 氏、吉川 肇子 氏、三牧 国昭 氏)
- Ministry of Health, Labor and Welfare, Japan 厚生労働省
- Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries, Japan 農林水産省
- Food Safety Commission Secretariat 食品安全委員会事務局

(4) プログラム

国際ワークショップのプログラムは以下に示す通りである。

平成 17 年 1 月 26 日には、国際ワークショップ事前ミーティングとして、食品安全委員会事務局から、「食品安全委員会におけるリスクコミュニケーションへの取組と今後の課題」と題した報告が行われた。

平成 17 年 1 月 27 日には、第 1 セッション「欧米諸国に学ぶ」、第 2 セッション「日本の課題を点検する」が開催され、カナダ、オランダ及び国内の各有識者からの報告が行われた。また、各有識者からの報告の後、提言策定に向けた論点整理を行うための総合討論が行われた。

平成 17 年 1 月 28 日には、さらにポイントを絞り議論を進め、提言を取りまとめた。

図表 3：国際ワークショップ プログラム

■2005（平成 17）年 1 月 26 日（水） 国際ワークショップ事前ミーティング

- ・ 食品安全委員会におけるリスクコミュニケーションへの取組と今後の課題～「食の安全に関するリスクコミュニケーションの現状と課題」について～（食品安全委員会事務局）

■2005（平成 17）年 1 月 27 日（木） 国際ワークショップ 1 日目

- ・ 第 1 セッション 欧米諸国に学ぶ（カナダ、オランダ）
- ・ 第 2 セッション 日本の課題を点検する（日本）
- ・ 総合討論（論点整理）

■2005（平成 17）年 1 月 28 日（金） 国際ワークショップ 2 日目

- ・ 第 3 セッション 提言策定

(5) 国際ワークショップにおける主な議論

国際ワークショップにおける主な議論は以下に示す通りである。

①国際ワークショップ事前ミーティング

食品安全のリスクコミュニケーションに関する日本の現状と課題についての報告及び、意見交換が行われた。

【主なポイント】

- ・ 日本における食品の輸入量及びその種類は増加傾向にある。食品安全問題についても、国内だけでなく、より国際的な取組を必要としている。
- ・ 日本における食品安全のリスクコミュニケーションは、BSE への政府の不適切な対応等が消費者の間に不信を募らせたことに端を発している。
- ・ 日本におけるリスクコミュニケーションは、未だに人々の理解を促進したり、助けるまでには至っていない。最優先事項の一つは、人々の食品安全行政の制度・政策に対する不信感をいかに取り除くかにある。
- ・ しかしながら、こうした不信感の背景には、食品はゼロリスクでなければならず、政府はゼロリスクを保証する義務があるといった考え方が、消費者の間に根強く存在していることがある。
- ・ 現在、各国（日本、カナダ、オランダ）では、共通または類似したリスクコミュニケーション上の諸問題を抱えている。

②国際ワークショップ1日目

各国における食品安全のリスクコミュニケーションへの取組状況、リスクコミュニケーションに対する社会心理学からのアプローチ等の報告及び、意見交換が行われた。

【主なポイント】

- ・ カナダ政府では、一般の人々にはインターネットサイトやパンフレット（高校生レベル）を用い、また、コンピュータをあまり使用しないような老人や子供などハイリスクな集団には、特別な教育プログラムや専用のパンフレットを作成し、情報を提供している。
- ・ ニュースリリースはインターネットサイトも同じタイミングで行っており、毎日更新されている。あわせて、肉類の消費量が増加するクリスマス直前のように、特にリスクが高まる時期にキャンペーンを実施している。
- ・ マスコミ対応能力が高く、科学的知識を持ち合わせており、高い信頼のおけるスポークスパーソンを確保することが重要である。カナダでは、専門の訓練を受けた科学者がスポークスパーソンを務めている。オランダやEFSAでは、リスクコミュニケーションの専門家が情報提供を行っている。
- ・ 信頼はリスクコミュニケーションを成功させるために、最も重要な要素のひとつ

である。カナダ政府は、カナダ国民とマスコミとの間に友好的な関係を築いている。

- ・ ステイクホルダーが十分に組織化されていれば、それらの意見はまとまりやすい。
- ・ オランダの食品安全政策は EU 委員会が実施している政策の枠組みにほとんど準拠しているが、一割程度はオランダ独自の対策が実施されている。鳥インフルエンザ発生時におけるリスクコミュニケーションでは、政府は、①リスクに関わる科学的な説明、②ターゲットグループの絞り込み、③政府及び産業界が行うリスク管理の内容説明を中心に特に力点をおいた。
- ・ リスクコミュニケーションとは、国民と行政の認識の差を埋めることである。科学的知識をわかりやすい言葉で伝えることが重要である。消費者は彼ら自身の“Rationality(合理性)”を持っており、正しい情報提供が行われなかった場合に、“Emotional(感情的)”になる。
- ・ カナダでは最近、“It’s Your Health”という非常に分かりやすい一般向けパンフレットを発行し、食品安全のみならず栄養・健康、公衆衛生など幅広く、最先端の科学的知識を国民に提供した。

③国際ワークショップ2日目

前日までのプレゼンテーションや議論を踏まえて、今後我が国におけるリスクコミュニケーションのあり方について、特に信頼、評価、方法論、国際協力の4つの視点から、提言策定に向けて集中的な議論が行われた。

1) 信頼

- ・ 食品安全政策において、政府が行うリスクコミュニケーションに対する国民の信頼性の高さは非常に重要な点である。
- ・ 信頼は、適切な対応を取っていかなかった場合、容易に損なわれるが、取り戻すには多大な努力と労力が必要である。
- ・ 日本の場合、消費者の食品安全や科学の信頼性への基本的考え方、文化的歴史的な背景の違いなどにより、特にこの点がカナダおよびオランダの場合と大きく異なっていると思われる。
- ・ 政府に対する信頼は、政策形成プロセスの透明性の確保とパラレルである。科学的事実にもとづくコミュニケーションの大切さと合わせて、透明性を高める努力をすべきである。

2) 評価

- ・ カナダ、オランダでは定期的に世論調査やモニタリングを実施し、効果を計測している。
- ・ しかし、現段階において、リスクコミュニケーションの成果を客観的・定量的に評価するための手法はまだ十分に確立されていない。

- ・ 今後、さらに諸外国でどのような評価の仕方がなされているのかを学ぶことは重要である。

3) 方法論

- ・ リスクコミュニケーションをどう進めるべきかについては、各国間の文化的歴史的な背景の違いもあり、海外の事例が日本でそのまま使えるということではない。
- ・ しかし、このワークショップにおける共通項として、日本が手法を学ぶべき点もかなり明らかにされた。
- ・ 特に、信頼のおける科学的な情報の開示に象徴される、クライシス発生直後の適切な対応や、普段からの事前準備の重要性、コミュニケーター育成のためのトレーニングプログラムの作成等において、カナダおよびオランダから学ぶ点が多々あることが明らかになった。
- ・ 両国の成功は、クライシスコミュニケーションというかたちで、クライシスチームの瞬時の立ち上げと、専門家（科学者）、関係業界、生産者に対する働きかけ、そして、消費者への食品安全に関わるリスクコミュニケーションの適切な対応の仕方にあつたと思われる。
- ・ 大切なことは、単なる心づもりだけではなくて、シミュレーションを実際に行うなど、具体的な危機管理のための体制作りの準備を行うことである。
- ・ また、ターゲットとして情報交換すべき消費者とは一体誰なのか、消費者団体のみならず、サイレントマジョリティーを含めた一般の消費者に向けて、どのような情報を提供することが効果的なのかを明らかにすることが重要である。

4) 国際協力

- ・ 1月の第4週にカナダのポール・マーティン首相が来日し、小泉日本国総理大臣及びマーティン・カナダ首相による共同声明（平成17年1月19日（於：東京））が発表された。
- ・ この中で、食品安全について、日加両国が今後協力しあうという合意がなされた。時期を同じくして本ワークショップが開催されたことは非常に意義深い。
- ・ これを機に、今後は、各国がリスクコミュニケーションに関わる調査研究を、可能な限り共通の土俵のもとに遂行していくことが重要である。特に、リスクコミュニケーションの手法、リスクの認知の方法、リスクコミュニケーションの評価のあり方等について、共同研究を行うことは、各国のリスクコミュニケーションの向上に有用であると考えられる。
- ・ 3月末にはカナダでリスクコミュニケーションの国際会議が予定されており、是非日本も参加していただけることを期待している。
- ・ EUでも、リスクコミュニケーションの向上を目指し、ワークショップを行っており、機会があれば、カナダ、日本にもオブザーバーとして参加して欲しい。
- ・ リスクコミュニケーションは食の安全に関するリスク分析の中でも、課題の多い

分野であるため、今後、試行錯誤の中で、新たな知見を蓄積しなければならない。

- ・ このことに関して、3 カ国間で共通の認識が得られた。日本も両国と協調しながら、このテーマに取り組んでいくことが重要である。

(6) 提言

以上の議論を経て、我が国における食品安全のリスクコミュニケーションに関する提言の取りまとめを行った。その取りまとめ結果を次頁以降に示す。

①提言（和文）

食品安全のリスクコミュニケーションに関する国際ワークショップ

[各国担当者・専門家からの提言]

本ワークショップでは、カナダとオランダにおける BSE あるいは鳥インフルエンザでの経験を踏まえて、我が国のリスクコミュニケーションにおいて今後どのような取組みがなされるべきかについての議論が行われ、実際にリスクコミュニケーション業務に携わる担当者や専門家から数多くの提言をいただいた。

以下はそれらの提言について、1. 信頼、2. 評価、3. 方法論、4. 国際協力という4つの側面からとりまとめたものである。

1. 信頼

- 1) 消費者（一般国民）と政府、事業者との間における相互の信頼は、食品安全のリスクコミュニケーションを成立させる上で最も重要な要素のひとつである。関係者間の信頼関係が確保されなければ、コミュニケーションは成立せず、一度失われた信頼を取り戻すためには、非常に膨大な労力と時間を要する。これまで我が国では、リスクコミュニケーションは、意見交換会等の時間的制約などにより一方的な情報提供となることが多く、そのために消費者が科学的な情報を分かりやすい表現で受容し、互いの立場を踏まえ、意見を交換し、理解する手段としての機能を果たしてきたとは言い難い。消費者の食品安全への信頼を回復させるためには、対話型で、透明性が高く、様々なステイクホルダーが参画可能なリスクコミュニケーションのあり方について、さらに具体的に検討すべきである。
- 2) 我が国における消費者の食品安全行政に対する不信感の背景として、過去の食品安全に関する問題への行政の不適切な対応への不満や、「食品は絶対安全でなければならない」あるいは「政府はゼロリスクを保証する義務がある」という考え方が根強く存在していることが考えられる。そのため、リスク分析に基づく考え方の浸透が、我が国では特に重要である。今後、多面的な角度からの検証と対応策の具体化が必要である。
- 3) 消費者の政府に対する信頼を規定する要因として、“専門性”、“共感性”、“透明性”、“独立性”が重要である。特に、科学的事実に基づくリスク評価の結果とその意味について、信頼におけるスポークスパーソン（広報担当者）から、分かりやすい表現で速やかに情報提供を行うこと、及び、政策決定プロセスにおいては国民の健康保護を最優先とし、透明性を可能な限り高めることは特に重要である。また、共感性の向上に努めることも重要である。

2. 評価

- 1) 現段階において、食品安全に係わるリスクコミュニケーションの成果を客観的・定量的に評価するための手法はほとんど確立されていない。諸外国においてどのような評価がなされ、また、評価結果がどのように活用されているのかについて早急に調査分析を行う必要がある。
- 2) これまで行われてきたリスクコミュニケーションの影響と効果について、説明用パンフレットの配布数、ウェブサイトへのアクセス数、相談電話窓口への問い合わせ内容や頻度、意見交換会等で行ったアンケートの分析結果などをもとに、可能な限り定量的な分析を試みるべきである。
- 3) 今日、食品安全の分野においてもメディアの影響力は非常に大きい。オランダでは、3ヶ月ごとに第三者機関に依頼して、食品安全に係わる報道の伝わり方と影響についてメディア分析を行い、それをリスクコミュニケーションに有効に活用しており、我が国においても参考になると考えられる。
- 4) 消費者を対象とする各種世論調査あるいは食品安全に関するアンケート等において、食品安全への関心の程度、理解度、消費者行動などについて質問を行うことによって、より迅速かつ効果的なリスクコミュニケーションのあり方について検討すべきである。

3. 方法論

- 1) 文化的・歴史的な背景の違いのために、諸外国のリスクコミュニケーション手法を日本に直接導入するのは困難であるが、学ぶべき点も少なくない。特に、信頼のおける科学的な情報を開示する手法、クライシス（危機）発生直後の適切な対応の仕方、日常的な危機管理の重要性、コミュニケーター育成のためのプログラムの作成など、カナダ、オランダ両国の経験は参考となる。
- 2) カナダ、オランダ両国におけるリスクコミュニケーション成功の要因として、「i. 事件発生直後におけるクライシスチームの瞬時の立ち上げ」、「ii. 専門家（科学者）、関係業界、生産者に対する働きかけ」、「iii. 消費者への食品安全に関する適切な情報提供」などを挙げる事ができる。この準備過程において、単なる啓蒙作業にとどめるのではなく、シミュレーション（模擬実験）を実際に行うなど、具体的な危機管理のための体制作りと周到な準備を行うことが重要である。例えば、鳥インフルエンザの発生直後、オランダ政府が「リスクに関する科学的な説明」、「ターゲットグループの絞り込み」、「政府及び産業界が行うリスク管理についての分かりやすい内容説明」に特に力点をおいたことは参考になる。

- 3) 一般に、どのような食品事故（ハザード）がクライシスへと拡大するのかを事前に予測することは困難である。ただし、事故発生直後の初期対応、特に第一報の情報伝達が正確かつ円滑に行われることが、クライシス拡大の抑制に極めて大きな影響を及ぼすので、食品事故が発生する可能性に備えて、事故発生直後に瞬時に情報提供できるようにQ&Aなどを事前に準備し、いつでもウェブサイト上に立ち上げられるように準備しておくことは有効な手段である。
- 4) 情報が錯綜しがちなクライシス発生時においては、特に確実な情報提供や正確かつ冷静な判断が求められるため、情報提供や判断の質が低下しないように、適切な要員を確保しておくなど、情報を提供する側の体制の整備が必要である。
- 5) 情報を交換すべき「消費者」とは一体誰なのか。それは、消費者団体のみならず、サイレントマジョリティー（表立って意見を言うことのない多数の一般大衆）を含めた一般の消費者である。そこで、主なターゲットグループごとにどのような情報を提供すべきかを明確にする必要がある。例えば、カナダでは、老人や子供などハイリスク集団に対しては、特別な教育プログラムや専用のパンフレットを用い、一般の人々に対しては、ウェブサイトや一般用のパンフレット（中学生、高校生向け）を用いて、情報を提供していることは参考になる。
- 6) カナダ保健省では、食品安全のリスクコミュニケーションの一環として、“It’s Your Health” という非常に読みやすい一般向けのパンフレット・シリーズが発刊され、好評である。このパンフレットでは、食品安全の問題のみならず、栄養・健康、公衆衛生など幅広いテーマを扱っており、最先端の科学的知識が国民にわかりやすく提供されている。
- 7) ウェブサイトやメディアから発信される情報は、日々更新せねばならない。また、情報発信を行う際には、予想されるリスクの大きさと対策の効果を勘案すべきである。例えば、カナダでは、リスクが高まると予想される時期、肉類の消費量が急増するクリスマスの直前などには、特別なキャンペーンを実施している。
- 8) マスコミへの対応能力が高く、科学的知識を持ち合わせた、社会的に信頼性の高いスポークスパーソンを確保することも極めて効果的である。一方で、科学的な内容を平易に説明する技術に長けたコミュニケーションアドバイザーを設置するという方法も有効な手段と考えられる。

4. 国際協力

- 1) 今回のワークショップを機に、今後、各国がリスクコミュニケーションに関わる調査研究を可能な限り共通の土俵のもとに遂行していくことが重要である。特にリスクコミュニケーションの手法、リスク認知・行動予測の方法、リスクコミュニケーションの評価のあり方等について、共同研究を行うことは、各国のリスクコミュニケーションの向上に有効であると考えられる。
- 2) 迅速かつ効果的なリスクコミュニケーションを推進するため、国際的な問題に発展する可能性がある案件については、速やかに各国間で情報交換可能なネットワークを構築することが必要である。
- 3) リスクコミュニケーションは食の安全に関するリスク分析の中でも、立ち遅れてきた分野であるため、今後、試行錯誤しながら新たな知見を蓄積しなければならない。日本はカナダ、オランダ両国と連携しながら、食のリスクコミュニケーションに関する国際的なネットワーク作りを目指すべきである。

②提言 (英文)

International Workshop on Risk Communication in the Field of Food Safety

[Proposals presented by experts and those concerned from respective countries]

In this workshop, intensive discussion was held, specifically focusing on how to improve risk communication in Japan. Based on the experiences of risk communications in the outbreak of BSE and avian flu in Canada and the Netherlands, a number of proposals were presented by experts and those who have experienced in food-related risk communications in those countries.

The following sections seek to provide summary of these proposals in terms of four aspects, trust, evaluation, methodology and international cooperation.

1.Trust

- 1) Mutual trust among consumers (general public), government and industry is one of the most important factors to successfully proceed risk communication in the field of food safety. Without this trust, risk communication would never be functioning. Furthermore in case the trust had been lost by some accident, a huge amount of effort and time would be necessary to regain it. Risk communication in Japan has often been conducted by a one-way provision of information due to insufficient exchanges of views and opinions among stakeholders. As a result, consumers were not able to understand scientific information correctly, nor participate in view exchange meetings for better understanding of the causes and results of food-related risks. In order to regain consumers' trust on food safety, more concrete proposals should be concerned as to realize risk communication, which is dialogue based, transparent and encouraging participant of various stakeholders.
- 2) Distrust among the general public or consumers toward food safety administration in Japan has been generated by such factors as inappropriate countermeasures taken by the administration in the past on the occasion of crisis in food safety and a wide spread belief that "food must be totally safe in any case" or "government must guarantee zero-risk in food". Such attitudes among Japanese consumers should necessarily be altered to adopt way of thinking based on risk analysis. Examination from different angles and specification of countermeasures in food-related risk communications are considered to be urgently needed.

- 3) “Expertise”, “Empathy”, “Transparency” and “Independency” are significant factors which determine the degree of trust among consumers toward government. Particularly, government should be sensitive in the following three respects. First, information as to result and its meaning of risk communication based on scientific facts should be swiftly provided by a reliable person (spokesperson) in understandable words. Second, in political decision making process people’s health should be most prioritized and transparency should be increased as much as possible. Third, government should endeavor to enhance empathy.

2. Evaluation

- 1) The effort for developing objective and quantitative methods evaluating outcomes of risk communication in the field of food safety has not been completed. It is an urgent task for Japan to examine such methods adopted in overseas and how such evaluations are utilized.
- 2) Quantitative analysis as to the influence and effect of risk communication carried out until now should be conducted based on such data as the number of circulated explanatory brochures, the number of website access, content and frequency of telephone consultation and the outcome of analysis of survey circulated in view exchanging meeting.
- 3) Media plays a very significant role in the wide range of food safety in contemporary days. In the Netherlands, in every three months the government asks an independent organization to analyze the effect of broadcasting on food safety and reflects the result on risk communication. Such practice may become a good reference for our government.
- 4) Swift and effective risk communication should be examined and encouraged by utilizing public opinion poll or surveys regarding food safety targeted at consumers (general public), which should investigate degree of interest in food safety, level of understanding and patterns of consumers’ behavior, etc.

3. Methodology

- 1) Because of cultural and historical differences among countries, introduction of methodology of risk communication from abroad may be difficult. However, there are many things to learn. Especially, practices in Canada and the Netherlands are good examples: procedure to publicize reliable scientific information, appropriate countermeasures at outbreak of crisis, daily risk management and launch of programs to educate communicators.
- 2) Three approaches explain success of risk communication in Canada and the Netherlands: “immediate establishment of crisis team at outbreak of crisis”, “involvement of experts (scientists), industries and producers” and “appropriate provision of information on food safety to consumers”. These approaches should not only be enlightening but also include establishment of system for risk management and sufficient preparation through simulation. As a good example, the Government of the Netherlands focused on particularly three aspects at outbreak of avian flu: “scientific explanation on risk”, “specification of targeted group” and “simplicity of explanation on risk management presented by government and industry.
- 3) Generally, it is difficult to find out what type of food hazard results in crisis in advance. The first countermeasure taken at the very outbreak of crisis should determine the degree of damage caused by the crisis. When information passed on swiftly and correctly, the damage diminishes significantly. Therefore, it is very useful to prepare in advance a list of Q&A which could be placed on website and provide information immediately after the food hazard did occur.
- 4) In time of crisis, information tends to become confusing. At that time, definite information and correct and cool judgments are required. Information providers have to be prepared to meet such demands by employing extra staff in order to avoid deterioration of quality of information and judgments.
- 5) Who are real “consumers” who should exchange information with the other stakeholders? Consumers are general consumers including not only consumer groups but also silent majority. Therefore, it is crucial to distinguish content of information according to respective targeted groups. For example, in Canada, special education programs and brochures are distributed to high-risk group like the elderly and children. On the other hand, to the general public, website and general brochures are utilized as information provider.

- 6) The Canadian Ministry of Health publishes a series of brochures, "It's Your Health", targeted at general public as one of tasks in risk communication on food safety. This series of brochures is popular due to clarity of the contents. The brochures deal with a variety of topics such as food safety, nutrition, health and public health, which provides latest scientific knowledge to its people.
- 7) Information emitted from website and media should be updated every minute. In time of transmission of information, size of risk and effectiveness of countermeasures should be estimated. In Canada, special campaigns are conducted during seasons when risk increases. One example is Christmas time during which consumption of meat significantly increases.
- 8) Appointment of spokesperson who is capable of dealing with media, well aware of scientific knowledge and socially reliable is quite effective. Also, employment of communication advisor is considered appropriate since he/she is able to explain scientific content in easy terms.

4. International Cooperation

- 1) From now on, it is desirable for respective countries to carry out research on risk communication within common framework as much as possible. Especially, collaboration in the following fields is beneficial for improvement of risk communication in the countries: methodology of risk communication, processes of risk recognition and behavior estimation, and evaluation of risk communication.
- 2) In order to enhance swift and effective risk communication, creation of network is an urgent task, where information on international issues can be exchanged swiftly among countries.
- 3) Risk communication appears to be lagged behind other areas in risk analysis of food safety. Therefore, accumulation of findings needs to be encouraged through trial and error. Japan should aim at establishing international network of risk communication of food in cooperation with Canada and the Netherlands.

2. 「現状と課題」についての諸外国有識者からのコメントの取りまとめ等

(1) はじめに

「現状と課題」の本文及び参考資料の英語翻訳を行った後、2004年12月～2005年2月にかけて、諸外国等の有識者に対し、英語翻訳を行った「現状と課題」を送付し、コメントを求めた。ここでは、返信のあった以下の9名の各有識者からのコメントを整理する。

図表 4：コメント返信者一覧

有識者氏名	所属・役職
キース・イトウ博士 (Dr. Keith Ito)	UCLREP 食品保存研究所 部長 (Director, Laboratory for Research in Food Preservation, UCLREP)
バルク・フィッシュョフ博士 (Dr. Baruch Fischhoff)	ハワード・ハインツ大 社会・決定科学部・工学・公共政策学部 教授 (Professor, Howard Heinz University, Department of Social & Decision Sciences, Department of Engineering and Public Policy and Social and Decision Sciences)
レイ・ブラッドレー博士 (Dr. Ray Bradley)	BSE コンサルタント、元英獣医学研究所病理部長 (Private BSE Consultant (former-director, department of pathology, Veterinary Laboratories Agency, UK))
スチュアート・マクダイアミド博士 (Dr. Stuart MacDiamid)	ニュージーランド食品基準庁主席アドバイザー (Principal Adviser Zoonosis & Animal Health, Newzealand Food Safety Authority)
ヤノヴィッツィ博士 (Dr. Itzhak Yanovitzky)	ラトガーズ大学 コミュニケーション学部 助教授 (Assistant Professor of Communication, Department of Communication, Rutgers, The State University of New Jersey)
ダニー・マシューズ博士 (Dr. Danny Matthews)	英獣医学研究所 TSE 研究プログラム管理官 (TSE Programme Manager, Veterinary Laboratories Agency)
リン・フリユール博士 (Dr. Lynn Frewer)	ワーヘニンヘン大学マーケティング消費者行動グループ 教授 (Professor, Marketing and Consumer Behaviour Group, Wageningen University)
ゲイリー・スミス博士 (Dr. Gary Smith)	コロラド州立大学 教授 (Distinguished Professor, Department of Animal Sciences, Colorado State University)
味田村 太郎 氏	NHK 科学文化部 記者

(2) コメント概要

各有識者から得られたコメントの概要は以下に示す通りである。

図表 5 : コメント概要 (1)

有識者氏名	主なコメント
キース・イトウ博士	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今後のリスクコミュニケーションにとって最も重要なことは、行政の意見が統一されているかどうか、そして信頼されているかどうかである ・ 特にメディアと行政の間で、信頼関係を構築することが非常に重要である
バルク・フィッシュ博士	<ul style="list-style-type: none"> ・ リスクコミュニケーションの特徴、問題点などを認識し、コミュニケーションネットワークを実証的に評価しながら運用していかなくてはならない
レイ・ブラッドレー博士	<ul style="list-style-type: none"> ・ ドキュメントの後半部分に比べ、前半部分の内容がやや明快ではなかった ・ ドキュメントの方向性を明確にする必要がある ・ BSE 問題に関して、常に新しい情報を得ておくことは有益である
スチュアート・マクダイアミド博士	<ul style="list-style-type: none"> ・ リスクコミュニケーション、リスク分析や各ステイクホルダーの責任と役割に関して、正確に論じられていた ・ リスクコミュニケーションが上手く機能するかどうかは、各ステイクホルダーが信念を持って参加できるかどうかにかかっている
ヤノヴィッツ博士	<ul style="list-style-type: none"> ・ ステイクホルダー間で円滑なリスクコミュニケーションを行うためには、報告されている過去の事例を学ぶことによって、今後起こりうるコミュニケーション上の問題を予測し、それらに対処しうる計画を立てて実行しなければならない

図表 6：コメント概要 (2)

有識者氏名	主なコメント
ダニー・マシューズ博士	<ul style="list-style-type: none"> ・ 政府や事業者は消費者の信頼を獲得する必要があり、また、情報のやりとりは一方的なものではなく双方向性があるものにすべきである ・ リスクコミュニケーションの専門家がいれば、スムーズなコミュニケーションが可能になる ・ 風評被害を防ぐためには、過去の事例から対処法を学び、ネットワークを効果的に使うことが重要である ・ 1つ問題があるとすれば、日本で構築中の中央から地方へという段階的なコミュニケーションシステムは、運用面での効率性に関して不安がある
リン・フリユール博士	<ul style="list-style-type: none"> ・ 行政や事業者に対する消費者の不信が、リスクコミュニケーションを行う上で大きな問題である。その解決にはリスク分析、リスクマネジメント、リスクコミュニケーションの場において、消費者が抱えている懸念を正しく理解することが最も重要である ・ 様々なヨーロッパの機関が、情報の透明性を向上させる努力を行ってきた。しかし、透明性が向上することで、リスク分析の持つ不確実性が明らかになり、さらなるリスクコミュニケーションが必要になることがわかってきた。その不確実性に関するコミュニケーションを行うことが消費者の信用を得るためには重要である ・ リスクコミュニケーションを行う際に、コミュニケーションの専門家がいれば円滑なコミュニケーションが可能となる ・ 今後の課題としては、リスクの影響を受けやすい人をターゲットにしたコミュニケーションの研究、コミュニケーション手法の国際的な比較などがある
ゲイリー・スミス博士	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「現状と課題」の主旨や記載事項を全面的に支持する
味田村 太郎 氏	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全体としては良好だが、日本での BSE、鳥インフルエンザ発生時のリスクコミュニケーションの詳細な分析が必要である

(3) 各有識者からのコメント

各有識者からのコメントは以下に示す通りである。

①キース・イトウ博士

- ・ ドキュメントでは、食品安全委員会のこれまでの成果と、今後の取組に関して明快に述べられていた。
- ・ 行政機関は、対立する意見に傾聴し、その存在を社会に広く認知させなければならない。しかし、行政機関側の意見は、政策的、科学的な根拠に基づいて統一されたものでなければならない。
- ・ 食品衛生法の下で基準を設ける場合には米国と同様にパブリックコメントが実施されている。これにより、行政は国民の意見を知ることができるので有益である。
- ・ リスクコミュニケーションが平時と緊急時という2つのカテゴリーに分類されているが、平時の情報は緊急時の情報ともなり得る。
- ・ リスクコミュニケーションにおいてメディアを使うことは有益であるが、その際、メディアと行政双方がその使い方を学び、互いの信頼関係を築かなくてはならない。
- ・ リスクコミュニケーションで最も重要なことは、コミュニケーションを行う行政機関が行政機関として尊重され、また認知されているかどうかということである。

②バルク・フィッシュ博士

- ・ ドキュメントの中で私が強調すべきと考えたのは以下の6点である。
 - － 各関係者の役割と組合せを認識すること
 - － 各関係者間における信頼の重要性を強調すること
 - － コミュニケーションの双方向性を認識させること
 - － 様々なタイプの問題を認識すること
 - － 各関係者の動機付けを特定化すること
 - － 長期間にわたりシステムの維持に携わること
- ・ リスクコミュニケーションにとって重要なことは以下のものが挙げられる。
 - － コミュニケーションを実証的に評価しなければならない
 - － コミュニケーションネットワークの効率性評価

③レイ・ブラッドレー博士

- ・ ドキュメントの後半部分に比べて前半部分はやや不明確な内容である。
- ・ ドキュメントの方向性を明確にする必要がある。
- ・ BSE に関しては、様々な科学的データや、法律の運用状況を紹介した月刊の冊子から情報を集めておくと良い。

④ スチュアート・マクダイアミド博士

- ・ リスクコミュニケーション、リスク分析や各ステイクホルダーの責任と役割について正確に論じられており、最終的な結論も適切であった。
- ・ リスクコミュニケーションが上手く機能するかどうかは、各ステイクホルダーが信念を持って参加できるかどうかにかかっている。

⑤ ヤノヴィッツィ博士

- ・ リスクに関する情報をステイクホルダーとの間でコミュニケーションする際には、いくつかの問題点があることがわかっている。その例としては、以下の点が挙げられる。
 - 各ステイクホルダー間で同じリスクに対する認識が異なってしまう（消費者と専門家間の乖離 等）
 - 消費者は自分のリスクを過小評価しがちである
 - あるリスクが人によって都合が良かったり悪かったりする
- ・ これらの問題解決のためには、以下の取組が重要である。
 - 情報を受け取る側にあわせたリスクコミュニケーションのメッセージを送る
 - 科学的根拠が存在する時にのみ、不確実性を減少させるための情報を提供する
 - リスクの大きさや予想される結果を、交通事故のリスクなどと比較する
 - 絶対的なリスクよりも相対的なリスクについてコミュニケーションを行う
 - リスクだけでなく代替案に関してもコミュニケーションを行う
- ・ 効果的なコミュニケーションに必要な情報は以下の5点である。
 - リスク評価の情報
 - 便益に関する情報
 - 代替策に関する情報
 - リスク情報に含まれる不確実性
 - リスクマネジメントに関する情報

⑥ダニー・マシューズ博士

- ・ 政府や事業者に対する消費者の信頼が、リスクコミュニケーションを行う上での最重要事項である。そのためには、リスクの不確実性を明確にした議論や、双方向的な情報のやりとりが重要である。
- ・ リスクに対する適度な科学的知識を持ったコミュニケーションの専門家がいれば非常に有用である。
- ・ 情報を必要とする側が各分野の専門家から専門的な情報を得ることができるようにしておく必要がある。
- ・ データや重要な情報は、「直ちに、分かりやすく、全て、正確に」共有されなければならないが、ここには「発表される前のデータの取り扱い」、「風評被害」という2つの問題がある。
- ・ 「発表される前のデータの取り扱い」に関して、科学者は一般的に論文として発表される前のデータを他の専門家や政府などに公表することをためらうものである。しかし、論文として発表される前のデータを専門家や政府などが共有し、考え得るリスクに対応する必要がある。その為には、非公開の会議を行うなどの配慮が必要である。
- ・ 「風評被害」を解決する簡単な方法は存在しないが、過去に別の場所で起こった事例を調べ、そこから学ぶことは有益である。
- ・ 政府は常に危機感を持ってリスクに対する準備をしておかなければならない。
- ・ 一つ問題があるとすれば、日本が構築中の中央から地方へという段階的なコミュニケーションシステムは、運用面での効率性に関して不安がある。

⑦リン・フリユール博士

- ・ ヨーロッパ諸国では、行政や事業者に対する消費者の不信の高まりが問題となっている。その解決のためにはリスク分析、リスクマネジメント、リスクコミュニケーションにおいて、消費者が抱いている懸念を正しく理解することが重要である。
- ・ 様々なヨーロッパの機関が、情報の透明性を向上させる努力を行ってきた。しかし、透明性が向上することで、リスク分析の持つ不確実性が明らかになり、さらなるリスクコミュニケーションが必要になることがわかってきた。その不確実性に関するコミュニケーションを行うことが消費者の信用を得るためには重要である。
- ・ リスクコミュニケーションの専門家は円滑なコミュニケーションを行うために重要な役割を果たす。
- ・ 今後の課題は、リスクの影響を受けやすい人をターゲットにしたコミュニケーション、顕在化しつつあるリスクやリスクの不確実性に対するコミュニケーション、未知のリスクに関するコミュニケーションなどの研究や、リスクコミュニケーションの中で感情が果たす役割の研究、さらにはコミュニケーション手法の国際的な比較などがある。

⑧ゲイリー・スミス博士

- ・ 関係分野と連携するためには情報は共有されなければならないが、企業や個人のプライバシーは守られなければならない。
- ・ リスク分析に関連した情報を各国間で交換することは非常に重要である
- ・ 今後の取組として食品安全委員会が挙げる7つの事項は、日本のリスクコミュニケーションの将来にとって非常に有益である。

⑨味田村 太郎 氏

- ・ ドキュメントは平易な英文で分かりやすく書かれていた。
- ・ 日本での BSE、鳥インフルエンザ発生時におけるリスクコミュニケーションを検証するべきである。
- ・ アメリカでは、各地のパブリックヘルス・スクール（各大学の公衆衛生学科）でリスク分析に関係した授業が行われている。そういった授業を行っている専門家の意見を求めることも一つの案である。

III. リスクコミュニケーションの効果・検証に関する調査

1. BSE、鳥インフルエンザ発生時の国民の消費行動の把握

(1) はじめに

日本国内を対象にインターネットアンケート調査を実施し、BSE、鳥インフルエンザ発生に伴う国民の消費行動の把握を行った。あわせて、消費行動の規定要因に関する分析を行った。

(2) 調査方法

① 質問項目

「消費行動」を規定する要因が何であるのかを探索するため、BSE、鳥インフルエンザ発生時の回答者の「消費行動」を把握するための質問項目に加え、回答者の「知識」、「信頼」、「考え」を把握するための質問項目を設定した。また、今後のリスクコミュニケーションの実施方法について検討する際に参考となるであろう項目についても設定を行った。本調査で設定した質問項目とそのねらいは以下に示す通りである²。

図表 7：質問項目一覧

質問項目	質問項目設定のねらい
BSE、鳥インフルエンザ発生に伴う消費行動の変化 (Q1～Q6)	BSE 及び鳥インフルエンザの発生直後、及び、発生直後から現在までの消費行動の変化を把握
消費行動の規定要因の候補 [BSE、鳥インフルエンザに対する不安] (Q7) [情報への信頼度] (Q8～9) [BSE、鳥インフルエンザに関する知識] (Q10) [情報を得る手段] (Q11～12) [食品安全に関する考え] (Q13)	消費行動の変化を規定する要因 (の候補) として、左記項目を把握
リスクコミュニケーション [リスクコミュニケーション関連の取組に関する知識] (Q14～16) [今後の取組に関するニーズ] (Q17～18)	リスクコミュニケーションの今後の取組方法の参考とするため、左記項目を把握
フェイスシート (個人属性) [性別、年齢、居住地、世帯員数、職業、年収] (Q19～25)	回答者の個人属性について把握
自由回答 (Q26)	アンケートへの感想や質問内容以外の事項に関する意向等について把握

² インターネットアンケート調査で使用した調査票は資料編に掲載している。

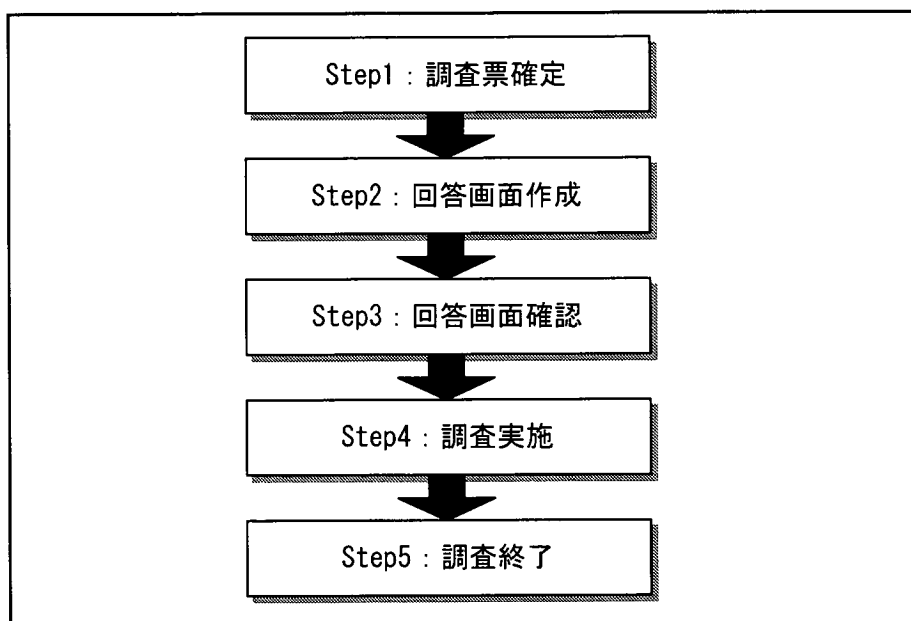
②インターネットアンケート調査の実施方法

1) 実施手順

インターネットアンケート調査の実施手順は以下に示すとおりである。

インターネットアンケート調査では、調査票の質問項目を確定し（Step1）、回答画面の作成（Step2）、回答画面の体裁等の確認（Step3）を行った後、実際にアンケート調査が実施される（Step4）。そして、あらかじめ設定した回答数が回収された時点で調査が終了する（Step5）。

図表 8：インターネットアンケート調査の実施手順



2) 調査対象・サンプル数

本調査では、株式会社インフォプラントのモニター³を利用し、全国の20代以上を対象に、平成17年3月5日～6日にかけてインターネットアンケート調査を実施した⁴。

その際、回収サンプル数は500に設定し、回答者に偏りが生じないように、以下に示すとおり、年代・地域別の割付を行った。

図表9：サンプルの割付

サンプル割付表（年代・地域別）							
	北海道・東北	関東	中部	関西	中国・四国	九州・沖縄	合計
20代	10	30	14	14	8	10	86
30代	10	31	14	14	8	10	87
40代	9	27	13	12	7	9	77
50代	12	32	16	15	9	10	94
60代以上	19	53	26	26	14	18	156
合計	60	173	83	81	46	57	500

地域区分						
北海道・東北	北海道	青森県	岩手県	秋田県	宮城県	山形県
	福島県					
関東	東京都	埼玉県	千葉県	神奈川県	茨城県	栃木県
	群馬県	山梨県	長野県			
中部	愛知県	岐阜県	三重県	静岡県	福井県	石川県
	富山県	新潟県				
関西	大阪府	京都府	兵庫県	奈良県	和歌山県	滋賀県
中国・四国	岡山県	鳥取県	島根県	広島県	山口県	香川県
	愛媛県	徳島県	高知県			
九州・沖縄	福岡県	佐賀県	大分県	熊本県	宮崎県	鹿児島県
	沖縄県					

注：サンプルの割付は、総務省『平成15年10月1日現在推計人口』の年代別・地域別の人口比に応じて設定した。

³ <http://www.info-plant.com/company/index.html>

⁴ モニターの中から2,825サンプルに調査依頼を行い、結果として500サンプルの回答を得た。

(3) 調査結果

インターネットアンケート調査の調査結果について示す。

ここでは、回答結果の単純集計を行った後、順序ロジットモデル⁵を用いて、消費行動の規定要因に関する分析を行う。

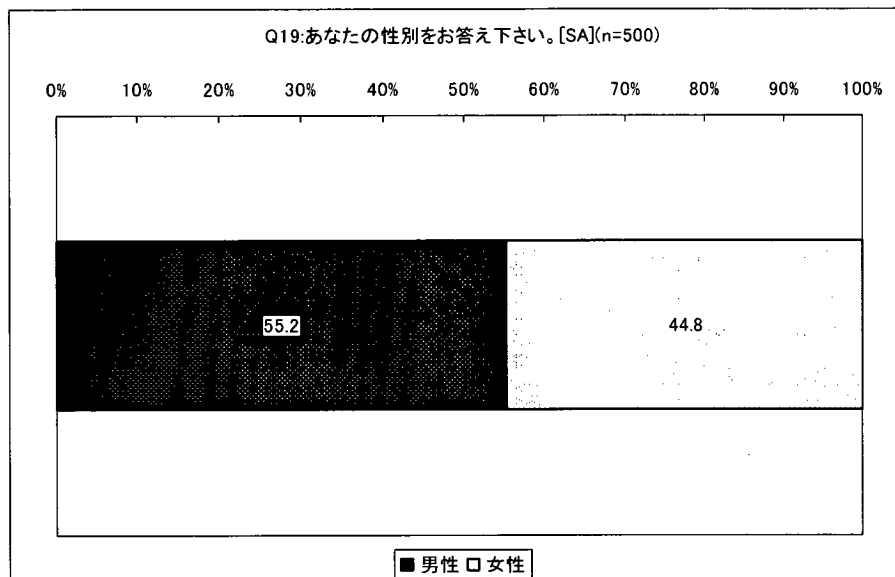
①単純集計

回答結果の単純集計は以下に示すとおりである⁶。

1) 回答者の属性

ア. 性別 [Q19]

○ 回答者の性別は、「男性 (55.2%)」、「女性 (44.8%)」とやや男性が多くなった。

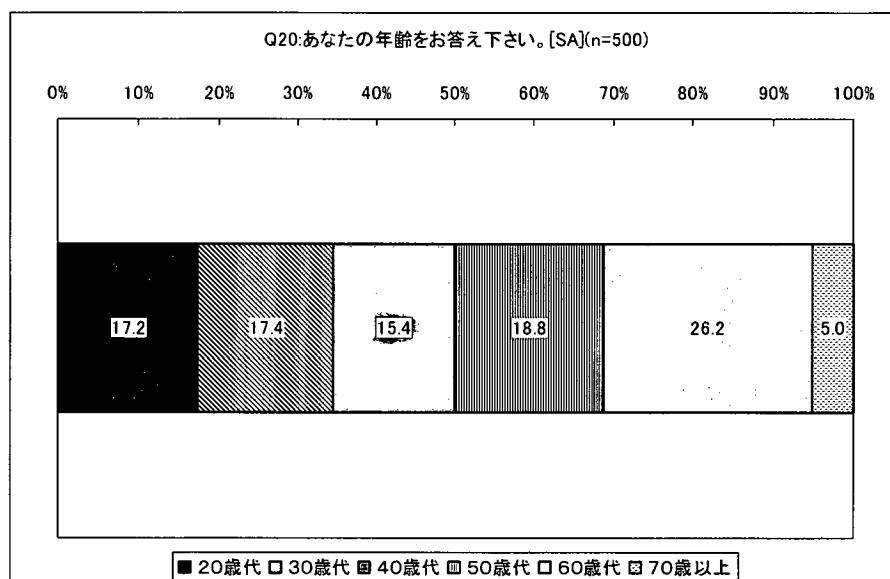


⁵ 順序ロジットモデルとは、順序付けされた複数のカテゴリーのいずれに分析対象が属するかを判定するための分析手法である。詳しくは、50頁を参照のこと。

⁶ クロス集計結果は資料編に掲載している。

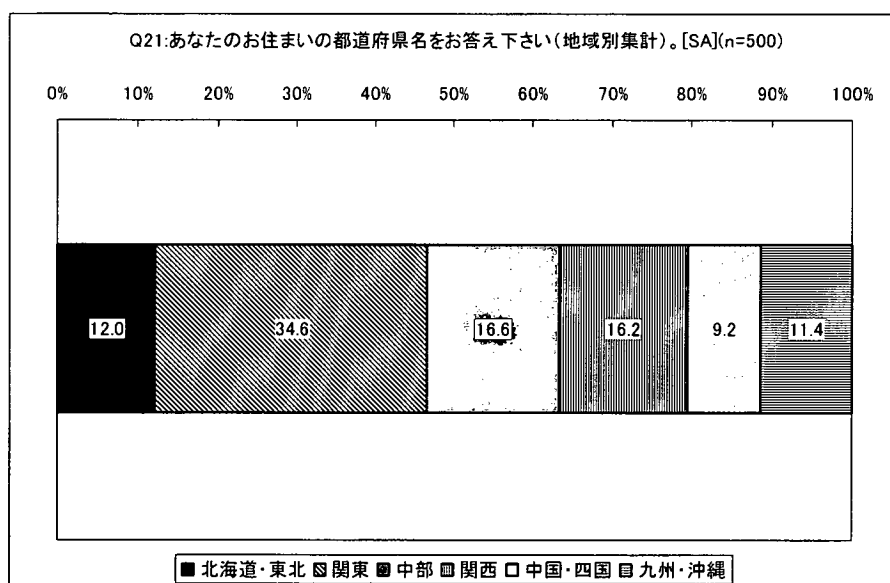
イ. 年齢[Q20]

○ 回答者の年齢は、「60歳代（26.2%）」が最も多くなった⁷。



ウ. 居住地[Q21]

○ 回答者の居住地は、「関東（34.6%）」が最も多く、次いで、「中部（16.6%）」、「関西（16.2%）」となった⁸。

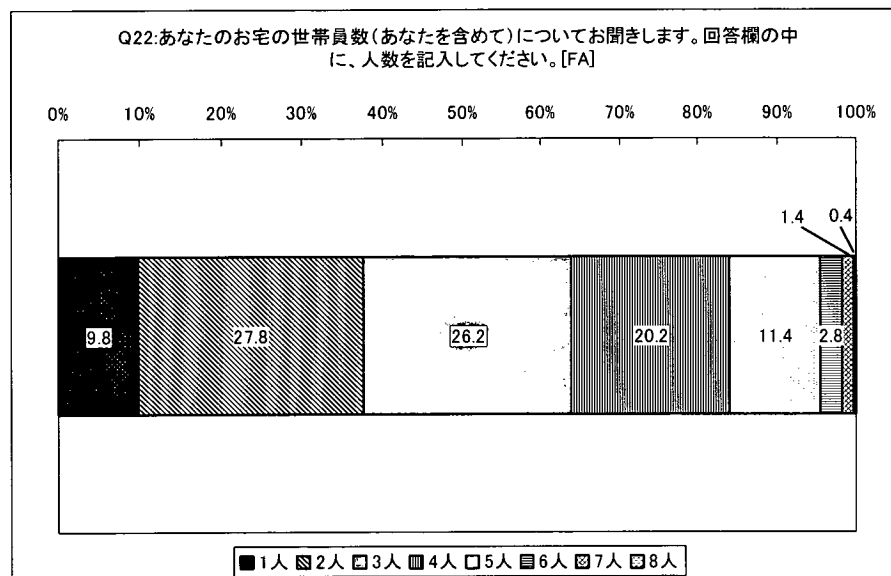


⁷ 先述のとおり、年齢[Q20]については、調査実施時にあらかじめサンプルの割付を行っている。

⁸ 先述のとおり、居住地[Q21]については、年齢[Q20]と同様に調査実施時にあらかじめサンプルの割付を行っている。

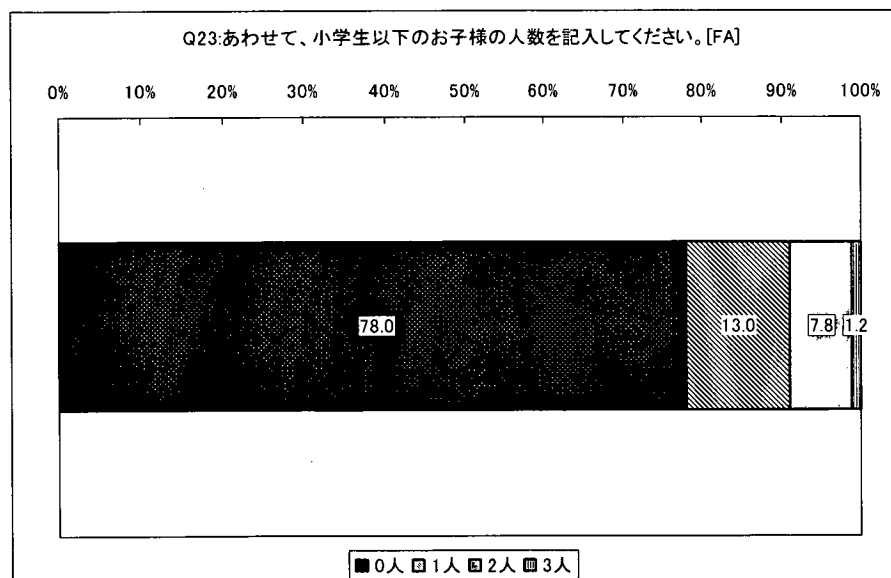
エ. 世帯員数 [Q22]

○回答者の世帯員数は、「2人 (27.8%)」が最も多く、次いで、「3人 (26.2%)」、「4人 (20.2%)」となった。



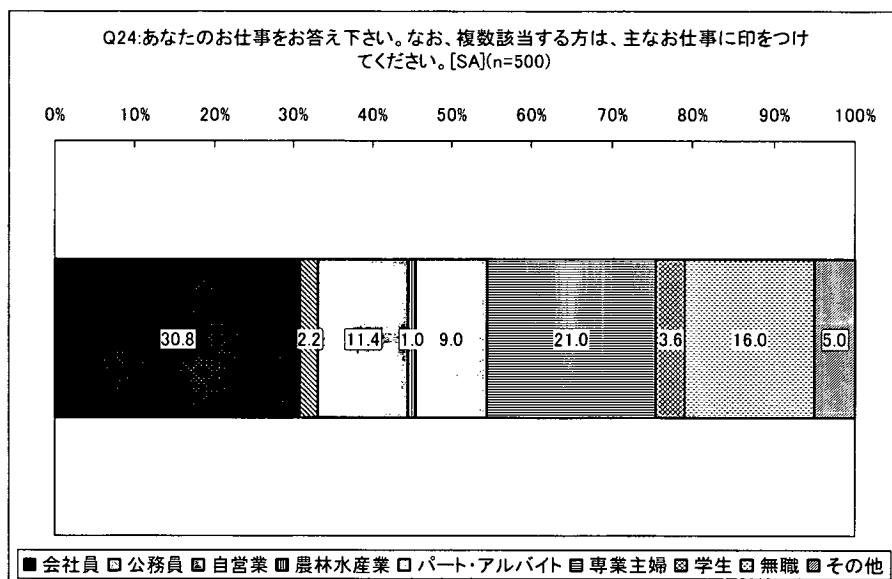
オ. 小学生以下の子供の数 [Q23]

○小学生以下の子供がいる回答者は、全体の 22.0%となった。



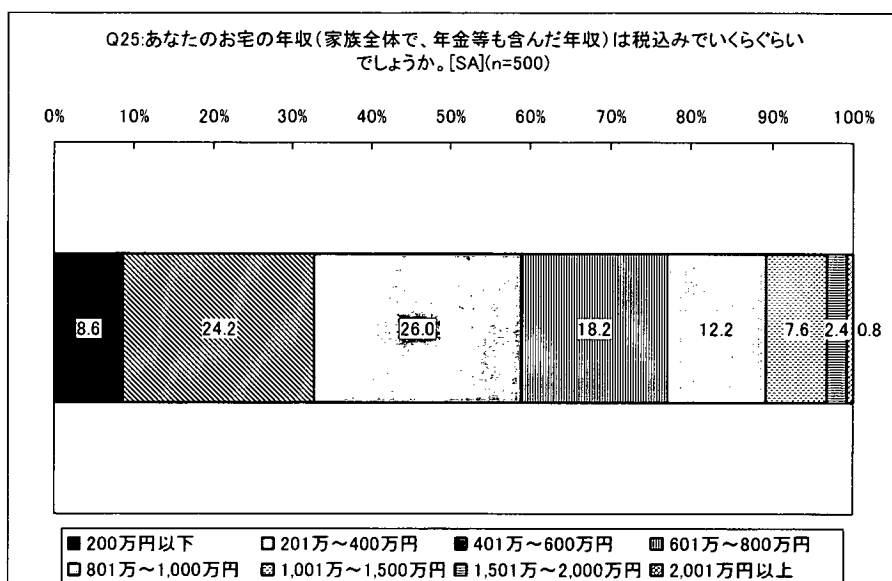
カ. 職業 [Q24]

○回答者の職業は、「会社員 (30.8%)」が最も多く、次いで、「専業主婦 (21.0%)」、「無職 (16.0%)」となった。



キ. 年収 [Q25]

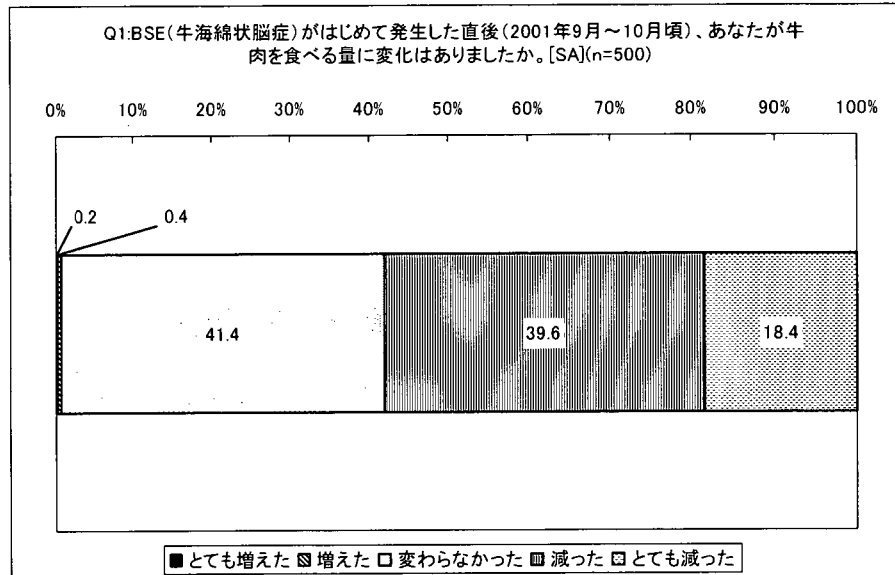
○回答者の年収は、「401～600万円 (26.0%)」が最も多く、次いで、「201～400万円 (24.2%)」、「601～800万円 (18.2%)」となった。



2) BSE、鳥インフルエンザ発生に伴う消費行動の変化

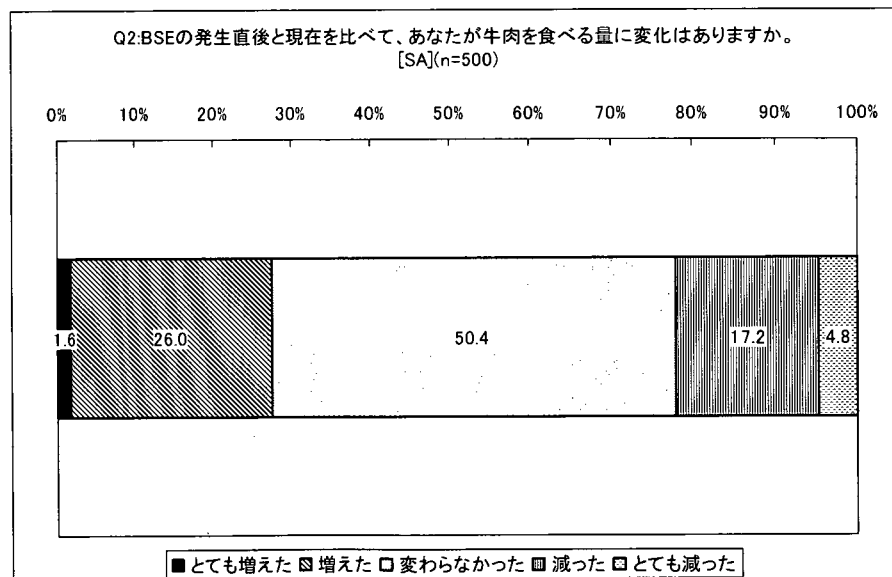
ア. 牛肉を食べる量の変化 (BSE 発生直後) [Q1]

○BSE 発生直後の牛肉を食べる量は、「変わらなかった (41.4%)」が最も多く、次いで、「減った (39.6%)」となった。



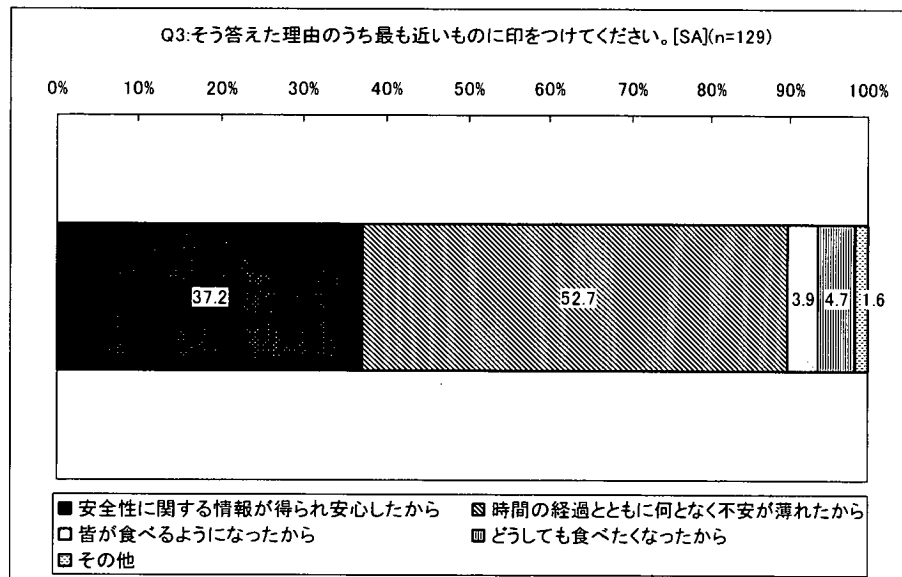
イ. 牛肉を食べる量の変化 (BSE 発生直後~現在) [Q2]

○BSE 発生直後と現在を比べた場合の牛肉を食べる量は、「変わらなかった (50.4%)」が最も多く、次いで、「増えた (26.0%)」、「減った (17.2%)」となった。



ウ. 追加設問：牛肉を食べる量が BSE 発生直後に減り、その後増えた理由 [Q3]

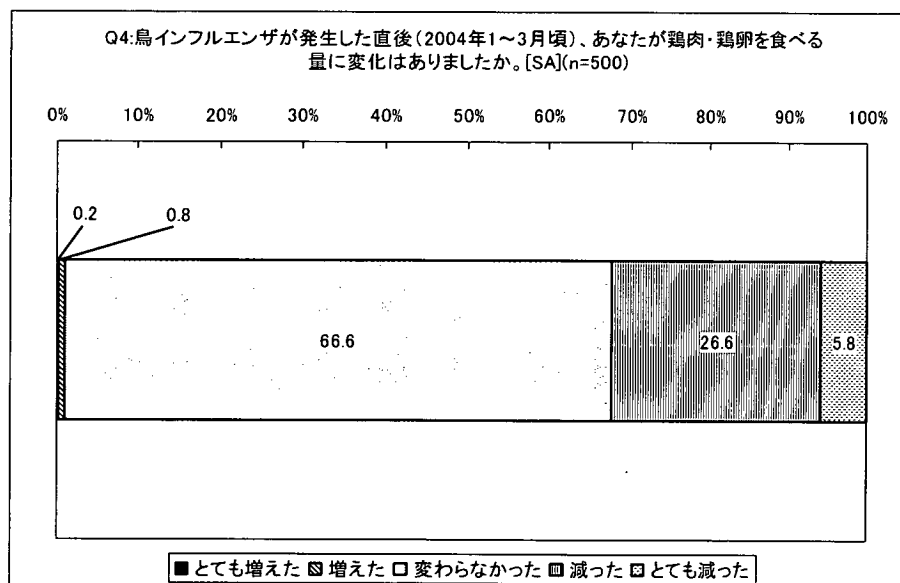
○BSE 発生直後に牛肉を食べる量が減り、かつ、その後現在までに増えた回答者にその理由を尋ねたところ、「時間の経過とともに何となく不安が薄れたから (52.7%)」が最も多く、次いで、「安全性に関する情報が得られ安心したから (37.2%)」となった。



注：Q1 で「減った」「とても減った」かつ、Q2 で「とても増えた」「増えた」を選択した回答者のみを対象に整理

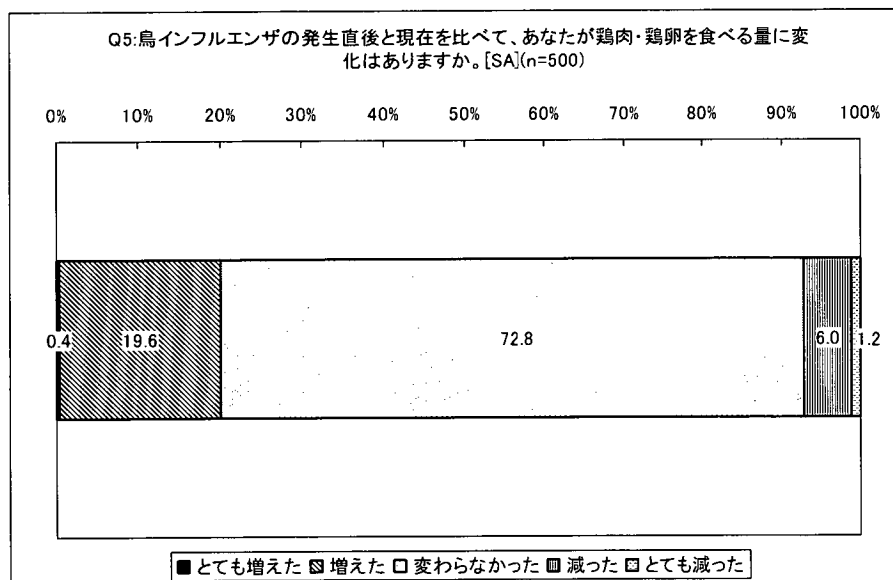
エ. 鶏肉・鶏卵を食べる量の変化（鳥インフルエンザ発生直後） [Q4]

○鳥インフルエンザ発生直後の鶏肉・鶏卵を食べる量は、「変わらなかった (66.6%)」が最も多く、次いで、「減った (26.6%)」となった。



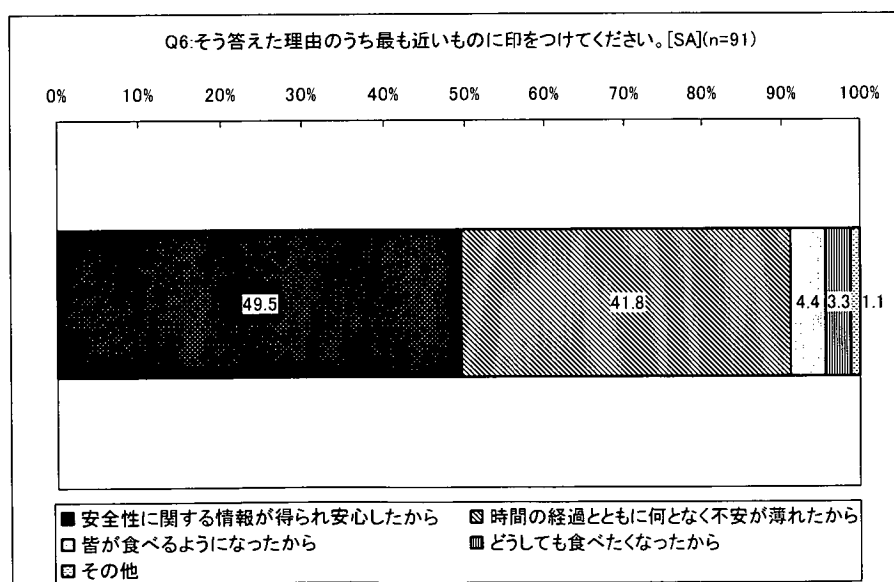
オ. 鶏肉・鶏卵を食べる量の変化（鳥インフルエンザ発生直後～現在）[Q5]

○鳥インフルエンザ発生直後と現在を比べた場合の鶏肉・鶏卵を食べる量は、「変わらなかった（72.8%）」が最も多く、全体の70%以上を占めた。



カ. 追加設問：鶏肉・鶏卵を食べる量が鳥インフルエンザ発生直後に減り、その後増えた理由 [Q6]

○鳥インフルエンザ発生直後に鶏肉・鶏卵を食べる量が減り、かつ、その後現在までに増えた回答者にその理由を尋ねたところ、「安全性に関する情報が得られ安心したから（49.5%）」が最も多く、次いで、「時間の経過とともに何となく不安が薄れたから（41.8%）」となった。

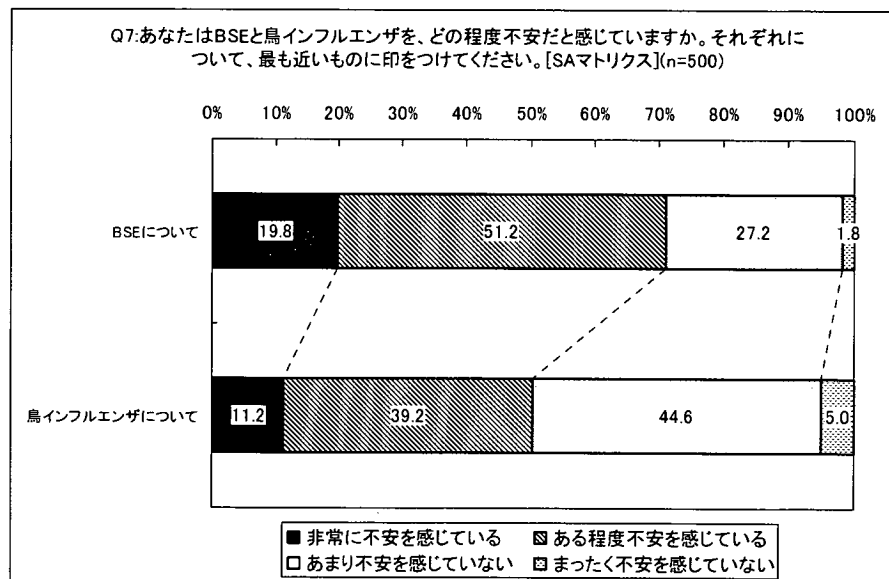


注：Q4で「減った」「とも減った」かつ、Q5で「とも増えた」「増えた」を選択した回答者のみを対象に整理

3) BSE、鳥インフルエンザに対する不安

ア. BSE、鳥インフルエンザに対する不安 [Q7]

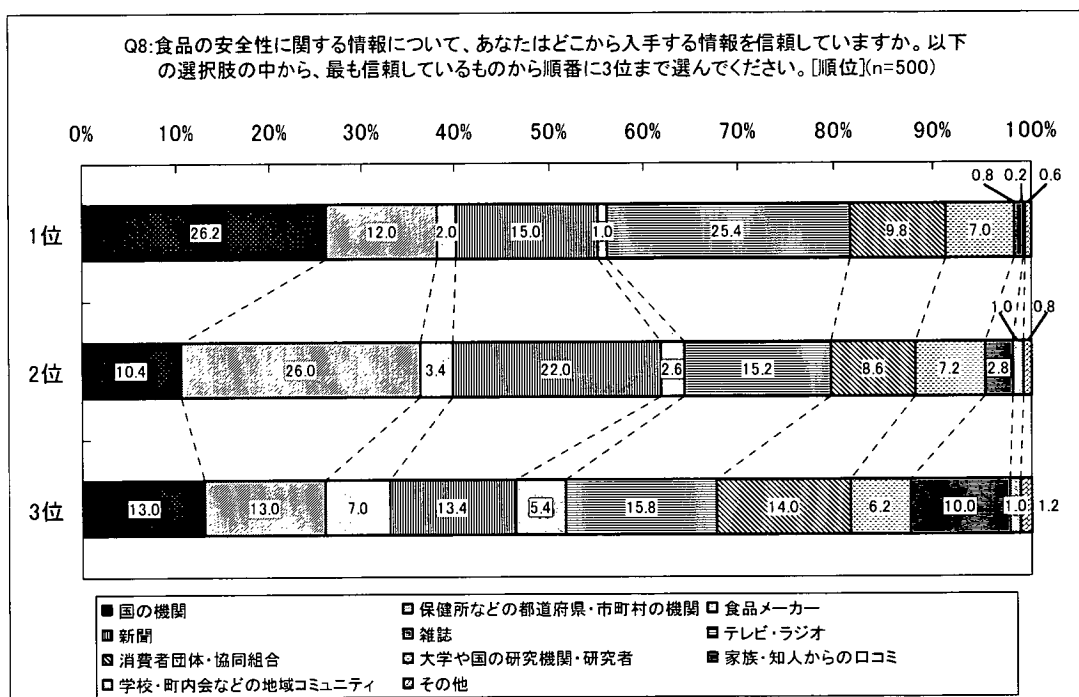
- BSE と鳥インフルエンザをどの程度不安に感じているかを尋ねたところ、BSE では、「ある程度不安を感じている (51.2%)」が最も多くなったのに対して、鳥インフルエンザでは、「あまり不安を感じていない (44.6%)」が最も多くなった。
- 「非常に不安を感じている」もしくは「ある程度以上の不安を感じている」のいずれかを選択した回答者は、BSE で 71.0%、鳥インフルエンザで 50.4% となった。



4) 情報源に対する信頼性

ア. 情報源に対する信頼性[Q8]

- 食品の安全性に関する情報について、どこから入手する情報を信頼しているかを尋ねたところ、最も信頼している（1位）という回答が多くなったのは、「国の機関（26.2%）」であり、次いで、「テレビ・ラジオ（25.4%）」となった。
- 1～3位までの回答を通じて、「保健所などの都道府県・市町村の機関」、「新聞」の割合も多くなった。

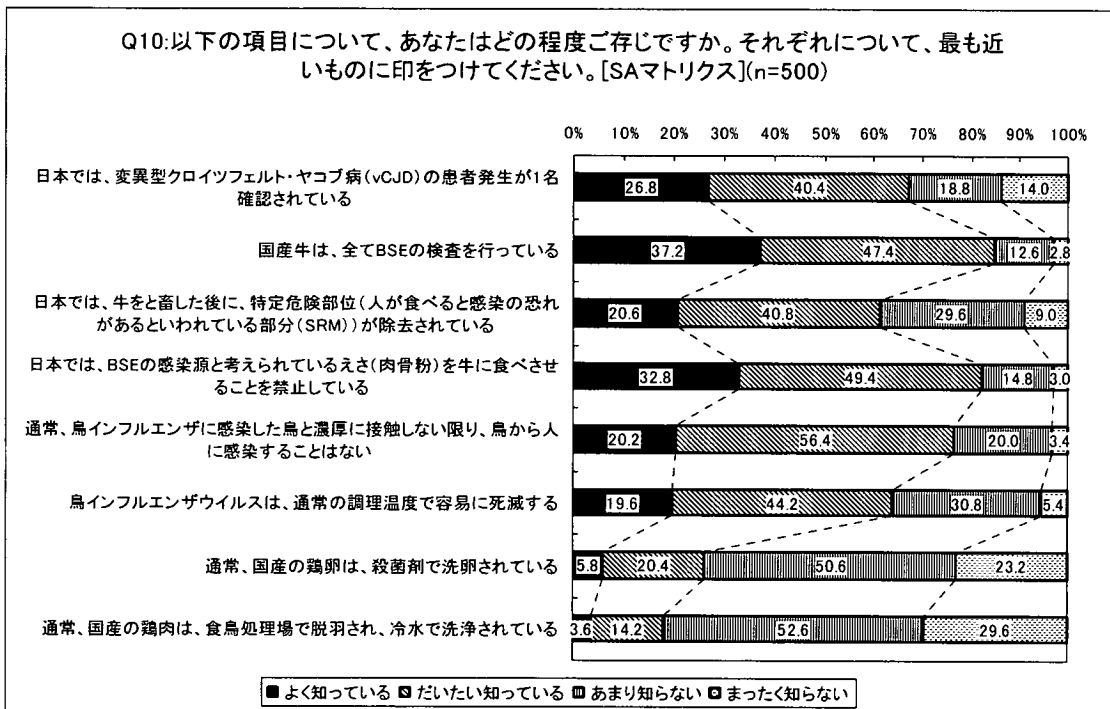


5) BSE、鳥インフルエンザに関する知識

ア. BSE、鳥インフルエンザに関する知識 [Q10]

○BSE、鳥インフルエンザに関する知識を尋ねたところ、「国産牛は、全て BSE の検査を行っている」、「日本では、BSE の感染源と考えられているえさ（肉骨粉）を牛に食べさせることを禁止している」では、「よく知っている」、「だいたい知っている」のいずれかを選択した回答者が 80%以上となった。

○一方、「通常、国産の鶏卵は、殺菌剤で洗卵されている」、「通常、国産の鶏肉は、食鳥処理場で脱羽され、冷水で洗浄されている」では、「よく知っている」、「だいたい知っている」のいずれかを選択した回答者が 20~30%に留まった。

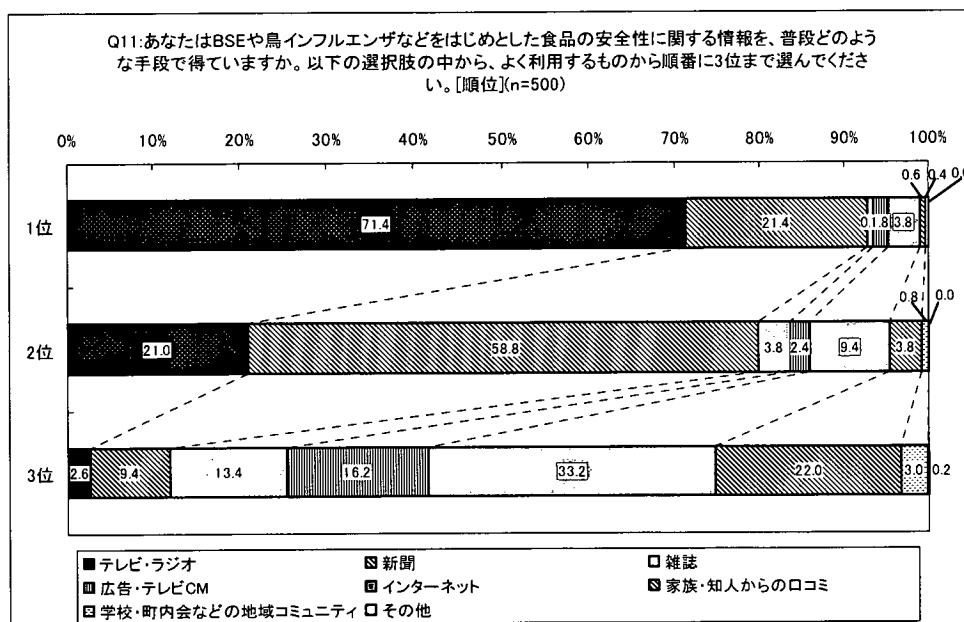


6) 情報を得る手段

ア. 情報を得る手段 [Q11]

○BSE や鳥インフルエンザなどをはじめとした食品の安全性に関する情報を、普段どのような手段で得ているかを尋ねたところ、最もよく得ている（1位）との回答が多くなったのは、「テレビ・ラジオ（71.4%）」であり、次いで、「新聞（21.4%）」となった。

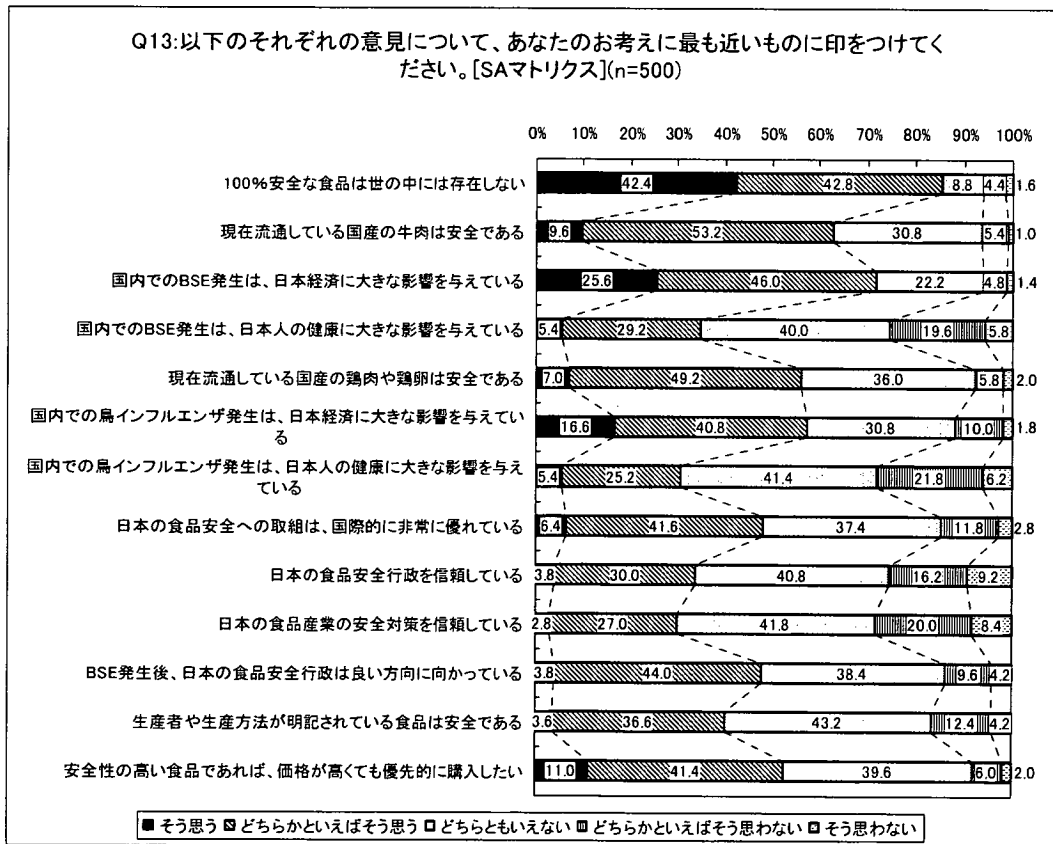
○1～3位までの回答を通じて、「新聞」や「インターネット」の割合も多くなった。



7) 食品安全に関する考え

ア. 食品安全に関する考え [Q13]

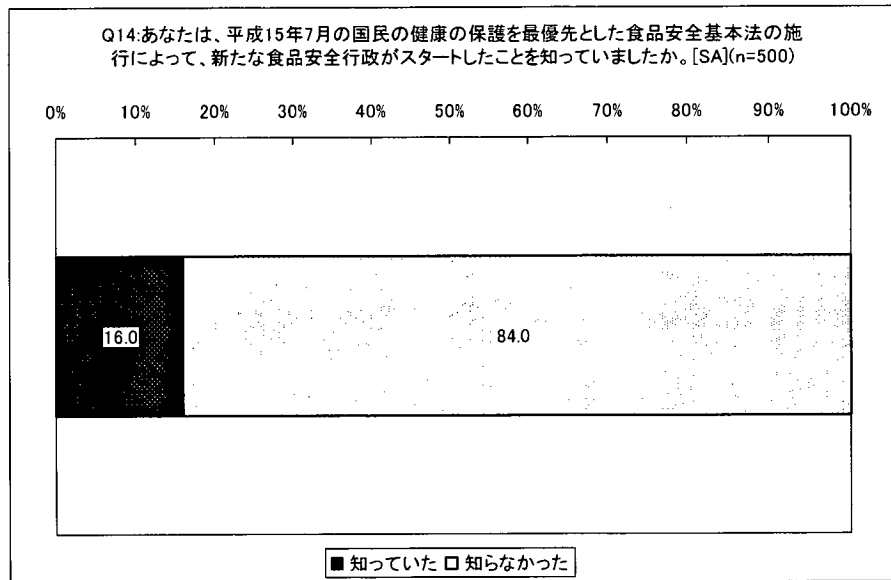
- 食品安全に関する考えについて尋ねたところ、「100%安全な食品は世の中には存在しない」、「国内でのBSE発生は、日本経済に大きな影響を与えている」では、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」のいずれかを選択した回答者が70%以上となった。
- 一方、「国内でのBSE発生は、日本人の健康に大きな影響を与えている」、「国内での鳥インフルエンザ発生は、日本人の健康に大きな影響を与えている」、「日本の食品安全行政を信頼している」、「日本の食品産業の安全対策を信頼している」では、「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」のいずれかを選択した回答者が25%以上となった。



8) リスクコミュニケーション

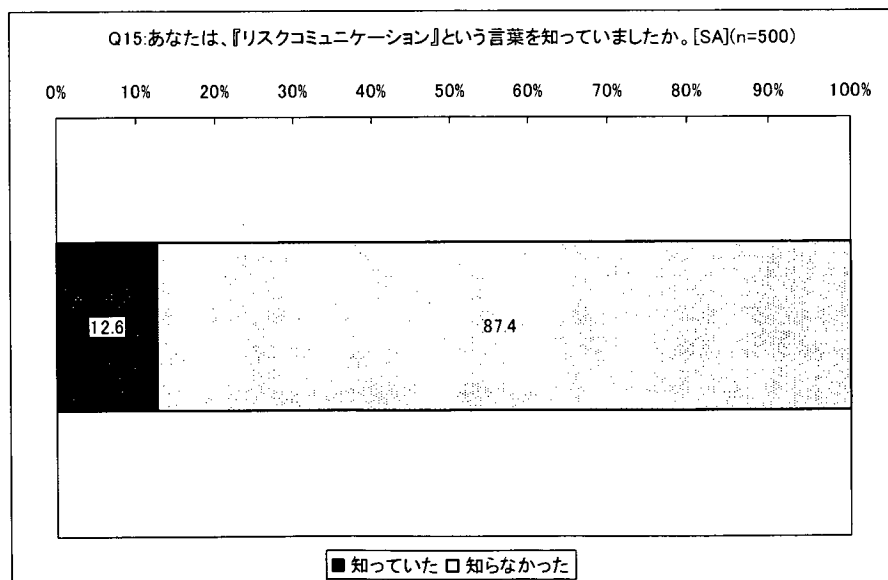
ア. 新たな食品安全行政の認知度 [Q14]

○食品安全基本法の施行により、新たな食品安全行政がスタートしたことの認知度は、16.0%と低い割合となった。



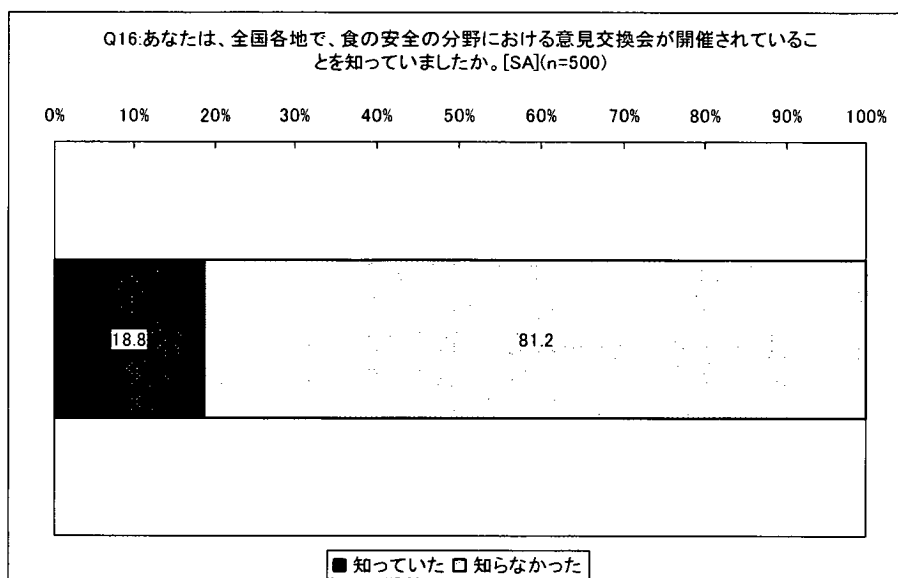
イ. 『リスクコミュニケーション』の認知度 [Q15]

○新たな食品安全行政に対する認知度と同様に、『リスクコミュニケーション』という言葉の認知度は、12.6%と低い割合となった。



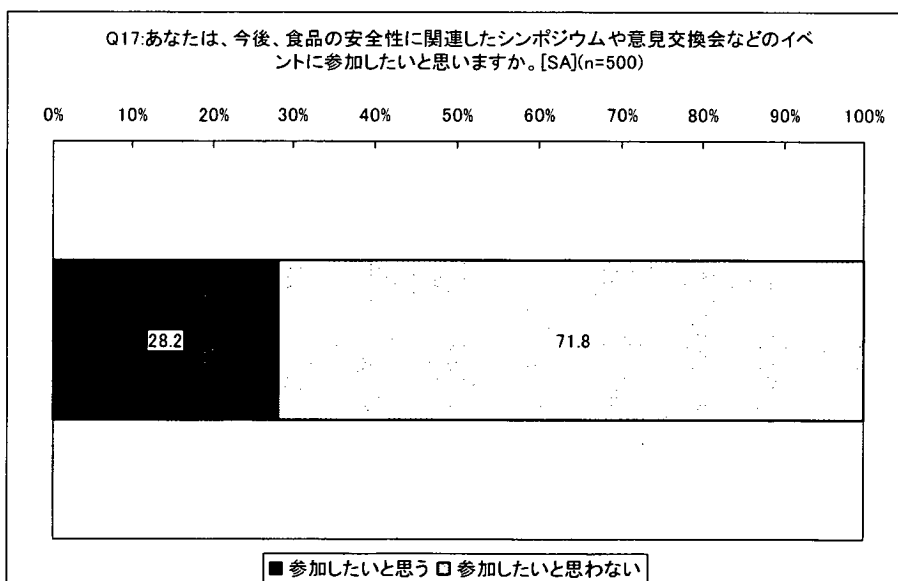
ウ. 意見交換会の認知度 [Q16]

○新たな食品安全行政や『リスクコミュニケーション』の認知度と同様に、意見交換会の認知度は、18.8%と低い割合となった。



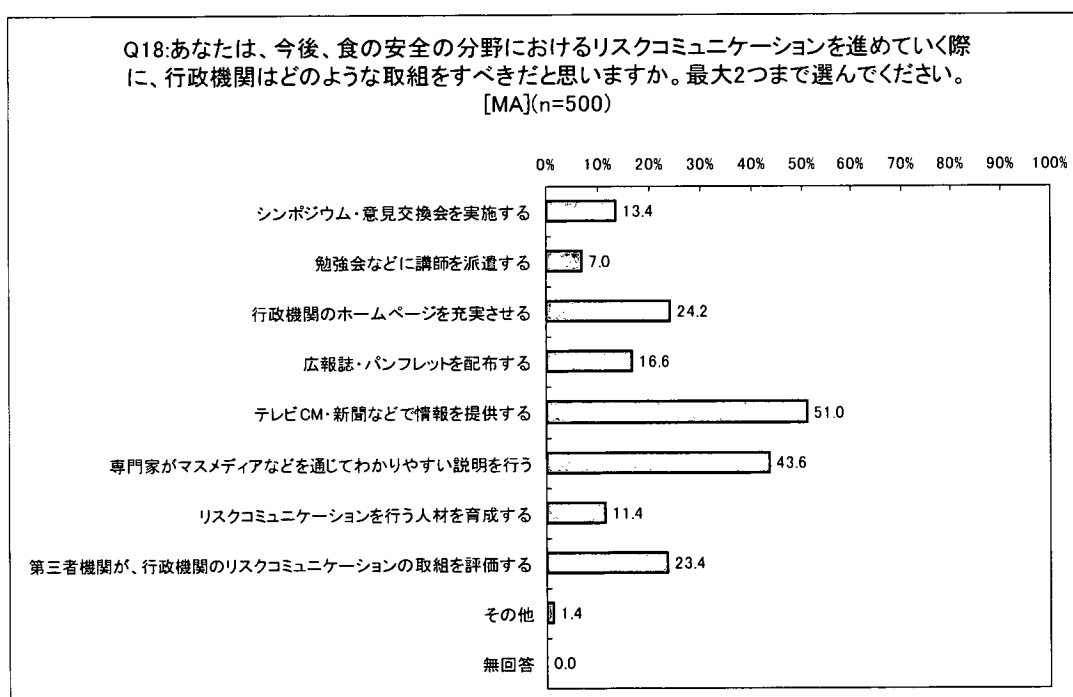
エ. 食品の安全性に関連したイベントへの参加 [Q17]

○今後、食品の安全性に関連したシンポジウムや意見交換会などのイベントに「参加したいと思う」と回答した割合は28.8%であり、意見交換会等の認知度よりもやや高くなった。



オ. 行政機関に求める取組 [Q18]

○食の安全の分野におけるリスクコミュニケーションを進めていく際に、行政機関がどのような取組をすべきだと思うかを尋ねたところ、「テレビCM・新聞などで情報を提供する」を選択した回答者が全体の51.0%と最も多くなった。次いで、「専門家がマスメディアなどを通じてわかりやすい説明を行う」を選択した回答者が全体の43.6%と多くなった。



9) カナダ国内で実施された調査結果との比較

ア. 比較対象

ここでは、カナダ国内で実施された BSE に関するアンケート調査と、本調査の回答結果の比較を行う。比較対象としたアンケート調査の概要は、以下に示す通りである。

なお、アンケート調査の実施方法や実施時期が異なるために、調査結果の単純比較は困難であると考えられるものの、本調査では、両国における BSE 発生時の消費行動や食品安全性に対する考えなどの違いを把握することを目的に、双方の調査でほぼ同様の質問を行っていると思われる項目を抽出し、回答結果の比較・整理を行うこととした。

図表 10：比較対象としたアンケート調査の概要

	日本	カナダ
出典名	(本調査)	EKOS Research Associates Inc. “Tracking Public Opinion on Mad Cow Disease Wave III,” Jan. 2004
調査方法	インターネットアンケート	電話調査
調査実施日	2005年3月5～6日	2004年1月9～14日
調査対象	20歳以上の日本人モニター	18歳以上のカナダ人
サンプル数	500名	1,271名

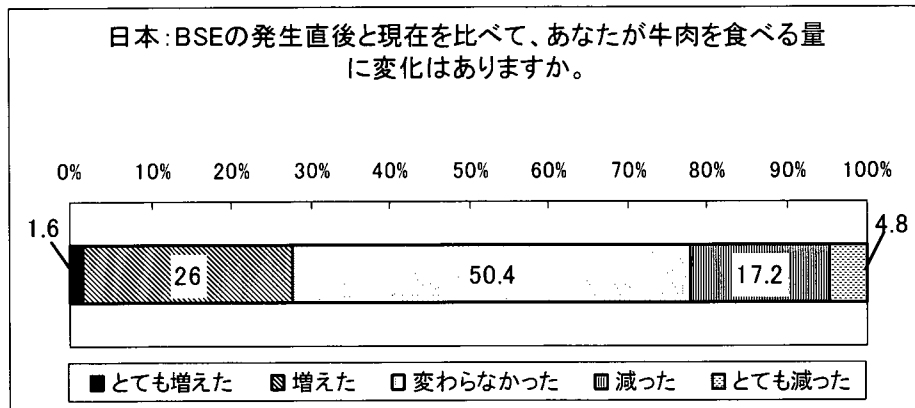
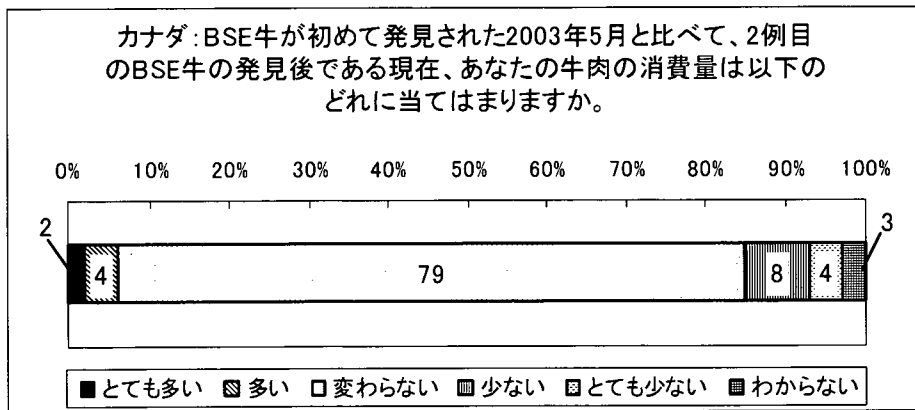
図表 11：比較項目

- 牛肉の消費量の変化
- 国産牛肉の安全性
- 国内経済、国民健康への影響
- 食品安全システム（システムの優劣、システムへの信頼度）

イ. 調査結果の比較

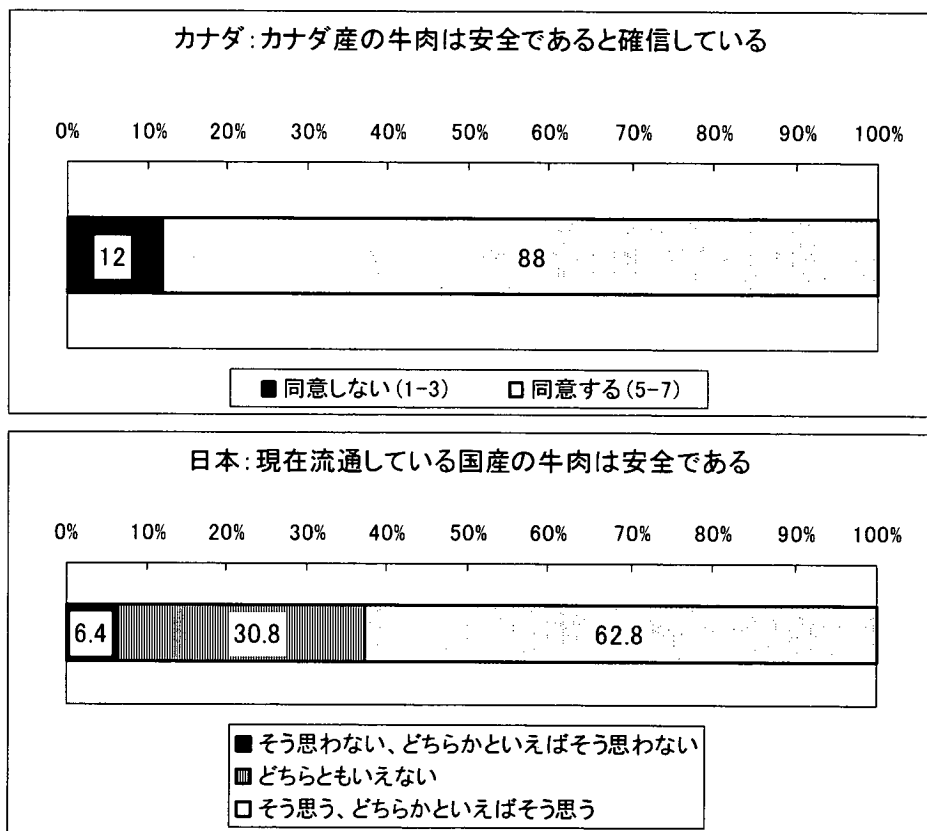
■牛肉の消費量の変化

- 両国における1頭目のBSE牛の確認直後と現在の牛肉消費量の変化を比較したところ、カナダでは79%が「変わらない」と回答したのに対し、日本では「変わらなかった」と回答した割合が50.4%であった。
- 以前より牛肉消費量を増やした割合は、カナダの6%（とても多い、多い）に対し、日本は27.6%（とても増えた、増えた）と高くなった。
- また、以前より牛肉消費量を減らした割合は、カナダの12%（少ない、とても少ない）に対し、日本は22%（とても減った、減った）と高くなった。



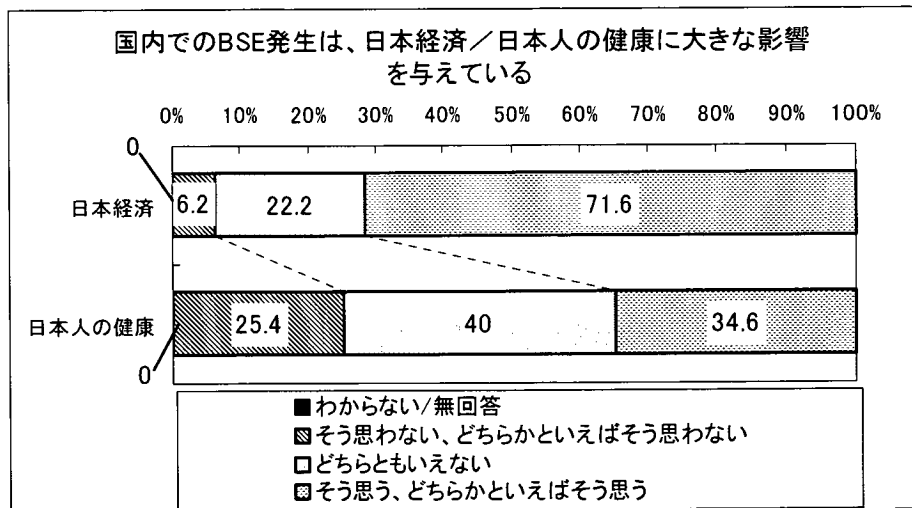
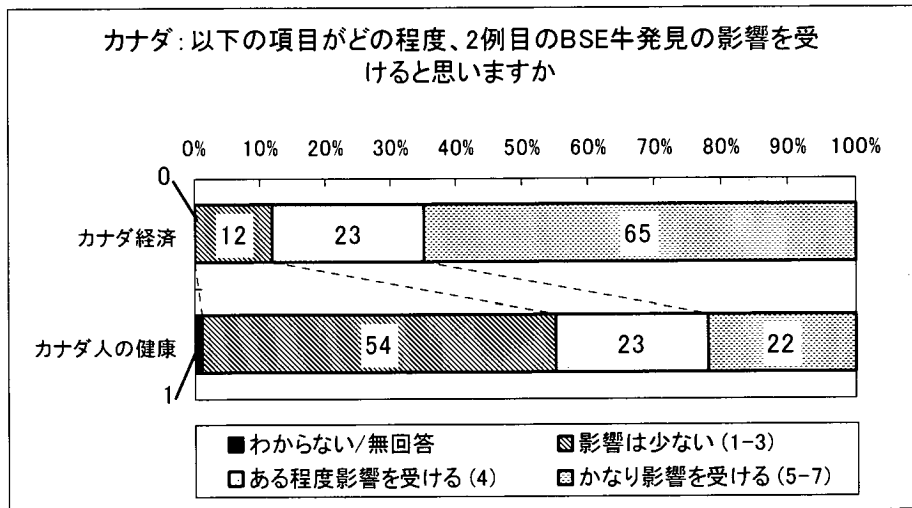
■国産牛肉の安全性

- 国産牛肉が安全であると回答した割合は、カナダの88%（同意する）に対し、日本は62.8%（そう思う、どちらかといえばそう思う）とやや低くなった。
- 日本では、国産牛肉が安全であると回答した割合が、カナダと比べて低くなっている分、「どちらともいえない」と回答した割合が30.8%と高くなっている。
- 一方、国産牛肉が安全でないとは回答した割合は、カナダの12%（同意しない）に対し、日本は6.4%（そう思わない、どちらかといえばそう思わない）と、カナダの方がやや高くなった。



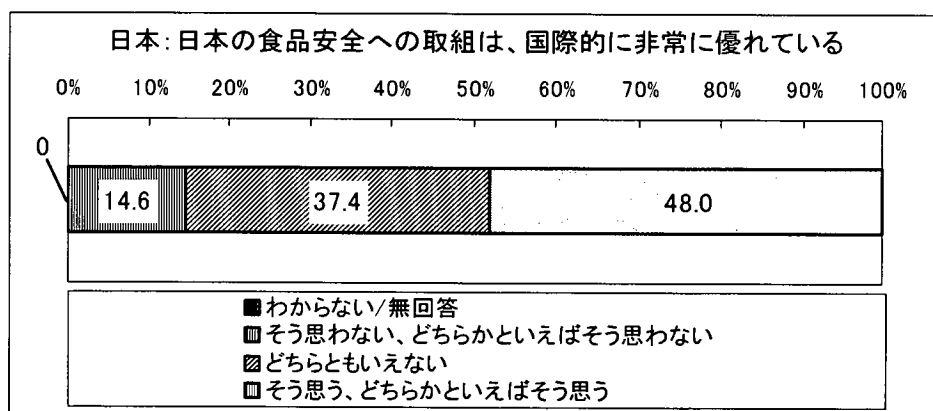
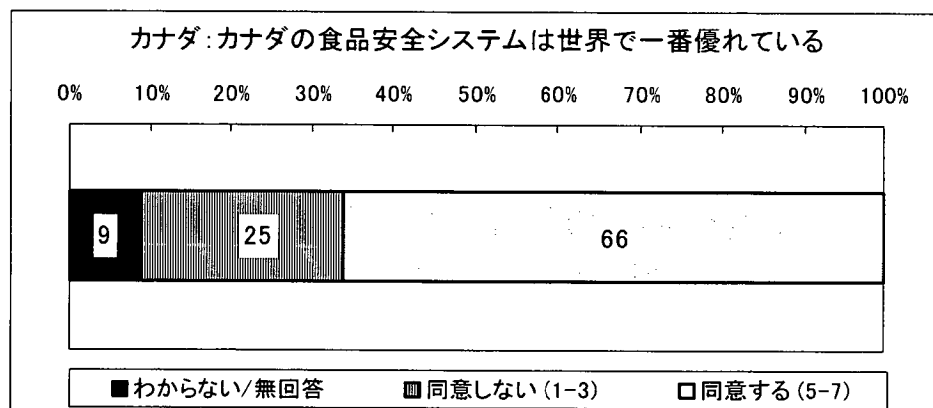
■国内経済、国民健康への影響

- BSE が国内経済や国民の健康に影響を与えているかどうかを尋ねた質問では、カナダ、日本両国において、健康への影響よりも経済への影響の方が大きいとした回答が多くなっている。
- 「経済への影響がある」と回答した割合は、カナダの65%（かなり影響を受ける）に対し、日本は71.6%（そう思う、どちらかといえばそう思う）とほぼ同程度となった。
- 「健康に影響がある」と回答した割合は、カナダの22%（かなり影響を受ける）に対し、日本は34.6%（そう思う、どちらかといえばそう思う）と日本の方がやや高い割合となった。



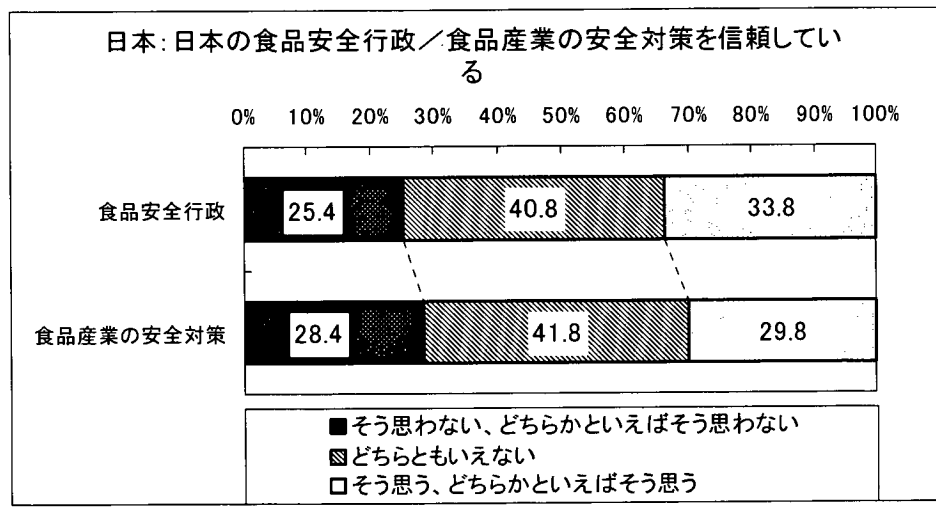
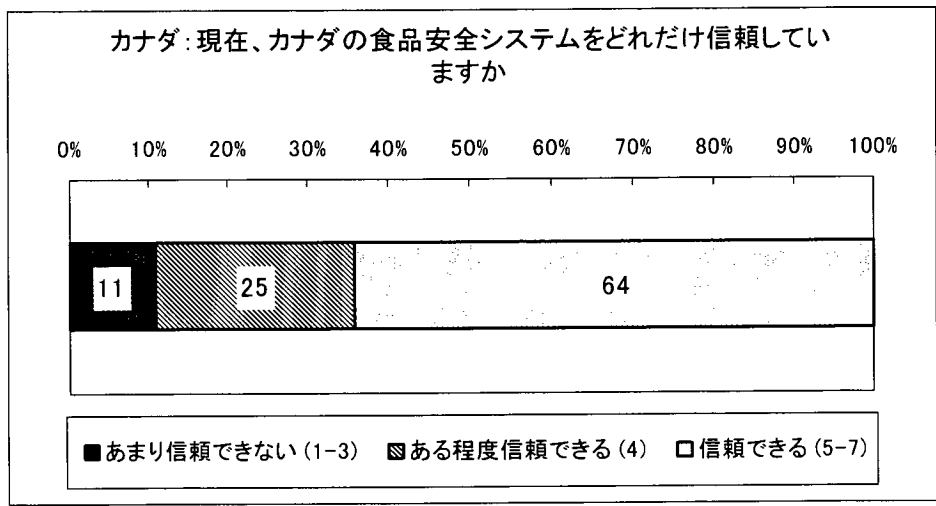
■食品安全システムの優劣

○食品安全システムや食品安全への取組が国際的に優れていると回答した割合は、カナダの66%（同意する）に対し、日本は48.0%（そう思う、どちらかといえばそう思う）とやや低くなった。



■ 食品安全システムへの信頼

○ 食品安全システムや食品安全への取組を信頼していると回答した割合は、カナダの64%（信頼できる）に対し、日本では、食品安全行政に対して33.8%（そう思う、どちらかといえばそう思う）、食品産業の安全対策に対して29.8%（そう思う、どちらかといえばそう思う）と日本の方が低くなった。



②順序ロジットモデル

1) 分析方法

今回のインターネットアンケート調査では、BSE、鳥インフルエンザの発生直後、及び、発生直後から現在までの消費行動の変化について「とても増えた」「増えた」「変わらなかった」「減った」「とても減った」の5段階の選択肢を設定し、回答者の消費行動を把握した。このように離散データがある一定の順序に従っているため、ここでは順序ロジットモデルを用いて、消費行動の規定要因に関する分析を行うこととする。

以下、Borooah [2001] や牧他[1997]を参考に、順序ロジットモデルの説明を行う。

個人*i*の消費行動の変化を被説明変数 (Y_i) とし、 Y_i がどの値をとるかを決めているある仮想的な因子 Y_i^* があり、

$$Y_i^* = \alpha + \beta_1 X_{1i} + \beta_2 X_{2i} + \dots + \beta_k X_{ki} + \varepsilon_i \quad (\text{式 1-1})$$

で表すことができるとする。 $X_{1i}, X_{2i}, \dots, X_{ki}$ は個人属性、知識、考えといった個人*i*の選択に影響する*k*個の説明変数であり、(式 1-1)は $X_{1i}, X_{2i}, \dots, X_{ki}$ で体系的に説明できる部分とそれ以外の誤差項 ε_i の和からなっている。 Y_i^* を直接観測することはできないが、その値によって、

$$Y_i = \begin{cases} 1 & \text{if } -\infty \leq Y_i^* \leq \gamma_1 \\ m & \text{if } \gamma_{m-1} \leq Y_i^* \leq \gamma_m \quad m = 2, 3, 4 \\ 5 & \text{if } \gamma_4 \leq Y_i^* \leq \infty \end{cases} \quad (\text{式 1-2})$$

となる。 $\gamma_1, \gamma_m, \gamma_4$ は Y_i から Y_i^* を推定するための閾値となる未知のパラメータである。ここで個人*i*が*j*個の選択肢から*j*番目の選択肢を選ぶ確率、すなわち $Y_i = j$ ($j = 1, \dots, 5$)となる確率*P*は、

$$P(Y_i = j | X_{1i}, X_{2i}, \dots, X_{ki}) = F(\alpha + \beta_1 X_{1i} + \beta_2 X_{2i} + \dots + \beta_k X_{ki} - \gamma_j) - F(\alpha + \beta_1 X_{1i} + \beta_2 X_{2i} + \dots + \beta_k X_{ki} - \gamma_{j+1}) = P_{ij} \quad (\text{式 1-3})$$

となる。ここで $F(\cdot)$ は ε_i の累積分布関数であり、ロジスティック分布の累積分布関数を仮定するものをロジットモデルと呼ぶ。尤度関数 $L(\gamma_1, \dots, \gamma_4, \beta_1, \dots, \beta_k)$ は、 Y_i の値ごとに(式 1-3)を掛け合わせることで得られる。このとき対数尤度 $\log L$ は、

$$\log L(\gamma_1, \dots, \gamma_4, \beta_1, \dots, \beta_k) = \sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^5 \lambda_{ij} P_{ij} \quad (\text{式 1-4})$$

となる。ここで λ_{ii} は $Y_i = j$ のとき1、その他は0となる変数である。推定すべきパラメータ $\gamma_1, \dots, \gamma_4, \beta_1, \dots, \beta_k$ は(式 1-4)を最大化することによって得られる。

本調査では、上記の手法に従い、①BSE発生直後、②BSE発生直後～現在、③鳥インフルエンザ発生直後、④鳥インフルエンザ発生直後～現在、の4つの消費行動の変化を個人属性、知識、考えで説明する順序ロジットモデルを構築し、消費行動の規定要因を把握する。

2) 分析データ

消費行動の規定要因の分析に用いる変数（変数名、定義、内容）は、次頁の図表に示すとおりである。

ここでは、インターネットアンケート調査の実施により得られた回答データのうち、[Q1]牛肉を食べる量の変化（BSE 発生直後）、[Q2]牛肉を食べる量の変化（BSE 発生直後～現在）、[Q4]鶏肉・鶏卵を食べる量の変化（鳥インフルエンザ発生直後）、[Q5]鶏肉・鶏卵を食べる量の変化（鳥インフルエンザ発生直後～現在）をそれぞれ被説明変数とする。

説明変数には、回答者の属性を説明する変数として、[Q19]性別、[Q20]年齢、[Q21]居住地、[Q22]世帯員数、[Q23]小学生以下の子供の数、[Q24]職業、[Q25]年収を用いる。さらに、不安感を説明する変数として[Q7]BSE、鳥インフルエンザに対する不安、知識を説明する変数として [Q10]BSE、鳥インフルエンザに関する知識、考えを説明する変数として[Q13]食品安全に関する考えを採用した。

また、被説明変数が、[Q2]牛肉を食べる量の変化（BSE 発生直後～現在）と[Q5]鶏肉・鶏卵を食べる量の変化（鳥インフルエンザ発生直後～現在）の場合、過去の行動を説明する変数としてこれらの発生直後に食べる量を減少させたかどうかを表すダミー変数を追加した。

なお、今回のインターネットアンケート調査では、説明変数に関しては回答者の現在の状況を尋ねている一方、被説明変数である消費行動の変化については過去の行動を尋ねている。BSE および鳥インフルエンザ発生後、不安感、知識や考えは変化した可能性があるため、結果の解釈においてはこの点に留意する必要がある。

図表 12 : 説明変数リスト

カテゴリー	変数名	変数	変数定義	内容
不安感 (説明変数)	ANXBSE	BSEに対する不安	あなたはBSEを、どの程度不安だと感じていますか。	非常に不安を感じている=4、ある程度不安を感じている=3、あまり不安を感じていない=2、まったく不安を感じていない=1の4段階
	ANXBF	鳥インフルエンザに対する不安	あなたは鳥インフルエンザを、どの程度不安だと感じていますか。	非常に不安を感じている=4、ある程度不安を感じている=3、あまり不安を感じていない=2、まったく不安を感じていない=1の4段階
知識 (説明変数)	KBSE1	BSEに関する知識1 (vCJD)	日本では、変異型クロイツフェルト・ヤコブ病(vCJD)の患者発生が1名確認されている。	よく知っている=4、だいたい知っている=3、あまり知らない=2、まったく知らない=1の4段階
	KBSE2	BSEに関する知識2 (全頭検査)	国産牛は、全てBSEの検査を行っている。	よく知っている=4、だいたい知っている=3、あまり知らない=2、まったく知らない=1の4段階
	KBSE3	BSEに関する知識3 (SRM)	日本では、牛をと畜した後に、特定危険部位(人が食べると感染の恐れがあるとされている部分(SRM))が除去されている。	よく知っている=4、だいたい知っている=3、あまり知らない=2、まったく知らない=1の4段階
	KBSE4	BSEに関する知識4 (肉骨粉)	日本では、BSEの感染源と考えられているえき(肉骨粉)を牛に食べさせることを禁止している。	よく知っている=4、だいたい知っている=3、あまり知らない=2、まったく知らない=1の4段階
	KBF1	鳥インフルエンザに関する知識1 (感染経路)	通常、鳥インフルエンザに感染した鳥と濃厚に接触しない限り、鳥から人に感染することはない。	よく知っている=4、だいたい知っている=3、あまり知らない=2、まったく知らない=1の4段階
	KBF2	鳥インフルエンザに関する知識2 (ウイルス特性)	鳥インフルエンザウイルスは、通常の調理温度で容易に死滅する。	よく知っている=4、だいたい知っている=3、あまり知らない=2、まったく知らない=1の4段階
	KBF3	鳥インフルエンザに関する知識3 (洗卵)	通常、国産の鶏卵は、殺菌剤で洗卵されている。	よく知っている=4、だいたい知っている=3、あまり知らない=2、まったく知らない=1の4段階
	KBF4	鳥インフルエンザに関する知識4 (冷水洗浄)	通常、国産の鶏肉は、食鳥処理場で脱羽され、冷水で洗浄されている。	よく知っている=4、だいたい知っている=3、あまり知らない=2、まったく知らない=1の4段階
考え (説明変数)	AT1	ゼロリスク傾向	100%安全な食品は世の中には存在しない。	そう思う=5、どちらかといえばそう思う=4、どちらともいえない=3、どちらかといえばそう思わない=2、そう思わない=1の5段階
	AT2	牛肉の国産安全性	現在流通している国産の牛肉は安全である。	そう思う=5、どちらかといえばそう思う=4、どちらともいえない=3、どちらかといえばそう思わない=2、そう思わない=1の5段階
	AT3	BSEの経済的影響	国内でのBSE発生は、日本経済に大きな影響を与えている。	そう思う=5、どちらかといえばそう思う=4、どちらともいえない=3、どちらかといえばそう思わない=2、そう思わない=1の5段階
	AT4	BSEの健康への影響	国内でのBSE発生は、日本人の健康に大きな影響を与えている。	そう思う=5、どちらかといえばそう思う=4、どちらともいえない=3、どちらかといえばそう思わない=2、そう思わない=1の5段階
	AT5	鶏肉・鶏卵の国産安全性	現在流通している国産の鶏肉や鶏卵は安全である。	そう思う=5、どちらかといえばそう思う=4、どちらともいえない=3、どちらかといえばそう思わない=2、そう思わない=1の5段階
	AT6	鳥インフルエンザの経済的影響	国内での鳥インフルエンザ発生は、日本経済に大きな影響を与えている。	そう思う=5、どちらかといえばそう思う=4、どちらともいえない=3、どちらかといえばそう思わない=2、そう思わない=1の5段階
	AT7	鳥インフルエンザの健康への影響	国内での鳥インフルエンザ発生は、日本人の健康に大きな影響を与えている。	そう思う=5、どちらかといえばそう思う=4、どちらともいえない=3、どちらかといえばそう思わない=2、そう思わない=1の5段階
	AT8	食品安全の取り組み評価	日本の食品安全への取組は、国際的に非常に優れている。	そう思う=5、どちらかといえばそう思う=4、どちらともいえない=3、どちらかといえばそう思わない=2、そう思わない=1の5段階
	AT9	行政への信頼	日本の食品安全行政を信頼している。	そう思う=5、どちらかといえばそう思う=4、どちらともいえない=3、どちらかといえばそう思わない=2、そう思わない=1の5段階
	AT10	食品産業への信頼	日本の食品産業の安全対策を信頼している。	そう思う=5、どちらかといえばそう思う=4、どちらともいえない=3、どちらかといえばそう思わない=2、そう思わない=1の5段階
	AT11	食品安全行政の方向性	BSE発生後、日本の食品安全行政は良い方向に向かっている。	そう思う=5、どちらかといえばそう思う=4、どちらともいえない=3、どちらかといえばそう思わない=2、そう思わない=1の5段階
	AT12	トレーサビリティ信頼	生産者や生産方法が明記されている食品は安全である。	そう思う=5、どちらかといえばそう思う=4、どちらともいえない=3、どちらかといえばそう思わない=2、そう思わない=1の5段階
	AT13	コスト意識	安全性の高い食品であれば、価格が高くても優先的に購入したい。	そう思う=5、どちらかといえばそう思う=4、どちらともいえない=3、どちらかといえばそう思わない=2、そう思わない=1の5段階
属性 (説明変数)	FEMALE	性別	-	女性=1、男性=0
	AGEDm	年齢ダミー	m=1:20歳代、m=2:30歳代、m=3:40歳代、m=4:50歳代、m=5:60歳代、m=6:70歳以上	年齢がmのとき=1、それ以外=0
	AREADm	居住地ダミー	m=1:北海道・東北、m=2:関東、m=3:中部、m=4:関西、m=5:中国・四国、m=6:九州・沖縄	居住地がmのとき=1、それ以外=0
	HSIZE	世帯員数	-	数値データ
	CHILD	子供ダミー	小学生以下の子供の有無	小学生以下の子供がいる=1、それ以外=0
	JOBm	職業ダミー	m=1:会社員、m=2:公務員、m=3:自営業、m=4:農林水産業、m=5:パート・アルバイト、m=6:専業主婦、m=7:学生、m=8:無職、m=9:その他	職業がmのとき=1、それ以外=0
	INCDm	所得ダミー	m=1:200万円以下、m=2:201万~400万円、m=3:401万~600万円、m=4:601万~800万円、m=5:801万~1,000万円、m=6:1,001万~1,500万円、m=7:1,501万~2,000万円、m=8:2,001万円以上	所得がmのとき=1、それ以外=0
	DD	発生直後反応ダミー	BSE、鳥インフルエンザ発生時に消費が減少したかどうか。	減少=1、それ以外=0
消費行動の変化 (被説明変数)	YBSE1	BSE発生直後の変化	BSEははじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。	とても増えた=5、増えた=4、変わらなかった=3、減った=2、とても減った=1の5段階
	YBSE2	BSE発生直後~現在の変化	BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。	とても増えた=5、増えた=4、変わらなかった=3、減った=2、とても減った=1の5段階
	YBF1	鳥インフルエンザ発生直後の変化	鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。	とても増えた=5、増えた=4、変わらなかった=3、減った=2、とても減った=1の5段階
	YBF2	鳥インフルエンザ発生直後~現在の変化	鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。	とても増えた=5、増えた=4、変わらなかった=3、減った=2、とても減った=1の5段階

3) 分析結果

BSE、鳥インフルエンザに関して、発生直後と、発生直後～現在の計4つのモデルについて、全ての説明変数を投入した場合の推計結果を次頁に整理した⁹。

いずれのモデルも閾値パラメータである γ の漸近的 t 値も全て5%水準以下で有意である。モデルの適合度を表す ρ^2 は0.06～0.17の値をとっている。順序ロジットモデルの場合、通常 ρ^2 は0.3～0.4あれば適合度は十分であるとされるが、今回推計したモデルは過去の行動を現在の状況で説明するモデルとなっているため、適合度は幾分低い値となっており、留意が必要である。

また、代表的回答者としては、40歳代男性、関西在住、会社員で年収601万円～800万円を想定している。年齢ダミー、居住地ダミー、職業ダミー、所得ダミーの係数はこの代表的回答者との違いを表す。

係数に*印がついているのものが消費行動に影響を与えたと考えられる変数である。以下では、モデルごとに推計結果の解釈を行う。

⁹ 全ての説明変数を投入した推定式の他にも、不安感、知識、考えの変数はすべて投入し、属性変数のうち、年齢ダミー、居住地ダミー、職業ダミー、所得ダミーを除いた変数を投入したものや、属性変数の全てと不安感変数、知識変数を投入したもの、属性変数の全てと不安感変数、考え変数を投入したものなど、いくつかの推定式を用いて推定したが、ここではモデルの適合度を表すBIC (Bayesian Information Criterion)、モデルの説明力を表すMcFaddenの自由度調整済み決定係数 ρ^2 の値などを総合的に判断して、全ての説明変数を投入した場合の推計式を採用した。なお、他の推定式で得られた結果からもほぼ同様の解釈ができるため、ここでは全ての説明変数を投入した推定式の分析結果のみを示している。

図表 13：消費行動の規定要因の推計結果

説明変数	BSE発生直後の変化		BSE発生直後～現在の変化		説明変数	鳥インフルエンザ発生直後の変化		鳥インフルエンザ発生直後～現在の変化	
	係数	漸近的t値	係数	漸近的t値		係数	漸近的t値	係数	漸近的t値
ANXBSE	-1.18	-7.72 ***	-0.34	-2.17 **	ANXBF	-0.94	-5.72 ***	-0.43	-2.04 **
KBSE1	-0.07	-0.60	-0.12	-1.06	KBF1	-0.04	-0.18	0.38	1.44
KBSE2	-0.09	-0.49	0.02	0.12	KBF2	0.18	0.98	-0.44	-1.96 *
KBSE3	0.28	1.87 *	-0.07	-0.44	KBF3	0.16	0.76	0.09	0.38
KBSE4	-0.14	-0.86	-0.09	-0.51	KBF4	0.10	0.44	-0.07	-0.24
AT1	0.10	0.90	0.19	1.71 *	AT1	-0.19	-1.60	0.18	0.98
AT2	0.12	0.80	0.27	1.83 *	AT5	0.20	1.84 *	0.27	1.39
AT3	-0.14	-1.15	0.01	0.05	AT6	-0.22	-1.75 *	0.09	0.47
AT4	0.09	0.89	-0.01	-0.10	AT7	-0.03	-0.19	-0.08	-0.42
AT8	-0.09	-0.65	0.01	0.06	AT8	-0.13	-0.69	-0.14	-0.63
AT9	0.11	0.54	0.10	0.53	AT9	-0.20	-0.97	0.04	0.16
AT10	0.23	0.98	-0.30	-1.61	AT10	0.25	1.20	-0.10	-0.37
AT11	-0.30	-1.77 *	0.43	3.07 ***	AT11	-0.25	-1.96 *	0.37	1.71 *
AT12	0.03	0.17	-0.11	-0.83	AT12	0.13	0.92	-0.19	-0.97
AT13	-0.08	-0.62	0.20	1.59	AT13	-0.07	-0.46	0.32	1.77 *
FEMALE	-0.40	-1.74 *	0.41	1.59	FEMALE	-0.34	-1.15	0.48	1.30
HSIZE	-0.07	-0.81	-0.02	-0.21	HSIZE	0.04	0.35	-0.09	-0.74
CHILD	-0.34	-1.21	0.11	0.37	CHILD	0.03	0.08	0.48	1.11
AGED1	0.32	0.90	0.07	0.21	AGED1	0.33	0.85	0.32	0.61
AGED2	0.33	1.00	0.42	1.22	AGED2	0.27	0.66	0.38	0.74
AGED4	0.21	0.67	-0.01	-0.02	AGED3	-0.12	-0.32	-0.14	-0.29
AGED5	0.44	1.39	0.02	0.07	AGED5	0.52	1.43	-0.18	-0.46
AGED6	0.52	0.99	-0.06	-0.12	AGED6	0.48	0.82	-0.35	-0.52
AREAD1	0.08	0.25	-0.92	-2.40 *	AREAD1	0.46	1.06	-1.02	-2.09 **
AREAD2	0.13	0.46	-0.88	-3.02 ***	AREAD2	0.18	0.56	-0.43	-1.05
AREAD3	0.53	1.54	-0.51	-1.55	AREAD3	0.04	0.12	-0.19	-0.39
AREAD5	-0.25	-0.70	-0.85	-2.24 **	AREAD5	0.18	0.40	-0.60	-1.16
AREAD6	0.32	0.92	-0.67	-1.72 *	AREAD6	0.52	1.19	-0.38	-0.67
JOBBD2	0.46	1.10	0.09	0.11	JOBBD2	0.12	0.18	0.55	0.33
JOBBD3	0.70	1.82 *	0.07	0.18	JOBBD3	-0.28	-0.68	0.45	1.04
JOBBD4	-1.20	-1.69 *	1.34	1.02	JOBBD4	-1.44	-1.72 *	0.77	0.55
JOBBD5	0.02	0.05	0.10	0.28	JOBBD5	-0.09	-0.20	-0.38	-0.76
JOBBD6	-0.06	-0.17	0.15	0.44	JOBBD6	0.15	0.37	-0.23	-0.47
JOBBD7	0.58	1.09	0.73	0.99	JOBBD7	-0.35	-0.51	0.68	0.59
JOBBD8	0.01	0.03	-0.40	-1.07	JOBBD8	-0.57	-1.32	0.11	0.22
JOBBD9	0.54	1.21	-0.03	-0.05	JOBBD9	0.03	0.05	-0.37	-0.55
INCD1	0.02	0.04	-0.40	-0.97	INCD1	0.14	0.29	-1.23	-2.16 **
INCD2	0.07	0.24	-0.36	-1.13	INCD2	0.21	0.59	-0.24	-0.55
INCD3	0.00	-0.02	-0.20	-0.65	INCD3	0.03	0.08	-0.55	-1.20
INCD5	-0.42	-1.20	-0.01	-0.04	INCD5	-0.44	-1.12	-0.15	-0.29
INCD6	-0.14	-0.38	0.06	0.14	INCD6	-0.31	-0.66	-0.37	-0.67
INCD7	-0.20	-0.27	-0.42	-0.54	INCD7	0.35	0.39	-0.12	-0.08
INCD8	1.38	1.88 *	-0.52	-0.32	INCD8	-0.36	-0.20	-2.01	-1.67 *
DD			0.49	1.91 *	DD			2.21	6.76 ***
$\gamma 1$	-4.16	-5.06 ***	-2.46	-3.13 ***	$\gamma 1$	-5.26	-5.38 ***	-3.57	-2.71 ***
$\gamma 2$	-1.90	-2.37 **	-0.69	-2.90 ***	$\gamma 2$	-2.92	-3.15 ***	-1.73	-2.50 ***
$\gamma 3$	3.55	3.75 ***	1.81	2.36 ***	$\gamma 3$	3.00	2.76 ***	3.19	2.69 ***
$\gamma 4$	4.68	4.06 ***	5.18	5.69 ***	$\gamma 4$	4.62	3.02 ***	7.92	4.87 ***
対数尤度	-465.68		-568.58		対数尤度	-374.25		-329.26	
$\rho 2$	0.14		0.06		$\rho 2$	0.11		0.17	

注：1) $\gamma 1, \gamma 2, \gamma 3, \gamma 4$ は閾値パラメータ

2) ***, **, *はそれぞれ有意水準 1%, 5%, 10%で統計的に有意にゼロと差があることを示す。

3) $\rho 2$ は McFadden の自由度調整済み決定係数

ア. BSE 発生直後の消費行動の規定要因

- ・ ANXBSE (BSE に対する不安) の係数は 1%水準で有意 (漸近的 t 検定で係数の帰無仮説が棄却される、以下同様) であり、値は-1.18 である。これは不安感が高いほど BSE 発生直後に消費量を減らしていたことを示しており、また、他の係数と比較して絶対値が大きいことから、その影響も大きかったといえる。
- ・ 知識カテゴリーの中では、KBSE3 (SRM に関する知識) の係数が 10%水準で有意であり、値は 0.28 である。このことから、SRM の知識を持っている人は BSE 発生直後、消費量をあまり減らさない傾向にあったといえる。
- ・ 考えカテゴリーの変数で係数が 10%水準で有意であるのは、AT11 (食品安全行政の方向性) の係数だけである。その値は-0.30 となっていることから、現在食品安全行政がよい方向に向かっていると思っている人は、BSE 発生直後には消費量を減らしていたといえる。
- ・ 属性カテゴリーの中では、FEMALE (性別) の係数が 10%水準で有意であり、値は-0.40 である。このことから、男性よりも女性のほうが BSE 発生直後に消費量を減らしていたといえる。
- ・ 職業ダミーのうち JOB3 (自営業) の係数は 10%水準で有意であり、値は 0.70 である。また、JOB4 (農林水産業) の係数は、10%水準で有意であり、値は-1.20 である。このことから、会社員と比較して、自営業の人は BSE 発生直後に消費量を減らさない傾向にあり、農林水産業に従事する人は逆に消費量を減らす傾向にあったといえる。
- ・ 所得ダミーでは INCD8 (2,001 万円以上) が 10%水準で有意であり、値は 1.38 である。このことから、年収 2,001 万円以上の層は BSE 発生直後に消費量を減らさない傾向にあったといえる。
- ・ HSIZE (世帯員数)、CHILD (子供ダミー)、年齢ダミー、居住地ダミーの係数はいずれも 10%水準以下では有意ではなく、これらの属性の消費行動に対する影響は検出されなかった。

イ. BSE 発生直後～現在の消費行動の規定要因

- ANXBSE (BSE に対する不安) の係数は 5% 水準で有意であり、値は -0.34 である。このことから、不安感が高いほど BSE 発生後から現在の間消費量を減らしていたといえるが、BSE 発生直後の ANXBSE の係数 (-1.18) よりはその絶対値が小さいため、発生直後と比較すれば不安感が消費行動に与えた影響は低下したといえる。
- 知識カテゴリーの中で 10% 以下の水準で有意な係数はなく、これらの知識変数の消費行動に対する影響は検出されなかった。
- 考えカテゴリーの中では、AT1 (ゼロリスク傾向)、AT2 (牛肉の国産安全性) の係数が 10% 水準で有意であり、値はそれぞれ 0.19 、 0.27 である。このことから、100% 安全な食品がないと考えている人や国産の牛肉は安全だと思っている人は BSE 発生直後から現在までの間に消費量を増加させたといえる。また、AT11 (食品安全行政の方向性) の係数も 1% 水準で有意であり、値は 0.43 である。このことから、現在食品安全行政がよい方向に向かっていると思っている人ほど BSE 発生直後から現在までの間に消費量を増加させたといえる。
- 属性カテゴリーのうち、居住地ダミーの係数は AREAD3 (中部) を除く全ての変数が 10% 以下の水準で有意であり、値は全てマイナス (それぞれ -0.92 (AREAD1), -0.88 (AREAD2), -0.51 (AREAD3), -0.85 (AREAD5), -0.67 (AREAD6)) である。このことから、関西地域に比べて、北海道・東北地域、関東地域、中国・四国地域、九州・沖縄地域は BSE 発生直後から現在までの間に消費量を増加させない傾向にあったといえる。
- FEMALE (性別)、HSIZE (世帯員数)、CHILD (子供ダミー)、年齢ダミー、職業ダミー、所得ダミーの係数はいずれも 10% 水準以下では有意ではなく、これらの属性の消費行動に対する影響は検出されなかった。
- DD (BSE 発生直後に食べる量を減少) の係数は 10% 水準で有意であり、値は 0.52 である。このことから、BSE 発生直後に消費量を減少した人は、BSE 発生直後から現在までの間に消費量を増加させたといえる。

ウ. 鳥インフルエンザ発生直後の消費行動の規定要因

- ANXBF(鳥インフルエンザに対する不安)の係数は 1%水準で有意であり、値は-0.94 である。このことから、不安感が高いほど鳥インフルエンザ発生直後に消費量を減らしていたといえるが、その絶対値は BSE 発生直後の値(-1.18)よりも低く、不安感が消費行動に与える影響は BSE 発生直後と比較して小さかったといえる。
- 知識カテゴリーの中で、10%以下の水準で有意な係数はなく、これらの知識変数の消費行動に対する影響は検出されなかった。
- 考えカテゴリーの中では、AT5(鶏肉・鶏卵の国産安全性)の係数が 10%水準で有意であり、値は 0.20 である。このことから、国産の鶏肉・鶏卵は安全だと思っている人は鳥インフルエンザ発生直後に消費量を減少させなかったといえる。一方、AT6(鳥インフルエンザの経済的影響)の係数は 10%水準で有意であり、値は-0.22 である。このことから、国内での鳥インフルエンザ発生が日本経済に影響を与えている人ほど、消費量を減少させたといえる。また、BSE の場合と同様に AT11(食品安全行政の方向性)は 10%水準で有意であり、値は-0.25 である。
- 属性カテゴリーの中では、唯一職業ダミーの JOB4(農林水産業)の係数が 10%水準で有意であり、値は-1.44 である。このことから、会社員と比較して、農林水産業に従事する人は鳥インフルエンザ発生直後に消費量を減らす傾向にあったといえる。
- FEMALE(性別)、HSIZE(世帯員数)、CHILD(子供ダミー)、年齢ダミー、居住地ダミー、所得ダミーの係数はいずれも 10%水準以下では有意ではなく、これらの属性の消費行動に対する影響は検出されなかった。

エ. 鳥インフルエンザ発生直後～現在の消費行動の規定要因

- ・ ANXBF(鳥インフルエンザに対する不安)の係数は 5%水準で有意であり、値は-0.43 である。このことから、不安感が高いほど鳥インフルエンザ発生直後から現在の間 に消費量を減らしていたといえるが、鳥インフルエンザ発生直後の ANXBF の係数 (-0.94) よりはその絶対値が小さいため、発生直後と比較すれば不安感が消費行動に あたえた影響は低下したといえる。
- ・ 知識カテゴリーでは KBF2(ウイルス特性)の係数は 10%水準で有意であり、値は-0.44 である。このことから、鳥インフルエンザウイルスが通常の調理温度で容易に死滅 するという知識を持つ人は、鳥インフルエンザ発生直後から現在の間消費量を減 少させる傾向にあったといえる。
- ・ 考えカテゴリーの中では、AT11(食品安全行政の方向性)と AT13(コスト意識)の係数 がいずれも 10%水準で有意であり、値はそれぞれ 0.37、0.32 である。このことか ら、現在食品安全行政がよい方向に向かっていると思っている人や安全性の高い食 品であれば価格が高くても優先的に購入したいと考えている人は、鳥インフルエン ザ発生直後から現在の間消費量を増やす傾向にあったといえる。
- ・ 居住地ダミーのうち、AREAD1(北海道・東北)の係数が 5%水準で有意であり、値は -1.02 である。このことから、関西地域と比較して北海道・東北地域は、鳥インフ ルエンザ発生直後から現在の間消費量を増加させない傾向にあったといえる。
- ・ 所得ダミーでは、INCD1(200 万円以下)と INCD8(2,001 万円以上)の係数がいずれも 10%以下の水準で有意であり、値はそれぞれ-1.23、-2.01 である。このことから、 鳥インフルエンザ発生直後から現在の間、最低所得層と最高所得層で消費量を増 加させない傾向にあったといえる。
- ・ 属性カテゴリーの中で、FEMALE(性別)、HSIZE(世帯員数)、CHILD(子供ダミー)、年 齢ダミー、職業ダミーの係数はいずれも 10%水準以下では有意ではなく、これらの 属性の消費行動に対する影響は検出されなかった。
- ・ DD(鳥インフルエンザ発生直後に食べる量を減少)の係数は 10%水準で有意であり、 値は 2.21 である。このことから、鳥インフルエンザ発生直後に消費量を減少した人 は、鳥インフルエンザ発生直後から現在までの間に消費量を増加させたといえる。

4) 引用文献

- [1] Vani K. Borooah (2001) Logit and Probit: Ordered and Multinomial Models
-Quantitative Applications in the Social Sciences-, Sage Pubns.
- [2] 牧厚志、宮内環、浪花貞夫、縄田和満 (1997) 『応用計量経済学Ⅱ-数量経済分析
シリーズ-』多賀出版.

(4) 考察

ここでは、BSE、鳥インフルエンザ発生に伴う消費行動の変化とその規定要因に関する分析を行った。

①単純集計

単純集計から得られた主な結果は以下の通りである。

1) 消費行動の変化

- ・発生直後の消費量を見ると、BSEの方が鳥インフルエンザよりも消費量を減らした人の割合が高い結果となった。
- ・また、[Q1][Q2][Q4][Q5]を通じて、鳥インフルエンザの方が、「変化なし」と回答した人の割合が高い結果となった。
- ・[Q3][Q6]において、発生直後に消費量が減り、その後増加した回答者にその理由を尋ねたところ、BSE（[Q3]）では、「時間の経過とともに何となく不安感が薄れたから」が最も多くなったのに対して、鳥インフルエンザ（[Q6]）では、「安全性に関する情報が得られ安心したから」が最も多い結果となった。

2) 消費行動の規定要因

- ・多くの人は鳥インフルエンザよりもBSEの方が不安だと感じているといえる。
- ・知識を尋ねる質問からは、BSEの関連事項の方が相対的によく知られているといえる。

3) リスクコミュニケーション

- ・リスクコミュニケーションや意見交換会の認知度は10～20%とそれほど高くないといえる。
- ・また、今後の取組としては、「テレビCM・新聞などで情報を提供する」や「専門家がマスメディアなどを通じてわかりやすい説明を行う」といった取組へのニーズが高い結果となった。

②順序ロジットモデル（消費行動の規定要因の分析）

順序ロジットモデルを用いて、①BSE 発生直後、②BSE 発生直後～現在、③鳥インフルエンザ発生直後、④鳥インフルエンザ発生直後～現在、の 4 つの消費行動の規定要因を把握した。その主な分析結果は以下の通りである。

- ・不安感 は BSE、鳥インフルエンザのいずれにおいても消費量を減らす効果があったといえる。また、推定結果の係数の絶対値は、発生直後よりも発生直後から現在の方が小さくなっているため、不安感による消費減少効果は発生後時間がたつにつれて低下していたといえる。
- ・知識変数についてみると、BSE の場合、「日本では、牛をと畜した後に、特定危険部位（人が食べると感染の恐れがあるといわれている部分（SRM））が除去されている。」という SRM に関する知識を持っている人が消費量を減少させなかった傾向にあったといえる。この知識変数は現在の状態であることに留意が必要であるが、現在の知識が高い人は当時も平均水準以上の知識があったと仮定すれば、SRM に関する知識が消費の減少を食い止める効果があったと考えられる。また、発生直後～現在においては、知識変数は消費行動に影響を与えていない。
- ・一方、鳥インフルエンザの場合は、発生直後に知識変数は消費行動に影響を与えていなかったが、発生直後～現在において「鳥インフルエンザウイルスは、通常の調理温度で容易に死滅する。」というウイルス属性に関する知識が、消費を減少させる（回復させない）効果があった。この知識は「加熱調理に比べて、生食はリスクが大きい」と捉えることも可能であるため、鳥インフルエンザ発生直後～現在にかけて卵を中心に生食を控えている結果を示している可能性が示唆されている。
- ・BSE、鳥インフルエンザのいずれにおいても「BSE 発生後、日本の食品安全行政は良い方向に向かっている。」と考える人は発生直後に消費量を減少させ、発生直後～現在において消費量を増加（回復）させている。つまり、現在、食品安全行政を評価している人ほど、BSE、鳥インフルエンザ発生直後に消費量を減少させ、その後回復させる行動をとったといえる。一方、信頼に関する説明変数はいずれも有意とはならなかった。
- ・国産（牛肉、鶏肉・鶏卵）の安全性についての考えが消費行動に与える効果は、BSE と鳥インフルエンザで異なる。BSE の場合、発生直後～現在において「現在流通している国産の牛肉は安全である。」と考えている人は消費量を増加（回復）させていた。一方、鳥インフルエンザでは「現在流通している国産の鶏肉や鶏卵は安全である。」と考える人は、発生直後に消費量を減少させない効果があった。

- ・ BSE の発生直後～現在において「100%安全な食品は世の中には存在しない。」と考える人ほど消費量を増加（回復）させる傾向があったが、鳥インフルエンザにおいては影響を与えていない。逆に、「安全性の高い食品であれば、価格が高くても優先的に購入したい。」というコスト意識を持つ人は、BSE では消費行動に影響を与えていなかったが、鳥インフルエンザの発生直後～現在において消費量を増加（回復）させた。
- ・ 属性では、BSE 発生直後において女性が男性よりも消費量を多く減少させた。職業では、BSE、鳥インフルエンザのいずれの場合も会社員に比べて農林水産業に従事している人ほど発生直後に消費量を減少させていた。また、BSE の発生直後～現在において消費行動に地域差がみられた。中部、関西は他の地域と比較して消費量を増加（回復）させる傾向にあった。所得については、最高所得層と最低所得層で幾分の消費行動の違いが見られたが、総じて所得による影響は検出されなかった。

2. 意見交換会におけるアンケート調査の企画、設計

(1) はじめに

食品安全委員会が行うリスクコミュニケーションの効果を検証するために、今年度実施予定の意見交換会において実施するアンケート調査の企画、設計を行った。

ここで、意見交換会の出席によって出席者の理解度、信頼度がどのように変化したか特定できるよう、調査項目の設定を行った上で、調査票を作成した。

(2) 各調査項目の設定とその目的

設定した調査項目とその目的は以下に示す通りである。

図表 14：調査項目一覧

調査項目	目的
参加者の基本属性 (問1 ①～④)	意見交換会参加者の職業属性および参加動機を把握
リスクコミュニケーションへの参加度 (問1 ⑤)	食品安全に関連した意見交換会への参加回数を把握
リスク評価の理解度 (問1 ⑥)	リスク評価の理解度について把握
BSE 対策の理解度及び意識の変化 (問2 ①～③、⑤)	各々の BSE 対策について、意見交換会を実施する前と後での参加者の理解、意識の変化を把握
食品安全委員会に対する信頼度の変化 (問2 ④)	食品安全委員会の取組について、意見交換会を実施する前と後での参加者の信頼度の変化を把握
リスクコミュニケーションの運営に対する評価 (問3 ①～④)	リスクコミュニケーション実施方法に対する意見について把握
リスクコミュニケーションのあり方等 (自由回答)	リスクコミュニケーションのあり方等に関する考え、意向等を自由回答方式で把握

(3) 調査票

前頁で設定した調査項目に従い、作成した調査票を以下に示す。

食品に関するリスクコミュニケーション
－ 日本における牛海綿状脳症（BSE）対策に関する意見交換会 －
にご参加いただいた皆様へ

平成●●年●●月●●日
食品安全委員会事務局

本日は、お忙しい中、意見交換会へご参加いただきありがとうございます。今後のリスクコミュニケーションをより実りある形で実施していくため、本日の意見交換会等に関するアンケートを実施しております。以下の各設問についてご回答いただき、意見交換会終了後、受付に設置されている回収ボックスにご提出いただきますようお願い申し上げます。

問1. あなたご自身のことや食品の安全性に関するお考えについてお聞きします。以下の設問について、それぞれあてはまるもの1つを選んで番号を○で囲んでください。

① 性別

1. 男性	2. 女性
-------	-------

② 年齢

1. 20歳未満	2. 20歳代	3. 30歳代	4. 40歳代
5. 50歳代	6. 60歳代	7. 70歳以上	

③ 職業（複数該当する方は、主なもの1つを○で囲んでください。）

1. 消費者団体（生活協同組合関係者 など）	2. 主婦、学生、無職
3. 生産者（農畜産業従事者 など）	4. 食品関連事業者（加工、流通、販売 など）
5. マスコミ（新聞記者、カメラマン など）	6. 行政（自治体職員、独立行政法人等職員 など）
7. 食品関連研究・教育機関（教員、研究職員 など）	
8. その他（具体的に： _____）	

④ 本日の意見交換会に参加された動機

（複数該当する方は、主なもの1つを○で囲んでください。）

1. BSE 対策に対する不安感があったから
2. BSE 対策についての情報を入手したかったから
3. 行政や専門家に直接意見を言いたかったから
4. 業務の一環として参加する必要があるから
5. その他（具体的に： _____）

⑤ 食品安全に関する意見交換会への参加回数（今回を含めて）

1. 初めて	2. 2回目	3. 3回目
4. 4回目	5. 5回以上	

→ 次のページにお進みください。

⑥ 「100%安全な食品はないこと」について、あなたはどのように思われますか。

- | | | |
|------------|-----------|----------|
| 1. 強く思う | 2. やや思う | |
| 3. あまり思わない | 4. 全く思わない | 5. わからない |

問2. 以下の設問の【意見交換会に参加する前】と【意見交換会に参加して】について、それぞれあてはまるもの1つを選んで番号を○で囲んでください。

① 日本における BSE 感染牛の発生状況について

【意見交換会に参加する前】(1つに○)

1. 知っていた
2. 知らなかった



【意見交換会に参加して】(1つに○)

1. 理解が深まった
2. 変化なし
3. わからなくなった

② 異常プリオンが集中している特定危険部位 (SRM) の除去や、これまで約 350 万頭に対して行われていると畜場における BSE 検査について

【意見交換会に参加する前】(1つに○)

1. 知っていた
2. 知らなかった



【意見交換会に参加して】(1つに○)

1. 理解が深まった
2. 変化なし
3. わからなくなった

③ 肉骨粉の牛への利用が禁止されているなどの日本の飼料規制について

【意見交換会に参加する前】(1つに○)

1. 知っていた
2. 知らなかった



【意見交換会に参加して】(1つに○)

1. 理解が深まった
2. 変化なし
3. わからなくなった

④ 食品安全委員会の取組 (リスク評価の実施など) について

【意見交換会に参加する前】(1つに○)

1. 信頼していた
2. 信頼していなかった
3. どちらとも言えない



【意見交換会に参加して】(1つに○)

1. 信頼感が深まった
2. 変化なし
3. 不信感が深まった

→ 次のページにお進みください。

⑤ BSE 対策について

【意見交換会に参加する前】(1つに○)

1. 安心していた
2. 安心していなかった
3. どちらとも言えない



【意見交換会に参加して】(1つに○)

1. 安心感が高まった
2. 変化なし
3. 不安感が高まった

問3. 本日の意見交換会の実施方法についてお聞きします。以下の設問について、それぞれあてはまるもの1つを選んで番号を○で囲んでください。

① 開催方法(参加手続き・場所・所要時間)

- | | | |
|--------------|-------------|----------|
| 1. とてもよかった | 2. よかった | |
| 3. あまりよくなかった | 4. 全くよくなかった | 5. わからない |

② 専門家等による講演

- | | |
|----------------|--------------|
| 1. とてもわかりやすかった | 2. わかりやすかった |
| 3. わかりにくかった | 4. 全くわからなかった |

③ 配付資料

- | | |
|----------------|--------------|
| 1. とてもわかりやすかった | 2. わかりやすかった |
| 3. わかりにくかった | 4. 全くわからなかった |

④ 意見交換時における講演者の応答

- | | |
|----------------|--------------|
| 1. とてもわかりやすかった | 2. わかりやすかった |
| 3. わかりにくかった | 4. 全くわからなかった |

最後に、ご意見や感想等がありましたら、ご自由にお書きください。

◆◆◆ ご協力ありがとうございました ◆◆◆

意見交換会終了後、受付に設置されている回収ボックスにご提出いただきますようお願い申し上げます。

3. 鳥インフルエンザ発生に伴う社会的影響の定量化

(1) はじめに

2004年1月に国内で鳥インフルエンザが発生した後に、鶏肉や鶏卵の消費は減少した。これは消費者が鶏肉や鶏卵を危険と評価し、消費を減らしたことを意味している。しかし、実際は鳥インフルエンザの人への感染は、鶏肉や鶏卵を食することで起こるとは考えられていないことから、リスクコミュニケーションを適切に行い、消費者が正しいリスク情報に基づいて食品を選択できるような施策が展開されていたならば、消費の減少は幾分か回避できていた可能性が考えられる。従って、消費者が鶏肉や鶏卵の消費を回避したために発生した社会的影響を把握することは、今後同様のクライシスが発した際、どの程度の規模の施策を展開すると効果的であるかを考える上で、大変有用である。

そこで本調査では、鳥インフルエンザ発生に伴う社会的影響を計量経済分析により推計し、その大きさを定量的に把握する。具体的には、消費者の財に対する品質評価を推計できる需要モデルを用いて鶏肉と鶏卵それぞれの需要関数を推定し、消費者に生じた厚生効果をシミュレーションすることによって、「①国内における鳥インフルエンザ発生により消費者の消費行動に影響が及んだ期間」と、「②社会的影響の大きさ（金額ベース）」の2点を把握することとする。

(2) 分析方法

①分析モデル

分析モデルにはFoster and Just [1989] の需要モデルを採用する。Foster and Just モデルの特徴の一つは、財の需要が、価格や所得に加えて、消費者の財に対する品質評価（主観的品質）で説明される点である。そのためFoster and Just モデルでは、実際に財の品質が変化していなくても、主観的品質が変化していれば、それに伴って発生する消費者の厚生（財を消費することで得られる満足度）の変化をとらえることができる。鳥インフルエンザの発生によって消費者の鶏肉、鶏卵などに対する品質評価は低下したと考えられるが、このモデルを用いることによって、主観的品質の変化が需要に与えた影響をとらえることができる。

②社会的影響 (CV) の定義と導出

1) 本分析における社会的影響の定義

鳥インフルエンザの発生やその後の政府や産業およびマスメディアなどの対応は、消費者による鶏肉や鶏卵の品質評価を変化させることから、価格や所得が一定であっても厚生効果をもたらすと考えられる。本分析では、品質評価が変化したときの補償変分 (Compensating Variation: 以下、CV という) を使って鳥インフルエンザ発生後の厚生効果の評価を行う。CV とは品質変化後も、変化前の効用水準にとどまれるのであったら消費者が支払ってもよいと考える最大の金額、または、補償してもらわなければならない最小の金額をあらわす。すなわち、今回の分析において CV は、国内における鳥インフルエンザ発生後も発生以前と同レベルに鶏肉や鶏卵を安全と消費者が評価できていたならば発生しなかった厚生損失をあらわす。

本分析では、この厚生損失を鳥インフルエンザに伴う社会的影響と定義し分析を行う。

2) 社会的影響 (CV) の導出

ここでは社会的影響 (CV) の導出について説明する。以下の説明は Foster and Just に従う。はじめに、消費者は次の期待効用最大化問題に直面しているとする。

$$\max_{x,y} E_q[U(x, y, \theta)] \quad \text{s.t.} \quad m = px + y \quad (\text{式 2-1})$$

ここで x は関心のある財 (鶏肉または鶏卵) の消費を、そして y はその他の財の消費をあらわす。 θ は関心のある財の品質水準をあらわす。 p と m はそれぞれ関心のある財の価格と所得をあらわし、ともに他の財の価格で相対化されている。それぞれの引数による偏微分は $U_x > 0$ 、 $U_y > 0$ 、 $U_\theta > 0$ とする。 q は財の品質の分布をあらわすパラメータをあらわし、この値が消費者の財に対する品質評価 (主観的品質) を説明するものとする。また、(式 2-1) の解である $x^* = x(p, m, q)$ と $y^* = m - px^*$ を目的関数に代入して得られる間接効用関数を $V(p, m, q)$ であらわし、さらに間接効用関数を m について解くことで得られる支出関数を $e(p, \bar{U}, q) \equiv \{\min(px + y) ; U(x, y, q) \geq \bar{U}\}$ と表現する。以上の設定のもと、CV について説明する。

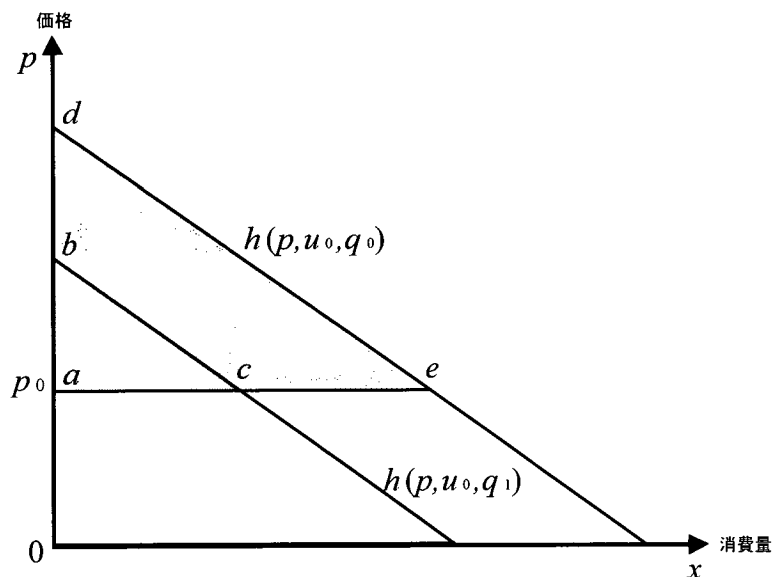
いま x と q の間に、Maler [1974] の弱補完性が成立しているとする。また価格 p_0 、所得 m_0 、主観的品質 q_0 とする。そして品質に関する情報が消費者に提供され、主観的品質が q_0 から q_1 へと変化するとする。このとき消費者が享受する厚生変化は CV でとらえられ、支出関数を使って表現すると、CV は次式であらわされる。

$$CV = e(p_0, U_0, q_0) - e(p_0, U_0, q_1) \quad (\text{式 2-2})$$

$U_0 = V(p_0, m_0, q_0)$ は、主観的品質変化前の状態で達成される効用水準である。

また、以下の図表を使って q_0 から q_1 へと主観的品質が低下したときの CV をとらえると、CV は台形 $bced$ に相当する。なお、 $h(p, u_0, q_0)$ と $h(p, u_0, q_1)$ は、主観的品質がそれぞれ q_0 、 q_1 のときの補償需要曲線をあらわしている。

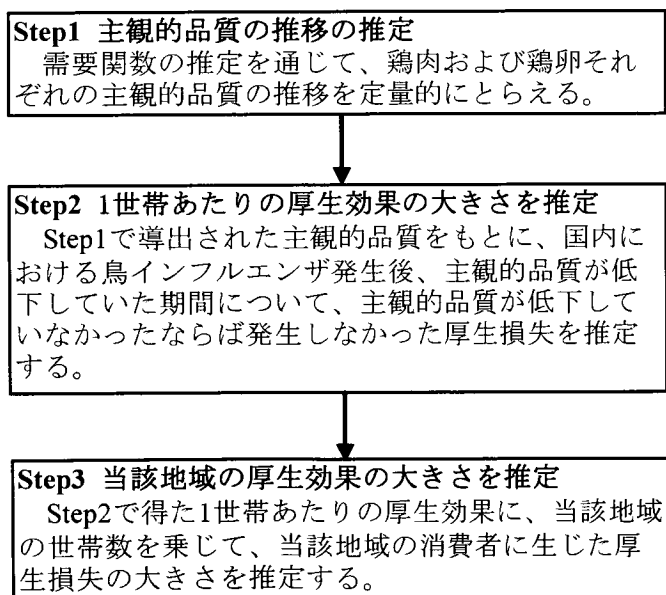
図表 15 : 品質評価低下時の厚生効果 (CV)



③ 定量化のステップ

社会的影響の定量化のステップは、以下の図表に示すとおりである。

図表 16 : 社会的影響の定量化のステップ



定量化のステップは大きく3つに分かれている。

まず需要関数を推定し、主観的品質の推移を定量的に捉える(Step 1)。

次に、この定量化された主観的品質の推移をもとにして、鳥インフルエンザ発生後の主観的品質が低下していた期間を特定化し、さらにこの期間主観的品質が低下していなかったならば発生しなかった厚生損失を推定する(Step 2)。

これら厚生損失は1世帯あたりの値であるので、これに当該地域の世帯数を乗じて、当該地域の消費者に生じた厚生損失の大きさを推定する(Step 3)。

なお、今回の分析では鳥インフルエンザ発生地にもっとも近い消費地である京都市と全国を分析の対象地域として、鶏肉、鶏卵に関して社会的影響を定量化した。

④主観的品質の分析モデル

分析を行う際、鶏肉(または鶏卵)の主観的品質 q をどのように特定化するかが問題となる。Foster and Just では、主観的品質 q の変化は一価の関数 $f(q)$ でとらえられるとし、ダミー変数を使って $f(q)$ を特定化している。このため本分析においても同様に、ダミー変数を使い次の形で t 期の主観的品質を特定化する。

$$f(q_t) = \exp(\beta_0 + \beta_1 d_t + \sum_i \beta_{2i} d_{it} + \sum_{j=0}^J \beta_{1j} D_{t,j}) \quad (\text{式 2-3})$$

ここで $\beta_0 (>0)$ 、 $\beta_1 (<0)$ 、 β_{2i} 、 β_{1j} は定数項であり、BSE 発生前(2001年8月まで)の鶏肉または鶏卵の主観的品質(ただし季節の影響を取り除いたものとする)をあらわす。

d_t は BSE 感染牛1頭目が確認された2001年9月以降ならば1、それ以前ならば0をとるダミー変数である。したがって β_1 は BSE 発生による主観的品質の構造変化をあらわすパラメータである。 d_{it} は i 月ならば1、それ以外なら0をとる月次ダミー変数である。なお、 i の特定は推定結果の有意性を見て行う。

$D_{t,j}$ は国内ではじめて鳥インフルエンザ発生が確認された2004年1月に1、その他では0をとるダミー変数であり、その j 期のラグが $D_{t,j}$ である。したがって、 β_{1j} は国内での鳥インフルエンザ発生に伴う主観的品質の低下の推移をとらえ、 J はその期間をあらわす。

また、鳥インフルエンザ発生に伴う主観的品質の変動をとらえるラグ係数 β_{1j} は Almon 分布ラグとして推定し、最大ラグ J は推定結果の有意性を見て決定する。また主観的品質は、最小値に達した後は単調に上昇するという制約を課して β_{1j} を推定する。

次に、鶏肉(または鶏卵)の需要関数形は次であらわされるとする。

$$x_t = x(p_t, m_t, q_t) = f(q_t) e^{\gamma m_t - \alpha p_t} \quad (\text{式 2-4})$$

ここで p_t 、 m_t 、 $f(q_t)$ はそれぞれ、 t 期の鶏肉(または鶏卵)の価格、食料支出をあらわす。 α と γ は未知のパラメータをあらわす。

このモデルでは、主観的品質が支出に及ぼす効果は、価格が大きくなるにつれて減少する。またこのモデルでは需要の価格弾力性は $-\alpha p_t$ 、支出弾力性は γm_t で導出される。

本分析において推定する式は(式 2-5)である。これは(式 2-4)に(式 2-3)の主観的品質

を代入し、対数変換して得られる。本分析では、(式 2-5)を各地域、各品目別に推計する。

$$\ln x_i = \beta_0 + \beta_1 d_i + \sum_i \beta_{2i} d_{ii} + \sum_{j=0}^J \beta_{1j} D_{i,j} + \gamma m_i - \alpha p_i \quad (\text{式 2-5})$$

以上から、主観的品質が q_0 から q_1 へと変化したときの CV の計算式は、次の式であらわされる。

$$\begin{aligned} CV &= e(p_0, U_0, q_0) \cdot e(p_0, U_0, q_1) \\ &= \frac{1}{\gamma} \ln \left[\frac{\gamma}{\alpha} (x_1 - x_0) + 1 \right] \end{aligned} \quad (\text{式 2-6})$$

(3) 分析結果

①分析データ

1) データ出典

需要関数の推定に用いたデータとその入手方法を以下の図表に示した。

各データは 2000 年 1 月から 2004 年 11 月までの 1 世帯あたりの月別データである。なお、家計調査結果からは農林漁家世帯を除く全世帯を対象とするデータを用いている。また、価格と食料支出データは食料の消費者物価指数（平成 12 年基準）で基準化している。

全世帯あたりの厚生効果の推定に際しては、世帯数データが必要となる。京都市の世帯数は、月別のデータ (<http://www.city.kyoto.jp/sogo/toukei/jinkou/qa002.html> より入手) を利用するが、全国のそれについては月別データが入手できないため、平成 16 年 3 月 31 日現在の 49,837,731 戸 (<http://www.soumu.go.jp/c-gyousei/020918.html> より入手) を用いる。

図表 17：データ出典

	単位	京都市	全国
鶏肉平均価格	円/100g	小売物価統計調査結果	家計調査結果
平均購入数量	100g	食料支出/平均価格	
鶏卵平均価格	円/100g	小売物価統計調査結果	家計調査結果
平均購入数量	100g	食料支出/平均価格	
食料支出	円	家計調査結果	家計調査結果

注：家計調査結果は総務省ホームページ (<http://www.stat.go.jp/data/kakei/index.htm>) で、小売物価統計調査結果は総務省ホームページ (<http://www.stat.go.jp/data/kouri/3.htm>) で入手できる。

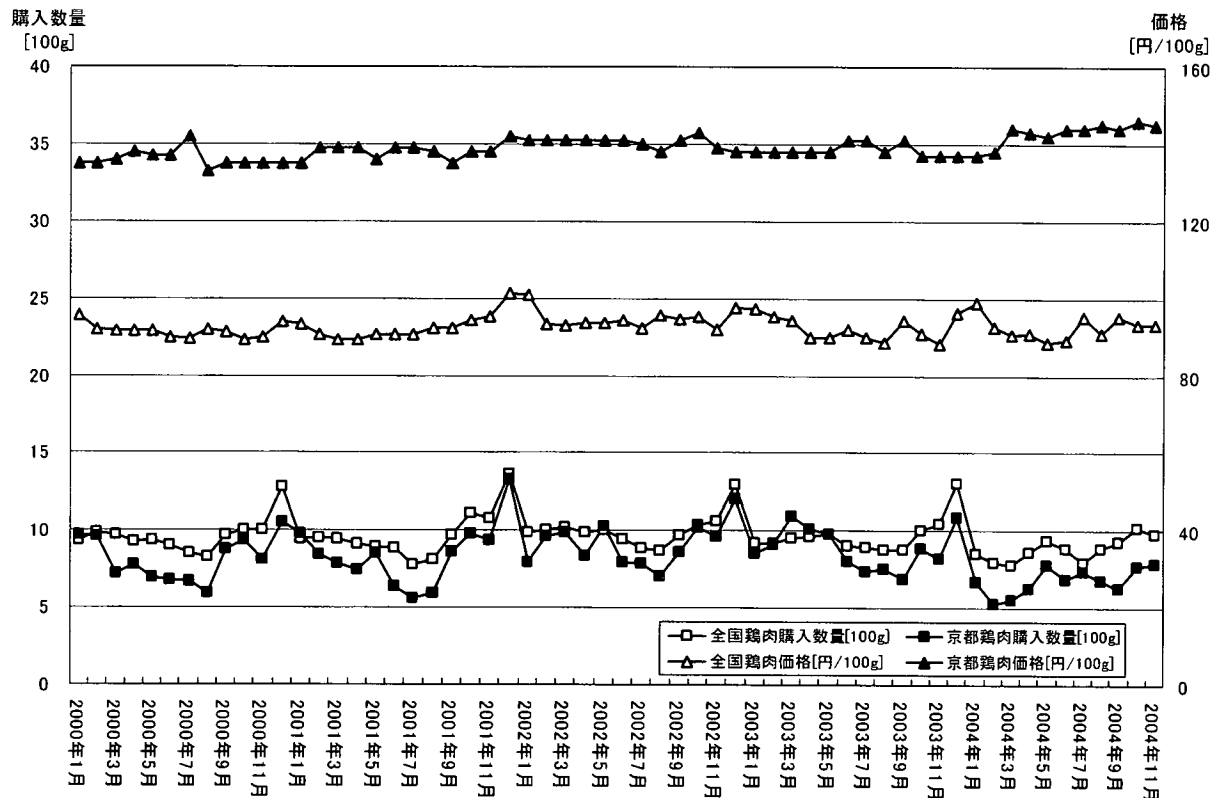
2) 平均購入数量と平均価格の推移

次に、推定に用いた平均購入数量と平均価格のデータの推移を観察し、特徴について整理する。

ア. 鶏肉

以下の図表は、鶏肉の平均購入数量と平均価格の推移を表したグラフである。

図表 18：鶏肉の平均購入数量と平均価格の推移



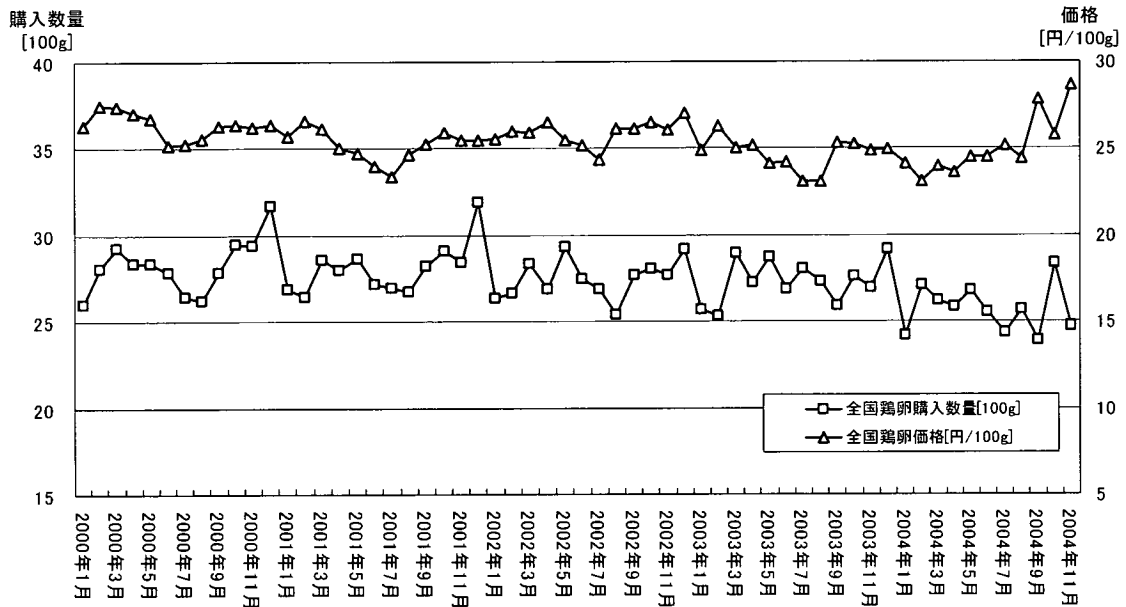
全国の鶏肉の購入数量が最も低い値を示しているのは、国内で鳥インフルエンザがはじめて確認された月の翌々月の2004年3月である。その後徐々に購入数量は上昇傾向を見せ、8月には昨年同月を上回る数量まで回復している。また、鳥インフルエンザ発生後の価格については、昨年同月と比較して見ると、7月以降一貫して昨年を上回る値を示しているのが特徴としてあげられる。

京都市の鶏肉の購入数量が最も低い値を示しているのは、鳥インフルエンザがはじめて確認された月の翌月の2004年2月である。その後上昇傾向を見せ7月には昨年同月を上回る値を示している。また、価格は、2004年3月以降、昨年同月を2.1%から6.6%ほど上回る高い水準で推移している。

イ. 鶏卵

以下の図表は、鶏卵の平均購入数量と平均価格の推移を表したグラフである。

図表 19：鶏卵の平均購入数量と平均価格の推移



全国の鶏卵の購入数量が最も低い値を示しているのは、鳥インフルエンザがはじめて確認された2004年1月である。2月には昨年同月を上回る値を示しているが、3月には再び昨年同月の値を下回り、その傾向は9月まで継続している。

一方、鳥インフルエンザ発生確認後の価格については、1月から4月までは一貫して昨年同月を下回る水準で推移している。その中で下落幅が最も大きいのは2月で、約12%となっている。前述のとおり、2月の購入数量は昨年同月を上回っているが、これは価格下落によるところが大きいものと推察される。また、5月以降の価格は一転して昨年同月を上回る水準で推移している。上昇幅は上下動があるものの、徐々に、その幅は大きくなる傾向にあり、11月の価格は昨年同月を約15%上回っている。

②需要関数の推定結果

1) 需要関数の推定結果

需要関数の推定結果は以下の図表に示す通りである。推定はまず通常最小二乗法 (OLS) で行った。全国の鶏肉需要関数については、DW (Durbin-Watson) 検定、LM (Lagrange Multiplier) 検定の結果、誤差項に 1 次の自己相関が強く疑われるため、1 次の自己相関を考慮して、非線形最小二乗法で推定した。なお、京都市の鶏卵の需要関数は主観的品質のパラメータが有意となる結果は得られなかった。以下では、各需要関数のパラメータの推定結果について見ていくことにする。

図表 20 : 需要関数の推定結果

パラメータ	鶏肉(全国)		鶏卵(全国)		鶏肉(京都市)	
	推定値	t-値	推定値	t-値	推定値	t-値
価格	-0.006	-2.856	-0.018	-4.259	-0.011	-2.027
支出	0.000009	16.725	0.000015	8.531	0.000007	5.342
BSE	0.068225	4.260			0.164603	4.287
主観的品質						
2004年1月	-0.161	-6.007	-0.058	-3.177	-0.383	-5.736
2004年2月	<u>-0.214</u>	-7.063	-0.0791	-3.793	<u>-0.515</u>	-7.222
2004年3月	-0.191	-6.714	<u>-0.0794</u>	-4.257	-0.471	-7.613
2004年4月	-0.125	-3.936	-0.071	-4.017	-0.322	-4.471
2004年5月	-0.050	-1.787	-0.061	-3.614	-0.141	-2.091
2004年6月			-0.055	-3.591		
2004年7月			-0.051	-3.236		
2004年8月			-0.047	-2.393		
2004年9月			-0.034	-1.856		
Adj R ²	0.927		0.794		0.755	
AR(1)	0.381	2.574				
DW	1.438		1.801		1.782	
		P-値		P-値		P-値
LM統計量	4.809	0.028	0.702	0.402	0.497	0.481

注1: 鶏肉(全国)のパラメータ推定値と自由度修正済み決定係数はAR(1)誤差項を持つ回帰式の推定結果である。

注2: 主観的品質の推定値や分散共分散は、Almon ラグ係数を決定する多項式の係数の推定値や分散共分散から再計算されるため、主観的品質のt-値は通常のt-値とは異なる。Almon ラグの詳細については森棟[1999]を参照されたい。

2) 全国の鶏肉

価格と食料支出のパラメータ推定値を使い、計測期間中の価格と食料支出の平均値で評価すると、価格弾力性は-0.547、支出弾力性は0.725と推定される。

主観的品質の推移をとらえるラグパラメータ β_{ij} の結果から、国内における鳥インフルエンザ発生が主観的品質に影響を及ぼした期間は2004年1月から5月までの5ヶ月間と推察される。またラグパラメータの中で β_{11} が最小であることから、最も影響が大きかったのは2月と推察される。

また、BSE（2001年8月までは0、9月以降は1をとるダミー変数）のパラメータが有意に正であったことから、国内におけるBSE発生により鶏肉の主観的品質は上昇していると推察される。

3) 全国の鶏卵

価格と食料支出のパラメータ推定値を使い、計測期間中の価格と食料支出の平均値で評価すると、価格弾力性は-0.462、支出弾力性は1.165と推定される。

主観的品質の推移をとらえるラグパラメータの有意性より、国内における鳥インフルエンザ発生が主観的品質に影響を及ぼした期間は2004年1月から9月までの9ヶ月間と推察される。また、最も影響が大きかったのは3月と推察される。

4) 京都市の鶏肉

価格と食料支出のパラメータ推定値を使い、計測期間中の価格と食料支出の平均値で評価すると、価格弾力性は-1.549、支出弾力性は0.583と推定される。

主観的品質の推移は全国の鶏肉と同様に、2月まで低下し、その後徐々に回復したものの5月までは低下していたと推察される。

また、京都市においても、国内におけるBSE発生により鶏肉の主観的品質は上昇していると推察される。

③社会的影響（CV）の推定結果

1) 社会的影響（CV）の推定結果

社会的影響（CV）の推定結果は、以下の図表に示す通りである。ここで、負の金額は損失を意味しており、また、国内における鳥インフルエンザ発生後も発生以前と同レベルに鶏肉や鶏卵を安全と消費者が評価できていたならば発生しなかった厚生損失をあらわしている。％は食料支出における損失の割合をあらわしている。

以下、それぞれの推計結果を述べる。

図表 21：社会的影響（CV）の推定結果

	鶏肉(全国)			鶏卵(全国)			鶏肉(京都市)		
	円/1世帯	%	円/全世帯	円/1世帯	%	円/全世帯	円/1世帯	%	円/全世帯
2004年1月	-247	-0.34	-12,289,676,323	-80	-0.11	-4,005,726,567	-278	-0.33	-177,971,493
2004年2月	-310	-0.44	-15,442,658,798	-112	-0.16	-5,568,769,035	-335	-0.44	-214,735,726
2004年3月	-297	-0.39	-14,817,133,835	-115	-0.15	-5,742,784,847	-304	-0.36	-194,611,766
2004年4月	-216	-0.30	-10,781,951,019	-102	-0.14	-5,081,918,149	-212	-0.28	-135,613,311
2004年5月	-72	-0.09	-3,579,076,008	-93	-0.12	-4,654,192,912	-109	-0.13	-70,508,551
2004年6月	-	-	-	-78	-0.11	-3,906,834,306	-	-	-
2004年7月	-	-	-	-67	-0.08	-3,359,426,166	-	-	-
2004年8月	-	-	-	-64	-0.08	-3,167,114,788	-	-	-
2004年9月	-	-	-	-45	-0.06	-2,229,413,530	-	-	-
総額	-1,142	-0.31	-56,910,495,982	-757	-0.11	-37,716,180,301	-1,238	-0.30	-793,440,847

2) 全国の鶏肉

影響を受けた期間は5ヶ月である。1世帯1ヶ月あたりの厚生損失は72円から310円の値を示している。2004年1月から5月までの5ヶ月間の総額は1,142円と推定され、これを当該5ヶ月間の食料支出に占める割合で見ると0.31%となる。また、全世帯では、5ヶ月間の厚生損失の合計は569億円を超えると推定される。

3) 全国の鶏卵

影響を受けた期間は9ヶ月である。1世帯1ヶ月あたりの厚生損失は45円から115円の値を示し、2004年1月から9月までの9ヶ月間の総額は757円と推定される。これを当該9ヶ月間の食料支出に占める割合で見ると0.11%となる。また、全世帯では、9ヶ月間の厚生損失は377億円を超えると推定される。

4) 京都市の鶏肉

影響を受けた期間は5ヶ月である。1世帯1ヶ月あたりの厚生損失は105円から335円の値を示している。5ヶ月間の総額は1,238円と推定され、食料支出に占める割合で見ると0.30%となる。また、全世帯では、5ヶ月間の厚生損失は7億9千万円を超えると推定される。

5) 推定結果の解釈に関する留意点

ここで推計された社会的影響は、消費者全員が鳥インフルエンザ発生後も鶏肉や鶏卵を発生前と同程度に安全と評価できていたならば回避できていた損失であるといえる。そのため、鶏肉や鶏卵の安全性に関する情報の周知徹底により回避できた損失の最大金額と解釈するのが望ましい。但し、現実には、消費者に鶏肉や鶏卵の安全性に関する情報を周知しても、鶏肉や鶏卵の潜在リスクの認識が生まれることや、事業者のコンプライアンスや行政措置に対する消費者の不安などの様々な要素が影響するため、消費者全員が鶏肉や鶏卵の安全性について、鳥インフルエンザ発生前と同等に安全と評価することはないと考えられる。従って、ここで推計された金額をディスカウントする必要があるとともに、その解釈についても一定の留意が必要と言える。

あわせて、今回の試算は鶏肉及び鶏卵に着目し、推計を行ったものであり、豚肉や牛肉等へのシフトは考慮されていないことに留意する必要がある。

6) リスクコミュニケーションの効果試算

本調査で別途実施したインターネットアンケートの回答結果では、18.2% (=91名/500名) の回答者が鳥インフルエンザ発生後鶏肉の消費を一旦減らし、その後消費を回復させたと答えており、また、そのうちの49.5% (=45名/91名) がその理由として「安全性に関する情報が得られ安心したから」と答えている。仮にこの値をディスカウント率¹⁰として用いると、より狭義の鳥インフルエンザ発生に伴う社会的影響は、今回推計された値の約1割程度となり、全国の値で見ると、鶏肉で51億円、鶏卵で34億円と試算できる。

この値は、安全性に関する情報が得られ、消費者が安心できる状態になれば、回避できたであろう社会的影響の程度を示している。換言すれば、正しい情報提供やリスクコミュニケーションにより低減できる社会的影響の可能性を示唆するものである。ただし、この値はアンケート調査と社会的影響の定量化という、母集団の異なる2つのデータを結合し算出した試算値であること、また、今後、食品安全に関する情報提供がより一層行われ、リスクコミュニケーションが普及するに従い、その状況も変化していくと考えられることに留意する必要がある。

¹⁰ $(91/500) \times (45/91) \times 100 = 9.0\%$ を用いた。

(4) 考察

鳥インフルエンザの社会的影響の分析により得られた主な結果は以下に示すとおりである。

- ・鳥インフルエンザの発生により主観的品质が影響を受けた期間は、鶏肉で1月から5月までの5ヶ月、鶏卵で1月から9月までの9ヶ月であった。国内の清浄性が確認されたのは4月13日であるから、鶏肉では清浄性確認後1ヶ月程度と比較的速やかに影響が消失したと言える。一方、鶏卵における影響は清浄性確認後もすぐには消失していないが、これは、生食による摂取を控えたことによる影響であるとも考えられる。もしそうであるならば、鶏肉や鶏卵の摂取は鳥インフルエンザの感染原因ではないと伝えられると同時に、通常の調理温度で容易に死滅するので加熱すればさらに安全という情報が伝えられたことから、消費者は生食を危険と評価した行動の結果であると推察される。
- ・全国で見ると、鳥インフルエンザ発生に伴う社会的影響は、鶏肉で596億円、鶏卵で377億円と推計された。1世帯1ヶ月あたりの平均影響は、鶏肉で228円、鶏卵で84円であり、食料支出に占める割合で見ると、それぞれ0.31%と0.11%である。推計された金額は、消費者全員が鳥インフルエンザ発生後も鶏肉や鶏卵を発生前と同程度に安全と評価できていたならば回避できていた損失と解釈できる。そのため、鶏肉や鶏卵の安全性に関する情報の周知徹底により回避できた損失の最大金額とも解釈できる。しかしながら、現実には消費者に情報を周知しても全員が鶏肉や鶏卵を安全と評価することはないであろう。そのため、鶏肉や鶏卵の安全性情報の価値を推計する際には、この点を考慮して、ここで推計された金額をディスカウントする必要があることに注意されたい。
- ・鶏肉に関して京都市と全国を比較すると、金額では京都市の方が1世帯1ヶ月あたりの影響は8%ほど高くなっており、発生地に近い消費地のほうが影響を強く受ける結果となった。

(5) 引用文献

- [1] Foster, W. and R. E. Just (1989) "Measuring Welfare Effects of Product Contamination with Consumer Uncertainty," *Journal of Environmental Economics and Management*, Vol.17, pp.266-283.
- [2] Maler, K. G. (1974) *Environmental Economics: A Theoretical Inquiry*, Johns Hopkins University Press, Baltimore.
- [3] 森棟公夫 (1999) 『計量経済学』東洋経済新報社.

IV. おわりに

本調査では、国際ワークショップの開催、社会的影響の定量化、インターネットアンケート調査の実施等によって多くの知見が得られた。以下、今後の課題として次の諸点を指摘しておきたい。

- ・消費者（一般国民）と政府、事業者との間における相互の信頼は、食品安全のリスクコミュニケーションを成立させる上で最も重要な要素のひとつである。一方的な情報の提供ではなく、対話型で、透明性が高く、様々なステイクホルダーが参画可能なリスクコミュニケーションのあり方について、さらに具体的に検討する必要がある。特にゼロリスク症候群や、サイレントマジョリティー対策について早急な対策を検討する必要がある。
- ・消費者を対象とする各種世論調査あるいは食品安全に関するアンケート調査等は、リスクコミュニケーションのあり方、さらに評価において重要な情報を提供しうる。今後とも、継続的にこれらの情報収集に努め、迅速かつ効果的なリスクコミュニケーションのあり方について検討すべきである。今回のインターネットアンケート調査では、食品安全への関心の程度、理解度、消費者行動などについて現状を把握することに重点がおかれたが、リスク認知と消費者行動との関係の把握、考え方と知識や個人属性との関係の把握などに焦点を絞った、より詳細なアンケート調査の実施について検討する必要がある。
- ・リスクコミュニケーションの方法論において、信頼における科学的な情報を開示する手法、クライシス（危機）発生直後の適切な対応の仕方、日常的な危機管理の重要性、コミュニケーター育成のためのプログラムの作成など、カナダおよびオランダから多くの参考とすべき手法が確認された。このようなクライシスチームに関する方法論は日本では浸透しておらず、早急にこれらの方針を議論する必要があると思われる。その際、シミュレーション（模擬実験）を実際に行うなど、具体的な危機管理のための体制作りと周到な準備を行うことが重要であり、今後検討する必要がある。
- ・食品安全の分野においてもメディアの影響力は非常に大きい。オランダでは、3ヶ月ごとに第三者機関に依頼して、食品安全に係わる報道の伝わり方と影響についてメディア分析を行い、それをリスクコミュニケーションに有効に活用しており、我が国においても非常に参考になると考えられる。その際、今回の分析で用いた社会的影響の定量化手法は、メディア情報の社会的影響の定量化においても有効であり、今後検討する必要がある。

- ・今回の国際ワークショップを機に、今後、各国がリスクコミュニケーションに関わる調査研究を可能な限り共通の土俵のもとに遂行していくことが重要である。今後、さらに積極的に国際共同研究を進め、各国間で情報交換可能な食のリスクコミュニケーションに関する国際的なネットワークを構築することが必要である。その際には、欧米だけではなくアジア諸国との関係強化もあわせて重要であると考えられ、今後検討する必要がある。

V. 資料編

1. BSE、鳥インフルエンザ発生時の国民の消費行動の把握

(1) インターネットアンケート調査票

本調査で利用したインターネットアンケートの調査票を以下に掲載する。

食品の安全性に関するアンケート			
番号	条件	内容	区分
Q1	必須回答	BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。	SA
1		とても増えた	
2		増えた	
3		変わらなかった	
4		減った	
5		とても減った	
Q2	必須回答	BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。	SA
1		とても増えた	
2		増えた	
3		変わらなかった	
4		減った	
5		とても減った	
Q3	必須回答:【Q3】は、Q1で「減った」「とても減った」、かつQ2で「とても増えた」「増えた」をお選びの方に伺います。	そう答えた理由のうち最も近いものに印をつけてください。	SA
1		安全性に関する情報が得られ安心したから	
2		時間の経過とともに何となく不安が薄れたから	
3		皆が食べるようになったから	
4		どうしても食べなくなったから	
5		その他	FA付
Q4	必須回答	鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。	SA
1		とても増えた	
2		増えた	
3		変わらなかった	
4		減った	
5		とても減った	
Q5	必須回答	鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。	SA
1		とても増えた	
2		増えた	
3		変わらなかった	
4		減った	
5		とても減った	
Q6	必須回答:【Q6】は、Q4で「減った」「とても減った」、かつQ5で「とても増えた」「増えた」をお選びの方に伺います。	そう答えた理由のうち最も近いものに印をつけてください。	SA
1		安全性に関する情報が得られ安心したから	
2		時間の経過とともに何となく不安が薄れたから	
3		皆が食べるようになったから	
4		どうしても食べなくなったから	
5		その他	FA付

Q7	必須回答	あなたはBSEと鳥インフルエンザを、どの程度不安だと感じていますか。それぞれについて、最も近いものに印をつけてください。	SAマトリクス
Q7M001		BSEについて	
Q7M002		鳥インフルエンザについて	
1		非常に不安を感じている	
2		ある程度不安を感じている	
3		あまり不安を感じていない	
4		まったく不安を感じていない	

Q8		食品の安全性に関する情報について、あなたはどこから入手する情報を信頼していますか。以下の選択肢の中から、最も信頼しているものから順番に3位まで選んでください。	順位
Q8M001		1位	
Q8M002		2位	
Q8M003		3位	
1		国の機関	
2		保健所などの都道府県・市町村の機関	
3		食品メーカー	
4		新聞	
5		雑誌	
6		テレビ・ラジオ	
7		消費者団体・協同組合	
8		大学や国の研究機関・研究者	
9		家族・知人からの口コミ	
10		学校・町内会などの地域コミュニティ	
11		その他	

Q9	必須回答:[Q9]は、Q8で「その他」をお選びの方に伺います。	「その他」を選んだ方はその内容をご記入ください。	FA
----	---------------------------------	--------------------------	----

Q10	必須回答	以下の項目について、あなたはどの程度ご存じですか。それぞれについて、最も近いものに印をつけてください。	SAマトリクス
Q10M001		日本では、変異型クロイツフェルト・ヤコブ病(vCJD)の患者発生が1名確認されている	
Q10M002		国産牛は、全てBSEの検査を行っている	
Q10M003		日本では、牛をと畜した後、特定危険部位(人が食べると感染の恐れがあるとされている部分(SRM))が除去されている	
Q10M004		日本では、BSEの感染源と考えられているえさ(肉骨粉)を牛に食べさせることを禁止している	
Q10M005		通常、鳥インフルエンザに感染した鳥と濃厚に接触しない限り、鳥から人に感染することはない	
Q10M006		鳥インフルエンザウイルスは、通常の調理温度で容易に死滅する	
Q10M007		通常、国産の鶏卵は、殺菌剤で洗卵されている	
Q10M008		通常、国産の鶏肉は、食鳥処理場で脱羽され、冷水で洗浄されている	
1		よく知っている	
2		だいたい知っている	
3		あまり知らない	
4		まったく知らない	

Q11		あなたはBSEや鳥インフルエンザなどをはじめとした食品の安全性に関する情報を、普段どのような手段で得ていますか。以下の選択肢の中から、よく利用するものから順番に3位まで選んでください。	順位
Q11M001		1位	
Q11M002		2位	
Q11M003		3位	
1		テレビ・ラジオ	
2		新聞	
3		雑誌	
4		広告・テレビCM	
5		インターネット	
6		家族・知人からの口コミ	
7		学校・町内会などの地域コミュニティ	
8		その他	

Q12	必須回答：【Q12】は、Q11で「その他」をお選びの方に伺います。	「その他」を選んだ方はその内容をご記入ください。	FA
-----	-----------------------------------	--------------------------	----

Q13	必須回答	以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。	SAマトリクス
Q13M001		100%安全な食品は世の中には存在しない	
Q13M002		現在流通している国産の牛肉は安全である	
Q13M003		国内でのBSE発生は、日本経済に大きな影響を与えている	
Q13M004		国内でのBSE発生は、日本人の健康に大きな影響を与えている	
Q13M005		現在流通している国産の鶏肉や鶏卵は安全である	
Q13M006		国内での鳥インフルエンザ発生は、日本経済に大きな影響を与えている	
Q13M007		国内での鳥インフルエンザ発生は、日本人の健康に大きな影響を与えている	
Q13M008		日本の食品安全への取組は、国際的に非常に優れている	
Q13M009		日本の食品安全行政を信頼している	
Q13M010		日本の食品産業の安全対策を信頼している	
Q13M011		BSE発生後、日本の食品安全行政は良い方向に向かっている	
Q13M012		生産者や生産方法が明記されている食品は安全である	
Q13M013		安全性の高い食品であれば、価格が高くても優先的に購入したい	
1		そう思う	
2		どちらかといえばそう思う	
3		どちらともいえない	
4		どちらかといえばそう思わない	
5		そう思わない	

Q14	必須回答	あなたは、平成15年7月の国民の健康の保護を最優先とした食品安全基本法の施行によって、新たな食品安全行政がスタートしたことを知っていましたか。	SA
1		知っていた	
2		知らなかった	

Q15	必須回答	あなたは、『リスクコミュニケーション』という言葉を知っていましたか。	SA
1		知っていた	
2		知らなかった	

Q16	必須回答	あなたは、全国各地で、食の安全の分野における意見交換会が開催されていることを知っていましたか。	SA
1		知っていた	
2		知らなかった	

Q17	必須回答	あなたは、今後、食品の安全性に関連したシンポジウムや意見交換会などのイベントに参加したいと思いますか。	SA
1		参加したいと思う	
2		参加したいと思わない	

Q18	必須回答:2個以内でお答えください	あなたは、今後、食の安全の分野におけるリスクコミュニケーションを進めていく際に、行政機関はどのような取組をすべきだと思いますか。最大2つまで選んでください。	MA
1		シンポジウム・意見交換会を実施する	
2		勉強会などに講師を派遣する	
3		行政機関のホームページを充実させる	
4		広報誌・パンフレットを配布する	
5		テレビCM・新聞などで情報を提供する	
6		専門家がマスメディアなどを通じてわかりやすい説明を行う	
7		リスクコミュニケーションを行う人材を育成する	
8		第三者機関が、行政機関のリスクコミュニケーションの取組を評価する	
9		その他	FA付

Q19	必須回答	あなたの性別をお答え下さい。	SA
1		男性	
2		女性	

Q20	必須回答	あなたの年齢をお答え下さい。	SA
1		20歳代	
2		30歳代	
3		40歳代	
4		50歳代	
5		60歳代	
6		70歳以上	

Q21	必須回答	あなたのお住まいの都道府県名をお答え下さい。	SA
1		北海道	
2		青森県	
3		岩手県	
4		宮城県	
5		秋田県	
6		山形県	
7		福島県	
8		茨城県	
9		栃木県	
10		群馬県	
11		埼玉県	
12		千葉県	
13		東京都	
14		神奈川県	
15		山梨県	
16		長野県	
17		新潟県	
18		富山県	
19		石川県	
20		福井県	
21		岐阜県	
22		静岡県	
23		愛知県	
24		三重県	
25		滋賀県	
26		京都府	
27		大阪府	
28		兵庫県	
29		奈良県	
30		和歌山県	
31		鳥取県	
32		島根県	
33		岡山県	
34		広島県	
35		山口県	
36		徳島県	
37		香川県	
38		愛媛県	
39		高知県	
40		福岡県	
41		佐賀県	
42		長崎県	
43		熊本県	
44		大分県	
45		宮崎県	
46		鹿児島県	
47		沖縄県	

Q22	必須回答	あなたのお宅の世帯員数(あなたを含めて)についてお聞きます。回答欄の中に、人数を記入してください。(半角数字で入力下さい)	FA
-----	------	---	----

Q23	必須回答	あわせて、小学生以下のお子様の人数を記入してください。(半角数字で入力下さい)	FA
-----	------	---	----

Q24	必須回答	あなたのお仕事をお答え下さい。なお、複数該当する方は、主なお仕事に印をつけてください。	SA
1		会社員	
2		公務員	
3		自営業	
4		農林水産業	
5		パート・アルバイト	
6		専業主婦	
7		学生	
8		無職	
9		その他	FA付

Q25	必須回答	あなたのお宅の年収(家族全体で、年金等も含んだ年収)は税込みでいくらぐらいでしょうか。	SA
1		200万円以下	
2		201万～400万円	
3		401万～600万円	
4		601万～800万円	
5		801万～1,000万円	
6		1,001万～1,500万円	
7		1,501万～2,000万円	
8		2,001万円以上	

Q26	必須回答	最後に、このアンケートや食品の安全性に関するご意見や感想等がありましたら、ご自由にお書きください。	FA

(2) 自由回答

インターネットアンケート調査の自由回答結果を以下に示す。

①追加設問：牛肉を食べる量がBSE発生直後に減り、その後増えた理由 [Q3]

■ [その他] を選択した回答者 (2名) の回答

- ・全面的に信用しているわけではないが、牛肉をまるっきり食べないわけにもいかないなので、ある程度情報やパッケージで確認して購入。
- ・国産しか食べない。

②追加設問：鶏肉・鶏卵を食べる量が鳥インフルエンザ発生直後に減り、その後増えた理由 [Q6]

■ [その他] を選択した回答者 (1名) の回答

- ・牛肉と同じ理由

③情報源に対する信頼性 [Q9]

■ [その他] を選択した回答者 (10名) の回答

- ・インターネット (他4名)
- ・現在はだいぶ良くなったと思われるが、国の機関、又周りを見渡しても嘘だらけであり因って新聞記事、インターネットなどで調べ総合的に判断して行動する。以前自分がアルバイトしていたところでもラベルの張替えや印字直しなどさせられたことあり信用できない。
- ・「どこも信用できないなー」と言うのが本音。
- ・web 情報
- ・インターネット、ラジオ
- ・外国から

④情報を得る手段 [Q12]

■ [その他] を選択した回答者 (1名) の回答

- ・生協 (COOP) からのお知らせや店頭で

⑤行政機関に求める取組 [Q18]

■ [その他] を選択した回答者 (7名) の回答

- ・自分たちにとって都合の悪いことでも、隠さずにすべて消費者に知らせるべきだと思う
- ・安全の規約を作っても生産者側、検査する側の人間の教育が必要、スーパーで日付けを付け替える、生産の段階で先日付けで商品の日付けを入れていたりするので抜き打ち検査等で企業への接触は必要と思う。
- ・意見交換しても取り入れられなければ意味がなくなる。ホームページを充実させても見れない場合もあるので、今流行りの情報番組でダイエットばかり取り上げずに、こういった問題も取り上げればよい
- ・行政機関は信頼できない。
- ・政府が情報をもっと詳しく公開すべきだ。また、流通業者がもっと責任を持つべきだ。
- ・リスクコミュニケーションに携わる人々にうそは絶対言わない事を、宣誓してもらいたい。それは幾ら良い機関でも嘘が土台になっていけば何の価値も無いから。
- ・徹底的な情報開示。それも迅速に。

⑥職業 [Q24]

■ [その他] を選択した回答者 (25名) の回答

- ・自由業 (他3名)
- ・団体役員
- ・手書友禅講師
- ・不動産貸付
- ・未婚でパートタイム
- ・アパート・マンション賃貸業
- ・会社経営者
- ・教員 (他1名)
- ・自営
- ・シニアスタッフ
- ・介護施設
- ・派遣
- ・医師
- ・保育士
- ・医療事務
- ・大学助教授
- ・在宅ネットビジネス
- ・有職主婦
- ・SOHO
- ・派遣社員
- ・公社職員

⑦自由回答[Q26]

回答者 500 名の主な意見は以下のとおりである¹¹⁾。

1) 牛肉・BSE/鶏肉・鶏卵・鳥インフルエンザについて (26 名)

- ・スーパーで売っている牛肉がいまいち信用できません。牛肉を食べる機会が減ってさみしいです。
- ・もう少し外国の牛肉を調べてほしい。あんなに広い国なのでどこでどんな肉を育てているのか分からないし輸入も国同士のためでなく国民のためにできる限り安全な肉を輸入するべきである！
- ・BSE問題は日米関係の深刻な問題になりそうだが、現在の日本の姿勢をくずしてほしくはない。国民は今の力強い日本の姿勢に期待していると思う。しかし、輸入に頼らずには成り立たない日本が、一体どのような対策をとるのだろうか。
- ・肉の安全性は大変気になる・・・。
- ・アメリカ産牛肉が入ってくるのは心配だ
- ・各国の食肉の安全性を数値化して掲載してほしい
- ・米牛輸入問題で、科学的な安全性より、政治的力関係で決着しそうで不安である
- ・BSE対策のためにも、全頭検査は譲るべきではない。
- ・米国産の輸入牛肉を再開しても良いと思う。
- ・安全問題に政治判断は排除するべし。BSEに対する米国の横槍はげしからん。対抗策として、輸入は解禁し、国民がボイコットするのがよい。
- ・米国のBSE検査なしの2歳未満牛輸入解禁へ向けて、米国の圧力に屈指かけていることへの疑問の是非を問う設問が無い。
- ・アメリカから輸入する牛は全頭検査するべきだ。
- ・BSEに関してアメリカの言い分は勝手すぎる。
- ・国は早くアメリカの肉を輸入再開してほしい
- ・メニューの横にアメリカ産牛使用と書いてほしい。
- ・このアンケートで早く牛肉輸入の再開が始まればいい。
- ・アメリカ産の牛肉の輸入再開は反対である。あのような常識で考えてもメチャクチャな論理が、消費者から理解されるわけがない。私は輸入再開されても日本レベル並みに安全性が確立されない限り、アメリカ産牛肉と牛丼は絶対にたべません。
- ・アメリカ牛についてに政府に判断は納得できない
- ・アメリカから輸入する肉は妥協して欲しくない
- ・輸入牛肉の輸入再開をするなら、現地での徹底的な検査を行うべきだと感じています。
- ・鶏インフルエンザに関して知らないことがあったのでこのアンケートでわかってよかった。
- ・このアンケートの趣旨とは異なりますが、鶏インフルエンザの流行については、野鳥の媒介により、我が家の飼い猫が感染しないかどうか不安でした。
- ・鶏卵の価格を早く今までどおりに下げて欲しい。
- ・鳥の情報はあまり伝わらない。もっと広告を充実させて欲しい
- ・鳥インフルエンザ・・・下火になってると思うのに相変わらず卵の価格が高い・・・便乗値上げの可能性大？
- ・BSE, 鶏インフルエンザのことは時がたつにつれ忘れてきていたので食品の安全性を実感しました。

¹¹⁾ 「特になし」といった回答は割愛した。

2) 食の安全、食のリスクについて (82名)

- ・どんなものでも、絶対安心できるとは言いきれないと思う。生産者も、消費者も、いろいろな意見があると思うけれど、食品を食べないといけな体なので、各自が気をつけるしかないと思う。
- ・自分がいかに食品に対してうかつたのか認識しました。これからは、家族のためにも、食品に対して気を引き締めていきたいと思えます。
- ・消費者は安全だとわかっている商品を買いたいと思っています。
- ・なかなか食に関してのことは難しいと思えます。安全だとは言われていてもほとんどの食品には農薬など使用されてるし安全に近いものを購入しようとしたら値がはり簡単に購入することができない。
- ・時間が経って食品に対する意識が低くなっている事に気づかされました。
- ・このアンケートを受けることによって、日本の食品の安全性に不安を感じてきました。もっと厳しく食品をチェックして購入していかないといけないなと思えました。
- ・このアンケートを通してリスクコミュニケーションということを知ることができました。
- ・安全で当然。BSE や鳥インフルエンザのようなものは、即断即決してほしい。
- ・安心して食事できるようにする・・・・
- ・肉の安全性は大変気になる・・・
- ・これからはもっと食品の安全性を意識して食品を選択したい
- ・食品の安全性は個人レベルでも確保できると思う。だがそれには確実な情報が不可欠で、それを公表して欲しい。マスコミは安易に不安を掻き立てるようなことがあるし、それに踊らされないような知識を身につけたいと思うことがある。
- ・もっと安心してモノが食べられるようになって欲しい
- ・今の世の中 自分で自分を守らなければ 本当に信頼できる物なんて無い
- ・生産者に対する義務の明確化、対価としての税金緩和などで食に対する根本の部分に安全、安心で揺らぎない地位の確立。
- ・「安全」をもっと徹底してほしい。
- ・生産者・流通・消費者すべての自覚と責任。
- ・日本人は食品の安全性についてもっと関心を持つべきである。
- ・食品の安全性に対する認識がアマかったなと思えました。もう少し勉強してみたいと思えます。
- ・食品は毎日食べるものなので、安全面には十分、気を付けてもらいたい。
- ・今だから安全なのかも知れない...又忘れた頃に起きるのではないかと不安もある。
- ・安全な食の提供をお願いしたい
- ・どんな食品でも口に入る物なのだから、徹底的に検査してから市場に出して欲しい。
- ・今まで経済中心で行われてきたがこれからは本来の安全性中心で行くべきである
- ・安全がもっと具体化できるようになって欲しい。
- ・農薬や化学肥料に頼らない食品の生産を望みます。
- ・日本の食品は安なものが多いと思うが、不安はあります。
- ・国は食品の健全性に責任を持って
- ・食品の安全基準も必要ですが、企業の安全性の認識度、従業員の認識度が重要。悪い事を企業がしているのを摘発できない雇用体系も問題がある
- ・食品の安全性は、何かがあったときは、結構きにするが、ふだんは、そこまで気にしてません。ただし野菜などにつかっている農薬などには、少しきにしています。
- ・食品の安全性に問題が発祥したときは速やかに消費者に知らせて欲しい。
- ・食品の安全についての「法整備」を行っても、その裏を掻く様な者には、厳罰をもって対処すべきである。
- ・特に思い出ませんがこれから成長する子供たちの事を考えると食生活が心配です。
- ・行政や食品メーカー、畜産業者などどうそをつかれていてもわからないのだから結局は自分で覚悟を決めて自己責任だと感じている。
- ・食品の安全性に対して過去の事件から行政、業界とも信頼できない。
- ・もっと広く[リスクコミュニケーション]等についてしらむ必要性を感じる。
- ・日本人は安全性に過剰に反応する傾向があり、科学的に説明することが重要と思う。
- ・国の食品の安全性に関する取組方を、マスメディアを通じて知らせて欲しい。
- ・リスクコミュニケーションという制度が発展することを望む。その活動の一環として食品行政のあり方を定期的にチェックし報告して欲しい。
- ・食の安全は生命の存続に多大なる影響を与えるので、第一優先で取り組んで欲しい。
- ・食の安全に対する意識は必須です。又時代の要請でもあります。消費者には見た目では安全かどうか分かりません。行政で常日頃から目を光らせ、監視の目を怠らないようにして欲しいものです。
- ・安全といっても信用できないがそどうしたらいいかわからないので食べています
- ・あらためて食品の安全性について考える事ができました。

[食の安全、食のリスクについて(続)]

- ・食品の安全性については、万全を期すべきである
- ・食べ物は 絶対安全でなければならないと思います
- ・食品のみならず安全性にたいしての投資はけちってはならない。
- ・食品の安全性が崩れると社会全体に与える健康上の影響のみならず経済的影響も大きいので対策 注意 配慮が必要であるである
- ・絶対に安全と言える物はあり得ないと思うがより安全な物に少しでも近づく努力をするべき
- ・安くて安全な食品が出回ってほしい
- ・これから食品の安全性には取り組んでいく必要がある
- ・絶対に安全な食品なんてないと思うけど、やっぱり添加物とかの無い身体に悪影響の無いものを食べたいと思うし、身体に悪いと思って食べる人なんていない。買わないから経済も流通しない。養殖者が苦勞する。悪循環だなあ・・・と思う・・・
- ・日本は食品を輸入に頼っているのだから、もっと安全面を気をつけなければならないと思う。安心して食せる物が少なくなってきているのでは。と感じることがある。
- ・ほとぼりがさめたからと言って、牛肉や鶏肉の安全のチェック体制が甘くなる様な事はやめて欲しいと思います。
- ・昔に比べて安全性に対する意識が全体的に高まってきていると思う。
- ・安心してこれからも食品を食べれたらいいと思う
- ・食品の安全性については考えていかなければならない問題で、いつまでもこの意識を持ち続けることが大事のように思う。
- ・何を基準に食品の安全性を測っているのかがよくわからない。
- ・現状では何が安全で何が安全じゃないという基準が明確になっていないので、もっともっと真剣に行政や食品メーカーも取り組んで欲しい。
- ・安く安全な物を提供してほしい
- ・100%安全とゆうのは難しいのかもしれないが、なるべくそれに近づける努力をしてほしいです。
- ・何が安全なのか、わからなくなるときがある。
- ・今までにも、消費者が裏切られるようなことが多かったので、いくら「安全です」とその商品に書かれていても、信用しきれない。何が(どれが)本当に安全なのか分からなくて不安。
- ・食品の安全や衛生に関して、行政にまかせっきりでは、絶対に良くはなっていないと思います。
- ・牛肉や鶏肉の問題を警鐘として踏まえて、安全な食品を安心して食べられるようになるとういなぁと思った
- ・もう、信頼しないとやってられない、という気分です。とにかく、食べないと食べさせないといけないので、国を信頼することにします・・・ちょっと不安ですが。
- ・家畜の飼料や食材を輸入に頼っている現状では、食品の安全性を確保するには日本一国だけの取組ではなく世界規模の共通認識と対策の確立が不可欠だと思う。
- ・食品の安全性については、検査体制を充実させるべき、製造、販売の両面で特にチェックを!
- ・出来るだけ国産の物、減農薬の物を買うようにしているけれど、偽装の物かもしれないと思いながら買っています。
- ・日本人は一般に食品に対しては、過度に安全性を求める傾向がある(食品以外の安全性に無頓着にもかかわらず)。好ましい傾向とはいえない。
- ・食品の安全性について、あまり深く考える事が無かった。あらためて、真剣に考えて見ようと思った。
- ・食品の安全性に対する、自分の認識の低さを痛感しました。もっと勉強しなければと思いました。
- ・国内で流通されている食品は安全性は高く見えるが生産段階での不安がある。
- ・安全な食品は無いと思う
- ・安全確保のための専門機関があるのが望ましい。
- ・食品の安全性に関し、ドサクサにまぎれて、利を得ようとする企業は、不買すべき。
- ・絶対安全なものはないと思うが、限りなくちかいものにしてほしい
- ・安全は幻想
- ・コストがかかっても確実に安全な食品を提供してほしい
- ・安全はコストがかかるものです。効率を確保しつつ、公平に負担する仕組みが必要です。
- ・安全な食品を食べられるよう企業努力をして欲しい。
- ・美味しくて安い牛肉を安心して食べられるようになってほしい
- ・いくらトレーサビリティとかシステムや制度で食の安全を確保しようとしても無理。ごまかそうと思えばいくらでもできるし、現実に牛のラベル(タグでしたっけ?)を付け替える事件も発生しました。子供の殺人とかその他最近頻発している社会的事件の対策も一緒ですが、各人がモラルを持つような社会を作らないと根本の問題は解決しないと思います。

3) 食品の消費・購買について (11名)

- ・BSE にしろ鳥インフルエンザにしろ、発生直後はみんな話題にして、購入を控えるケースが見うけられたが、問題が解決したのかわからなくても、ある程度時間が経てば今までとかわらない量を購入していると思う。
- ・ある程度は自己責任の上で食品を買わなければならないと思う
- ・消費者は安全だとわかっている商品を買いたいと思っています。
- ・なかなか食に関してのことは難しいと思います。安全だとは言われていてもほとんどの食品には農薬など使用されてるし安全に近いものを購入しようとしたら値がはり簡単に購入することができない。
- ・このアンケートを受けることによって、日本の食品の安全性に不安を感じてきました。もっと厳しく食品をチェックして購入していかないといけないなと思いました。
- ・値段も安く、安全な商品が消費者のもとに届くようにしてほしい。
- ・これからはもっと食品の安全性を意識して食品を選択したい
- ・毎日の事であるから、売る側がしっかりして欲しい。
- ・鶏卵の価格を早く今までどおりに下げて欲しい。
- ・なるべく安全な食品を取るようになっているが、どうしても高くなるのは、仕方ないと思う。
- ・BSE や鳥インフルエンザ発生後、消費量が減るのは神経過敏になりすぎだと思う。
- ・本当に安全なものは価格が高いので買えない。健康と引き換えにしてもいいのかといわれても、ギリギリで生活しているものにはきつい。
- ・基本に完全なる安全はありえないと思っている。自分の体力もしくは、その食品の摂取量を減らす。
- ・鳥インフルエンザ・・・下火になってると思うのに相変わらず卵の価格が高い・・・便乗値上げの可能性大？
- ・低所得の私からいえば、安全性を追求するのはいいが、物が高くなっては困る。
- ・安全性よりも価格を重視してしまいます・・・。安くても安心な食品ばかりだと思いたい。

4) 情報公開等について (45名)

- ・もっと情報公開を徹底義務をして欲しい。食品表示で国産だけでは信用性にかけてと思う。
- ・安全と安心の違いを行政が消費者に適切に説明し、総合的に消費者にとってメリットが出る様にしてほしい。
- ・もっと情報公開して欲しい。
- ・的確な情報提供が必要
- ・広報の充実が必要
- ・極めて大切なことなので、情報の公開をしっかりとして欲しい。
- ・正しい情報を流し政治力で歪めない
- ・食品を扱う会社は、国民に対してもっと説明責任を負うべきである。
- ・食品の安全性に問題が発祥したときは速やかに消費者に知らせて欲しい。
- ・啓蒙活動に期待しています。
- ・企業は利益ばかりを追求する結果、ややもすると消費者不在の状況になっている。コンプライアンスとか、トレーサビリティも時にいい加減になって、見つかって初めてお詫びと善処を約束するが、本当にどうなのか、その後の情報がほとんど開示されていない。チェック体制を強化しもっと、消費者に知らしめるべきではないか。
- ・日本人は安全性に過剰に反応する傾向があり、科学的に説明することが重要と思う。
- ・もっと解りやすい言葉で表現して欲しい。
- ・安全性についてもっとわかりやすい説明がほしい
- ・食品の安全性について もっと情報の公開をすべきである。
- ・「遅れず、隠さず、誠意をもって」関係機関が対処することが食の安全の基本だと思います。これを守って欲しいですね。
- ・最近乳業工場の見学をして、日本の主力工場は雪印事件後無菌・密閉室で作業する工程に切り替え牛乳の賞味期限も伸びていると知ったが、いろんな情報を出してほしい。
- ・とても心配なのでもっと検査内容を教えてください
- ・貝なども安全性が疑問視されているようで、もっと情報が欲しいと思います。
- ・安全性に対するPRをもっとして欲しい
- ・国やメーカーはなにか事が起こったとき、迅速にわれわれに明確に情報を開示してほしい
- ・鳥の情報はあまり伝わらない。もっと広告を充実させて欲しい
- ・安全かどうかは結局のところよく分からないので自分なりに安全だと思えるものを食べている。もっと情報開示してほしい
- ・国の行政機関が情報を早く公表する。信頼できない時がある。
- ・現代の食品は心配だが、過剰な情報公開もいただけない。
- ・食については絶対に安心ということは考えられないので、消費者への情報が増えるのは良いことと思います。
- ・今までにも、消費者が裏切られるようなことが多かったので、いくら「安全です」とその商品に書かれていても、信用しきれない。何が(どれが)本当に安全なのか分からなくて不安。
- ・鳥インフルエンザやBSEの問題について、今どうなっているのかという状況がわかりにくい。情報がストップされている感じがする。
- ・正確な情報を早急に伝えて欲しい
- ・食の安全性は各自が情報を収集し、自分の責任に於いて食べる。
- ・いろんな問題点をもっとオープンにして欲しい
- ・正しい情報を流してほしい
- ・人の命に関わる事なのであらゆる方法で食に関する情報は公開するべきだと思っています
- ・正しい情報の開示
- ・安全に対しては気をつけて調理しているが、やはり不安なのでもっと情報公開して欲しい
- ・正しい情報を早く、広く広報してほしい。
- ・健康に関わる事なので行政機関・マスコミは正確な情報を遅滞なく告知・報道してほしい。特にマスコミはそのときだけで終わってしまうが継続的に報道することが必要と思う。メーカーの申告(産地・賞味期限等)は毎日のように報道されているが信用はしていない。
- ・情報公開を積極的に行うべきだ
- ・発生源や発生理由や対策方法を細かく、分かりやすく消費者に情報を伝えてほしい。
- ・国民に解り易い説明をして、もっと的確な情報が欲しい。
- ・情報公開をとにかくなんでもしてほしい
- ・色々な事件で食の安全の不信感が出てきているので、安心して物が買えるような情報開示をして欲しい。
- ・わかりやすく経過などを毎回発表してほしい
- ・もっと情報を開示して欲しい
- ・情報公開を多くしてほしい

5) 食品の表示について (30名)

- ・もっと情報公開を徹底義務をして欲しい。食品表示で国産だけでは信用性にかけてと思う。
- ・スーパー等で並んでいる食品に記載されている情報は100%真実なのかわからないし、消費期限内でも異臭がすることがあったり、ちゃんと品質確認しているのか行政に確認してもらいたい
- ・安全と言われても、その業者がどうにでも改ざんできる表示が多いのであてにならないと思う
- ・まだまだ生産者に関する情報表示が不足していると思う。特に魚介類は水揚げされた場所が生産地として表示されるなんておかしいと思う。
- ・虚偽表示がとても増えているので、業者の方はきちんとした行動をとってほしい。
- ・産地やいろいろな偽装や、隠蔽をなくしてほしい
- ・最近生産地/生産者をトレースできる商品が出てきているが、食品全体で同じような方策を採ると安心が出来るような樹がする
- ・賞味期限など表示に関する問題を消費者にも提示することが必要なのではないのでしょうか。
- ・最近近隣アジアからの食品を一時日本国内に留め(例えば魚介類など)販売のときに九州産などの産地名で売っている場合があるように思います。
- ・日本では益々食料を海外からの輸入に依存する傾向が高まっており安全について不安を感じる。国産品だけではなく輸入品についてももしっかりした検査体制を整えるべきであり、輸出元に対してもそれを強く要求すべき。また、スーパーでの虚偽表示など関連業界にも不信感がある。検査体制の強化を要望すると同時に罰則も厳しくすぬなど再発強化策が必要と考える。
- ・最近真に安全な食品を求めようと思っても、販売食品の安全度を判断する目安がなく不安に思うことが多い。外観的に農薬汚染や有害添加物などを含有する食品の判別は、一般消費者には判らないのが常である。食品の安全と安心を売ってくれる生産者に期待したい。
- ・生産者を明記させる。
- ・企業は利益ばかりを追求する結果、ややもすると消費者不在の状況になっている。コンプライアンスとか、トレーサビリティも時にいい加減になって、見つかって初めてお詫びと善処を約束するが、本当にどうなのか、その後の情報がほとんど開示されていない。チェック体制を強化しもっと、消費者に知らしめるべきではないか。
- ・食品の表示自体が嘘だったというのをテレビで見て、100%信頼できるものはないんじゃないか・・・という気がしています
- ・流通段階での誤魔化し、不当表示等問題が蓄積している
- ・食品の安全性については非常に大切であるが、中でも消費者が判断するうえで必要な透明性(トレーサビリティや表示方法)に対する改善が急がれる。
- ・官の対策が後手気味で遅い。国産については、まあまあと思うが、外国産、特に中国産に対する対策が不十分。
- ・賞味期限の表示産地、内容の表示など定着して来たが悪徳業者もまだ横行しているので行政機関の監視を強化すべきである。
- ・北朝鮮からの《あさり》に関しても色々抜け道もあるらしい(TVによると)それと不正表示をした店に対して罰則を重くし公表をしっかりしてほしい
- ・身近なスーパーで生産者名入りでの野菜等がありますが全般的に高い。しかし納得がいけば購入します。一スーパーの努力ではなく国が取り組んでほしい。国は今まで生産者の方を向いて消費者を無視していたとおもう。我々消費者も怒らないとおもうこのごろである。
- ・飽食の現代、安全面においては万全の検査・表示をやってほしいものです。添加物より品質重視(鮮度)
- ・メニューの横にアメリカ産牛使用と書いてほしい。
- ・今までにも、消費者が裏切られるようなことが多かったので、いくら「安全です」とその商品に書かれていても、信用しきれない。何が(どれが)本当に安全なのか分からなくて不安。
- ・産地偽装とか色々な問題があり素人には食品の安全性や質を見極めるのは難しいです何を信頼すれば良いか分かりにくいですね。
- ・産地照会PCシステムの店舗設置なども形ばかりでありあまり役にたたない様だし、トレー管理も異表示疑惑などで信用できない。なにより行政が安全性より経済を優先しているように感じられ、個々で自衛しなければならない時代だと思う。
- ・まずは、販売店のラベルを信用して買っているの、それが正しいことのチェック機関をシッカリして欲しい
- ・食の安全性を高めるためには生産者の顔が見えることが望ましいと思う。経済と密接な関係もあるが、食料需給率を上げないと生産者に対する安心感は増していかないと思う。
- ・食品に対する規制は、メーカー、卸業者しか認識していないため、消費者は各食品の表示が規格に正しいかを判断するしかない。
- ・スーパー等での、嘘の表示は絶対やめてほしい
- ・産地を偽って表示するのを取締る行政機関が必要。と同時に罰則を厳しくする必要あり。

6) 食品の輸出入について (27名)

- ・もう少し外国の牛肉を調べてほしい。あんなに広い国なのでどこでどんな肉を育てているのか分からないし輸入も国同士のためでなく国民のためにできる限り安全な肉を輸入するべきである!
- ・機関と消費者の間に温度差があるように感じる。日本の機関も妥協するところはする、引けないところは引かないようにして、アメリカの圧力には負けないようにがんばってほしい。
- ・BSE問題は日米関係の深刻な問題になりそうだが、現在の日本の姿勢をくずしてほしくはない。国民は今の力強い日本の姿勢に期待していると思う。しかし、輸入に頼らずには成り立たない日本が、一体どのような対策をとるのだろうか。
- ・国産でも信頼おけない業者がいると思うが、さらに外国産(とくにアメリカ産)は安いだけで信頼していない。
- ・アメリカ産牛肉が入ってくるのは心配だ
- ・各国の食肉の安全性を数値化して掲載してほしい
- ・米牛輸入問題で、科学的な安全性より、政治的力関係で決着しそうで不安である
- ・中国産農産物の残留農薬が心配です
- ・日本では益々食料を海外からの輸入に依存する傾向が高まっており安全について不安を感じる。国産品だけではなく輸入品についてもしっかりと検査体制を整えるべきであり、輸出入に対してもそれを強く要求すべき。また、スーパーでの虚偽表示など関連業界にも不信感がある。検査体制の強化を要望すると同時に罰則も厳しくすぬなど再発強化策が必要と考える。
- ・外圧に屈しないで食の安全を守ってほしい。
- ・BSE問題で米国の圧力に屈しないでほしい。
- ・米国産の輸入牛肉を再開しても良いと思う。
- ・安全問題に政治判断は排除するべし。BSEに対する米国の横槍はけしからん。対抗策として、輸入は解禁し、国民がボイコットするのがよい。
- ・米国のBSE検査なしの2歳未満牛輸入解禁へ向けて、米国の圧力に屈指かけていることへの疑問の是非を問う設問が無い。
- ・アメリカの圧力にビビリしている政府は信用出来ない。
- ・アメリカから輸入する牛は全頭検査するべきだ。
- ・BSEに関してアメリカの言い分は勝手すぎる。
- ・国は早くアメリカの肉を輸入再開してほしい
- ・このアンケートで早く牛肉輸入の再開が始まればいい。
- ・アメリカ産の牛肉の輸入再開は反対である。あのような常識で考えてもメチャクチャな論理が、消費者から理解されるわけがない。私は輸入再開されても日本レベル並みに安全性が確立されない限り、アメリカ産牛肉と牛丼は絶対にたべません。
- ・アメリカ牛についてに政府に判断は納得できない
- ・アメリカから輸入する肉は妥協して欲しくない
- ・輸入牛肉の輸入再開をするなら、現地での徹底的な検査を行うべきだと感じています。
- ・今や数多くの食べ物海外から輸入されておりその安全性が問われていると思う。
- ・売り場に輸入品と国産のものが並んでいれば必ず国産を買うようにしている。いくらか安心感を得られるからです。国も食品会社も何となく信用できない気持ちがあります。

7) 行政の取組について (56名)

- ・スーパー等で並んでいる食品に記載されている情報は100%真実なのかわからないし、消費期限内でも異臭がすることがあったり、ちゃんと品質確認しているのか行政に確認してもらいたい
- ・問題が発生する前に対応できる体制を作してほしい。
- ・機関と消費者の間に温度差があるように感じる。日本の機関も妥協するところはする、引けないところは引かないようにして、アメリカの圧力には負けないようにがんばってほしい。
- ・BSE問題は日米関係の深刻な問題になりそうだが、現在の日本の姿勢をくずしてほしくはない。国民は今の力強い日本の姿勢に期待していると思う。しかし、輸入に頼らずには成り立たない日本が、一体どのような対策をとるのだろうか。
- ・食品の安全性について政府もしっかり取り組んで欲しい
- ・正直に言って、日本の官僚体制、また利益重視の企業体制をあまり信頼していない。
- ・生産者に対する義務の明確化、対価としての税金緩和などで食に対する根本の部分に安全、安心して揺らぎない地位の確立。
- ・米牛輸入問題で、科学的な安全性より、政治的力関係で決着しそうで不安である
- ・消費者は、行政や生産者やメーカーの言葉を信じるしかない。
- ・広報の充実が必要
- ・国レベルで安全対策を強固なものにしてほしい
- ・このようなアンケートが行政に届き国民(国内で生活したり、旅行で国内に居る全ての人)の食が安全に健康に生活出来る様に政府・官僚に守って欲しいです。
- ・正しい情報を流し政治力で歪めない
- ・日本では益々食料を海外からの輸入に依存する傾向が高まっており安全について不安を感じる。国産品だけではなく輸入品についてももしっかりした検査体制を整えるべきであり、輸出元に対してもそれを強く要求すべき。また、スーパーでの虚偽表示など関連業界にも不信感がある。検査体制の強化を要望すると同時に罰則も厳しくすぬなど再発強化素が必要と考える。
- ・国や公共機関がもっと早く手を打ち啓蒙する必要がある。
- ・国は食品の健全性に責任を持って
- ・外圧に屈しないで食の安全を守ってほしい。
- ・食品の安全についての「法整備」を行っても、その裏を掻く様な者には、厳罰をもって対処すべきである。
- ・食品の安全性については、国民生活に重大な影響があるのだから、とりわけ行政がもっと真剣に取り組むべきである。
- ・国の取組がいいかげんだと思う。業界の利益を優先している。
- ・食物アレルギーについてもっと行政で対策をしてほしい
- ・国は検査等より一層厳しくして頂く事を期待します。
- ・企業は利益ばかりを追求する結果、ややもすると消費者不在の状況になっている。コンプライアンスとか、トレーサビリティも時にいい加減になって、見つかって初めてお詫びと善処を約束するが、本当にどうなのか、その後の情報がほとんど開示されていない。チェック体制を強化しもっと、消費者に知らしめるべきではないか。
- ・国の食品の安全性に関する取組方を、マスメディアを通じて知らせたい。
- ・食の安全は最大の問題であり、国の施策は遅いぐらいで、他の国で例が出た時点で即手を打つぐらいのスピード感が欲しい。慎重も必要だが、下手な考えにならないように。
- ・これまでは、とにかく行政が後手にまわりがちであったが、これからは、もっと全世界に目配りし、早い手を打って欲しい。
- ・リスクコミュニケーションという制度が発展することを望む。その活動の一環として食品行政のあり方を定期的にチェックし報告して欲しい。
- ・行政は国民から信頼されるようにもっとしっかりすべきだ!
- ・官の対策が後手気味で遅い。国産については、まあまあと思うが、外国産、特に中国産に対する対策が不十分。
- ・賞味期限の表示産地、内容の表示など定着して来たが悪徳業者もまだ横行しているので行政機関の監視を強化すべきである。
- ・食の安全について国をはじめとする機関がもっと積極的な対応を望む。
- ・国は国民に安全な行政を実施して欲しい。
- ・行政機関が情報を的確に素早く判断をして公開すること。そのための人材の養成に努めて欲しい。
- ・アメリカの圧力にビビリしている政府は信用出来ない。

[行政の取組について(続)]

- ・行政、メーカーとももっとしっかり
- ・本当に安出来る食行政にもっともっと力を入れるべき
- ・国や行政機関は食品の安全にもっともっと力を入れてほしい
- ・政府は食品の安全に対する取組が遅いと思う。メーカーの利益や利害関係に左右されることが多いと思う。
- ・国の行政機関が情報を早く公表する。信頼できない時がある。
- ・行政は、あらゆる食品の安全性に、注意してほしい。
- ・身近なスーパーで生産者名入りでの野菜等がありますが全般的に高い。しかし納得がいけば購入します。スーパーの努力ではなく国が取り組んでほしい。国は今まで生産者の方を向いて消費者を無視していたとおもう。我々消費者も怒らないとおもうこのごろである。
- ・食品の安全性については、国がイニシアチブを取って進めていくべきだ。現行では、一貫したポリシーに欠けている。
- ・食品の危険が発覚したときは、国が主導で、全国に無料で情報を配布してほしい
- ・国の安全基準に関するものは、食品に限らず、全て利益優先で考えられていると認識しています。消費者の立場に立った、安全対策を早急をお願いしたい。
- ・国の方針があいまいすぎる
- ・自分の身は自分でと思うが、そうは行かない。国に任せておける国になってほしい。
- ・食品の安全性は行政・生産者・流通業者など関係機関の真剣に取り組む姿勢が大切。世間が騒ぐから、責任を逃れたいからでは、真の安全性確保にはつながらないと思う。輸入食品の安全性も取りざたされるが、輸出元に安全性を求めるのに並行して、食料自給率向上も真剣に論議すべきときだと思う。一次産業を守ることが日本の自然を守ることにもつながる。関係機関は真剣に、利害やセクト主義を排して有機的に取り組んで欲しい。
- ・関係業者の無責任ぶりが目立つ。政府機関の自信のなさがはっきりした。
- ・行政機関は監督の役割を果たすこととそれぞれの食品にかかわる業者はおのずから研究と情報の公開に努めるべきである。
- ・あまり国の言うことは信用できない。
- ・国の安全管理自体信用できない
- ・行政機関には、もっと情報をわかりやすく説明して欲しい。
- ・行政をチェックする機関が必要。
- ・生産地を偽って表示するのを取締る行政機関が必要。と同時に罰則を厳しくする必要あり。
- ・食品の安全性に関しては常に関係諸機関は指導、監視に手をゆるめてはならない。
- ・食の安全を考えるともっと行政が表だって力を入れスピーディーに取り組む必要がある

8) マスメディアについて (9名)

- ・アンケートに答えてみて、自分はテレビで騒がれている間のみ敏感に反応するだけでテレビで報道されなくなると共に、何も思わなくなってしまっていることに気が付きました。小さい子供がいるだけに、もう少し気にかけることも必要かと思いました。
- ・食品の安全性は個人レベルでも確保できると思う。だがそれには確実な情報が不可欠で、それを公表して欲しい。マスコミは安易に不安を掻き立てるようなことがあるし、それに踊らされないような知識を身につけたいと思うことがある。
- ・不安になるような報道は慎重に行って欲しい
- ・食品の表示自体が嘘だったというのをテレビで見て、100%信頼できるものはないんじゃないか・・・という気がしています
- ・国の食品の安全性に関する取組方を、マスメディアを通じて知らせて欲しい。
- ・テレビ、新聞等によく皆に知らせることが大事である
- ・食品の安全性は常に担保される必要があるが、マスコミの情報は誤った解釈をもたらすリスクが強い
- ・どんどん新聞やテレビで情報を流して欲しい
- ・学者やマスコミの対応はあまり信頼できない

9) アンケートについて (42名)

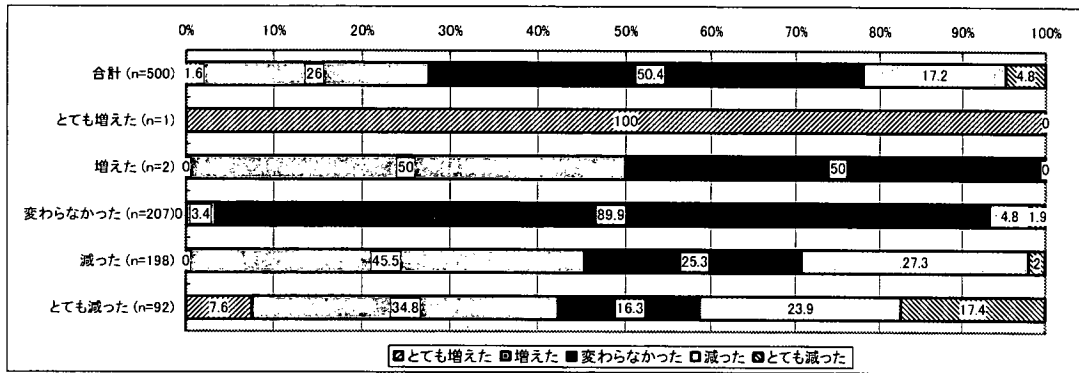
- ・農業の問題や、現代の食の乱れ、食育に関してもアンケートを実施して欲しい。
- ・このアンケートが上手く利用されて私みたいな知識の無い者にでもわかりやすく情報が耳にはいれればいいなと思いました。
- ・食品に対する知識が深まりました。
- ・このアンケートを受けることによって、日本の食品の安全性に不安を感じてきました。もっと厳しく食品をチェックして購入していかないといけないなと思いました。
- ・アンケートの結果はどうなるのか教えて欲しい
- ・このアンケートを通してリスクコミュニケーションということを知ることができました。
- ・とても興味深いアンケートでした。少し忘れていた問題を思い出させていただきました
- ・このアンケートの参加者の中から集って座談会をやりませんか？
- ・有意義なアンケートです。必要に応じ、情報開示をお願いいたします。
- ・行ったアンケートの結果はどうだったのか知りたいと思う
- ・長い。疲れた。
- ・鶏インフルエンザに関して知らないことがあったのでこのアンケートでわかってよかった。
- ・BSEと鶏インフルエンザは国民の関心が高いテーマなので、このアンケートの結果が知りたい。公開されるのでしょうか。
- ・今まで知らなかった事など知ることが出来てよかったと思います。
- ・この種の意見や感想は、もう少し時を見てやったら如何ですか？
- ・この様なアンケートが行政に届き国民(国内で生活したり、旅行で国内に居る全ての人)の食が安全に健康に生活出来る様に政府・官僚に守って欲しいです。
- ・自分がいかに知らないかがわかり、アンケートに答えて良かった
- ・知らないことが多すぎた。勉強になりました。こういうアンケートは嬉しいです
- ・消費者の食品に関する知識、関心度を見る上でこのアンケートは有効だともう。
- ・食品の安全問題を意識させるためにこの様なアンケートは役に立つ
- ・良い企画である。
- ・アンケート結果をどう使われるのかな？
- ・新たな知識が吸収できて良かった。
- ・とても、良い企画であり、毎日食べる食品については、特に主婦の、関心が高いので、参加できる場がほしい。
- ・このアンケートにどうして年収が必要なのか疑問。プライバシーの観点から、今後年収の問いに付いては任意記入にすべきである。
- ・知らなかったことがたくさんあった。
- ・知ってるようで知らなかったことが結構あった
- ・今まで知らないことがたくさんあったけどこのアンケートで少し知識が高まった。
- ・知らないことが多かった。消費者も生産者も、もっと研究や勉強をしなければいけないと思いました。
- ・このアンケートを通して、食品安全行政についてより詳しく知りたいと思いました。
- ・アンケートを通じて知ったこともあり、アンケートに答えてよかった
- ・知らないことだらけでした。
- ・アンケートに回答することで食品の安全について改めて再認識させられました。
- ・特にはないが、自分以外の人たちの意識を知りたいので、調査結果を見てみたい。
- ・もっと頻繁にアンケートをしたほうが良い
- ・年に一回ぐらいはこうしたアンケートがあればよいと思う
- ・食品の安全に関するいろいろな取組があることをアンケートによって知ることが多いです。気をつけてみると、あまり大きくではないけれども新聞などで取り上げられているのに後から気がつくこともよくあります
- ・この欄は感想らがあったら、と書かれて居りますなぜ、強制されるのですか？
- ・知っていそうで知らないことがたくさんあったことがわかりました。
- ・とても 興味のある アンケートでした。
- ・アンケートによって食品の安全性が向上すると思う
- ・今後も機会があれば協力する

(3) クロス集計

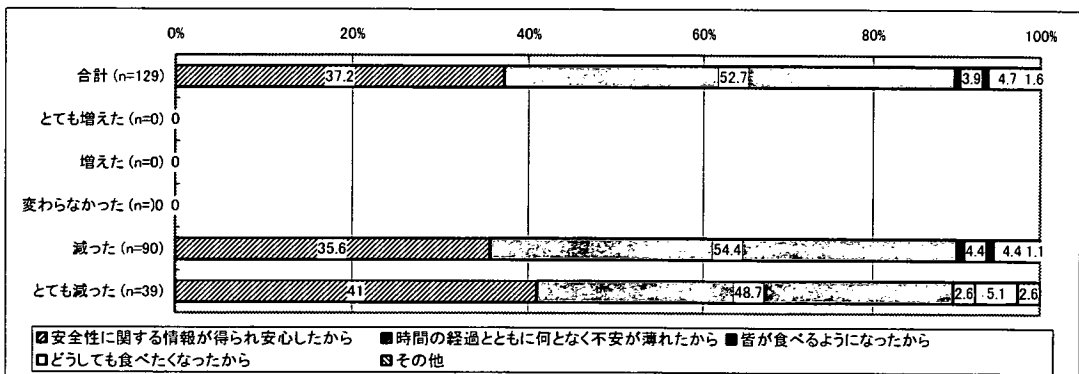
クロス集計結果 (Q1、Q2、Q4、Q5、Q20、Q21 関連) を順に掲載する。

① クロス集計結果 (Q1)

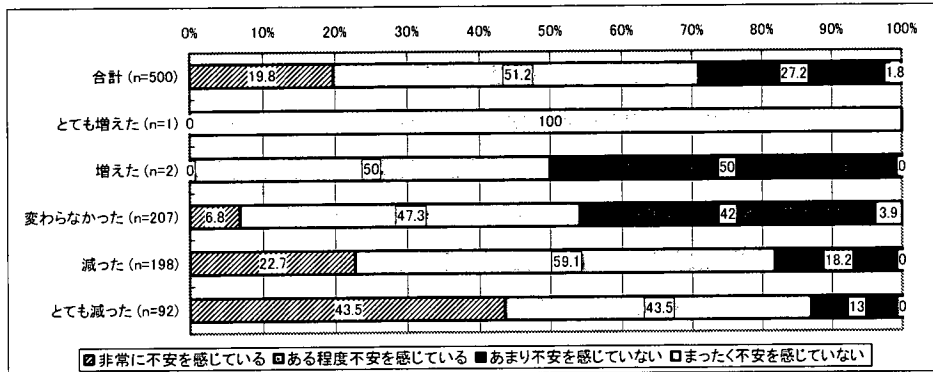
上段:度数 下段:%		Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	8	130	252	86	24
		100	1.6	26	50.4	17.2	4.8
	とても増えた	1	100	-	-	-	-
	増えた	2	-	100	-	-	-
	変わらなかった	207	-	-	100	-	-
	減った	198	-	-	-	100	-
	とても減った	92	-	-	-	-	100
			7.6	34.8	16.3	23.9	17.4



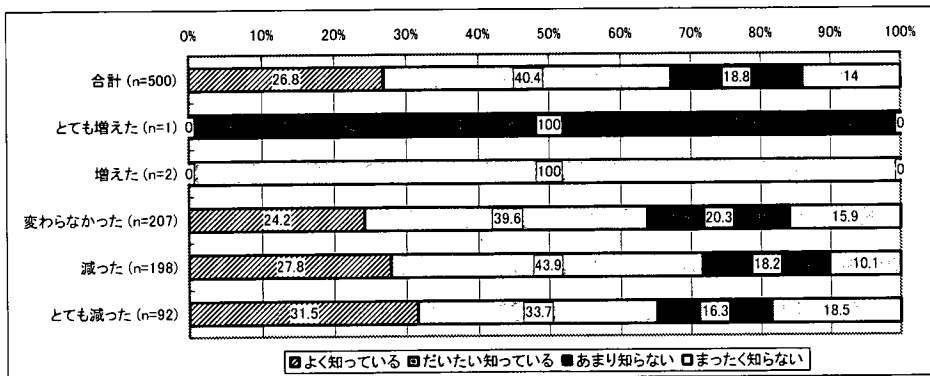
上段:度数 下段:%		Q3 Q1で「減った」「とても減った」、かつQ2で「とても増えた」「増えた」をお選びの方に伺います。その答えた理由のうち最も近いものに印をつけてください。					
		合計	安全性に関する情報が得られ安心したから	時間の経過とともに何となく不安が薄れたから	皆が食べるようになったから	どうしても食べなくなつたから	その他
Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。	合計	129	48	68	5	6	2
		100	37.2	52.7	3.9	4.7	1.6
	とても増えた	-	-	-	-	-	-
	増えた	-	-	-	-	-	-
	変わらなかった	-	-	-	-	-	-
	減った	90	32	49	4	4	1
	とても減った	39	16	19	1	2	1
			41	48.7	2.6	5.1	2.6



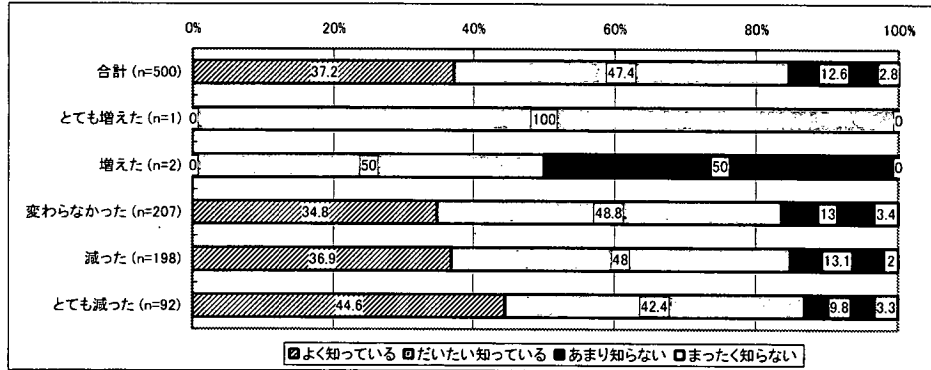
上段:度数 下段:%		Q7-1 あなたはBSEをどの程度不安だと感じていますか。				
		合計	非常に不安を感じている	ある程度不安を感じている	あまり不安を感じていない	まったく不安を感じていない
Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	99	256	136	9
		100	19.8	51.2	27.2	1.8
	とても増えた	1	-	-	-	1
		100	-	-	-	100
	増えた	2	-	1	1	-
		100	-	50	50	-
	変わらなかった	207	14	98	87	8
	100	6.8	47.3	42	3.9	
減った	198	45	117	36	-	
	100	22.7	59.1	18.2	-	
とても減った	92	40	40	12	-	
	100	43.5	43.5	13	-	



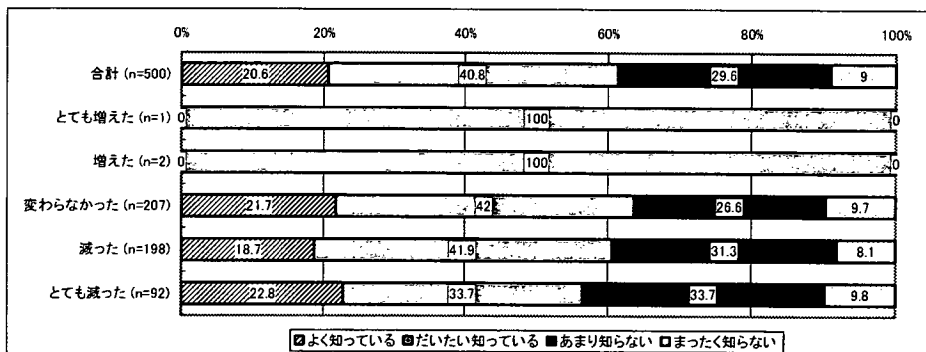
上段:度数 下段:%		Q10-1 以下の項目について、あなたはどの程度ご存じですか。日本では、変異型クローンフェルト・ヤコブ病(vCJD)の患者発生が1名確認されている				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	134	202	94	70
		100	26.8	40.4	18.8	14
	とても増えた	1	-	-	1	-
		100	-	-	100	-
	増えた	2	-	2	-	-
		100	-	100	-	-
	変わらなかった	207	50	82	42	33
	100	24.2	39.6	20.3	15.9	
減った	198	55	87	36	20	
	100	27.8	43.9	18.2	10.1	
とても減った	92	29	31	15	17	
	100	31.5	33.7	16.3	18.5	



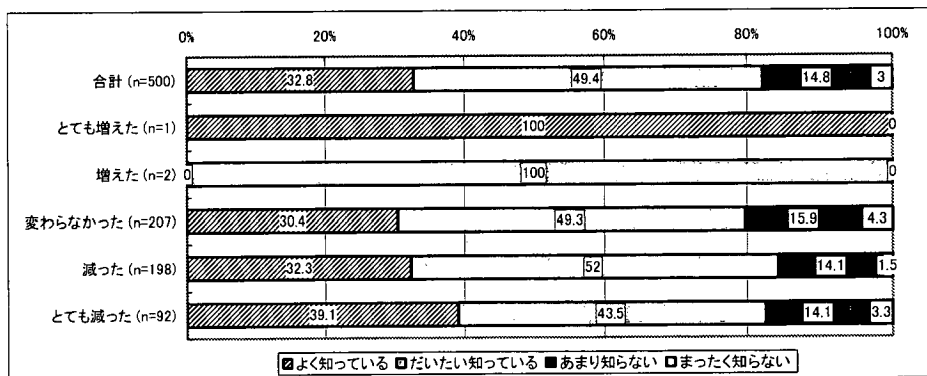
上段:度数 下段:%		Q10-2 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。国産牛は、全てBSEの検査を行っている				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	186	237	63	14
		100	37.2	47.4	12.6	2.8
	とても増えた	1	-	1	-	-
		100	-	100	-	-
	増えた	2	-	1	1	-
		100	-	50	50	-
	変わらなかった	207	72	101	27	7
	100	34.8	48.8	13	3.4	
減った	198	73	95	26	4	
	100	36.9	48	13.1	2	
とても減った	92	41	39	9	3	
	100	44.6	42.4	9.8	3.3	



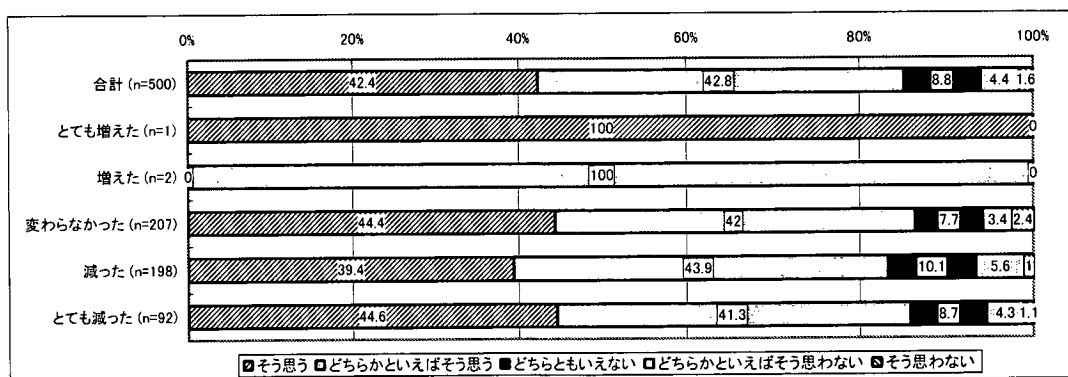
上段:度数 下段:%		Q10-3 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。日本では、牛をど畜した後に、特定危険部位(人が食べると感染の恐れがあるといわれている部分(SRM))が除去されている				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	103	204	148	45
		100	20.6	40.8	29.6	9
	とても増えた	1	-	1	-	-
		100	-	100	-	-
	増えた	2	-	2	-	-
		100	-	100	-	-
	変わらなかった	207	45	87	55	20
	100	21.7	42	26.6	9.7	
減った	198	37	83	62	16	
	100	18.7	41.9	31.3	8.1	
とても減った	92	21	31	31	9	
	100	22.8	33.7	33.7	9.8	



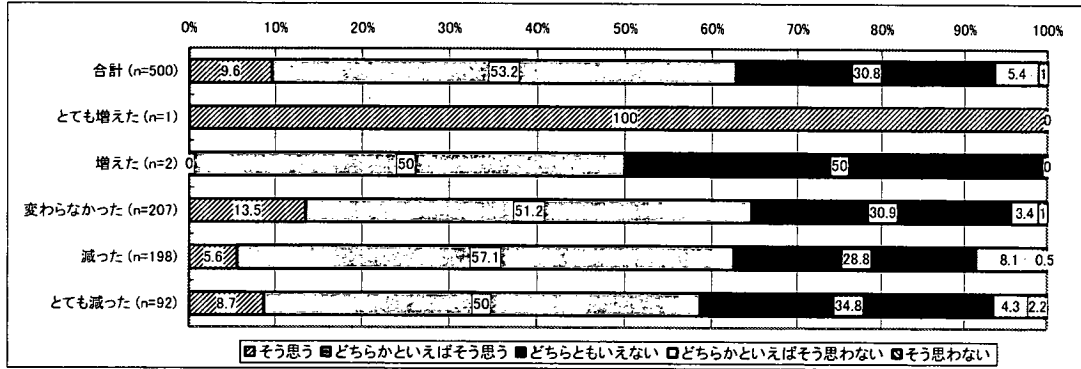
上段:度数 下段:%		Q10-4 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。日本では、BSEの感染源と考えられているえさ(肉骨粉)を牛に食べさせることを禁止している				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。	合計	500 100	164 32.8	247 49.4	74 14.8	15 3
	とても増えた	1 100	1 100	-	-	-
	増えた	2 100	-	2 100	-	-
	変わらなかった	207 100	63 30.4	102 49.3	33 15.9	9 4.3
	減った	198 100	64 32.3	103 52	28 14.1	3 1.5
	とても減った	92 100	36 39.1	40 43.5	13 14.1	3 3.3



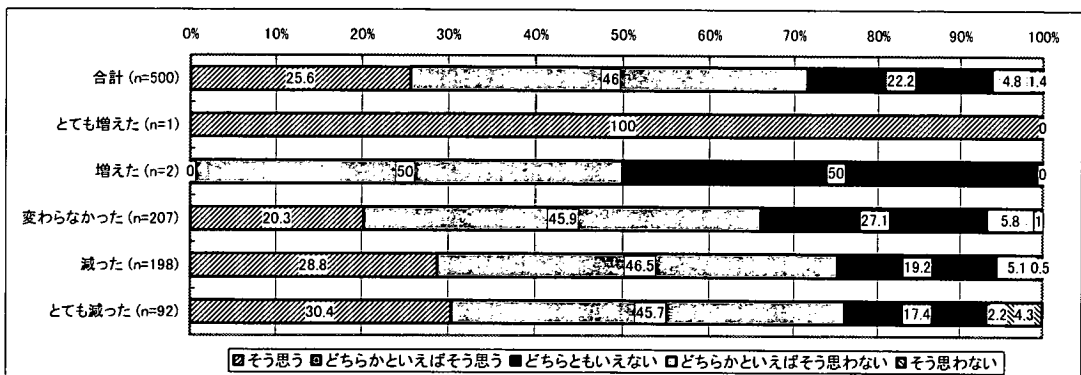
上段:度数 下段:%		Q13-1 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。 100%安全な食品は世の中には存在しない					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。	合計	500 100	212 42.4	214 42.8	44 8.8	22 4.4	8 1.6
	とても増えた	1 100	1 100	-	-	-	-
	増えた	2 100	-	2 100	-	-	-
	変わらなかった	207 100	92 44.4	87 42	16 7.7	7 3.4	5 2.4
	減った	198 100	78 39.4	87 43.9	20 10.1	11 5.6	2 1
	とても減った	92 100	41 44.6	38 41.3	8 8.7	4 4.3	1 1.1



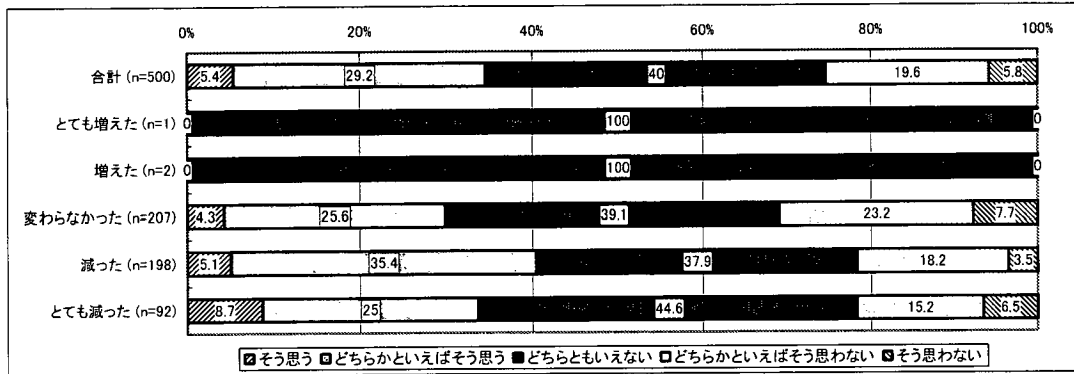
上段:度数 下段:%		Q13-2 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。現在流通している国産の牛肉は安全である					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	48	266	154	27	5
		100	9.6	53.2	30.8	5.4	1
	とても増えた	1	1	-	-	-	-
		100	100	-	-	-	-
	増えた	2	-	1	1	-	-
		100	-	50	50	-	-
変わらなかった	207	28	106	64	7	2	
	100	13.5	51.2	30.9	3.4	1	
減った	198	11	113	57	16	1	
	100	5.6	57.1	28.8	8.1	0.5	
とても減った	92	8	46	32	4	2	
	100	8.7	50	34.8	4.3	2.2	



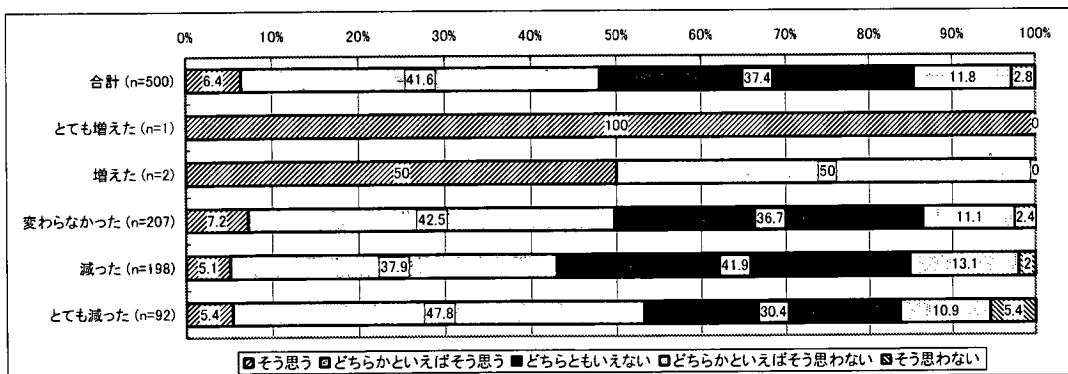
上段:度数 下段:%		Q13-3 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。国内でのBSE発生は、日本経済に大きな影響を与えている					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	128	230	111	24	7
		100	25.6	46	22.2	4.8	1.4
	とても増えた	1	1	-	-	-	-
		100	100	-	-	-	-
	増えた	2	-	1	1	-	-
		100	-	50	50	-	-
変わらなかった	207	42	95	56	12	2	
	100	20.3	45.9	27.1	5.8	1	
減った	198	57	92	38	10	1	
	100	28.8	46.5	19.2	5.1	0.5	
とても減った	92	28	42	16	2	4	
	100	30.4	45.7	17.4	2.2	4.3	



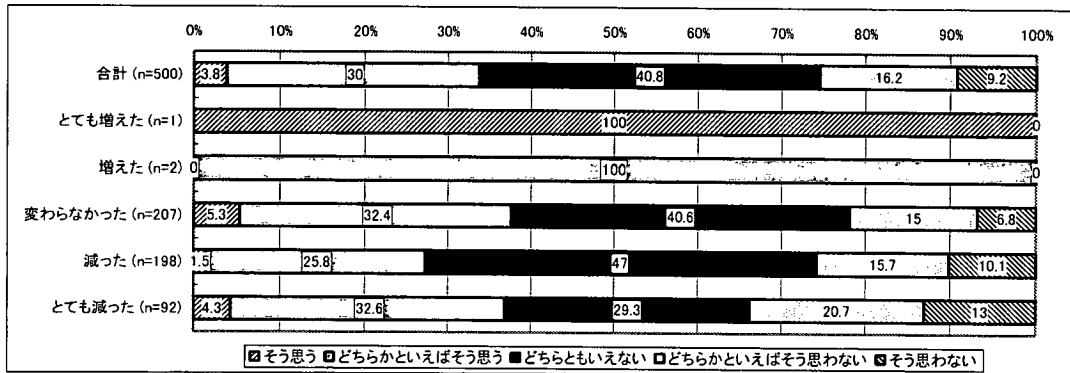
上段:度数 下段:%		Q13-4 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。国内でのBSE発生は、日本人の健康に大きな影響を与えている					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。	合計	500 100	27 5.4	146 29.2	200 40	98 19.6	29 5.8
	とても増えた	1 100	-	-	-	1 100	-
	増えた	2 100	-	-	-	2 100	-
	変わらなかった	207 100	9 4.3	53 25.6	81 39.1	48 23.2	16 7.7
	減った	198 100	10 5.1	70 35.4	75 37.9	36 18.2	7 3.5
	とても減った	92 100	8 8.7	23 25	41 44.6	14 15.2	6 6.5



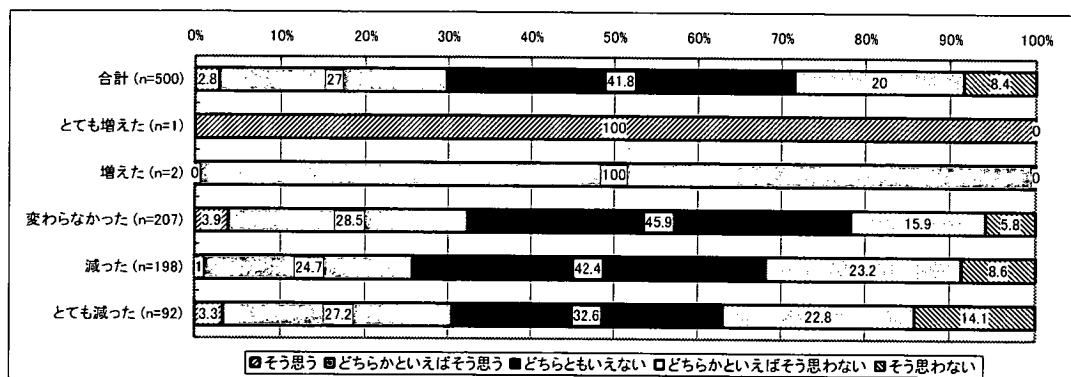
上段:度数 下段:%		Q13-8 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。日本の食品安全への取組は、国際的に非常に優れている					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。	合計	500 100	32 6.4	208 41.6	187 37.4	59 11.8	14 2.8
	とても増えた	1 100	1 100	-	-	-	-
	増えた	2 100	1 50	1 50	-	-	-
	変わらなかった	207 100	15 7.2	88 42.5	76 36.7	23 11.1	5 2.4
	減った	198 100	10 5.1	75 37.9	83 41.9	26 13.1	4 2
	とても減った	92 100	5 5.4	44 47.8	28 30.4	10 10.9	5 5.4



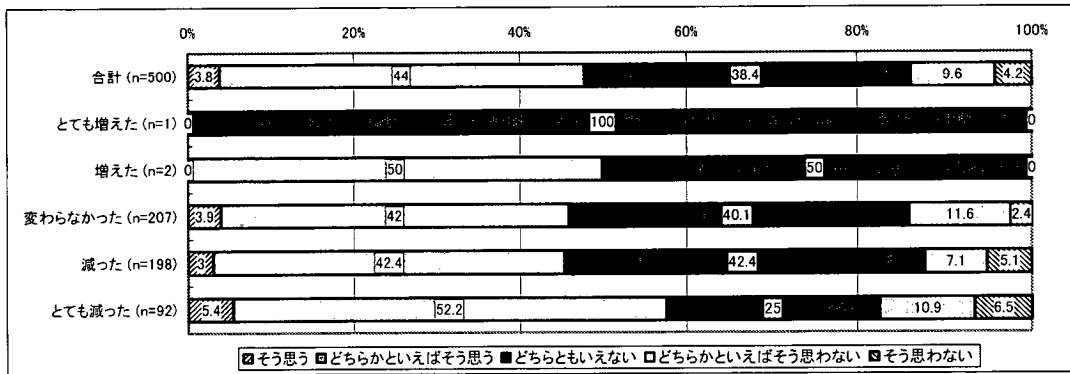
上段:度数 下段:%		Q13-9 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。日本の食品安全行政を信頼している					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	19	150	204	81	46
		100	3.8	30	40.8	16.2	9.2
	とても増えた	1	1	-	-	-	-
		100	100	-	-	-	-
	増えた	2	-	2	-	-	-
		100	-	100	-	-	-
	変わらなかった	207	11	67	84	31	14
	100	5.3	32.4	40.6	15	6.8	
減った	198	3	51	93	31	20	
	100	1.5	25.8	47	15.7	10.1	
とても減った	92	4	30	27	19	12	
	100	4.3	32.6	29.3	20.7	13	



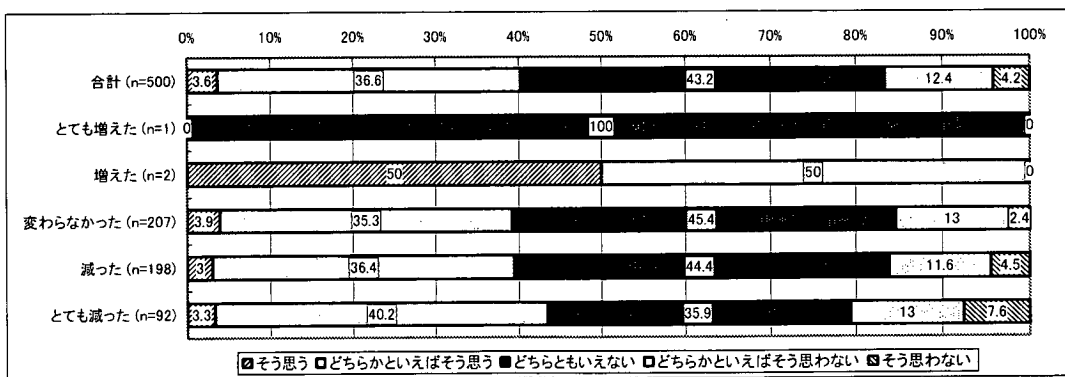
上段:度数 下段:%		Q13-10 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。日本の食品産業の安全対策を信頼している					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	14	135	209	100	42
		100	2.8	27	41.8	20	8.4
	とても増えた	1	1	-	-	-	-
		100	100	-	-	-	-
	増えた	2	-	2	-	-	-
		100	-	100	-	-	-
	変わらなかった	207	8	59	95	33	12
	100	3.9	28.5	45.9	15.9	5.8	
減った	198	2	49	84	46	17	
	100	1	24.7	42.4	23.2	8.6	
とても減った	92	3	25	30	21	13	
	100	3.3	27.2	32.6	22.8	14.1	



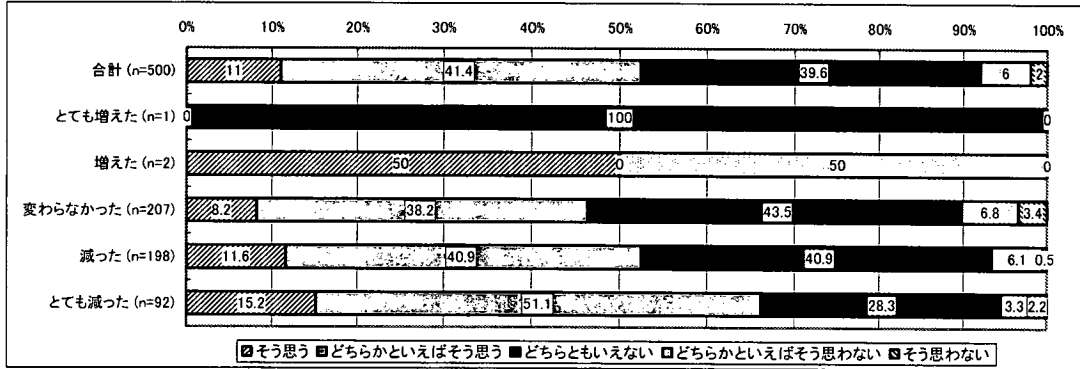
上段:度数 下段:%		Q13-11 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。 BSE発生後、日本の食品安全行政は良い方向に向かっている					
		合計	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	19	220	192	48	21
		100	3.8	44	38.4	9.6	4.2
	とても増えた	1	-	-	1	-	-
		100	-	-	100	-	-
	増えた	2	-	1	-	-	-
		100	-	50	50	-	-
	変わらなかった	207	8	87	83	24	5
	100	3.9	42	40.1	11.6	2.4	
減った	198	6	84	84	14	10	
	100	3	42.4	42.4	7.1	5.1	
とても減った	92	5	48	23	10	6	
	100	5.4	52.2	25	10.9	6.5	



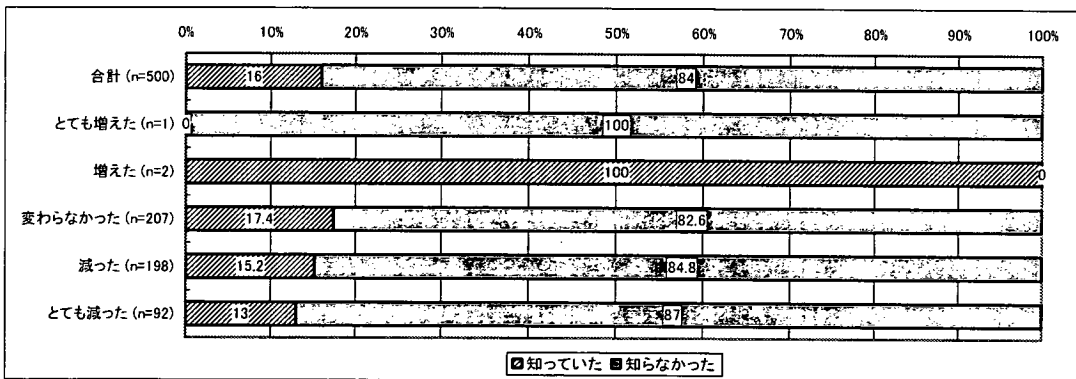
上段:度数 下段:%		Q13-12 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。生 産者や生産方法が明記されている食品は安全である					
		合計	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	18	183	216	62	21
		100	3.6	36.6	43.2	12.4	4.2
	とても増えた	1	-	-	1	-	-
		100	-	-	100	-	-
	増えた	2	1	1	-	-	-
		100	50	50	-	-	-
	変わらなかった	207	8	73	94	27	5
	100	3.9	35.3	45.4	13	2.4	
減った	198	6	72	88	23	9	
	100	3	36.4	44.4	11.6	4.5	
とても減った	92	3	37	33	12	7	
	100	3.3	40.2	35.9	13	7.6	



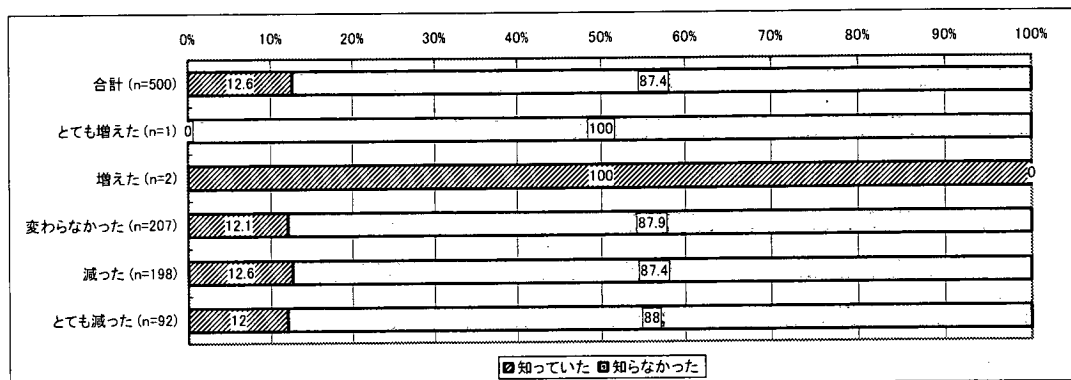
上段:度数 下段:%		Q13-13 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。安全性の高い食品であれば、価格が高くても優先的に購入したい					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	55	207	198	30	10
		100	11	41.4	39.6	6	2
	とても増えた	1	-	-	1	-	-
		100	-	-	100	-	-
	増えた	2	1	-	-	1	-
		100	50	-	-	50	-
	変わらなかった	207	17	79	90	14	7
	100	8.2	38.2	43.5	6.8	3.4	
減った	198	23	81	81	12	1	
	100	11.6	40.9	40.9	6.1	0.5	
とても減った	92	14	47	26	3	2	
	100	15.2	51.1	28.3	3.3	2.2	



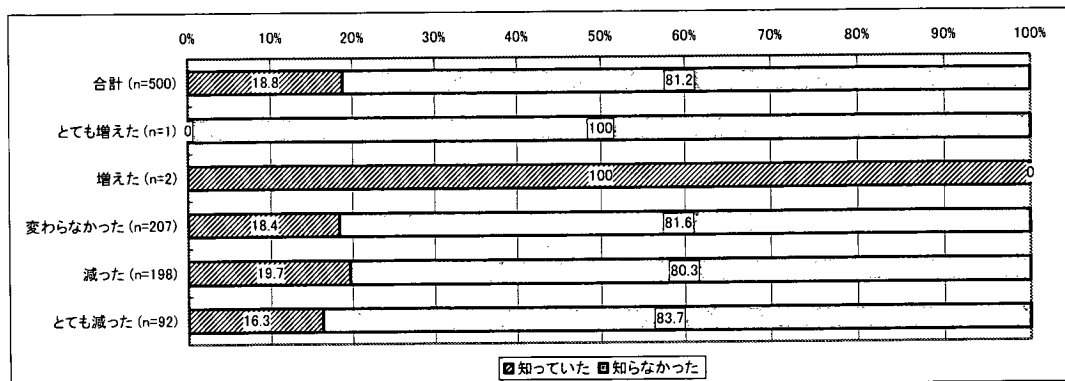
上段:度数 下段:%		Q14 あなたは、平成15年7月の国民の健康の保護を最優先とした食品安全基本法の施行によって、新たな食品安全行政がスタートしたことを知っていますか。		
		合計	知っていた	知らなかった
Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	80	420
		100	16	84
	とても増えた	1	-	1
		100	-	100
	増えた	2	2	-
		100	100	-
	変わらなかった	207	36	171
	100	17.4	82.6	
減った	198	30	168	
	100	15.2	84.8	
とても減った	92	12	80	
	100	13	87	



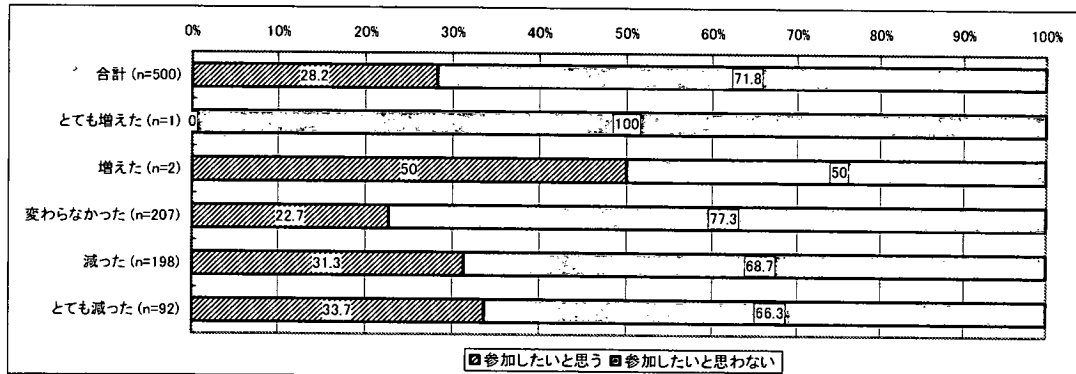
上段:度数 下段:%		Q15 あなたは、『リスクコミュニケーション』という言葉を知っていましたか。		
		合計	知っていた	知らなかった
Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	63	437
		100	12.6	87.4
	とても増えた	1	-	1
		100	-	100
	増えた	2	2	-
		100	100	-
	変わらなかった	207	25	182
	100	12.1	87.9	
減った	198	25	173	
	100	12.6	87.4	
とても減った	92	11	81	
	100	12	88	



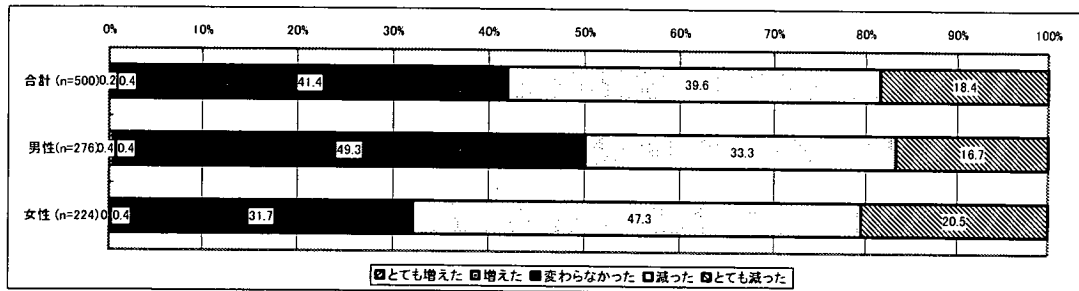
上段:度数 下段:%		Q16 あなたは、全国各地で、食の安全の分野における意見交換会が開催されていることを知っていましたか。		
		合計	知っていた	知らなかった
Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	94	406
		100	18.8	81.2
	とても増えた	1	-	1
		100	-	100
	増えた	2	2	-
		100	100	-
	変わらなかった	207	38	169
	100	18.4	81.6	
減った	198	39	159	
	100	19.7	80.3	
とても減った	92	15	77	
	100	16.3	83.7	



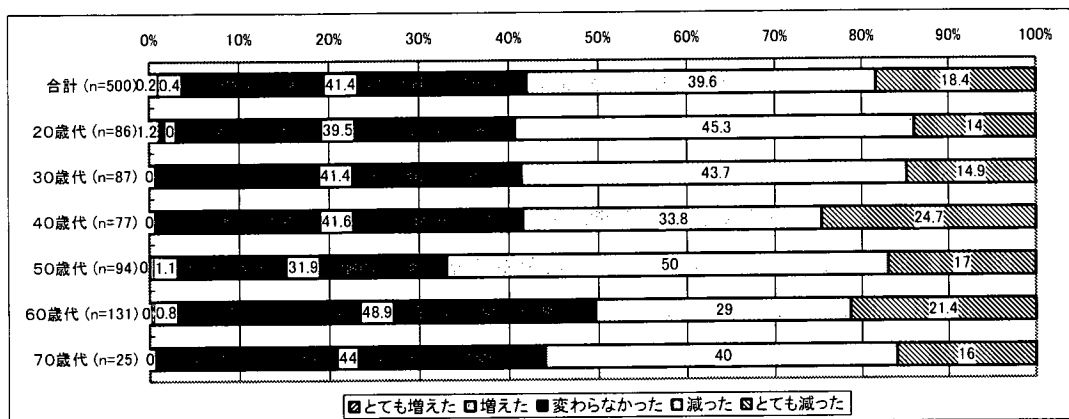
上段:度数 下段:%		Q17 あなたは、今後、食品の安全性に関連したシンポジウムや意見交換会などのイベントに参加したいと思いますか。		
		合計	参加したいと思う	参加したいと思わない
Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	141	359
		100	28.2	71.8
	とても増えた	1	-	1
		100	-	100
	増えた	2	1	1
		100	50	50
	変わらなかった	207	47	160
	100	22.7	77.3	
減った	198	62	136	
	100	31.3	68.7	
とても減った	92	31	61	
	100	33.7	66.3	



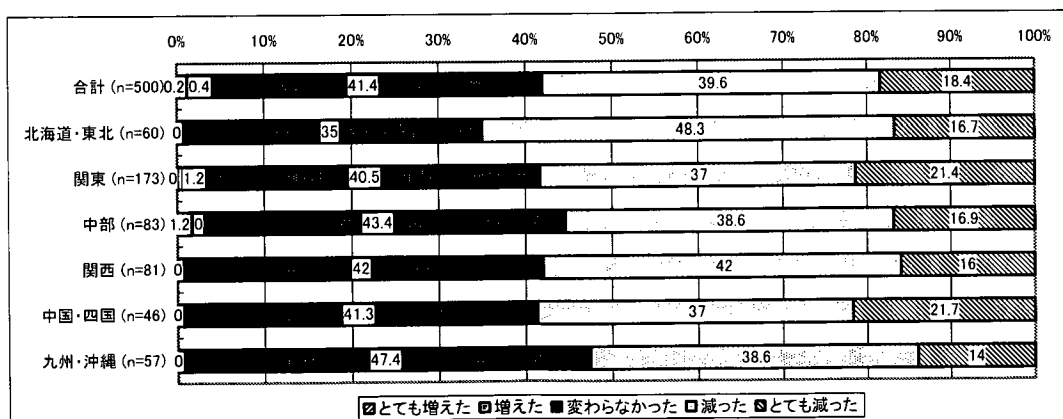
上段:度数 下段:%		Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q19 あなたの性別をお答え下さい。	合計	500	1	2	207	198	92
		100	0.2	0.4	41.4	39.6	18.4
	男性	276	1	1	136	92	46
		100	0.4	0.4	49.3	33.3	16.7
女性	224	-	1	71	106	46	
	100	-	0.4	31.7	47.3	20.5	



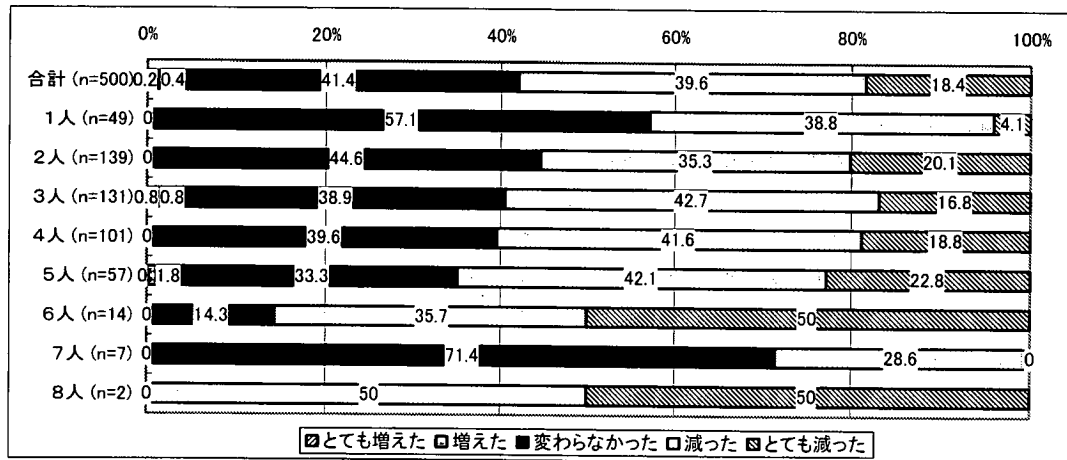
上段:度数 下段:%		Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500 100	1 0.2	2 0.4	207 41.4	198 39.6	92 18.4
	20歳代	86 100	1 1.2	-	34 39.5	39 45.3	12 14
	30歳代	87 100	-	-	36 41.4	38 43.7	13 14.9
	40歳代	77 100	-	-	32 41.6	26 33.8	19 24.7
	50歳代	94 100	-	1 1.1	30 31.9	47 50	16 17
	60歳代	131 100	-	1 0.8	64 48.9	38 29	28 21.4
	70歳以上	25 100	-	-	11 44	10 40	4 16



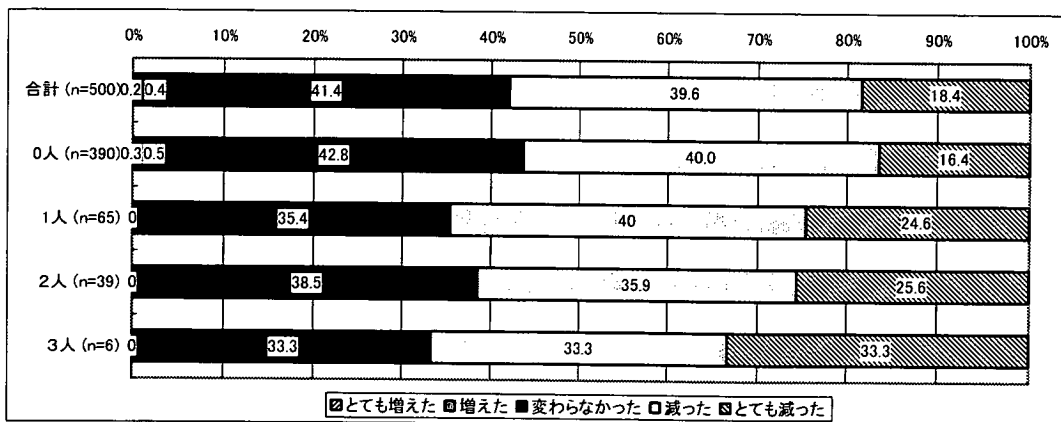
上段:度数 下段:%		Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q21 あなたの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500 100	1 0.2	2 0.4	207 41.4	198 39.6	92 18.4
	北海道・東北	60 100	-	-	21 35	29 48.3	10 16.7
	関東	173 100	-	2 1.2	70 40.5	64 37	37 21.4
	中部	83 100	1 1.2	-	36 43.4	32 38.6	14 16.9
	関西	81 100	-	-	34 42	34 42	13 16
	中国・四国	46 100	-	-	19 41.3	17 37	10 21.7
	九州・沖縄	57 100	-	-	27 47.4	22 38.6	8 14



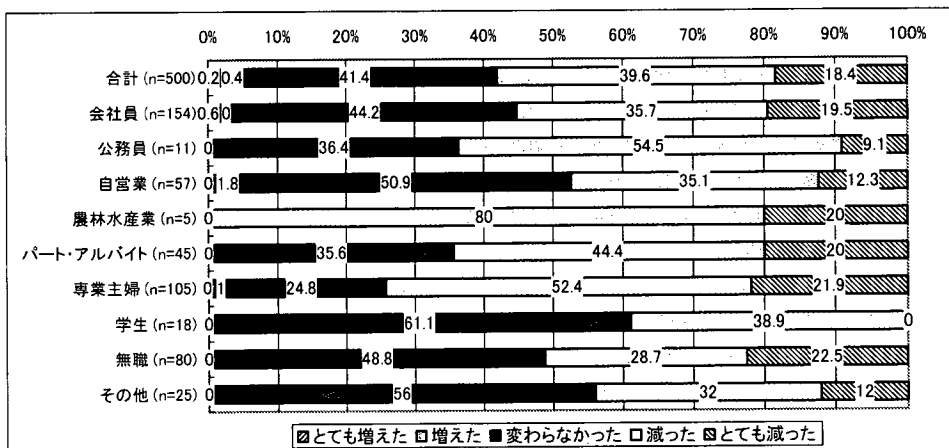
上段:度数 下段:%		Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q22 あなたのお宅の世帯員数(あなたを含めて)についてお聞きします。回答欄の中に、人数を記入してください。	合計	500 100	1 0.2	2 0.4	207 41.4	198 39.6	92 18.4
	1人	49 100	-	-	28 57.1	19 38.8	2 4.1
	2人	139 100	-	-	62 44.6	49 35.3	28 20.1
	3人	131 100	1 0.8	1 0.8	51 38.9	56 42.7	22 16.8
	4人	101 100	-	-	40 39.6	42 41.6	19 18.8
	5人	57 100	-	1 1.8	19 33.3	24 42.1	13 22.8
	6人	14 100	-	-	2 14.3	5 35.7	7 50
	7人	7 100	-	-	5 71.4	2 28.6	-
	8人	2 100	-	-	-	1 50	1 50



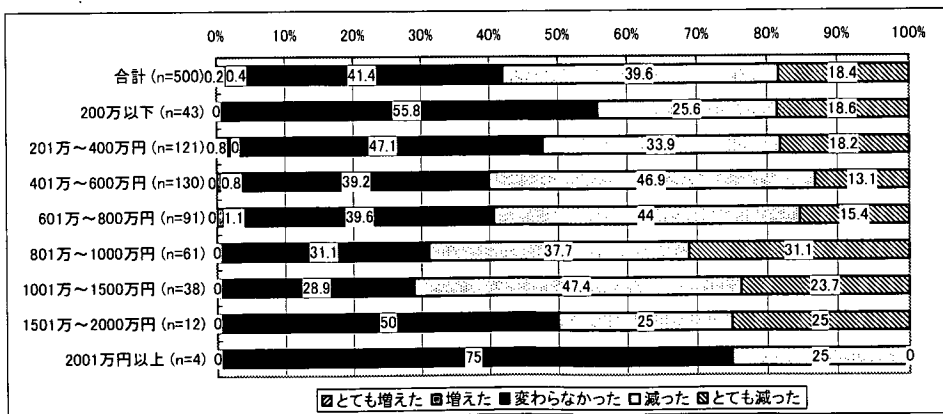
上段:度数 下段:%		Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q23 あなたのお宅の世帯員数(あなたを含めて)についてお聞きします。あわせて、小学生以下のお子様的人数を記入してください。	合計	500 100	1 0.2	2 0.4	207 41.4	198 39.6	92 18.4
	0人	390 100	1 0.3	2 0.5	167 42.8	156 40.0	64 16.4
	1人	65 100	-	-	23 35.4	26 40	16 24.6
	2人	39 100	-	-	15 38.5	14 35.9	10 25.6
	3人	6 100	-	-	2 33.3	2 33.3	2 33.3



上段:度数 下段:%		Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q24 あなたのお仕事をお答え下さい。なお、複数該当する方は、主なお仕事に印をつけてください。	合計	500 100	1 0.2	2 0.4	207 41.4	198 39.6	92 18.4
	会社員	154 100	1 0.6	-	68 44.2	55 35.7	30 19.5
	公務員	11 100	-	-	4 36.4	6 54.5	1 9.1
	自営業	57 100	-	1 1.8	29 50.9	20 35.1	7 12.3
	農林水産業	5 100	-	-	-	4 80	1 20
	パート・アルバイト	45 100	-	-	16 35.6	20 44.4	9 20
	専業主婦	105 100	-	1 1	26 24.8	55 52.4	23 21.9
	学生	18 100	-	-	11 61.1	7 38.9	0
	無職	80 100	-	-	39 48.8	23 28.7	18 22.5
	その他	25 100	-	-	14 56	8 32	3 12

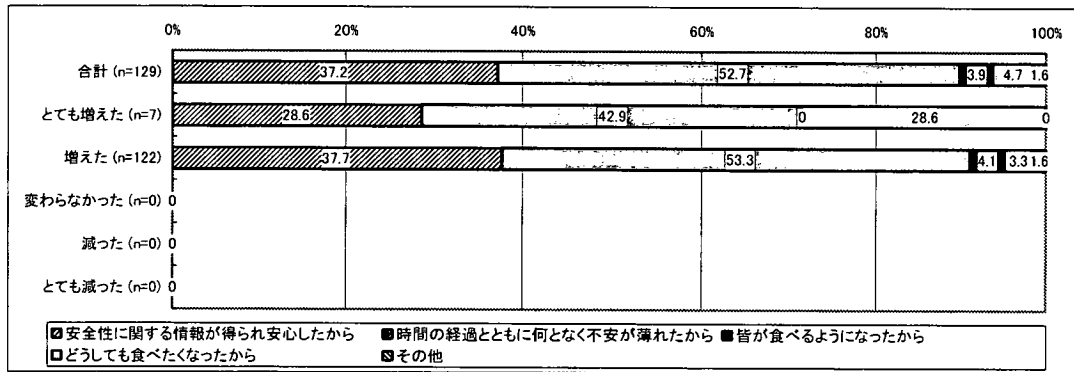


上段:度数 下段:%		Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q25 あなたのお宅の年収(家族全体で、年金等も含んだ年収)は税込みでいくらぐらいでしょうか。	合計	500 100	1 0.2	2 0.4	207 41.4	198 39.6	92 18.4
	200万円以下	43 100	-	-	24 55.8	11 25.6	8 18.6
	201万~400万円	121 100	1 0.8	-	57 47.1	41 33.9	22 18.2
	401万~600万円	130 100	-	1 0.8	51 39.2	61 46.9	17 13.1
	601万~800万円	91 100	-	1 1.1	36 39.6	40 44	14 15.4
	801万~1,000万円	61 100	-	-	19 31.1	23 37.7	19 31.1
	1,001万~1,500万円	38 100	-	-	11 28.9	18 47.4	9 23.7
	1,501万~2,000万円	12 100	-	-	6 50	3 25	3 25
	2,001万円以上	4 100	-	-	3 75	1 25	0

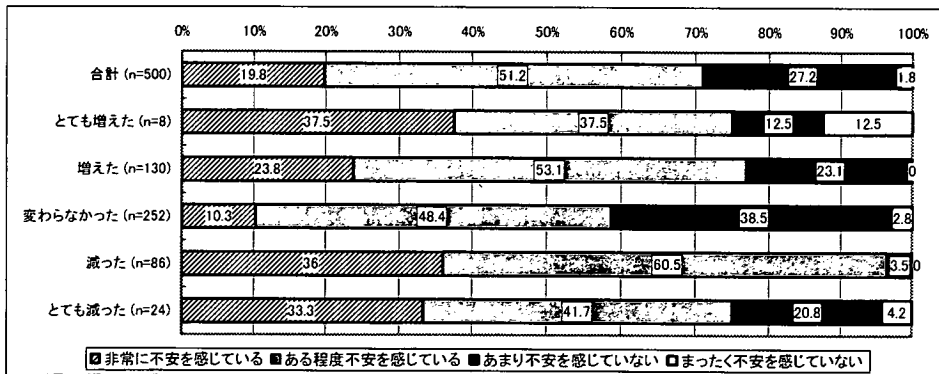


②クロス集計結果 (Q2)

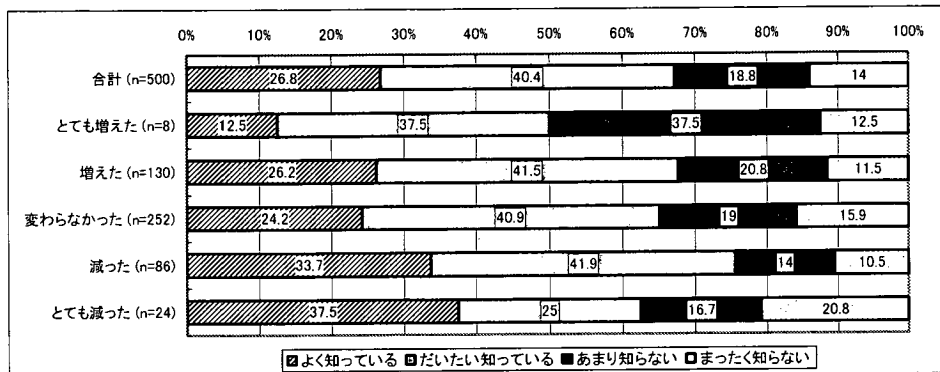
上段:度数 下段:%		Q3 Q1で「減った」「とても減った」、かつQ2で「とても増えた」「増えた」をお選びの方に伺います。その答えた理由のうち最も近いものに印をつけてください。					
		合計	安全性に関する情報が得られ安心したから	時間の経過とともに何となく不安が薄れたから	皆が食べるようになったから	どうしても食べなくなったから	その他
Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。	合計	129	48	68	5	6	2
		100	37.2	52.7	3.9	4.7	1.6
	とても増えた	7	2	3	-	2	-
		100	28.6	42.9	-	28.6	-
	増えた	122	46	65	5	4	2
		100	37.7	53.3	4.1	3.3	1.6
	変わらなかった	-	-	-	-	-	-
減った	-	-	-	-	-	-	
とても減った	-	-	-	-	-	-	



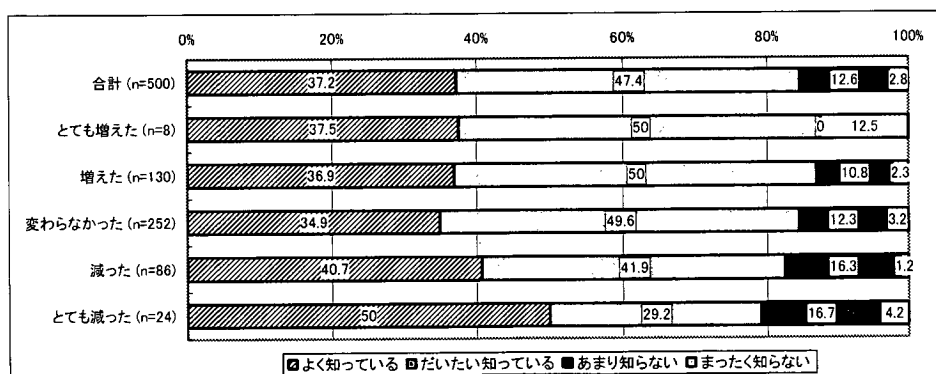
上段:度数 下段:%		Q7-1 あなたはBSEをどの程度不安だと感じていますか。				
		合計	非常に不安を感じている	ある程度不安を感じている	あまり不安を感じていない	まったく不安を感じていない
Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。	合計	500	99	256	136	9
		100	19.8	51.2	27.2	1.8
	とても増えた	8	3	3	1	1
		100	37.5	37.5	12.5	12.5
	増えた	130	31	69	30	-
		100	23.8	53.1	23.1	-
	変わらなかった	252	26	122	97	7
	100	10.3	48.4	38.5	2.8	
減った	86	31	52	3	-	
	100	36	60.5	3.5	-	
とても減った	24	8	10	5	1	
	100	33.3	41.7	20.8	4.2	



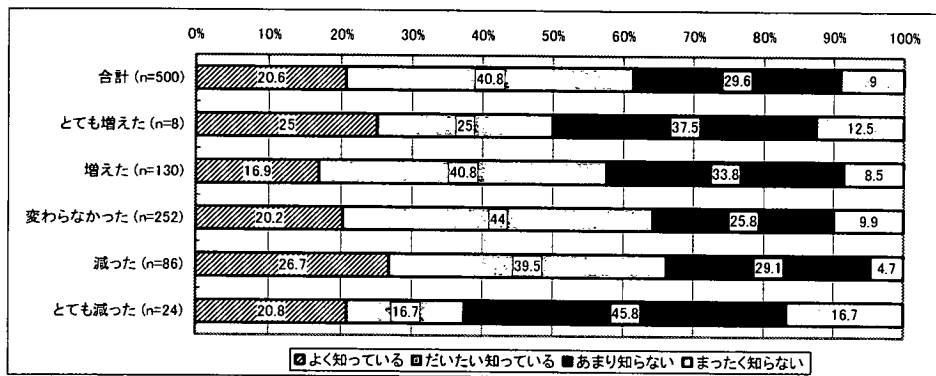
上段:度数 下段:%		Q10-1 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。日本では、変異型クロイツフェルト・ヤコブ病(vCJD)の患者発生が1名確認されている				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。	合計	500 100	134 26.8	202 40.4	94 18.8	70 14
	とても増えた	8 100	1 12.5	3 37.5	3 37.5	1 12.5
	増えた	130 100	34 26.2	54 41.5	27 20.8	15 11.5
	変わらなかった	252 100	61 24.2	103 40.9	48 19	40 15.9
	減った	86 100	29 33.7	36 41.9	12 14	9 10.5
	とても減った	24 100	9 37.5	6 25	4 16.7	5 20.8



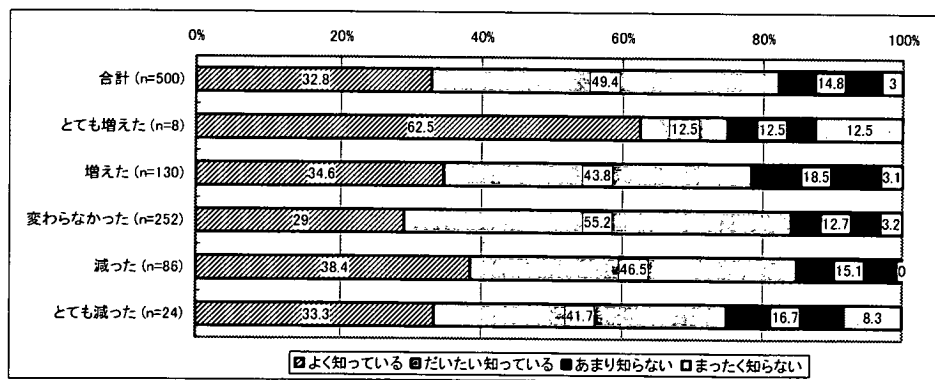
上段:度数 下段:%		Q10-2 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。国産牛は、全てBSEの検査を行っている				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。	合計	500 100	186 37.2	237 47.4	63 12.6	14 2.8
	とても増えた	8 100	3 37.5	4 50	-	1 12.5
	増えた	130 100	48 36.9	65 50	14 10.8	3 2.3
	変わらなかった	252 100	88 34.9	125 49.6	31 12.3	8 3.2
	減った	86 100	35 40.7	36 41.9	14 16.3	1 1.2
	とても減った	24 100	12 50	7 29.2	4 16.7	1 4.2



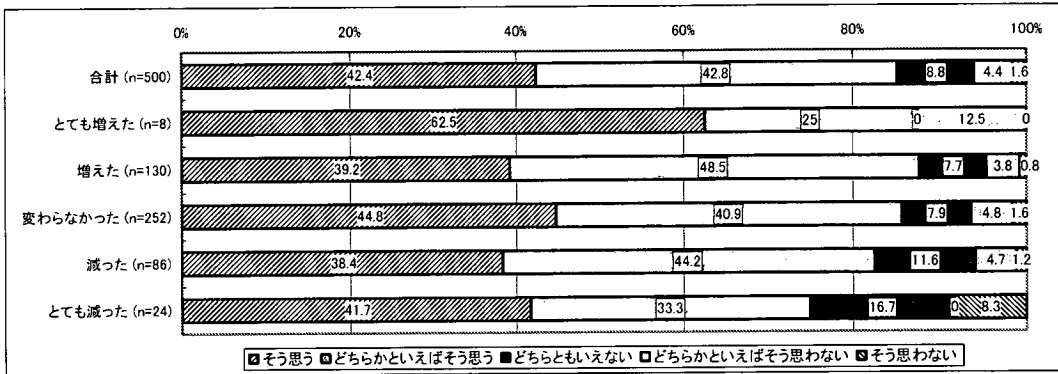
上段:度数 下段:%		Q10-3 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。日本では、牛をと畜した後に、特定危険部位(人が食べると感染の恐れがあるといわれている部分(SRM))が除去されている				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。	合計	500	103	204	148	45
		100	20.6	40.8	29.6	9.9
	とても増えた	8	2	2	3	1
		100	25	25	37.5	12.5
	増えた	130	22	53	44	11
		100	16.9	40.8	33.8	8.5
	変わらなかった	252	51	111	65	25
	100	20.2	44	25.8	9.9	
減った	86	23	34	25	4	
	100	26.7	39.5	29.1	4.7	
とても減った	24	5	4	11	4	
	100	20.8	16.7	45.8	16.7	



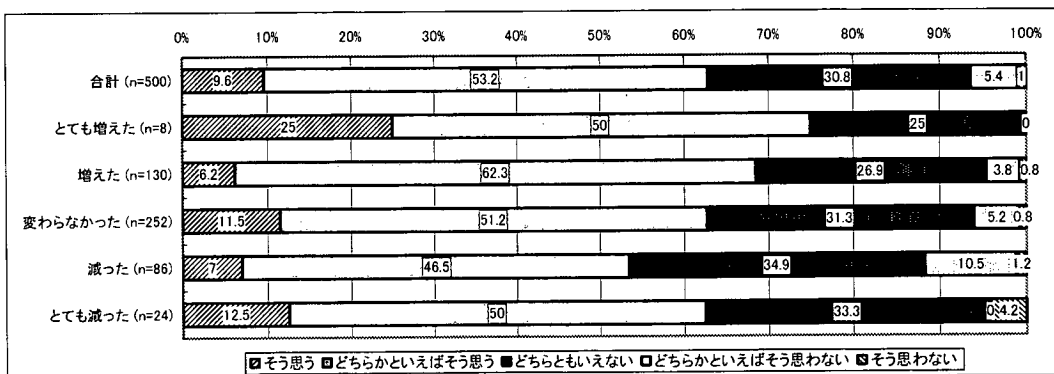
上段:度数 下段:%		Q10-4 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。日本では、BSEの感染源と考えられているえさ(肉骨粉)を牛に食べさせることを禁止している				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。	合計	500	164	247	74	15
		100	32.8	49.4	14.8	3
	とても増えた	8	5	1	1	1
		100	62.5	12.5	12.5	12.5
	増えた	130	45	57	24	4
		100	34.6	43.8	18.5	3.1
	変わらなかった	252	73	139	32	8
	100	29	55.2	12.7	3.2	
減った	86	33	40	13	0	
	100	38.4	46.5	15.1	0	
とても減った	24	8	10	4	2	
	100	33.3	41.7	16.7	8.3	



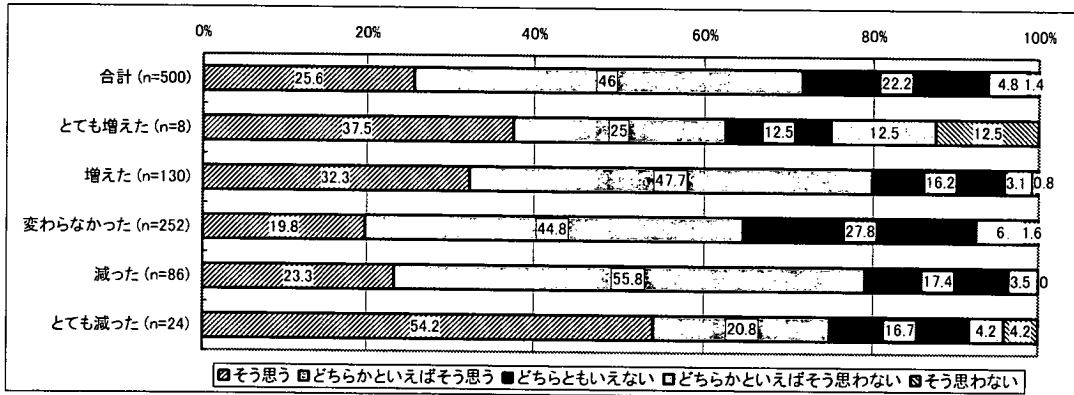
上段:度数 下段:%		Q13-1 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。 100%安全な食品は世の中には存在しない					
		合計	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q2 BSEの発生 直後と現在を比 べて、あなたが 牛肉を食べる量 に変化はありま すか。	合計	500	212	214	44	22	8
		100	42.4	42.8	8.8	4.4	1.6
	とても増えた	8	5	2	-	1	-
		100	62.5	25	-	12.5	-
	増えた	130	51	63	10	5	1
		100	39.2	48.5	7.7	3.8	0.8
	変わらなかった	252	113	103	20	12	4
	100	44.8	40.9	7.9	4.8	1.6	
減った	86	33	38	10	4	1	
	100	38.4	44.2	11.6	4.7	1.2	
とても減った	24	10	8	4	-	2	
	100	41.7	33.3	16.7	-	8.3	



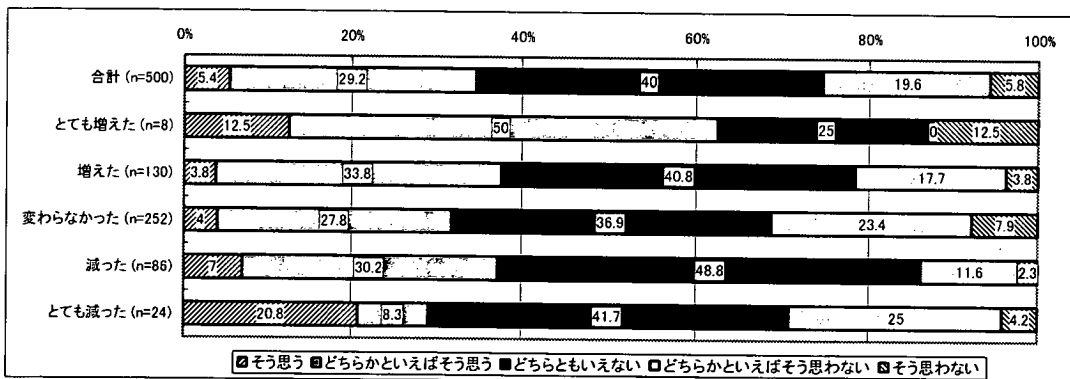
上段:度数 下段:%		Q13-2 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。現 在流通している国産の牛肉は安全である					
		合計	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q2 BSEの発生 直後と現在を比 べて、あなたが 牛肉を食べる量 に変化はありま すか。	合計	500	48	266	154	27	5
		100	9.6	53.2	30.8	5.4	1
	とても増えた	8	2	4	2	-	-
		100	25	50	25	-	-
	増えた	130	8	81	35	5	1
		100	6.2	62.3	26.9	3.8	0.8
	変わらなかった	252	29	129	79	13	2
	100	11.5	51.2	31.3	5.2	0.8	
減った	86	6	40	30	9	1	
	100	7	46.5	34.9	10.5	1.2	
とても減った	24	3	12	8	-	1	
	100	12.5	50	33.3	-	4.2	



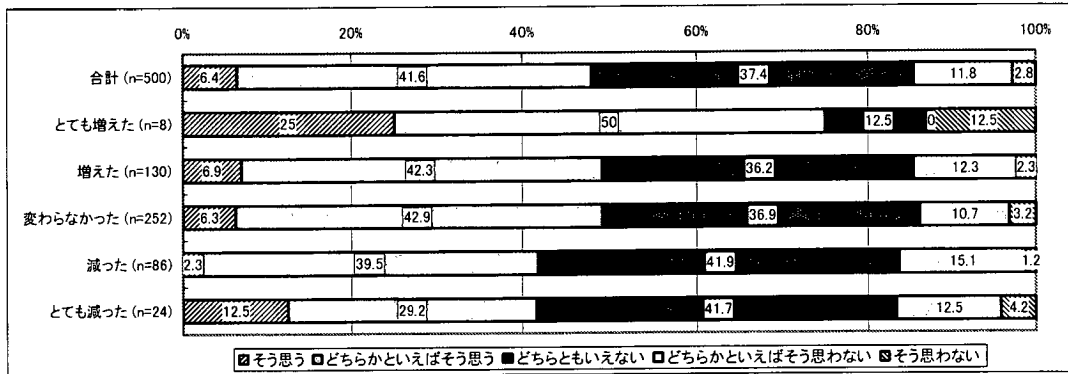
上段:度数 下段:%		Q13-3 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。国内でのBSE発生は、日本経済に大きな影響を与えている					
		合計	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらともい えない	どちらかとい え ばそう思わない	そう思わない
Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。	合計	500	128	230	111	24	7
		100	25.6	46	22.2	4.8	1.4
	とても増えた	8	3	2	1	1	1
		100	37.5	25	12.5	12.5	12.5
	増えた	130	42	62	21	4	1
		100	32.3	47.7	16.2	3.1	0.8
	変わらなかった	252	50	113	70	15	4
	100	19.8	44.8	27.8	6	1.6	
減った	86	20	48	15	3	-	
	100	23.3	55.8	17.4	3.5	-	
とても減った	24	13	5	4	1	1	
	100	54.2	20.8	16.7	4.2	4.2	



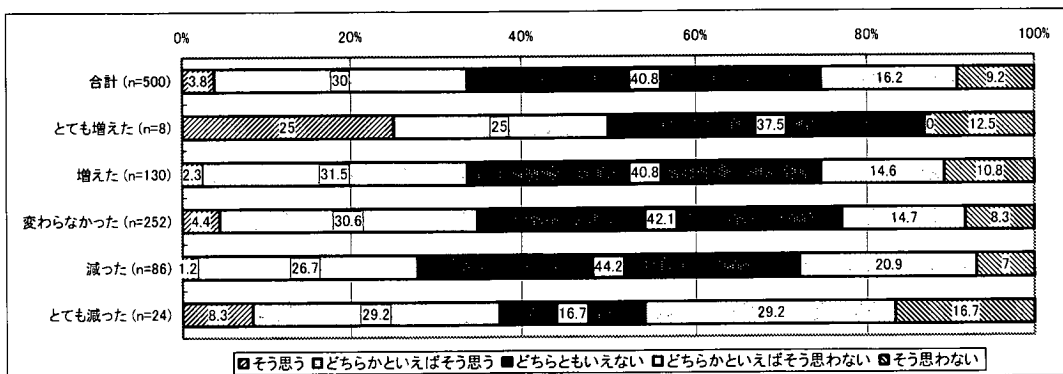
上段:度数 下段:%		Q13-4 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。国内でのBSE発生は、日本人の健康に大きな影響を与えている					
		合計	そう思う	どちらかとい え ばそう思う	どちらともい えない	どちらかとい え ばそう思わない	そう思わない
Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。	合計	500	27	146	200	98	29
		100	5.4	29.2	40	19.6	5.8
	とても増えた	8	1	4	2	-	1
		100	12.5	50	25	-	12.5
	増えた	130	5	44	53	23	5
		100	3.8	33.8	40.8	17.7	3.8
	変わらなかった	252	10	70	93	59	20
	100	4	27.8	36.9	23.4	7.9	
減った	86	6	26	42	10	2	
	100	7	30.2	48.8	11.6	2.3	
とても減った	24	5	2	10	6	1	
	100	20.8	8.3	41.7	25	4.2	



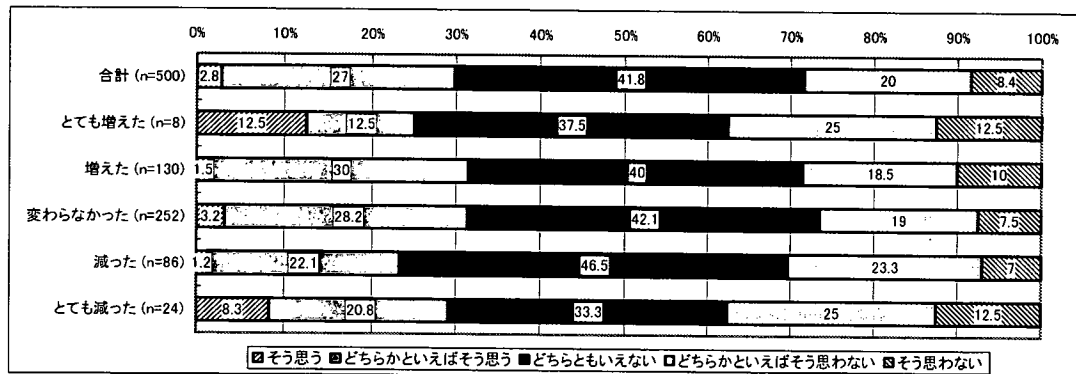
上段:度数 下段:%		Q13-8 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。日本の食品安全への取組は、国際的に非常に優れている					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。	合計	500	32	208	187	59	14
		100	6.4	41.6	37.4	11.8	2.8
	とても増えた	8	2	4	1	-	1
		100	25	50	12.5	-	12.5
	増えた	130	9	55	47	16	3
		100	6.9	42.3	36.2	12.3	2.3
	変わらなかった	252	16	108	93	27	8
	100	6.3	42.9	36.9	10.7	3.2	
減った	86	2	34	36	13	1	
	100	2.3	39.5	41.9	15.1	1.2	
とても減った	24	3	7	10	3	1	
	100	12.5	29.2	41.7	12.5	4.2	



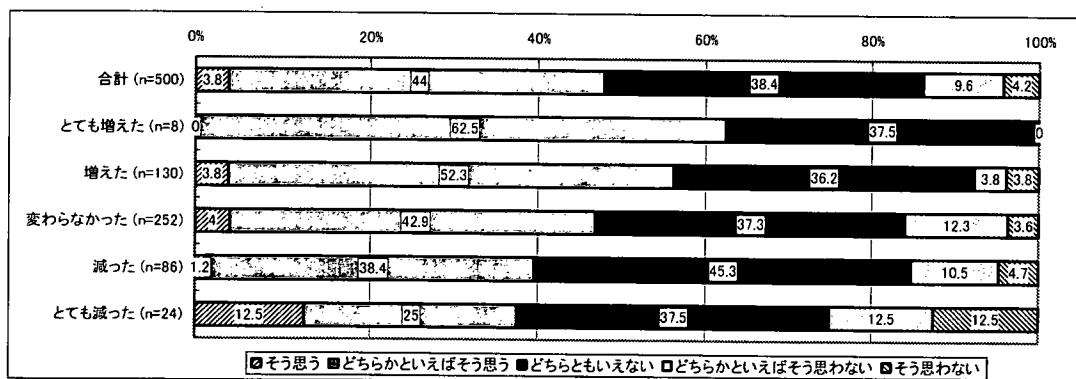
上段:度数 下段:%		Q13-9 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。日本の食品安全行政を信頼している					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。	合計	500	19	150	204	81	46
		100	3.8	30	40.8	16.2	9.2
	とても増えた	8	2	2	3	-	1
		100	25	25	37.5	-	12.5
	増えた	130	3	41	53	19	14
		100	2.3	31.5	40.8	14.6	10.8
	変わらなかった	252	11	77	106	37	21
	100	4.4	30.6	42.1	14.7	8.3	
減った	86	1	23	38	18	6	
	100	1.2	26.7	44.2	20.9	7	
とても減った	24	2	7	4	7	4	
	100	8.3	29.2	16.7	29.2	16.7	



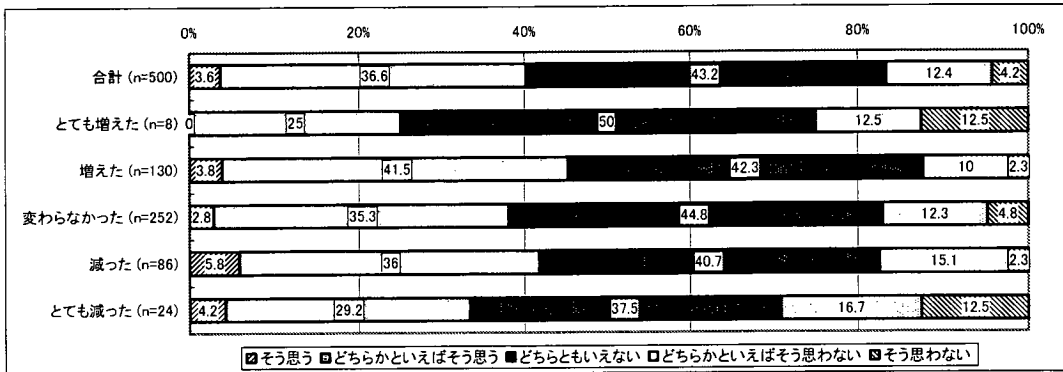
上段:度数 下段:%		Q13-10 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。日本の食品産業の安全対策を信頼している					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。	合計	500	14	135	209	100	42
		100	2.8	27	41.8	20	8.4
	とても増えた	8	1	1	3	2	1
		100	12.5	12.5	37.5	25	12.5
	増えた	130	2	39	52	24	13
		100	1.5	30	40	18.5	10
	変わらなかった	252	8	71	106	48	19
	100	3.2	28.2	42.1	19	7.5	
減った	86	1	19	40	20	6	
	100	1.2	22.1	46.5	23.3	7	
とても減った	24	2	5	8	6	3	
	100	8.3	20.8	33.3	25	12.5	



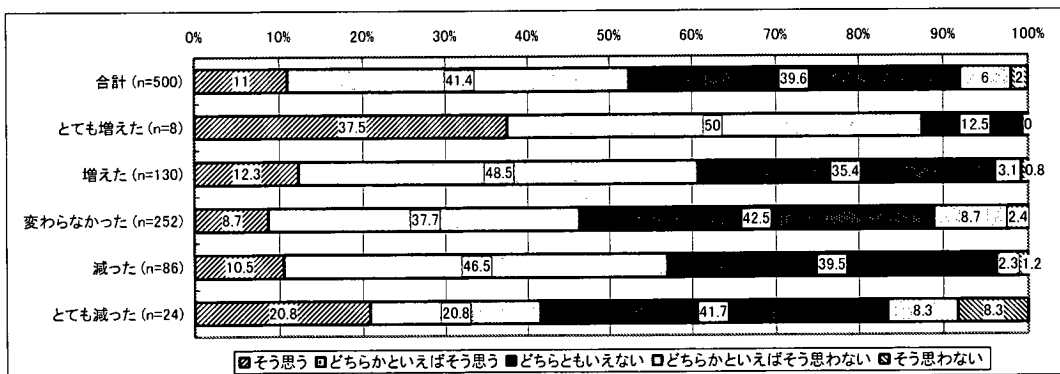
上段:度数 下段:%		Q13-11 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。BSE発生後、日本の食品安全行政は良い方向に向かっている					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。	合計	500	19	220	192	48	21
		100	3.8	44	38.4	9.6	4.2
	とても増えた	8	-	5	3	-	-
		100	-	62.5	37.5	-	-
	増えた	130	5	68	47	5	5
		100	3.8	52.3	36.2	3.8	3.8
	変わらなかった	252	10	108	94	31	9
	100	4	42.9	37.3	12.3	3.6	
減った	86	1	33	39	9	4	
	100	1.2	38.4	45.3	10.5	4.7	
とても減った	24	3	6	9	3	3	
	100	12.5	25	37.5	12.5	12.5	



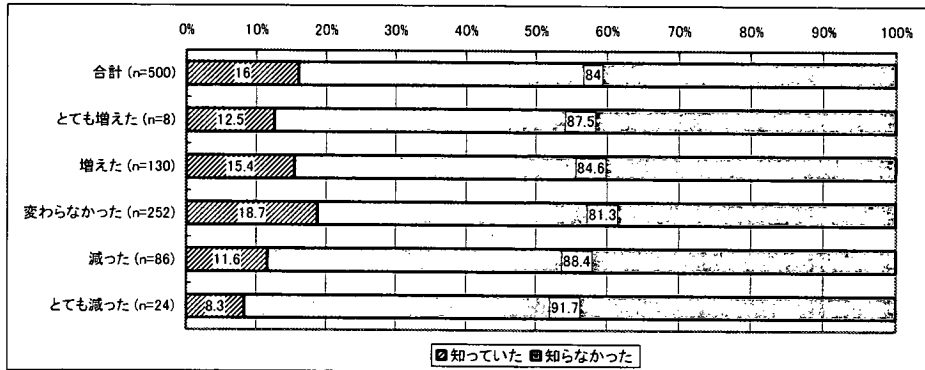
上段:度数 下段:%		Q13-12 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。生産者や生産方法が明記されている食品は安全である					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。	合計	500	18	183	216	62	21
		100	3.6	36.6	43.2	12.4	4.2
	とても増えた	8	-	2	4	1	1
		100	-	25	50	12.5	12.5
	増えた	130	5	54	55	13	3
		100	3.8	41.5	42.3	10	2.3
	変わらなかった	252	7	89	113	31	12
	100	2.8	35.3	44.8	12.3	4.8	
減った	86	5	31	35	13	2	
	100	5.8	36	40.7	15.1	2.3	
とても減った	24	1	7	9	4	3	
	100	4.2	29.2	37.5	16.7	12.5	



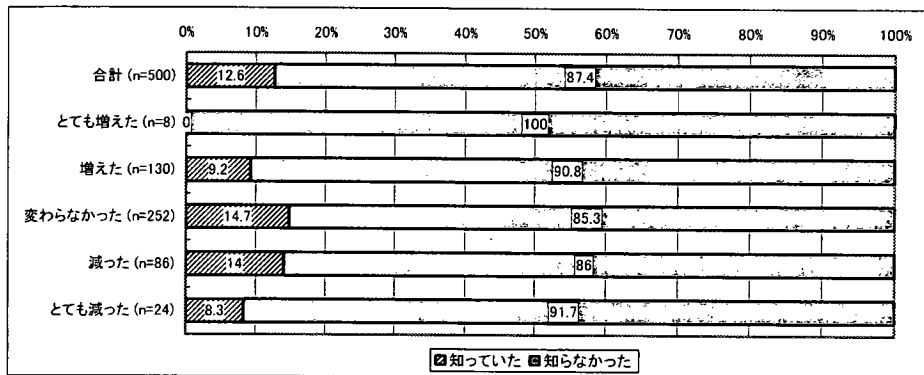
上段:度数 下段:%		Q13-13 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。安全性の高い食品であれば、価格が高くても優先的に購入したい					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。	合計	500	55	207	198	30	10
		100	11	41.4	39.6	6	2
	とても増えた	8	3	4	1	-	-
		100	37.5	50	12.5	-	-
	増えた	130	16	63	46	4	1
		100	12.3	48.5	35.4	3.1	0.8
	変わらなかった	252	22	95	107	22	6
	100	8.7	37.7	42.5	8.7	2.4	
減った	86	9	40	34	2	1	
	100	10.5	46.5	39.5	2.3	1.2	
とても減った	24	5	5	10	2	2	
	100	20.8	20.8	41.7	8.3	8.3	



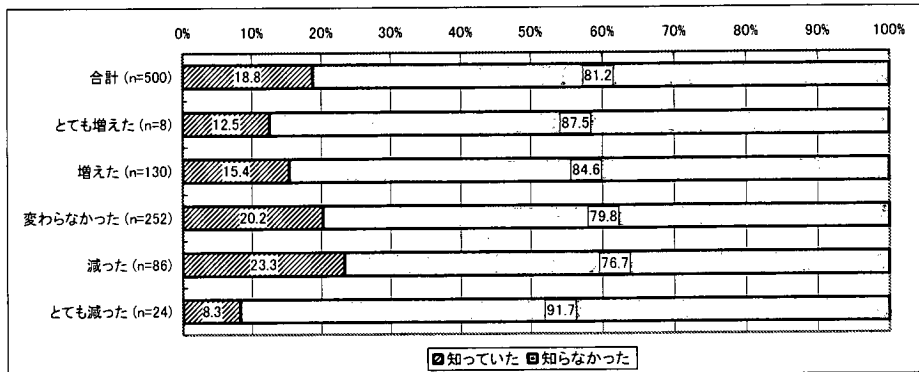
上段:度数 下段:%		Q14 あなたは、平成15年7月の国民の健康の保護を最優先とした食品安全基本法の施行によって、新たな食品安全行政がスタートしたことを知っていますか。		
		合計	知っていた	知らなかった
Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。	合計	500	80	420
		100	16	84
	とても増えた	8	1	7
		100	12.5	87.5
	増えた	130	20	110
		100	15.4	84.6
	変わらなかった	252	47	205
	100	18.7	81.3	
減った	86	10	76	
	100	11.6	88.4	
とても減った	24	2	22	
	100	8.3	91.7	



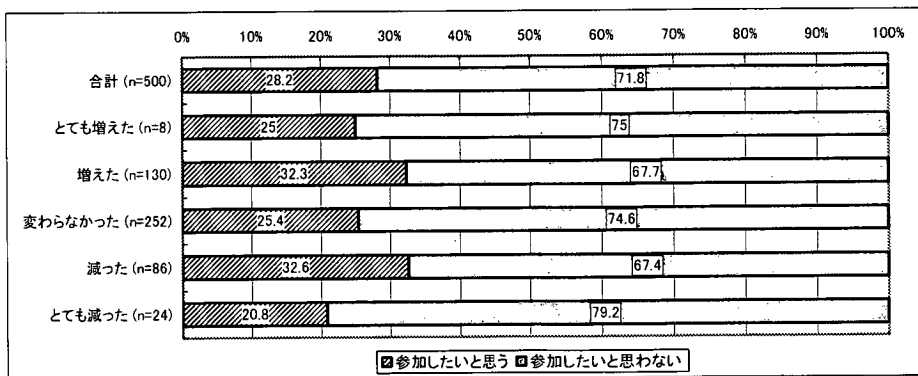
上段:度数 下段:%		Q15 あなたは、『リスクコミュニケーション』という言葉を知っていましたか。		
		合計	知っていた	知らなかった
Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。	合計	500	63	437
		100	12.6	87.4
	とても増えた	8	-	8
		100	-	100
	増えた	130	12	118
		100	9.2	90.8
	変わらなかった	252	37	215
	100	14.7	85.3	
減った	86	12	74	
	100	14	86	
とても減った	24	2	22	
	100	8.3	91.7	



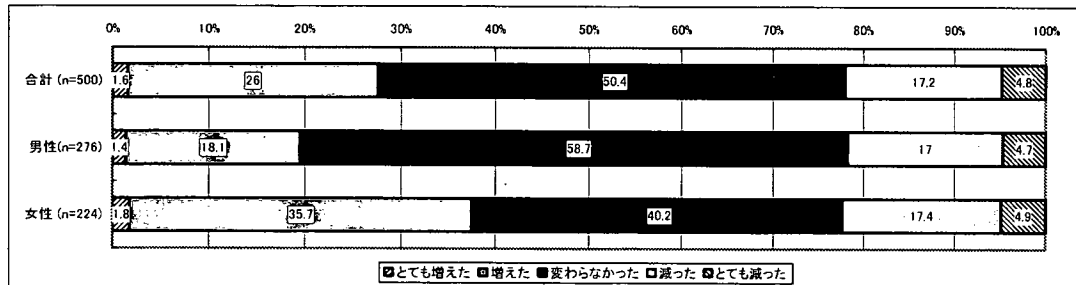
上段:度数 下段:%		Q16 あなたは、全国各地で、食の安全の分野における意見交換会が開催されていることを知っていましたか。		
		合計	知っていた	知らなかった
Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。	合計	500	94	406
		100	18.8	81.2
	とても増えた	8	1	7
		100	12.5	87.5
	増えた	130	20	110
		100	15.4	84.6
	変わらなかった	252	51	201
	100	20.2	79.8	
減った	86	20	66	
	100	23.3	76.7	
とても減った	24	2	22	
	100	8.3	91.7	



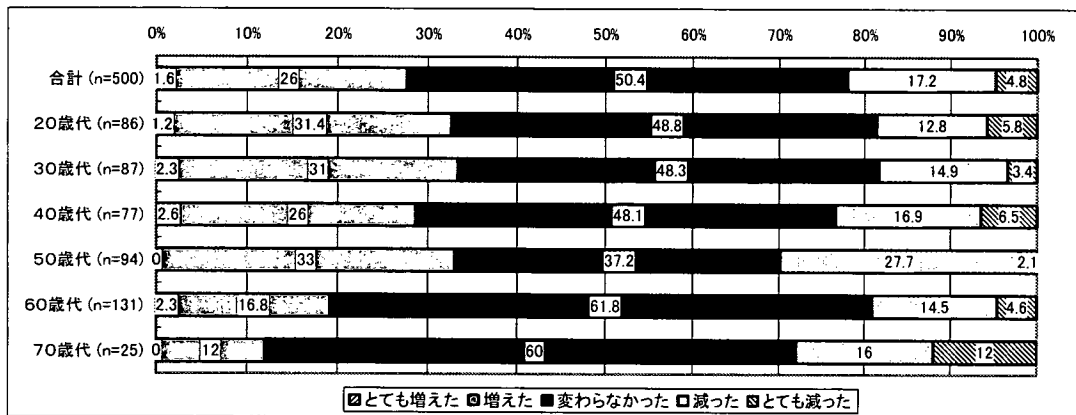
上段:度数 下段:%		Q17 あなたは、今後、食品の安全性に関連したシンポジウムや意見交換会などのイベントに参加したいと思いますか。		
		合計	参加したいと思う	参加したいと思わない
Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。	合計	500	141	359
		100	28.2	71.8
	とても増えた	8	2	6
		100	25	75
	増えた	130	42	88
		100	32.3	67.7
	変わらなかった	252	64	188
	100	25.4	74.6	
減った	86	28	58	
	100	32.6	67.4	
とても減った	24	5	19	
	100	20.8	79.2	



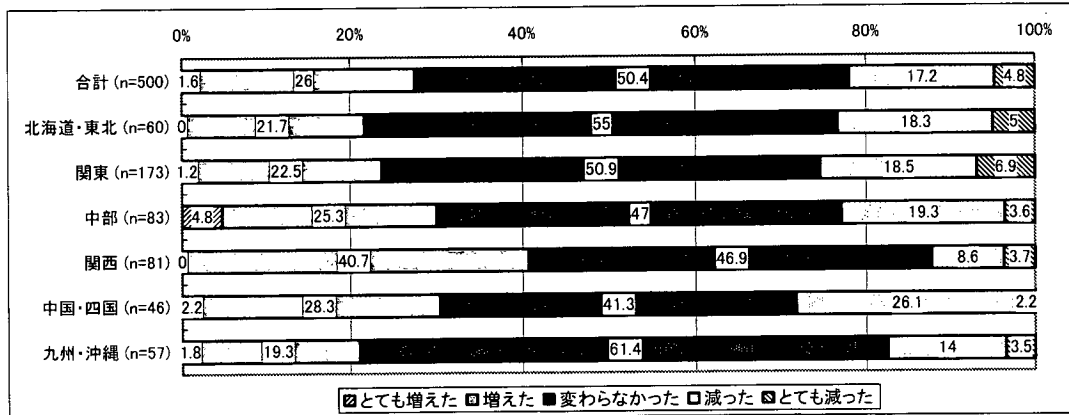
上段:度数 下段:%		Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q19 あなたの性別をお答え下さい。	合計	500	8	130	252	86	24
		100	1.6	26	50.4	17.2	4.8
	男性	276	4	50	162	47	13
		100	1.4	18.1	58.7	17	4.7
女性	224	4	80	90	39	11	
	100	1.8	35.7	40.2	17.4	4.9	



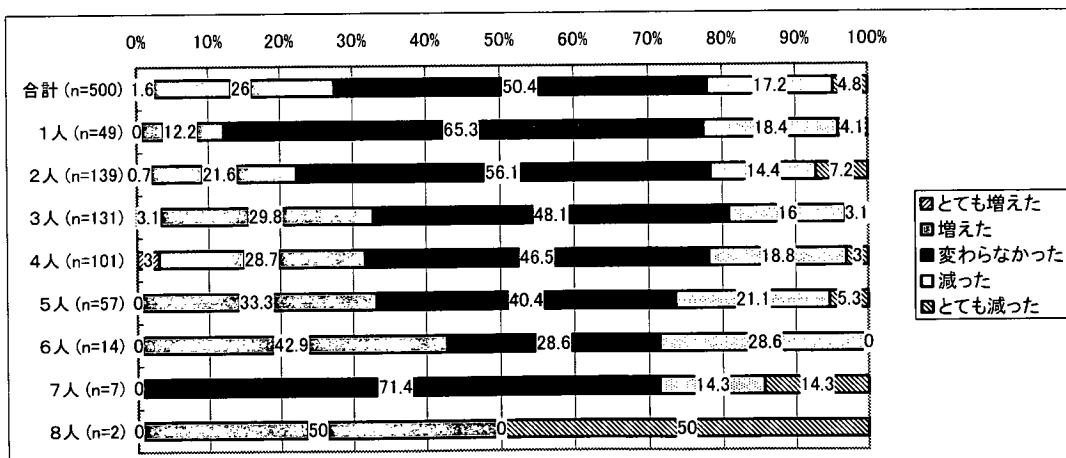
上段:度数 下段:%		Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500	8	130	252	86	24
		100	1.6	26	50.4	17.2	4.8
	20歳代	86	1	27	42	11	5
		100	1.2	31.4	48.8	12.8	5.8
	30歳代	87	2	27	42	13	3
		100	2.3	31	48.3	14.9	3.4
	40歳代	77	2	20	37	13	5
		100	2.6	26	48.1	16.9	6.5
	50歳代	94	-	31	35	26	2
	100	-	33	37.2	27.7	2.1	
60歳代	131	3	22	81	19	6	
	100	2.3	16.8	61.8	14.5	4.6	
70歳以上	25	-	3	15	4	3	
	100	-	12	60	16	12	



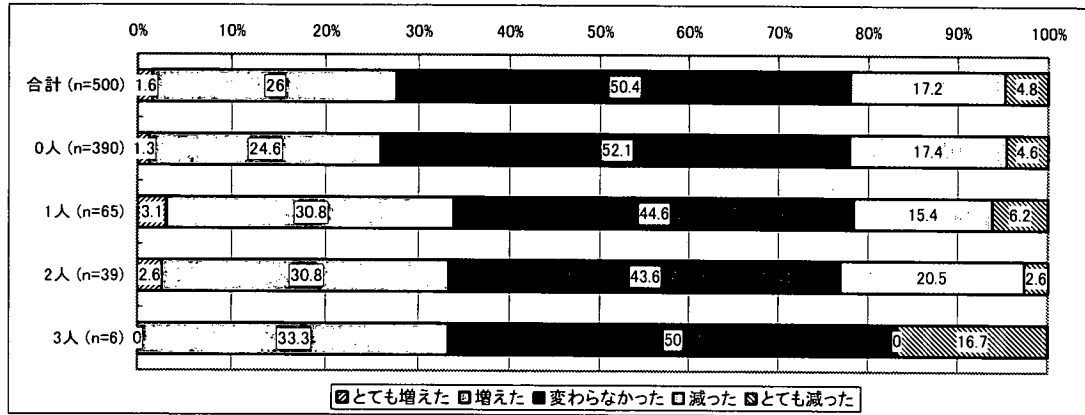
上段:度数 下段:%		Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q21 あなたのお住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500 100	8 1.6	130 26	252 50.4	86 17.2	24 4.8
	北海道・東北	60 100	-	13 21.7	33 55	11 18.3	3 5
	関東	173 100	2 1.2	39 22.5	88 50.9	32 18.5	12 6.9
	中部	83 100	4 4.8	21 25.3	39 47	16 19.3	3 3.6
	関西	81 100	-	33 40.7	38 46.9	7 8.6	3 3.7
	中国・四国	46 100	1 2.2	13 28.3	19 41.3	12 26.1	1 2.2
	九州・沖縄	57 100	1 1.8	11 19.3	35 61.4	8 14	2 3.5



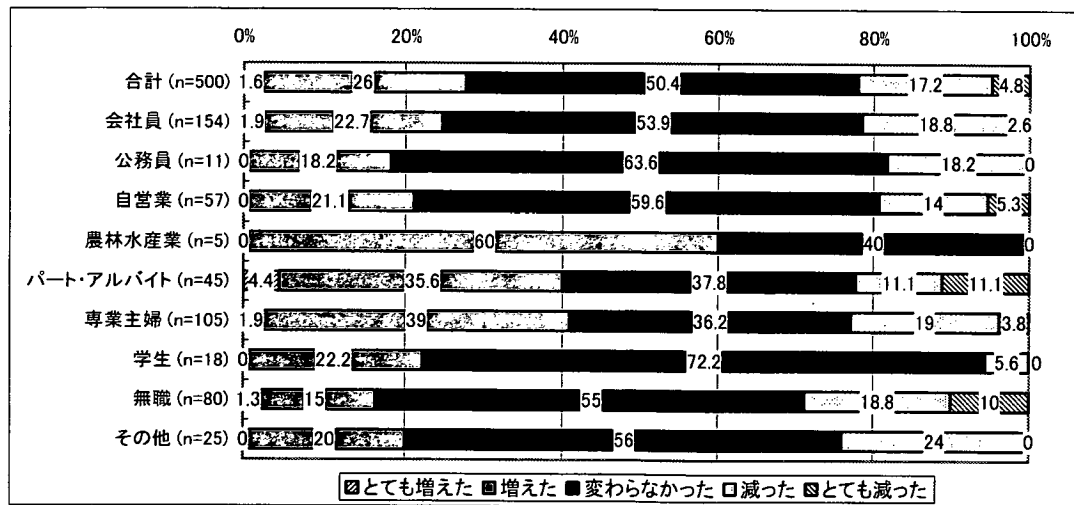
上段:度数 下段:%		Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q22 あなたのお宅の世帯員数(あなたを含めて)についてお聞きします。回答欄の中に、人数を記入してください。	合計	500 100	8 1.6	130 26	252 50.4	86 17.2	24 4.8
	1人	49 100	-	6 12.2	32 65.3	9 18.4	2 4.1
	2人	139 100	1 0.7	30 21.6	78 56.1	20 14.4	10 7.2
	3人	131 100	4 3.1	39 29.8	63 48.1	21 16	4 3.1
	4人	101 100	3 3	29 28.7	47 46.5	19 18.8	3 3
	5人	57 100	-	19 33.3	23 40.4	12 21.1	3 5.3
	6人	14 100	-	6 42.9	4 28.6	4 28.6	0
	7人	7 100	-	-	5 71.4	1 14.3	1 14.3
	8人	2 100	-	1 50	-	-	1 50



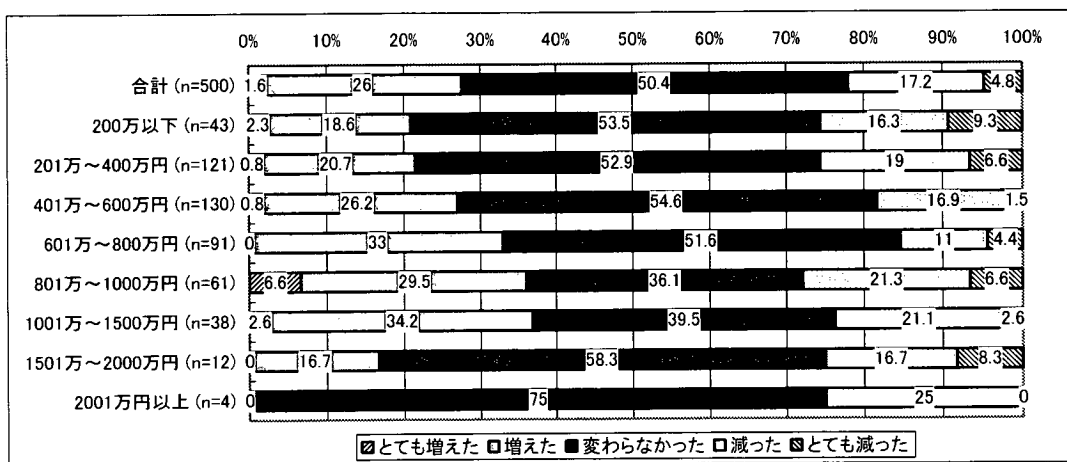
上段:度数 下段:%		Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q23 あなたのお宅の世帯員数(あなたを含めて)についてお聞きます。あわせて、小学生以下のお子様的人数を記入してください。	合計	500 100	8 1.6	130 26	252 50.4	86 17.2	24 4.8
	0人	390 100	5 1.3	96 24.6	203 52.1	68 17.4	18 4.6
	1人	65 100	2 3.1	20 30.8	29 44.6	10 15.4	4 6.2
	2人	39 100	1 2.6	12 30.8	17 43.6	8 20.5	1 2.6
	3人	6 100	- -	2 33.3	3 50	- -	1 16.7



上段:度数 下段:%		Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q24 あなたのお仕事をお答え下さい。なお、複数該当する方は、主なお仕事に印をつけてください。	合計	500 100	8 1.6	130 26	252 50.4	86 17.2	24 4.8
	会社員	154 100	3 1.9	35 22.7	83 53.9	29 18.8	4 2.6
	公務員	11 100	- -	2 18.2	7 63.6	2 18.2	- -
	自営業	57 100	- -	12 21.1	34 59.6	8 14	3 5.3
	農林水産業	5 100	- -	3 60	2 40	- -	- -
	パート・アルバイト	45 100	2 4.4	16 35.6	17 37.8	5 11.1	5 11.1
	専業主婦	105 100	2 1.9	41 39	38 36.2	20 19	4 3.8
	学生	18 100	- -	4 22.2	13 72.2	1 5.6	- -
	無職	80 100	1 1.3	12 15	44 55	15 18.8	8 10
	その他	25 100	- -	5 20	14 56	6 24	- -

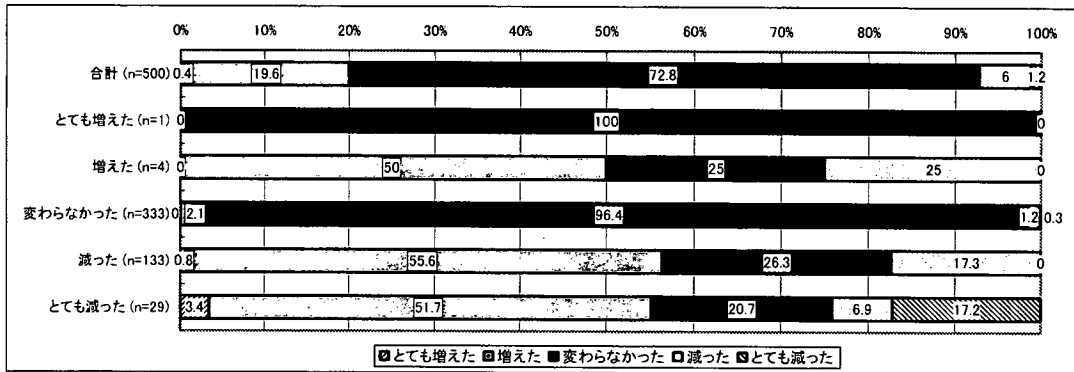


上段:度数 下段:%		Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。					
合計		とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った	
Q25 あなたの お宅の年収(家 族全体で、年金 等も含んだ年 収)は税込みで いくぐらいで しょうか。	合計	500	8	130	252	86	24
		100	1.6	26	50.4	17.2	4.8
	200万円以下	43	1	8	23	7	4
		100	2.3	18.6	53.5	16.3	9.3
	201万~400万 円	121	1	25	64	23	8
		100	0.8	20.7	52.9	19	6.6
	401万~600万 円	130	1	34	71	22	2
		100	0.8	26.2	54.6	16.9	1.5
	601万~800万 円	91	-	30	47	10	4
		100	-	33	51.6	11	4.4
801万~1,000万 円	61	4	18	22	13	4	
	100	6.6	29.5	36.1	21.3	6.6	
1,001万~1,500 万円	38	1	13	15	8	1	
	100	2.6	34.2	39.5	21.1	2.6	
1,501万~2,000 万円	12	-	2	7	2	1	
	100	-	16.7	58.3	16.7	8.3	
2,001万円以上	4	-	-	3	1	-	
	100	-	-	75	25	-	

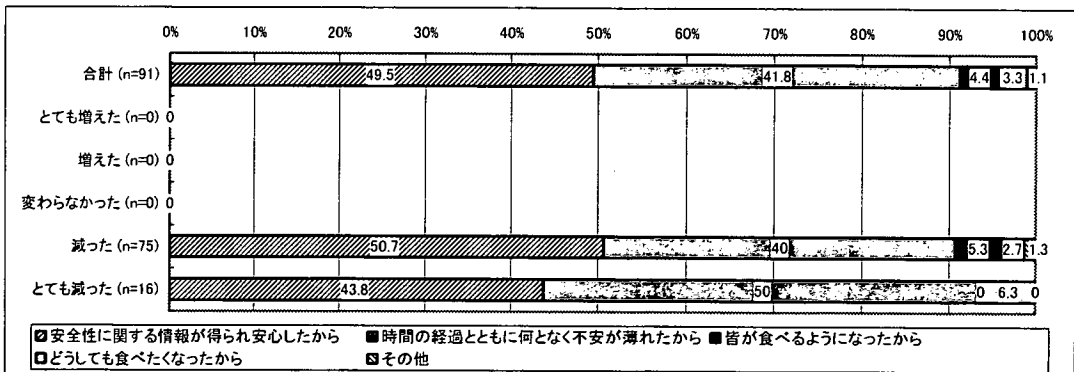


③クロス集計結果 (Q4)

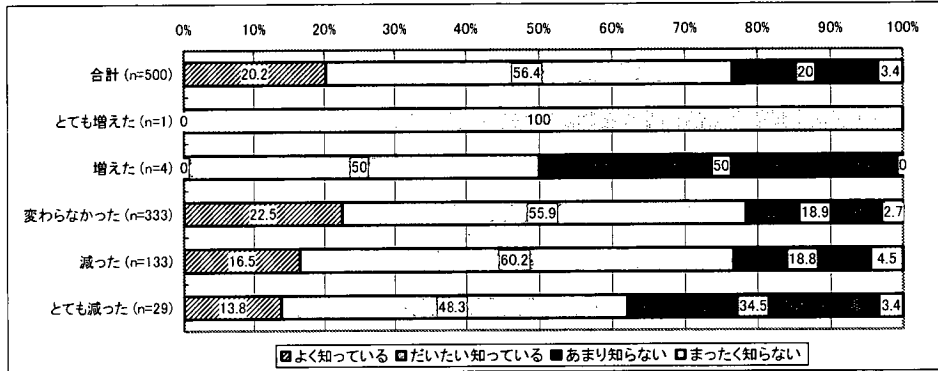
上段:度数 下段:%		Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。	合計	500 100	2 0.4	98 19.6	364 72.8	30 6	6 1.2
	とても増えた	1 100	-	-	1 100	-	-
	増えた	4 100	-	2 50	1 25	1 25	-
	変わらなかった	333 100	-	7 2.1	321 96.4	4 1.2	1 0.3
	減った	133 100	1 0.8	74 55.6	35 26.3	23 17.3	-
	とても減った	29 100	1 3.4	15 51.7	6 20.7	2 6.9	5 17.2



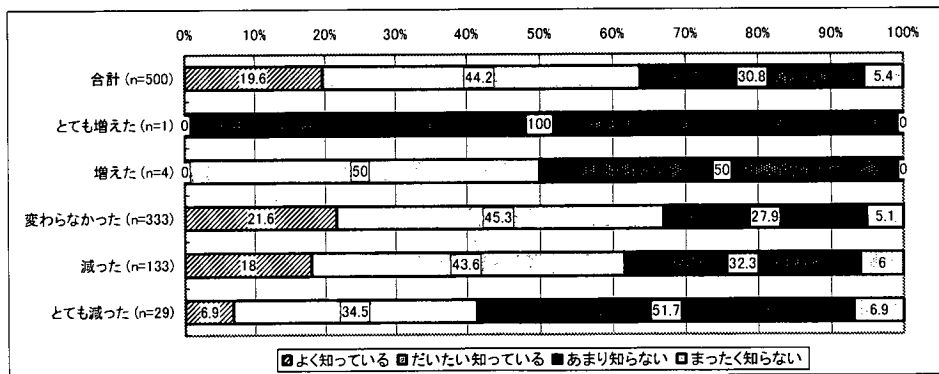
上段:度数 下段:%		Q6 Q4で「減った」「とても減った」、かつQ5で「とても増えた」「増えた」をお選びの方に伺います。そう答えた理由のうち最も近いものに印をつけてください。					
		合計	安全性に関する情報が得られ安心したから	時間の経過とともに何となく不安が薄れたから	皆が食べるようになったから	どうしても食べなくなったから	その他
Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。	合計	91 100	45 49.5	38 41.8	4 4.4	3 3.3	1 1.1
	とても増えた	-	-	-	-	-	-
	増えた	-	-	-	-	-	-
	変わらなかった	-	-	-	-	-	-
	減った	75 100	38 50.7	30 40	4 5.3	2 2.7	1 1.3
	とても減った	16 100	7 43.8	8 50	-	1 6.3	-



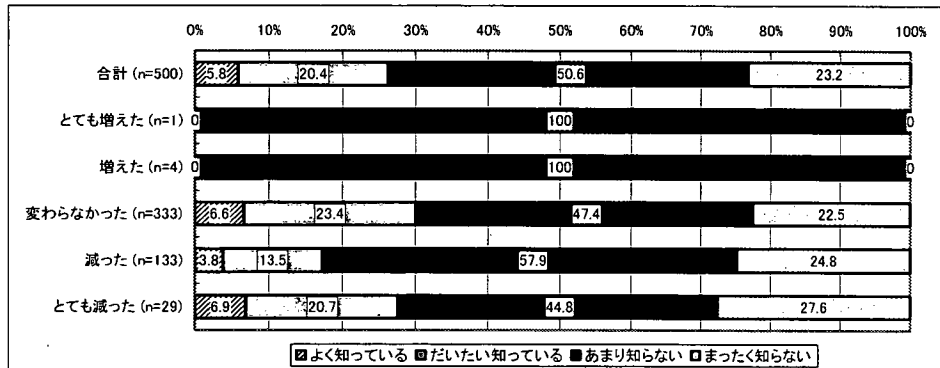
上段:度数 下段:%		Q10-5 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。通常、鳥インフルエンザに感染した鳥と濃厚に接触しない限り、鳥から人に感染することはない				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	101	282	100	17
		100	20.2	56.4	20	3.4
	とても増えた	1	-	-	-	1
		100	-	-	-	100
	増えた	4	-	2	2	-
		100	-	50	50	-
変わらなかった	333	75	186	63	9	
	100	22.5	55.9	18.9	2.7	
減った	133	22	80	25	6	
	100	16.5	60.2	18.8	4.5	
とても減った	29	4	14	10	1	
	100	13.8	48.3	34.5	3.4	



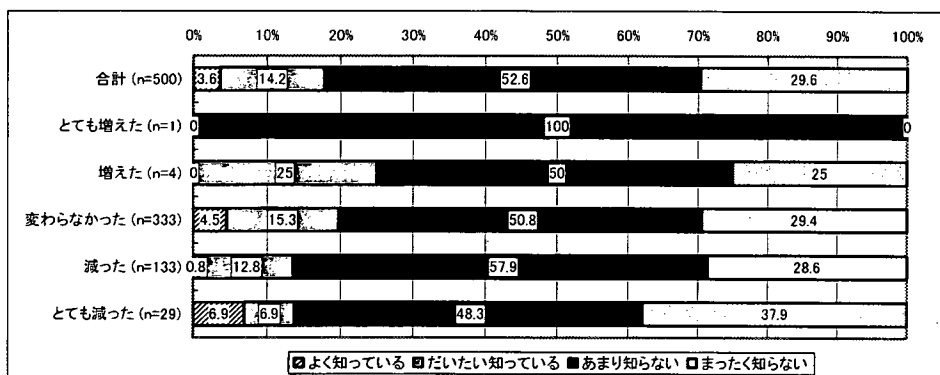
上段:度数 下段:%		Q10-6 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。鳥インフルエンザウイルスは、通常の調理温度で容易に死滅する				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	98	221	154	27
		100	19.6	44.2	30.8	5.4
	とても増えた	1	-	-	-	1
		100	-	-	-	100
	増えた	4	-	2	2	-
		100	-	50	50	-
変わらなかった	333	72	151	93	17	
	100	21.6	45.3	27.9	5.1	
減った	133	24	58	43	8	
	100	18	43.6	32.3	6	
とても減った	29	2	10	15	2	
	100	6.9	34.5	51.7	6.9	



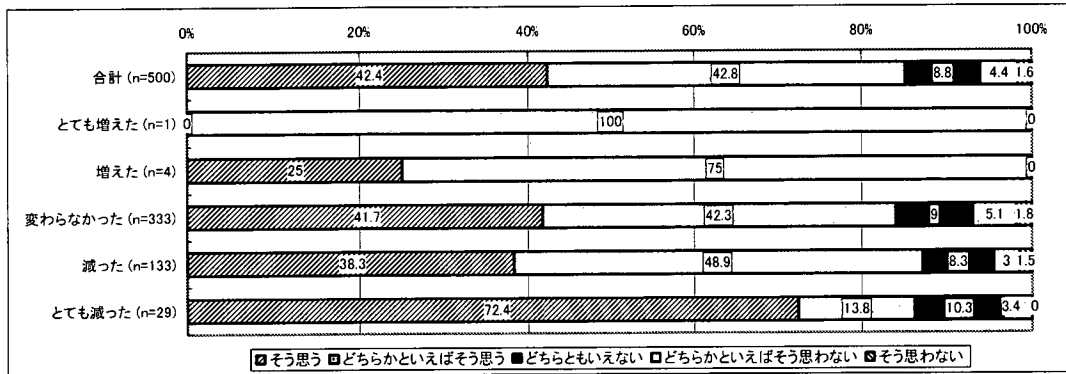
上段:度数 下段:%		Q10-7 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。通常、国産の鶏卵は、殺菌剤で洗卵されている				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。	合計	500 100	29 5.8	102 20.4	253 50.6	116 23.2
	とても増えた	1 100	-	-	1 100	-
	増えた	4 100	-	-	4 100	-
	変わらなかった	333 100	22 6.6	78 23.4	158 47.4	75 22.5
	減った	133 100	5 3.8	18 13.5	77 57.9	33 24.8
	とても減った	29 100	2 6.9	6 20.7	13 44.8	8 27.6



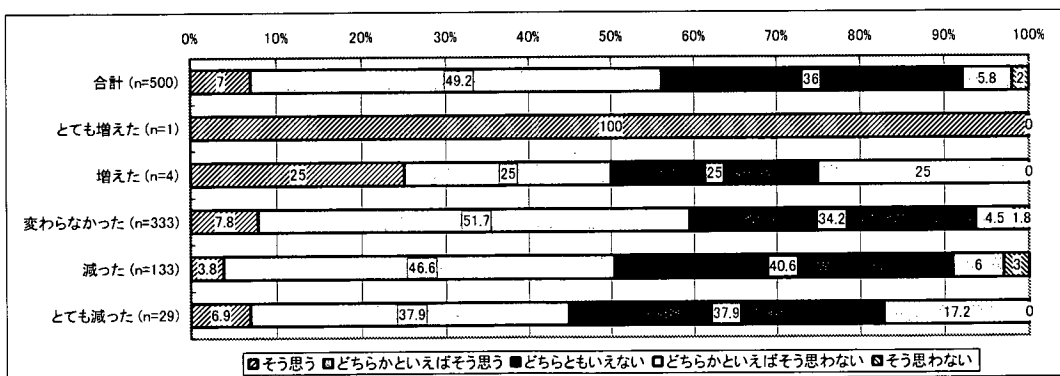
上段:度数 下段:%		Q10-8 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。通常、国産の鶏肉は、食鳥処理場で脱羽され、冷水で洗浄されている				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。	合計	500 100	18 3.6	71 14.2	263 52.6	148 29.6
	とても増えた	1 100	-	-	1 100	-
	増えた	4 100	-	1 25	2 50	1 25
	変わらなかった	333 100	15 4.5	51 15.3	169 50.8	98 29.4
	減った	133 100	1 0.8	17 12.8	77 57.9	38 28.6
	とても減った	29 100	2 6.9	2 6.9	14 48.3	11 37.9



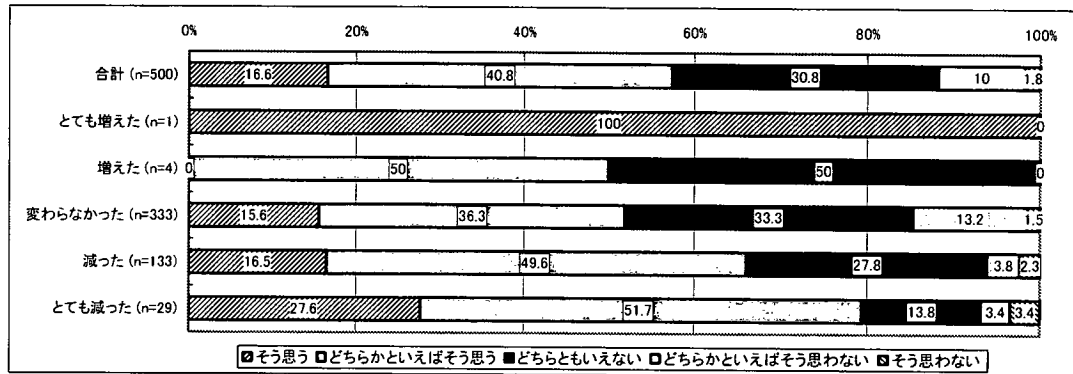
上段:度数 下段:%		Q13-1 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。 100%安全な食品は世の中には存在しない					
		合計	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。	合計	500 100	212 42.4	214 42.8	44 8.8	22 4.4	8 1.6
	とても増えた	1 100	-	1 100	-	-	-
	増えた	4 100	1 25	3 75	-	-	-
	変わらなかった	333 100	139 41.7	141 42.3	30 9	17 5.1	6 1.8
	減った	133 100	51 38.3	65 48.9	11 8.3	4 3	2 1.5
	とても減った	29 100	21 72.4	4 13.8	3 10.3	1 3.4	-



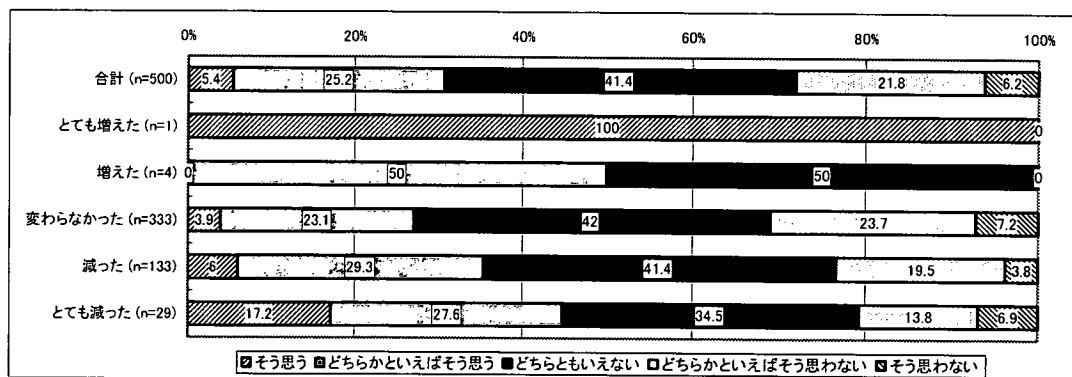
上段:度数 下段:%		Q13-5 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。現在流通している国産の鶏肉や鶏卵は安全である					
		合計	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。	合計	500 100	35 7	246 49.2	180 36	29 5.8	10 2
	とても増えた	1 100	1 100	-	-	-	-
	増えた	4 100	1 25	25 75	25 75	25 75	0
	変わらなかった	333 100	26 7.8	172 51.7	114 34.2	15 4.5	6 1.8
	減った	133 100	5 3.8	62 46.6	54 40.6	8 6	4 3
	とても減った	29 100	2 6.9	11 37.9	11 37.9	5 17.2	0



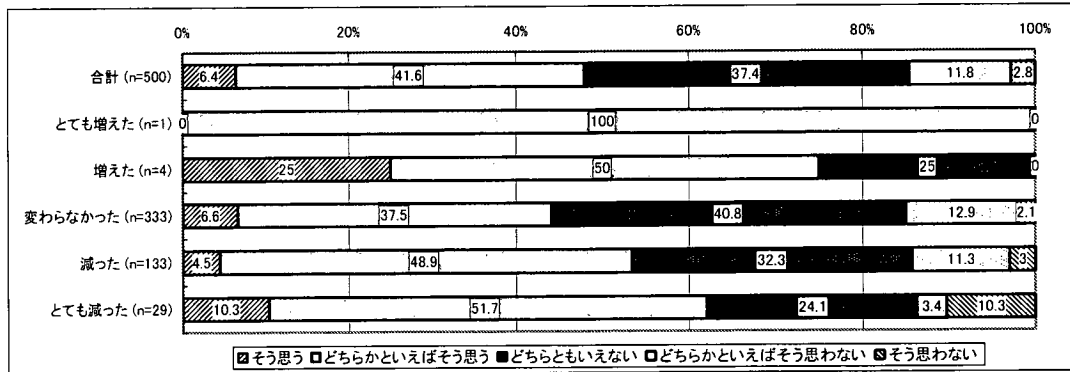
上段:度数 下段:%		Q13-6 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。国内での鳥インフルエンザ発生は、日本経済に大きな影響を与えている					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。	合計	500 100	83 16.6	204 40.8	154 30.8	50 10	9 1.8
	とても増えた	1 100	1 100	-	-	-	-
	増えた	4 100	-	2 50	2 50	-	-
	変わらなかった	333 100	52 15.6	121 36.3	111 33.3	44 13.2	5 1.5
	減った	133 100	22 16.5	66 49.6	37 27.8	5 3.8	3 2.3
	とても減った	29 100	8 27.6	15 51.7	4 13.8	1 3.4	1 3.4



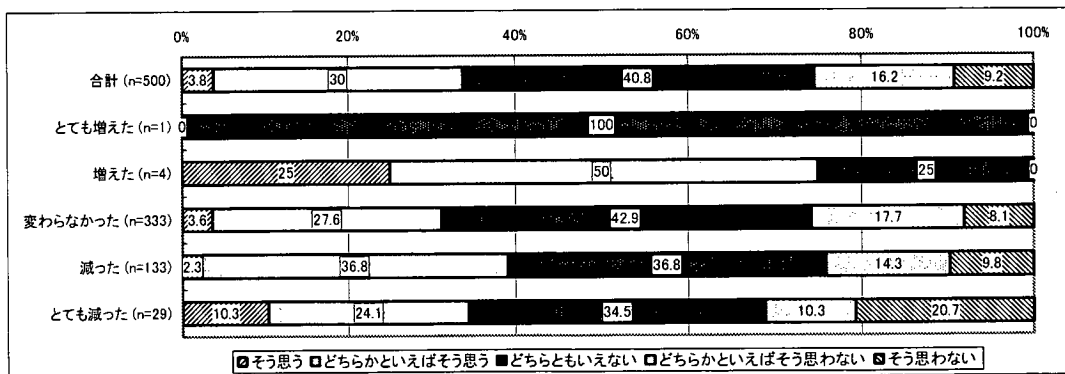
上段:度数 下段:%		Q13-7 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。国内での鳥インフルエンザ発生は、日本人の健康に大きな影響を与えている					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。	合計	500 100	27 5.4	126 25.2	207 41.4	109 21.8	31 6.2
	とても増えた	1 100	1 100	-	-	-	-
	増えた	4 100	-	2 50	2 50	-	-
	変わらなかった	333 100	13 3.9	77 23.1	140 42	79 23.7	24 7.2
	減った	133 100	8 6	39 29.3	55 41.4	26 19.5	5 3.8
	とても減った	29 100	5 17.2	8 27.6	10 34.5	4 13.8	2 6.9



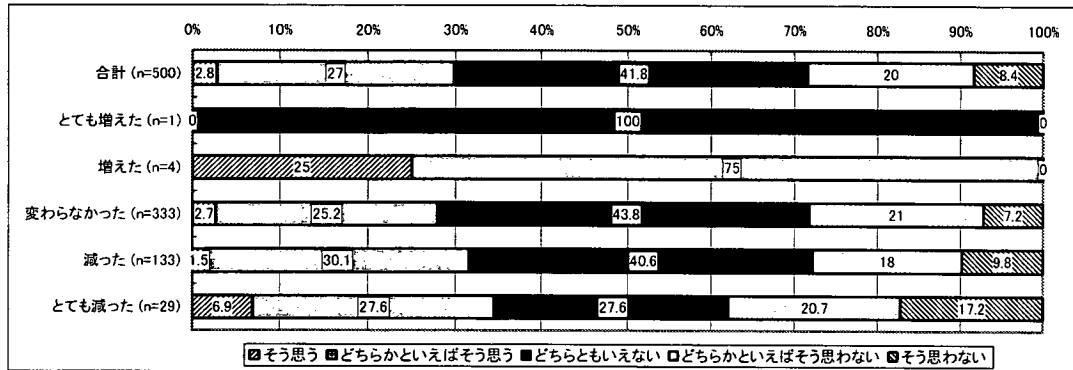
上段:度数 下段:%		Q13-8 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。日本の食品安全への取組は、国際的に非常に優れている					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	32	208	187	59	14
		100	6.4	41.6	37.4	11.8	2.8
	とても増えた	1	-	-	1	-	-
		100	-	-	100	-	-
	増えた	4	1	2	1	-	-
		100	25	50	25	-	-
	変わらなかった	333	22	125	136	43	7
	100	6.6	37.5	40.8	12.9	2.1	
減った	133	6	65	43	15	4	
	100	4.5	48.9	32.3	11.3	3	
とても減った	29	3	15	7	1	3	
	100	10.3	51.7	24.1	3.4	10.3	



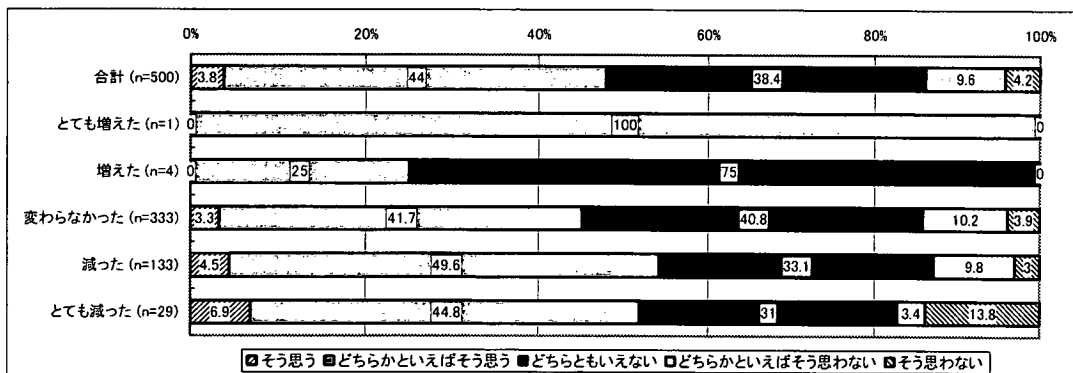
上段:度数 下段:%		Q13-9 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。日本の食品安全行政を信頼している					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	19	150	204	81	46
		100	3.8	30	40.8	16.2	9.2
	とても増えた	1	-	-	1	-	-
		100	-	-	100	-	-
	増えた	4	1	2	1	-	-
		100	25	50	25	-	-
	変わらなかった	333	12	92	143	59	27
	100	3.6	27.6	42.9	17.7	8.1	
減った	133	3	49	49	19	13	
	100	2.3	36.8	36.8	14.3	9.8	
とても減った	29	3	7	10	3	6	
	100	10.3	24.1	34.5	10.3	20.7	



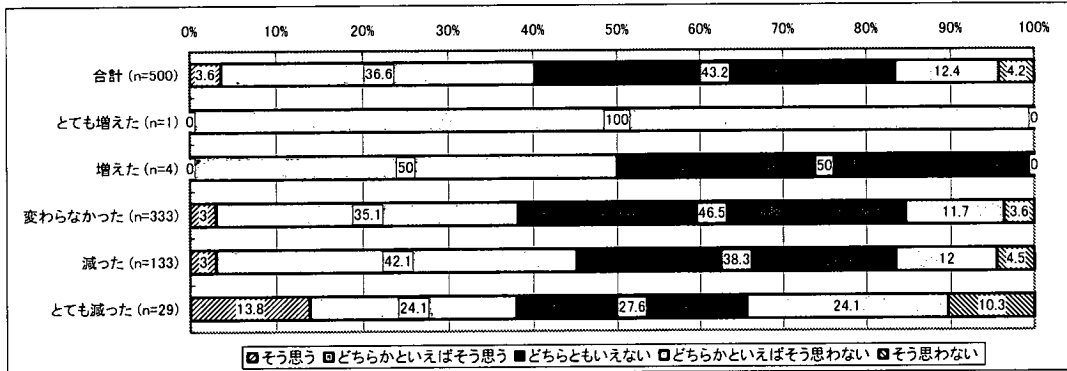
上段:度数 下段:%		Q13-10 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。日本の食品産業の安全対策を信頼している					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	14	135	209	100	42
		100	2.8	27	41.8	20	8.4
	とても増えた	1	-	-	1	-	-
		100	-	-	100	-	-
	増えた	4	1	3	-	-	-
		100	25	75	-	-	-
	変わらなかった	333	9	84	146	70	24
	100	2.7	25.2	43.8	21	7.2	
減った	133	2	40	54	24	13	
	100	1.5	30.1	40.6	18	9.8	
とても減った	29	2	8	8	6	5	
	100	6.9	27.6	27.6	20.7	17.2	



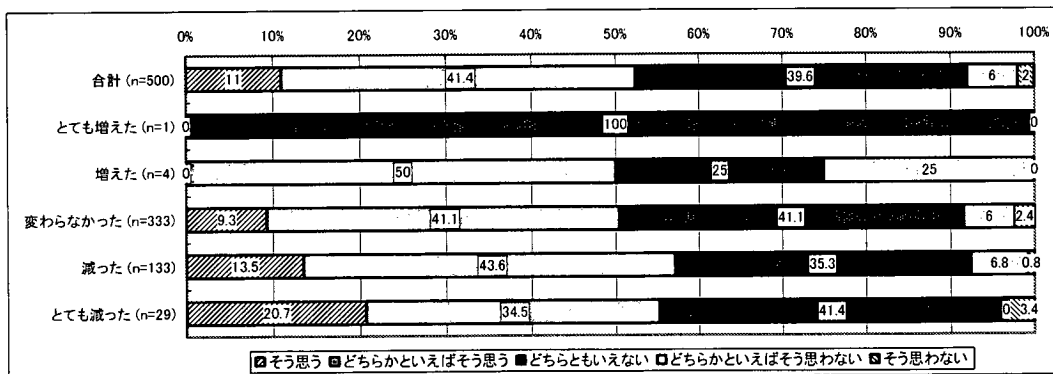
上段:度数 下段:%		Q13-11 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。BSE発生後、日本の食品安全行政は良い方向に向かっている					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	19	220	192	48	21
		100	3.8	44	38.4	9.6	4.2
	とても増えた	1	-	1	-	-	-
		100	-	100	-	-	-
	増えた	4	-	25	75	-	-
		100	-	25	75	-	-
	変わらなかった	333	11	139	136	34	13
	100	3.3	41.7	40.8	10.2	3.9	
減った	133	6	66	44	13	4	
	100	4.5	49.6	33.1	9.8	3	
とても減った	29	2	13	9	1	4	
	100	6.9	44.8	31	3.4	13.8	



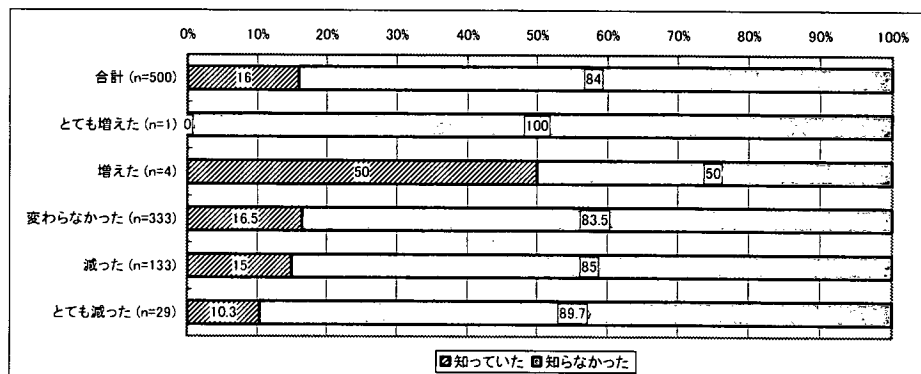
上段:度数 下段:%		Q13-12 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。生産者や生産方法が明記されている食品は安全である					
		合計	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	18	183	216	62	21
		100	3.6	36.6	43.2	12.4	4.2
	とても増えた	1	-	1	-	-	-
		100	-	100	-	-	-
	増えた	4	-	2	2	-	-
		100	-	50	50	-	-
	変わらなかった	333	10	117	155	39	12
	100	3	35.1	46.5	11.7	3.6	
減った	133	4	56	51	16	6	
	100	3	42.1	38.3	12	4.5	
とても減った	29	4	7	8	7	3	
	100	13.8	24.1	27.6	24.1	10.3	



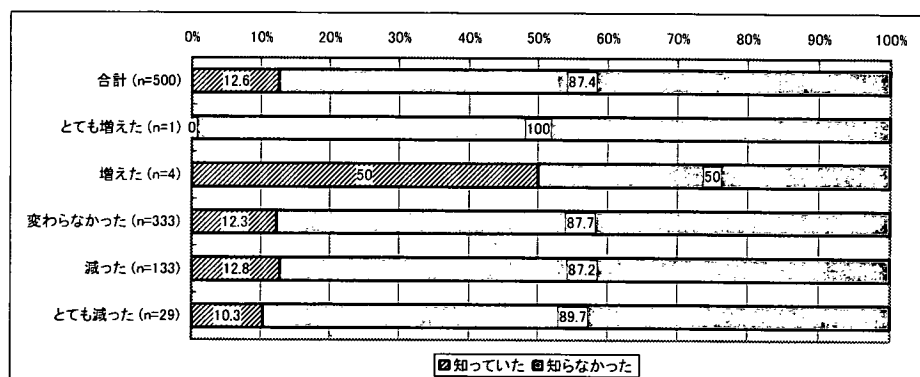
上段:度数 下段:%		Q13-13 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。安全性の高い食品であれば、価格が高くても優先的に購入したい					
		合計	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	55	207	198	30	10
		100	11	41.4	39.6	6	2
	とても増えた	1	-	-	1	-	-
		100	-	-	100	-	-
	増えた	4	-	2	1	1	-
		100	-	50	25	25	0
	変わらなかった	333	31	137	137	20	8
	100	9.3	41.1	41.1	6	2.4	
減った	133	18	58	47	9	1	
	100	13.5	43.6	35.3	6.8	0.8	
とても減った	29	6	10	12	-	1	
	100	20.7	34.5	41.4	-	3.4	



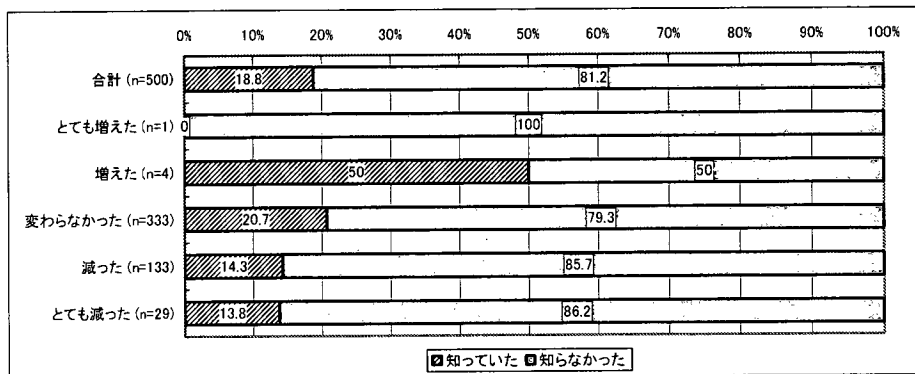
上段:度数 下段:%		Q14 あなたは、平成15年7月の国民の健康の保護を最優先とした食品安全基本法の施行によって、新たな食品安全行政がスタートしたことを知っていましたか。		
		合計	知っていた	知らなかった
Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	80	420
		100	16	84
	とても増えた	1	-	1
		100	-	100
	増えた	4	2	2
		100	50	50
	変わらなかった	333	55	278
	100	16.5	83.5	
減った	133	20	113	
	100	15	85	
とても減った	29	3	26	
	100	10.3	89.7	



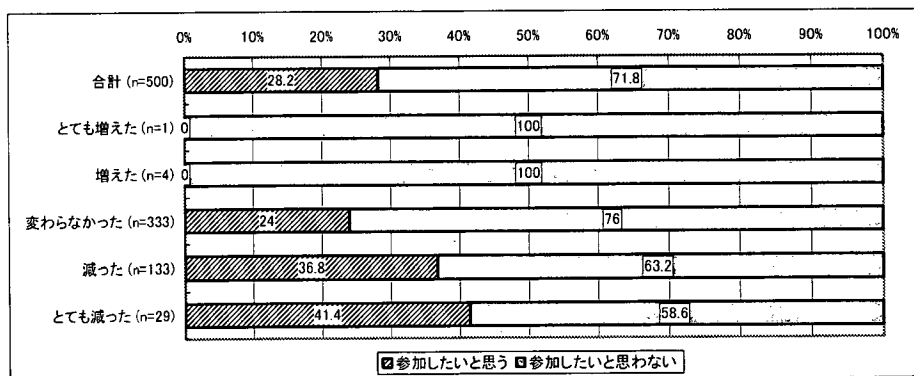
上段:度数 下段:%		Q15 あなたは、『リスクコミュニケーション』という言葉を知っていましたか。		
		合計	知っていた	知らなかった
Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	63	437
		100	12.6	87.4
	とても増えた	1	-	1
		100	-	100
	増えた	4	2	2
		100	50	50
	変わらなかった	333	41	292
	100	12.3	87.7	
減った	133	17	116	
	100	12.8	87.2	
とても減った	29	3	26	
	100	10.3	89.7	



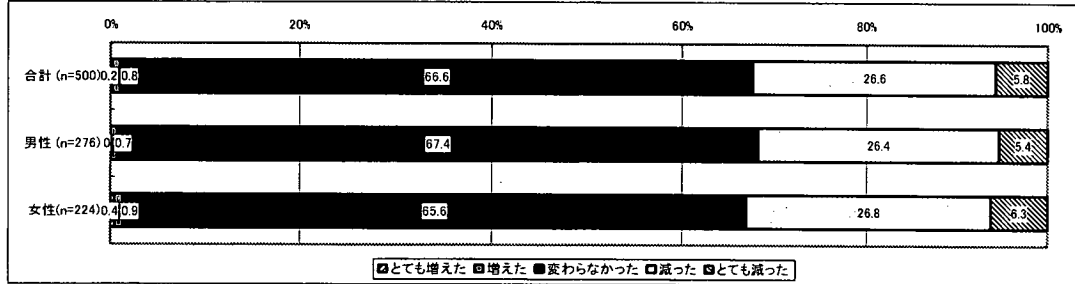
上段:度数 下段:%		Q16 あなたは、全国各地で、食の安全の分野における意見交換会が開催されていることを知っていましたか。		
		合計	知っていた	知らなかった
Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	94	406
		100	18.8	81.2
	とても増えた	1	-	1
		100	-	100
	増えた	4	2	2
		100	50	50
	変わらなかった	333	69	264
	100	20.7	79.3	
減った	133	19	114	
	100	14.3	85.7	
とても減った	29	4	25	
	100	13.8	86.2	



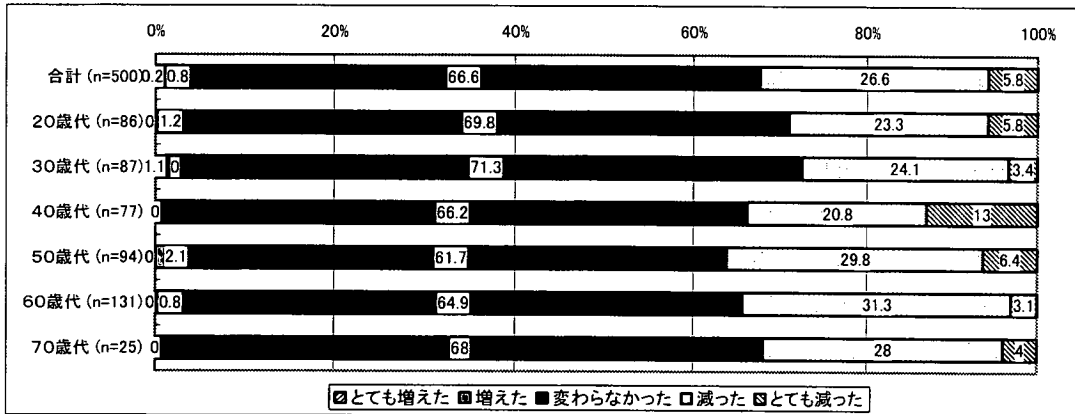
上段:度数 下段:%		Q17 あなたは、今後、食品の安全性に関連したシンポジウムや意見交換会などのイベントに参加したいと思いますか。		
		合計	参加したいと思う	参加したくない
Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。	合計	500	141	359
		100	28.2	71.8
	とても増えた	1	-	1
		100	-	100
	増えた	4	4	4
		100	100	100
	変わらなかった	333	80	253
	100	24	76	
減った	133	49	84	
	100	36.8	63.2	
とても減った	29	12	17	
	100	41.4	58.6	



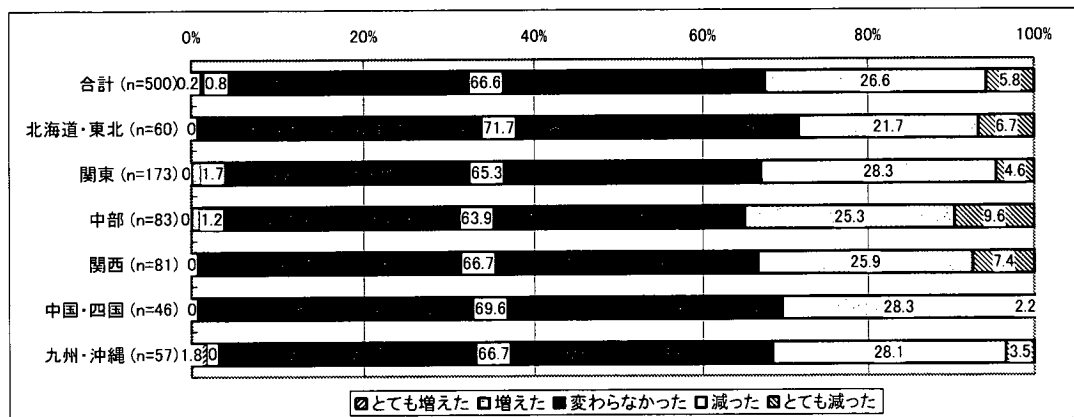
上段:度数 下段:%		Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q19 あなたの性別をお答え下さい。	合計	500	1	4	333	133	29
		100	0.2	0.8	66.6	26.6	5.8
	男性	276	-	2	186	73	15
		100	-	0.7	67.4	26.4	5.4
	女性	224	1	2	147	60	14
		100	0.4	0.9	65.6	26.8	6.3



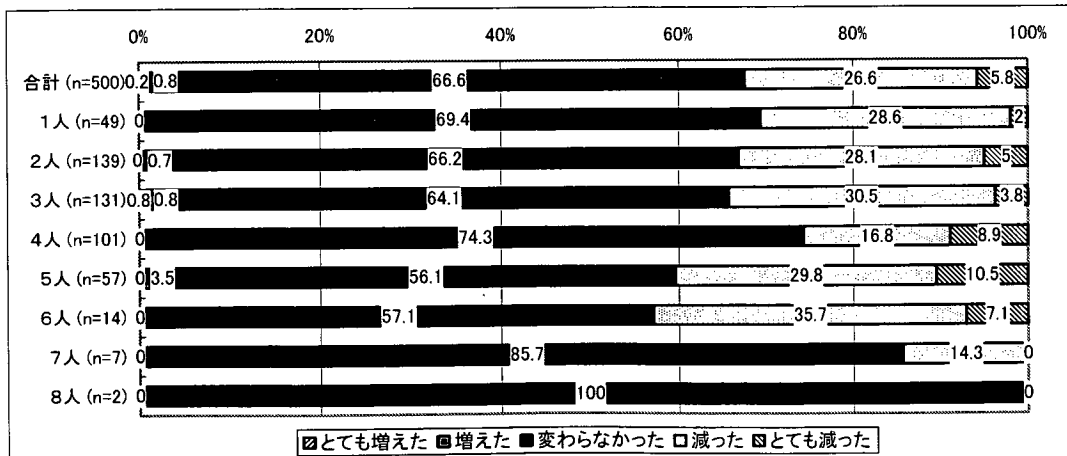
上段:度数 下段:%		Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500	1	4	333	133	29
		100	0.2	0.8	66.6	26.6	5.8
	20歳代	86	-	1	60	20	5
		100	-	1.2	69.8	23.3	5.8
	30歳代	87	1	-	62	21	3
		100	1.1	-	71.3	24.1	3.4
	40歳代	77	-	-	51	16	10
		100	-	-	66.2	20.8	13
50歳代	94	-	2	58	28	6	
	100	-	2.1	61.7	29.8	6.4	
60歳代	131	1	1	85	41	4	
	100	0.8	0.8	64.9	31.3	3.1	
70歳以上	25	-	-	17	7	1	
	100	-	-	68	28	4	



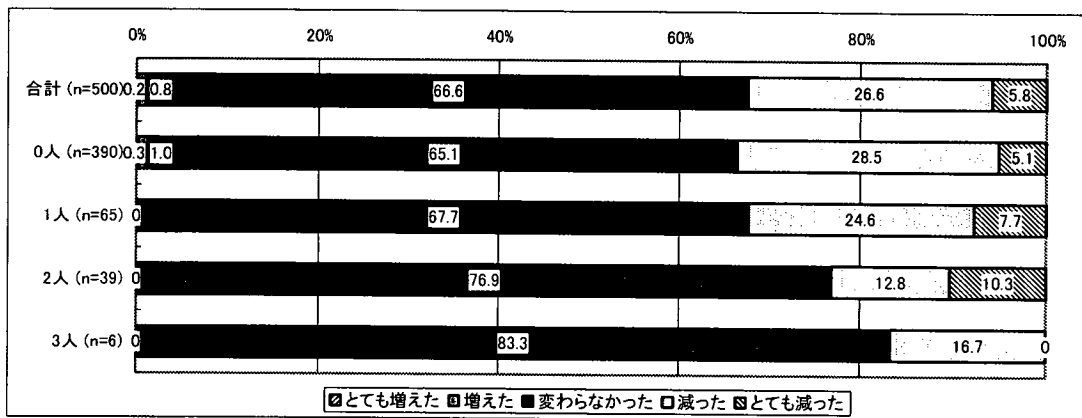
上段:度数 下段:%		Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	500 100	1 0.2	4 0.8	333 66.6	133 26.6	29 5.8
	北海道・東北	60 100	-	-	43 71.7	13 21.7	4 6.7
	関東	173 100	-	3 1.7	113 65.3	49 28.3	8 4.6
	中部	83 100	-	1 1.2	53 63.9	21 25.3	8 9.6
	関西	81 100	-	-	54 66.7	21 25.9	6 7.4
	中国・四国	46 100	-	-	32 69.6	13 28.3	1 2.2
	九州・沖縄	57 100	1 1.8	-	38 66.7	16 28.1	2 3.5



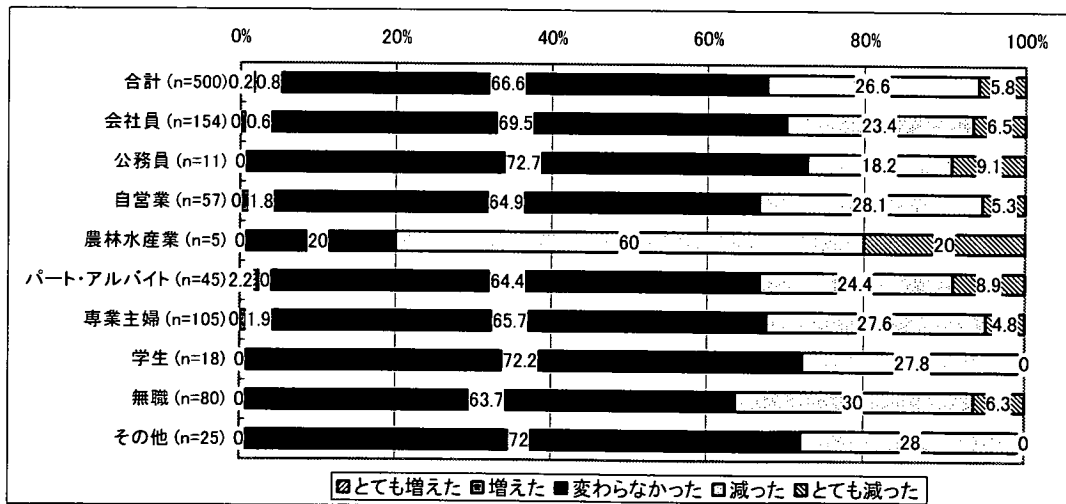
上段:度数 下段:%		Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q22 あなたの お宅の世帯員 数(あなたを含 めて)について お聞きます。 回答欄の中に、 人数を記入し てください。	合計	500 100	1 0.2	4 0.8	333 66.6	133 26.6	29 5.8
	1人	49 100	-	-	34 69.4	14 28.6	1 2
	2人	139 100	-	1 0.7	92 66.2	39 28.1	7 5
	3人	131 100	1 0.8	1 0.8	84 64.1	40 30.5	5 3.8
	4人	101 100	-	-	75 74.3	17 16.8	9 8.9
	5人	57 100	-	2 3.5	32 56.1	17 29.8	6 10.5
	6人	14 100	-	-	8 57.1	5 35.7	1 7.1
	7人	7 100	-	-	6 85.7	1 14.3	-
	8人	2 100	-	-	2 100	-	-



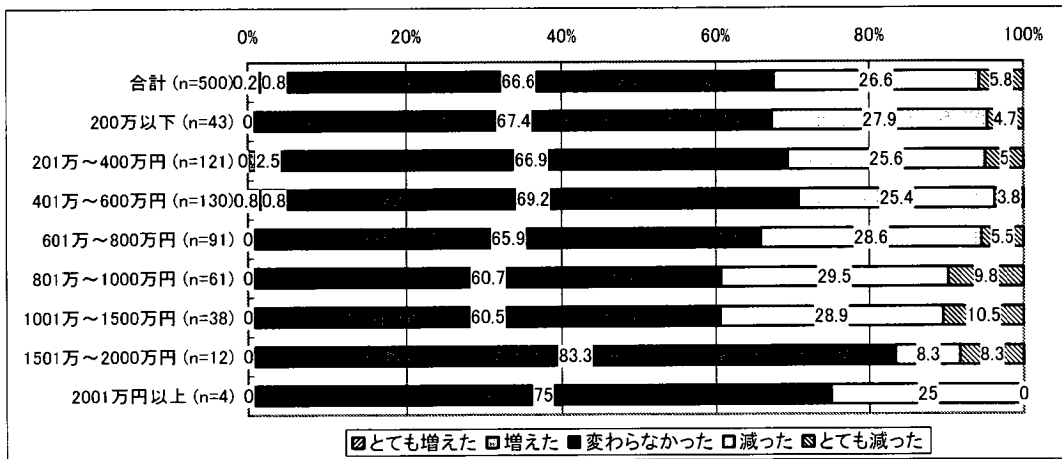
上段:度数 下段:%		Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q23 あなたのお宅の世帯員数(あなたを含めて)についてお聞きます。あわせて、小学生以下のお子様の人数を記入してください。	合計	500 100	1 0.2	4 0.8	333 66.6	133 26.6	29 5.8
	0人	390 100	1 0.3	4 1.0	254 65.1	111 28.5	20 5.1
	1人	65 100	-	-	44 67.7	16 24.6	5 7.7
	2人	39 100	-	-	30 76.9	5 12.8	4 10.3
	3人	6 100	-	-	5 83.3	1 16.7	-



上段:度数 下段:%		Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q24 あなたのお仕事をお答え下さい。なお、複数該当する方は、主なお仕事に印をつけてください。	合計	500 100	1 0.2	4 0.8	333 66.6	133 26.6	29 5.8
	会社員	154 100	-	1 0.6	107 69.5	36 23.4	10 6.5
	公務員	11 100	-	-	8 72.7	2 18.2	1 9.1
	自営業	57 100	-	1 1.8	37 64.9	16 28.1	3 5.3
	農林水産業	5 100	-	-	1 20	3 60	1 20
	パート・アルバイト	45 100	1 2.2	-	29 64.4	11 24.4	4 8.9
	専業主婦	105 100	-	2 1.9	69 65.7	29 27.6	5 4.8
	学生	18 100	-	-	13 72.2	5 27.8	-
	無職	80 100	-	-	51 63.7	24 30	5 6.3
	その他	25 100	-	-	18 72	7 28	-

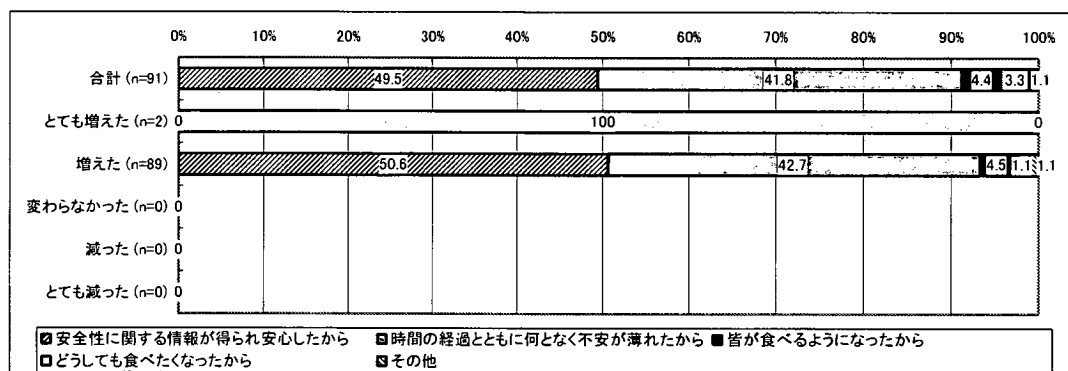


上段:度数 下段:%		Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q25 あなたの お宅の年収(家 族全体で、年金 等も含んだ年 収)は税込みで いくぐらいで しょうか。	合計	500 100	1 0.2	4 0.8	333 66.6	133 26.6	29 5.8
	200万円以下	43 100	-	-	29 67.4	12 27.9	2 4.7
	201万~400万 円	121 100	-	3 2.5	81 66.9	31 25.6	6 5
	401万~600万 円	130 100	1 0.8	1 0.8	90 69.2	33 25.4	5 3.8
	601万~800万 円	91 100	-	-	60 65.9	26 28.6	5 5.5
	801万~1,000万 円	61 100	-	-	37 60.7	18 29.5	6 9.8
	1,001万~1,500 万円	38 100	-	-	23 60.5	11 28.9	4 10.5
	1,501万~2,000 万円	12 100	-	-	10 83.3	1 8.3	1 8.3
	2,001万円以上	4 100	-	-	3 75	1 25	-

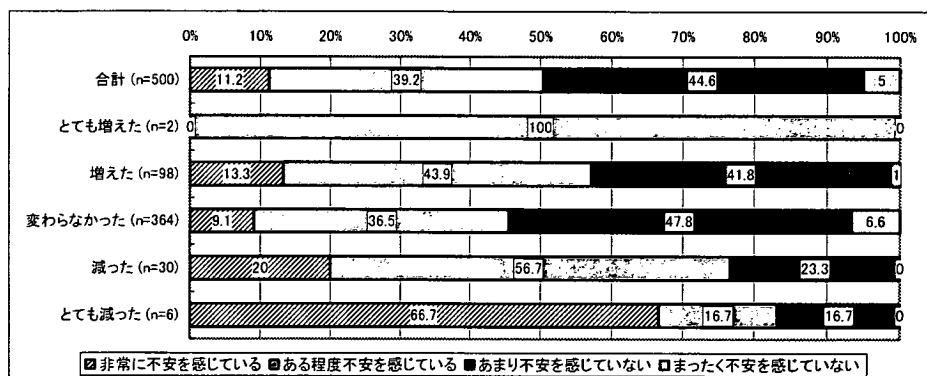


④クロス集計結果 (Q5)

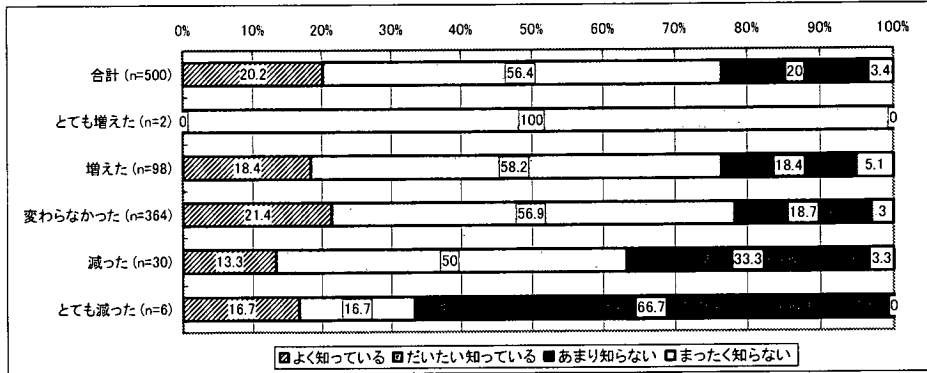
上段:度数 下段:%		Q6 Q4で「減った」「とても減った」、かつQ5で「とても増えた」「増えた」をお選びの方に伺います。その答えた理由のうち最も近いものに印をつけてください。					
		合計	安全性に関する情報が得られ安心したから	時間の経過とともに何となく不安が薄れたから	皆が食べるようになったから	どうしても食べたくなったから	その他
Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。	合計	91 100	45 49.5	38 41.8	4 4.4	3 3.3	1 1.1
	とても増えた	2 100	-	-	-	2 100	-
	増えた	89 100	45 50.6	38 42.7	4 4.5	1 1.1	1 1.1
	変わらなかった	-	-	-	-	-	-
	減った	-	-	-	-	-	-
	とても減った	-	-	-	-	-	-



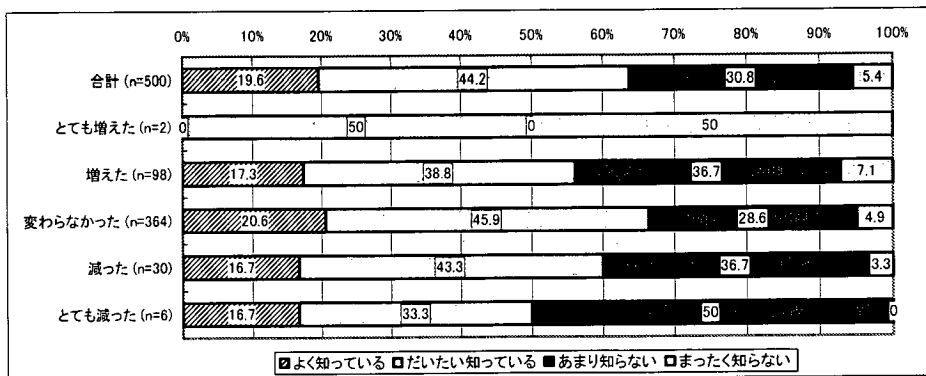
上段:度数 下段:%		Q7-2 あなたは鳥インフルエンザをどの程度不安だと感じていますか。				
		合計	非常に不安を感じている	ある程度不安を感じている	あまり不安を感じていない	まったく不安を感じていない
Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。	合計	500 100	56 11.2	196 39.2	223 44.6	25 5
	とても増えた	2 100	-	2 100	-	-
	増えた	98 100	13 13.3	43 43.9	41 41.8	1 1
	変わらなかった	364 100	33 9.1	133 36.5	174 47.8	24 6.6
	減った	30 100	6 20	17 56.7	7 23.3	-
	とても減った	6 100	4 66.7	1 16.7	1 16.7	-



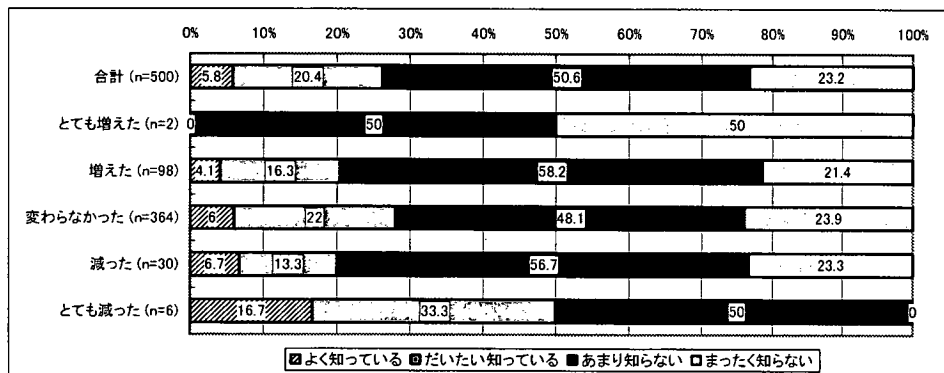
上段:度数 下段:%		Q10-5 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。通常、鳥インフルエンザに感染した鳥と濃厚に接触しない限り、鳥から人に感染することはない				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。	合計	500	101	282	100	17
		100	20.2	56.4	20	3.4
	とても増えた	2	-	2	-	-
		100	-	100	-	-
	増えた	98	18	57	18	5
		100	18.4	58.2	18.4	5.1
	変わらなかった	364	78	207	68	11
	100	21.4	56.9	18.7	3	
減った	30	4	15	10	1	
	100	13.3	50	33.3	3.3	
とても減った	6	1	1	4	-	
	100	16.7	16.7	66.7	-	



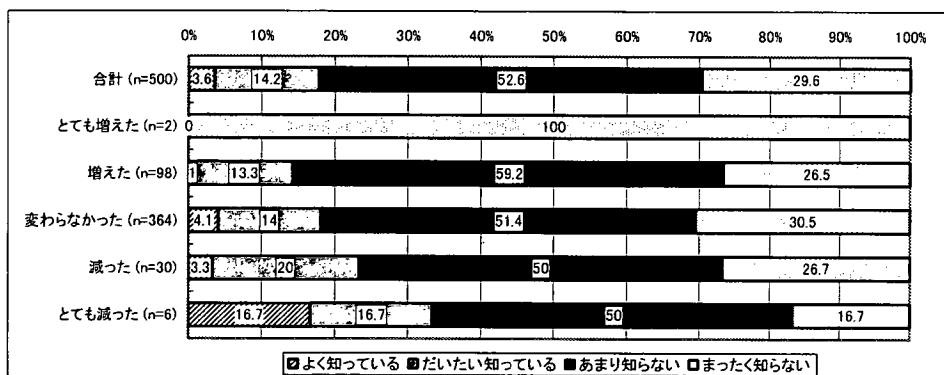
上段:度数 下段:%		Q10-6 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。鳥インフルエンザウイルスは、通常の調理温度で容易に死滅する				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。	合計	500	98	221	154	27
		100	19.6	44.2	30.8	5.4
	とても増えた	2	-	1	-	1
		100	-	50	-	50
	増えた	98	17	38	36	7
		100	17.3	38.8	36.7	7.1
	変わらなかった	364	75	167	104	18
	100	20.6	45.9	28.6	4.9	
減った	30	5	13	11	1	
	100	16.7	43.3	36.7	3.3	
とても減った	6	1	2	3	-	
	100	16.7	33.3	50	-	



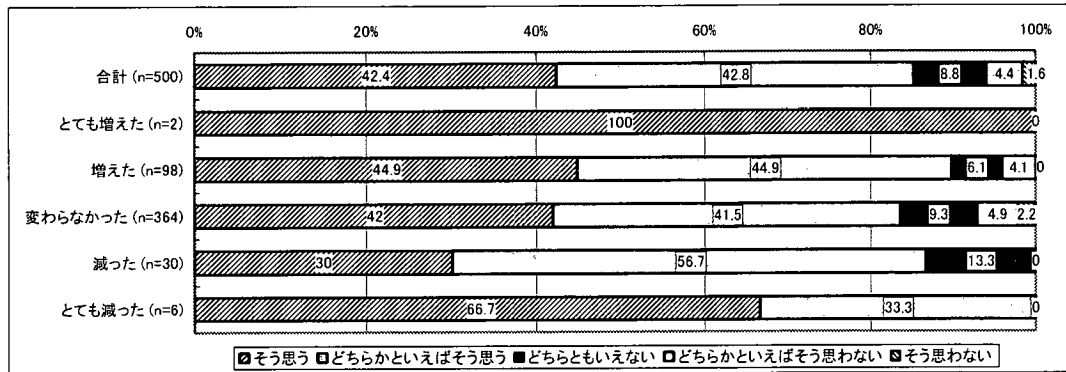
上段:度数 下段:%		Q10-7 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。通常、国産の鶏卵は、殺菌剤で洗卵されている				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。	合計	500 100	29 5.8	102 20.4	253 50.6	116 23.2
	とても増えた	2 100	-	-	1 50	1 50
	増えた	98 100	4 4.1	16 16.3	57 58.2	21 21.4
	変わらなかった	364 100	22 6	80 22	175 48.1	87 23.9
	減った	30 100	2 6.7	4 13.3	17 56.7	7 23.3
	とても減った	6 100	1 16.7	2 33.3	3 50	-



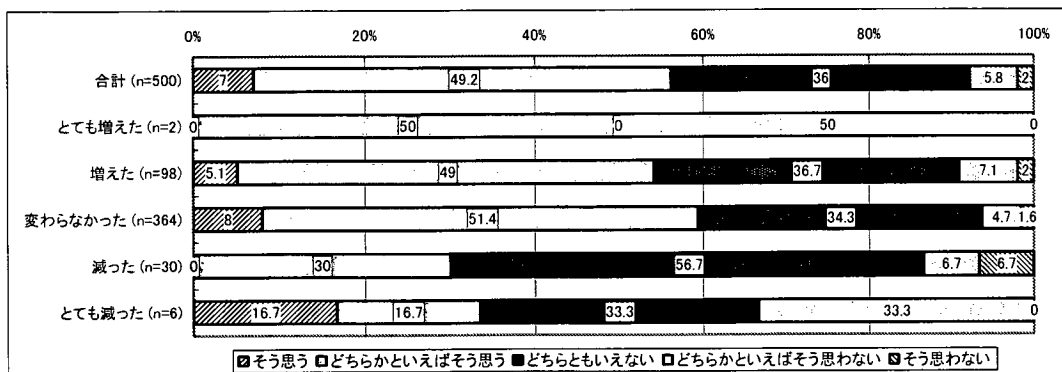
上段:度数 下段:%		Q10-8 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。通常、国産の鶏肉は、食鳥処理場で脱羽され、冷水で洗浄されている				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。	合計	500 100	18 3.6	71 14.2	263 52.6	148 29.6
	とても増えた	2 100	-	-	-	2 100
	増えた	98 100	1 1	13 13.3	58 59.2	26 26.5
	変わらなかった	364 100	15 4.1	51 14	187 51.4	111 30.5
	減った	30 100	1 3.3	6 20	15 50	8 26.7
	とても減った	6 100	1 16.7	1 16.7	3 50	1 16.7



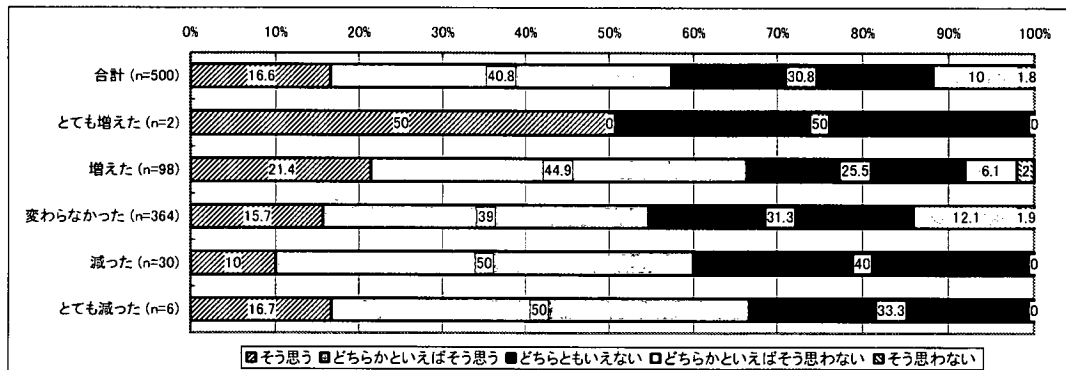
上段:度数 下段:%		Q13-1 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。 100%安全な食品は世の中には存在しない					
		合計	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。	合計	500 100	212 42.4	214 42.8	44 8.8	22 4.4	8 1.6
	とても増えた	2 100	2 100	-	-	-	-
	増えた	98 100	44 44.9	44 44.9	6 6.1	4 4.1	-
	変わらなかった	364 100	153 42	151 41.5	34 9.3	18 4.9	8 2.2
	減った	30 100	9 30	17 56.7	4 13.3	-	-
	とても減った	6 100	4 66.7	2 33.3	-	-	-



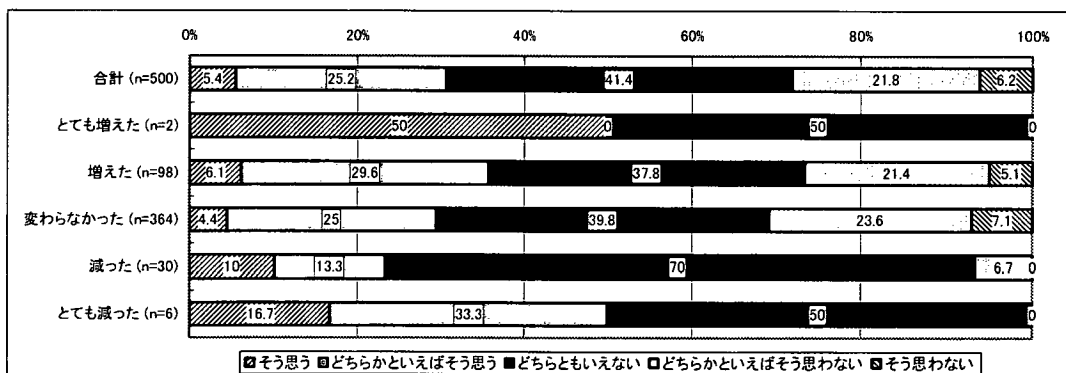
上段:度数 下段:%		Q13-5 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。現在流通している国産の鶏肉や鶏卵は安全である					
		合計	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。	合計	500 100	35 7	246 49.2	180 36	29 5.8	10 2
	とても増えた	2 100	-	1 50	-	1 50	-
	増えた	98 100	5 5.1	48 49	36 36.7	7 7.1	2 2
	変わらなかった	364 100	29 8	187 51.4	125 34.3	17 4.7	6 1.6
	減った	30 100	-	9 30	17 56.7	2 6.7	2 6.7
	とても減った	6 100	1 16.7	1 16.7	2 33.3	2 33.3	-



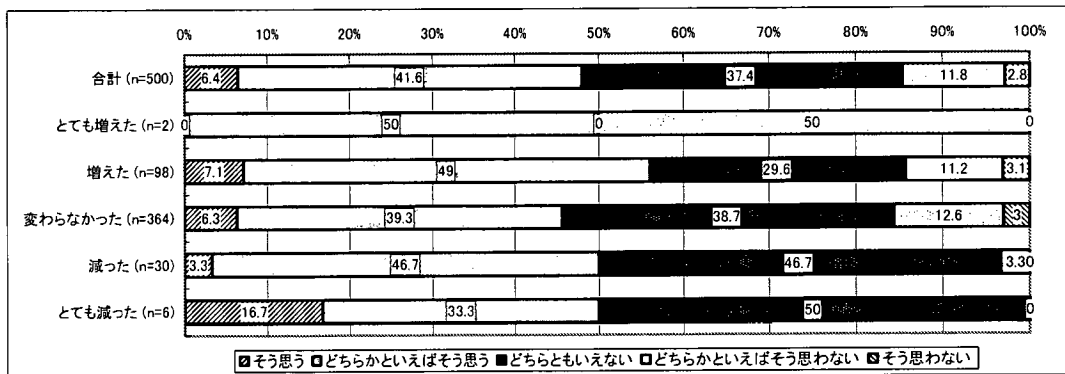
上段:度数 下段:%		Q13-6 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。国内での鳥インフルエンザ発生は、日本経済に大きな影響を与えている					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。	合計	500	83	204	154	50	9
		100	16.6	40.8	30.8	10	1.8
	ととも増えた	2	1	-	1	-	-
		100	50	-	50	-	-
	増えた	98	21	44	25	6	2
		100	21.4	44.9	25.5	6.1	2
	変わらなかった	364	57	142	114	44	7
	100	15.7	39	31.3	12.1	1.9	
減った	30	3	15	12	-	-	
	100	10	50	40	-	0	
とても減った	6	1	3	2	-	-	
	100	16.7	50	33.3	-	0	



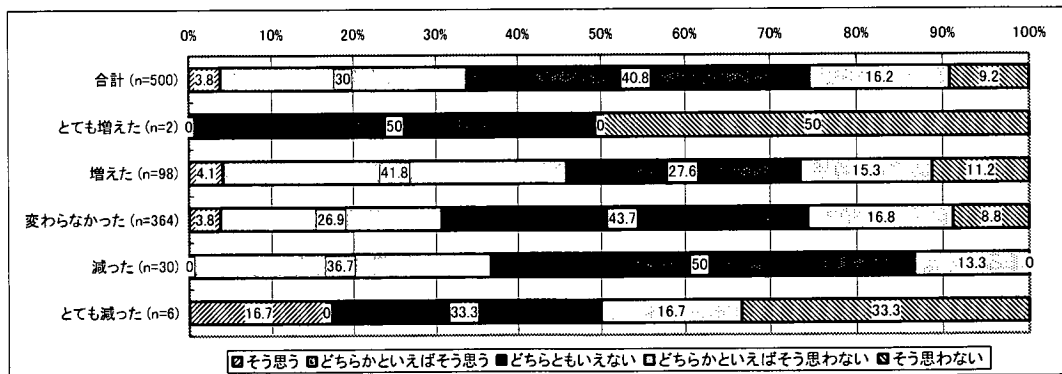
上段:度数 下段:%		Q13-7 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。国内での鳥インフルエンザ発生は、日本人の健康に大きな影響を与えている					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。	合計	500	27	126	207	109	31
		100	5.4	25.2	41.4	21.8	6.2
	ととも増えた	2	1	-	1	-	-
		100	50	-	50	-	-
	増えた	98	6	29	37	21	5
		100	6.1	29.6	37.8	21.4	5.1
	変わらなかった	364	16	91	145	86	26
	100	4.4	25	39.8	23.6	7.1	
減った	30	3	4	21	2	-	
	100	10	13.3	70	6.7	0	
とても減った	6	1	2	3	-	-	
	100	16.7	33.3	50	-	0	



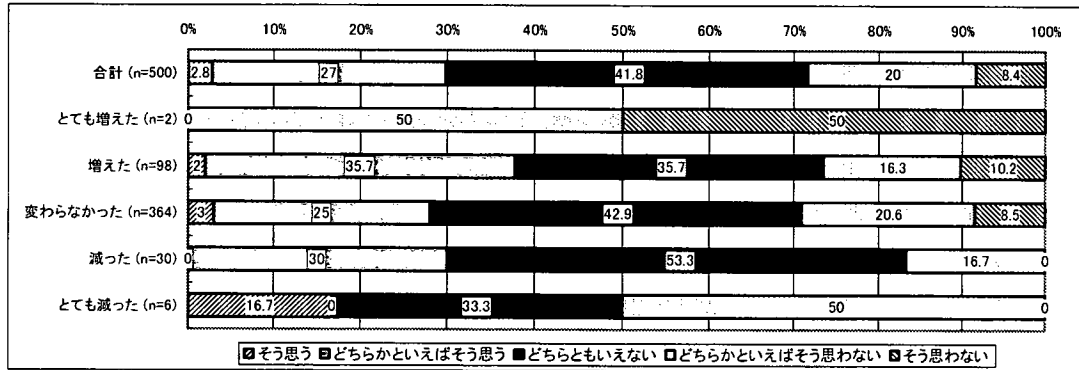
上段:度数 下段:%		Q13-8 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。日本の食品安全への取組は、国際的に非常に優れている					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。	合計	500	32	208	187	59	14
		100	6.4	41.6	37.4	11.8	2.8
	とても増えた	2	-	1	-	1	-
		100	-	50	-	50	-
	増えた	98	7	48	29	11	3
		100	7.1	49	29.6	11.2	3.1
	変わらなかった	364	23	143	141	46	11
	100	6.3	39.3	38.7	12.6	3	
減った	30	1	14	14	1	-	
	100	3.3	46.7	46.7	3.3	-	
とても減った	6	1	2	3	-	-	
	100	16.7	33.3	50	-	-	



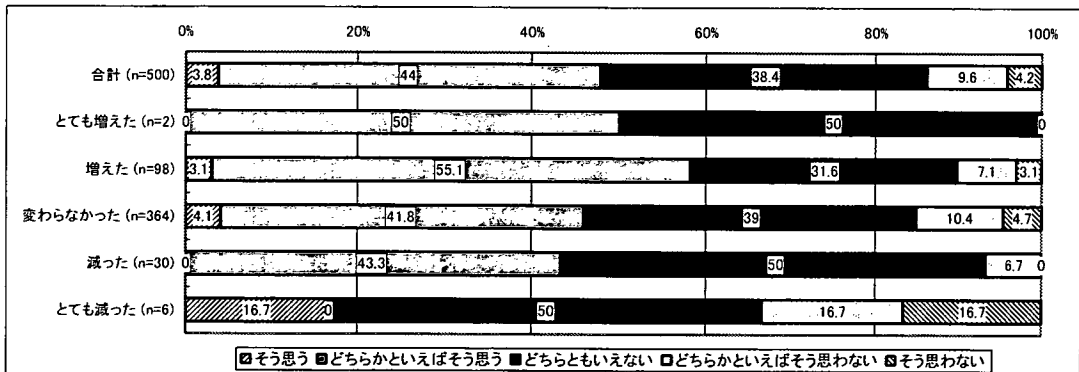
上段:度数 下段:%		Q13-9 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。日本の食品安全行政を信頼している					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。	合計	500	19	150	204	81	46
		100	3.8	30	40.8	16.2	9.2
	とても増えた	2	-	-	1	-	1
		100	-	-	50	-	50
	増えた	98	4	41	27	15	11
		100	4.1	41.8	27.6	15.3	11.2
	変わらなかった	364	14	98	159	61	32
	100	3.8	26.9	43.7	16.8	8.8	
減った	30	-	11	15	4	-	
	100	-	36.7	50	13.3	-	
とても減った	6	1	2	2	1	2	
	100	16.7	33.3	33.3	16.7	33.3	



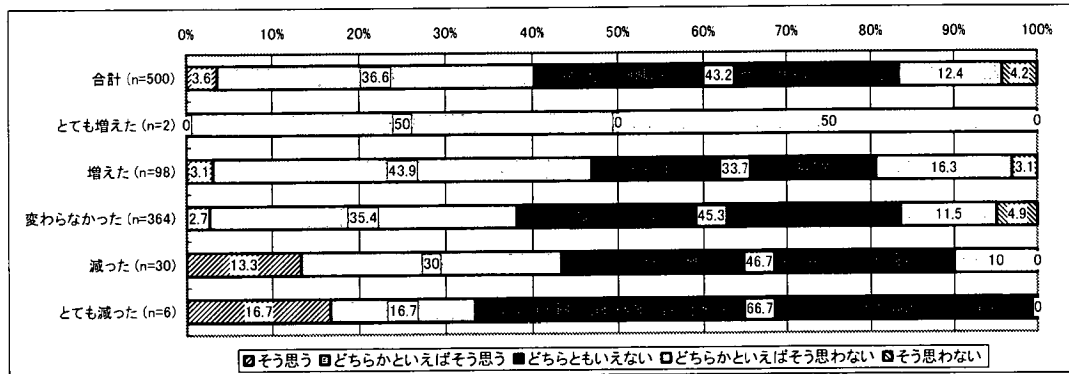
上段:度数 下段:%		Q13-10 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。日本の食品産業の安全対策を信頼している					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。	合計	500	14	135	209	100	42
		100	2.8	27	41.8	20	8.4
	とても増えた	2	-	-	-	1	1
		100	-	-	-	50	50
	増えた	98	2	35	35	16	10
		100	2	35.7	35.7	16.3	10.2
	変わらなかった	364	11	91	156	75	31
	100	3	25	42.9	20.6	8.5	
減った	30	-	9	16	5	-	
	100	-	30	53.3	16.7	-	
とても減った	6	1	-	2	3	-	
	100	16.7	-	33.3	50	-	



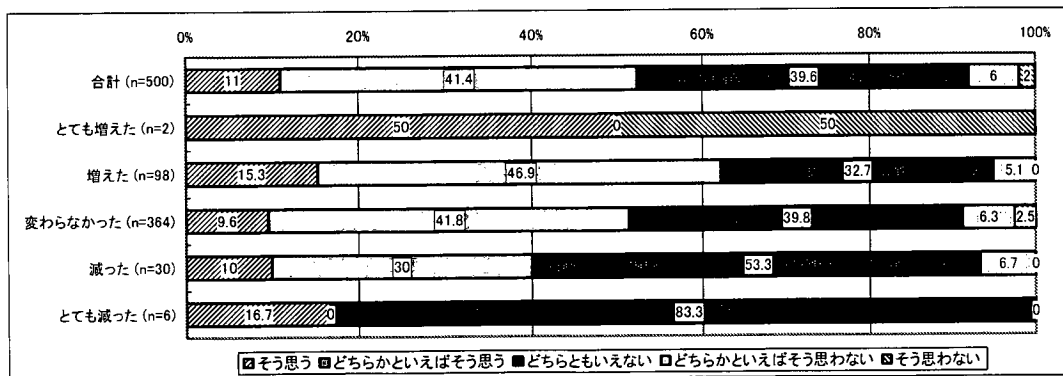
上段:度数 下段:%		Q13-11 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。BSE発生後、日本の食品安全行政は良い方向に向かっている					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。	合計	500	19	220	192	48	21
		100	3.8	44	38.4	9.6	4.2
	とても増えた	2	-	1	1	-	-
		100	-	50	50	-	-
	増えた	98	3	54	31	7	3
		100	3.1	55.1	31.6	7.1	3.1
	変わらなかった	364	15	152	142	38	17
	100	4.1	41.8	39	10.4	4.7	
減った	30	-	13	15	2	-	
	100	-	43.3	50	6.7	-	
とても減った	6	1	-	3	1	1	
	100	16.7	-	50	16.7	16.7	



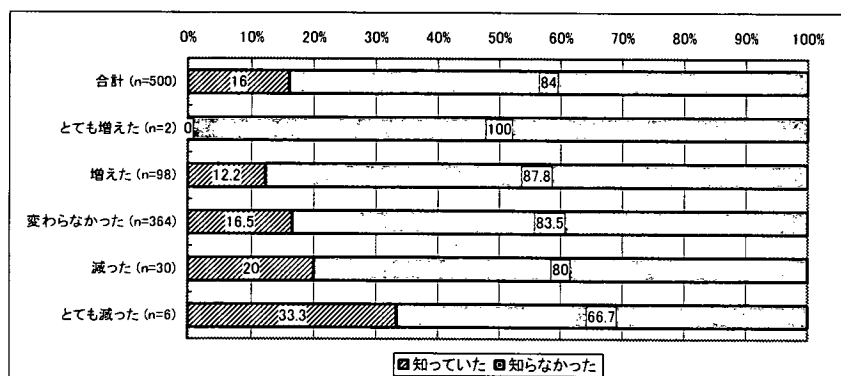
上段:度数 下段:%		Q13-12 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。生産者や生産方法が明記されている食品は安全である					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。	合計	500	18	183	216	62	21
		100	3.6	36.6	43.2	12.4	4.2
	とても増えた	2	-	1	-	1	-
		100	-	50	-	50	-
	増えた	98	3	43	33	16	3
		100	3.1	43.9	33.7	16.3	3.1
	変わらなかった	364	10	129	165	42	18
	100	2.7	35.4	45.3	11.5	4.9	
減った	30	4	9	14	3	-	
	100	13.3	30	46.7	10	-	
とても減った	6	1	1	4	-	-	
	100	16.7	16.7	66.7	-	-	



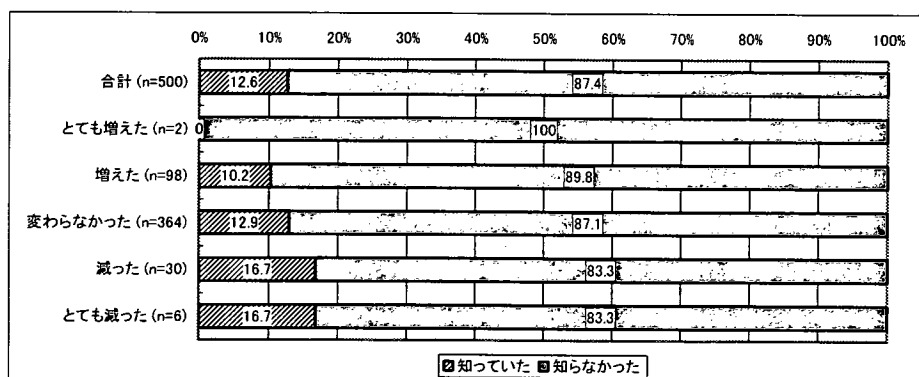
上段:度数 下段:%		Q13-13 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。安全性の高い食品であれば、価格が高くても優先的に購入したい					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。	合計	500	55	207	198	30	10
		100	11	41.4	39.6	6	2
	とても増えた	2	1	-	-	-	1
		100	50	-	-	-	50
	増えた	98	15	46	32	5	-
		100	15.3	46.9	32.7	5.1	-
	変わらなかった	364	35	152	145	23	9
	100	9.6	41.8	39.8	6.3	2.5	
減った	30	3	9	16	2	-	
	100	10	30	53.3	6.7	-	
とても減った	6	1	1	5	-	-	
	100	16.7	16.7	83.3	-	-	



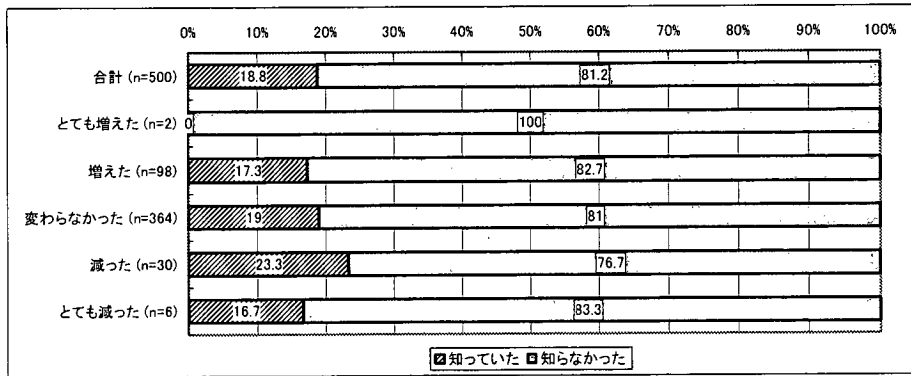
上段:度数 下段:%		Q14 あなたは、平成15年7月の国民の健康の保護を最優先とした食品安全基本法の施行によって、新たな食品安全行政がスタートしたことを知っていましたか。		
		合計	知っていた	知らなかった
Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。	合計	500	80	420
		100	16	84
	とても増えた	2	-	2
		100	-	100
	増えた	98	12	86
		100	12.2	87.8
	変わらなかった	364	60	304
		100	16.5	83.5
減った	30	6	24	
	100	20	80	
とても減った	6	2	4	
	100	33.3	66.7	



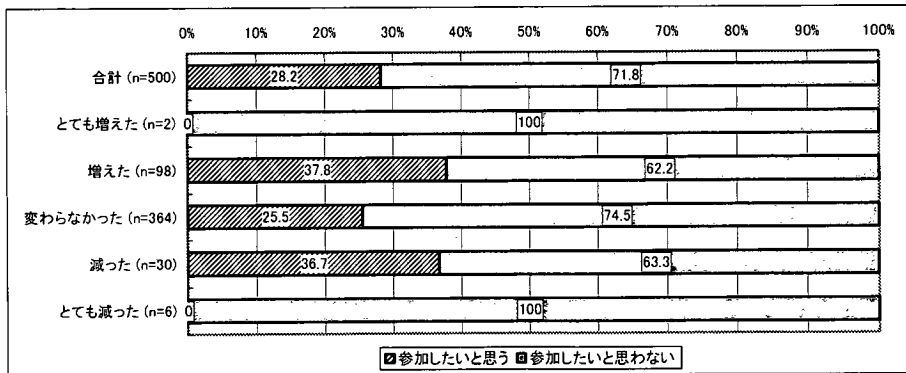
上段:度数 下段:%		Q15 あなたは、『リスクコミュニケーション』という言葉を知っていましたか。		
		合計	知っていた	知らなかった
Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。	合計	500	63	437
		100	12.6	87.4
	とても増えた	2	-	2
		100	-	100
	増えた	98	10	88
		100	10.2	89.8
	変わらなかった	364	47	317
		100	12.9	87.1
減った	30	5	25	
	100	16.7	83.3	
とても減った	6	1	5	
	100	16.7	83.3	



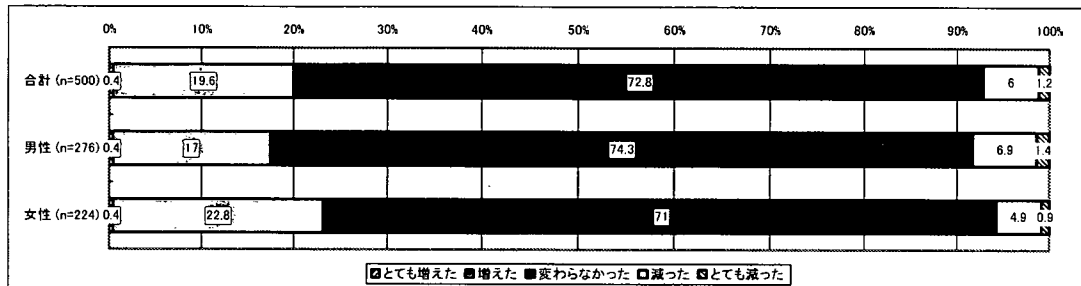
上段:度数 下段:%		Q16 あなたは、全国各地で、食の安全の分野における意見交換会が開催されていることを知っていましたか。		
		合計	知っていた	知らなかった
Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。	合計	500	94	406
		100	18.8	81.2
	とても増えた	2	-	2
		100	-	100
	増えた	98	17	81
		100	17.3	82.7
	変わらなかった	364	69	295
	100	19	81	
減った	30	7	23	
	100	23.3	76.7	
とても減った	6	1	5	
	100	16.7	83.3	



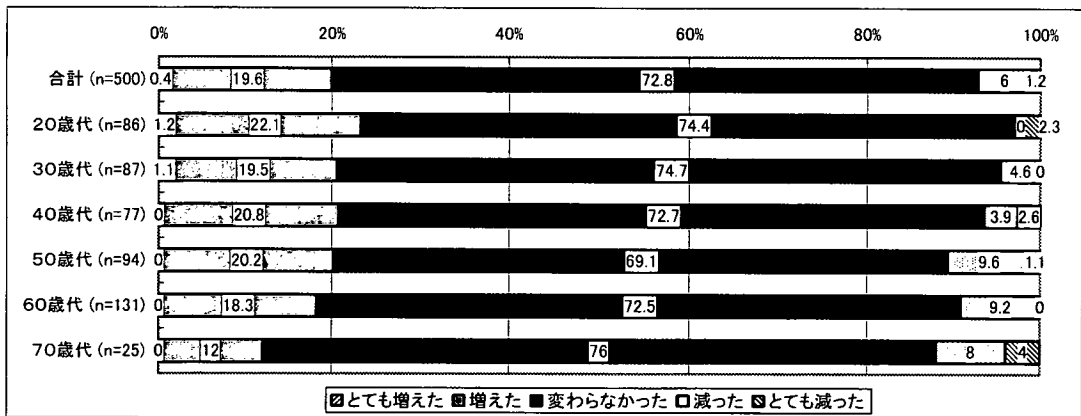
上段:度数 下段:%		Q17 あなたは、今後、食品の安全性に関連したシンポジウムや意見交換会などのイベントに参加したいと思いますか。		
		合計	参加したいと思う	参加したいと思わない
Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。	合計	500	141	359
		100	28.2	71.8
	とても増えた	2	-	2
		100	-	100
	増えた	98	37	61
		100	37.8	62.2
	変わらなかった	364	93	271
	100	25.5	74.5	
減った	30	11	19	
	100	36.7	63.3	
とても減った	6	-	6	
	100	-	100	



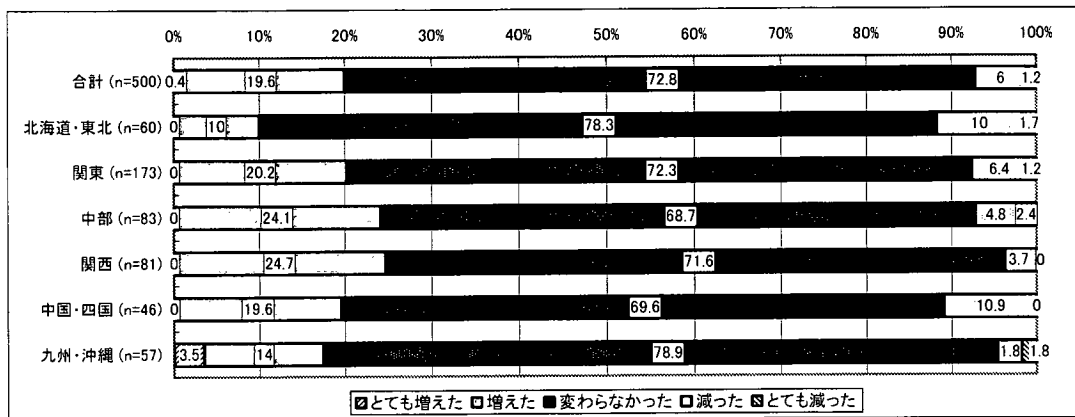
上段:度数 下段:%		Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q19 あなたの性別をお答え下さい。	合計	500	2	98	364	30	6
		100	0.4	19.6	72.8	6	1.2
	男性	276	1	47	205	19	4
		100	0.4	17	74.3	6.9	1.4
女性	224	1	51	159	11	2	
	100	0.4	22.8	71	4.9	0.9	



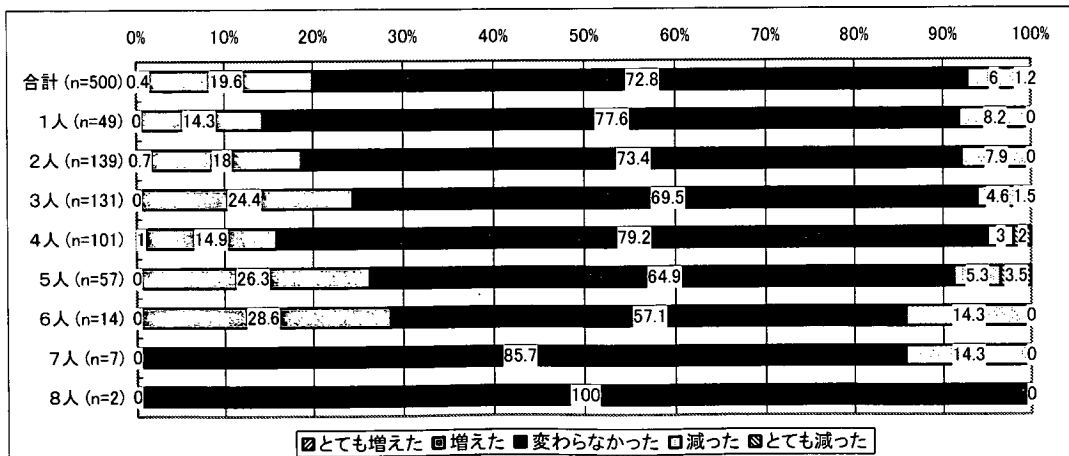
上段:度数 下段:%		Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500	2	98	364	30	6
		100	0.4	19.6	72.8	6	1.2
	20歳代	86	1	19	64	-	2
		100	1.2	22.1	74.4	-	2.3
	30歳代	87	1	17	65	4	-
		100	1.1	19.5	74.7	4.6	-
	40歳代	77	-	16	56	3	2
		100	-	20.8	72.7	3.9	2.6
	50歳代	94	-	19	65	9	1
	100	-	20.2	69.1	9.6	1.1	
60歳代	131	-	24	95	12	-	
	100	-	18.3	72.5	9.2	0	
70歳以上	25	-	3	19	2	1	
	100	-	12	76	8	4	



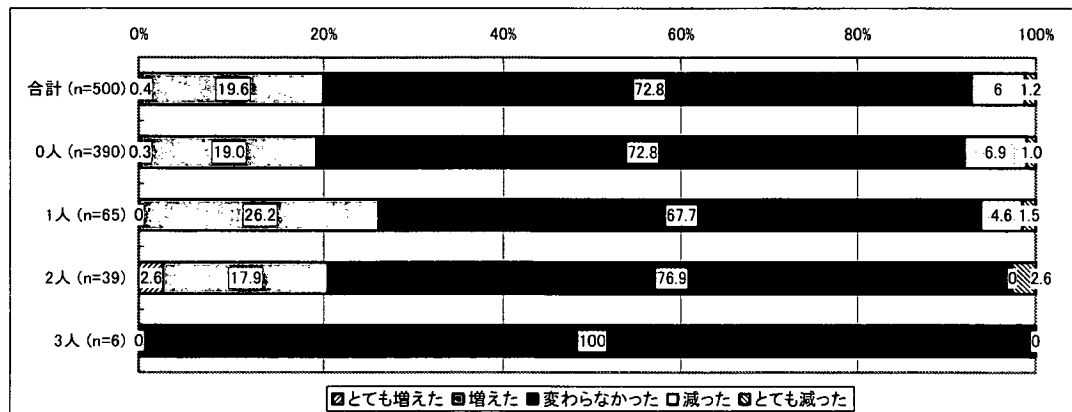
上段:度数 下段:%		Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	500 100	2 0.4	98 19.6	364 72.8	30 6	6 1.2
	北海道・東北	60 100	-	6 10	47 78.3	6 10	1 1.7
	関東	173 100	-	35 20.2	125 72.3	11 6.4	2 1.2
	中部	83 100	-	20 24.1	57 68.7	4 4.8	2 2.4
	関西	81 100	-	20 24.7	58 71.6	3 3.7	-
	中国・四国	46 100	-	9 19.6	32 69.6	5 10.9	-
	九州・沖縄	57 100	2 3.5	8 14	45 78.9	1 1.8	1 1.8



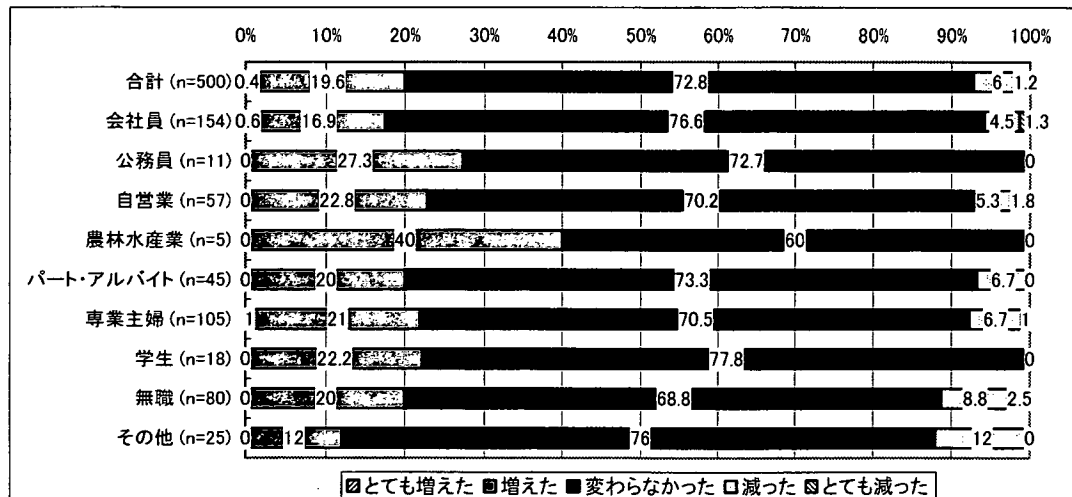
上段:度数 下段:%		Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q22 あなたの お宅の世帯員 数(あなたを含 めて)について お聞きします。 回答欄の中に、 人数を記入し てください。	合計	500 100	2 0.4	98 19.6	364 72.8	30 6	6 1.2
	1人	49 100	-	7 14.3	38 77.6	4 8.2	-
	2人	139 100	1 0.7	25 18	102 73.4	11 7.9	-
	3人	131 100	-	32 24.4	91 69.5	6 4.6	2 1.5
	4人	101 100	1 1	15 14.9	80 79.2	3 3	2 2
	5人	57 100	-	15 26.3	37 64.9	3 5.3	2 3.5
	6人	14 100	-	4 28.6	8 57.1	2 14.3	-
	7人	7 100	-	-	6 85.7	1 14.3	-
	8人	2 100	-	-	2 100	-	-



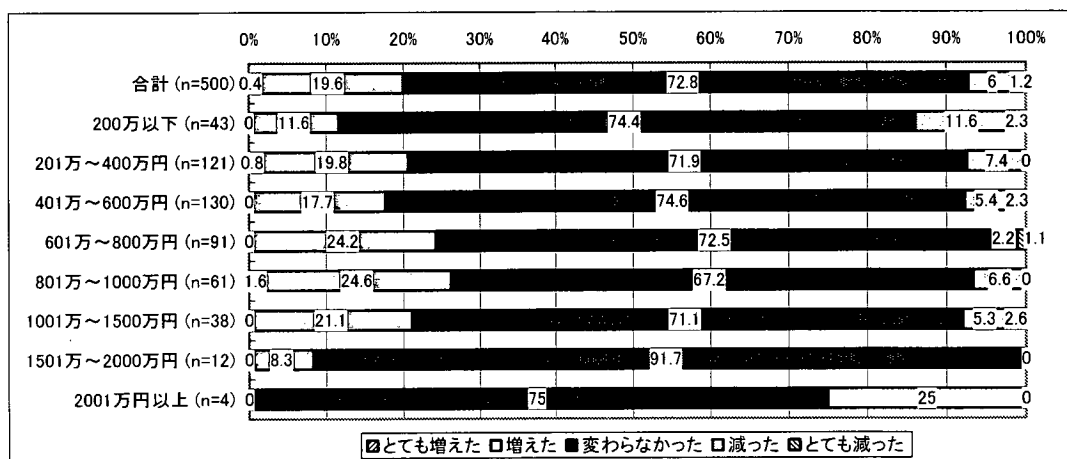
上段:度数 下段:%		Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q23 あなたの お宅の世帯員 数(あなたを含 めて)について お聞きします。 あわせて、小学 生以下のお子 様の人数を記 入してください。	合計	500	2	98	364	30	6
		100	0.4	19.6	72.8	6	1.2
	1人	390	1	74	284	27	4
		100	0.3	19.0	72.8	6.9	1.0
	1人	65	-	17	44	3	1
		100	-	26.2	67.7	4.6	1.5
2人	39	1	7	30	-	1	
	100	2.6	17.9	76.9	-	2.6	
3人	6	-	-	6	-	-	
	100	-	-	100	-	-	



上段:度数 下段:%		Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q24 あなたの お仕事をお答え 下さい。なお、 複数該当する 方は、主なお仕 事に印をつけて ください。	合計	500	2	98	364	30	6
		100	0.4	19.6	72.8	6	1.2
	会社員	154	1	26	118	7	2
		100	0.6	16.9	76.6	4.5	1.3
	公務員	11	-	3	8	-	-
		100	-	27.3	72.7	-	-
	自営業	57	-	13	40	3	1
		100	-	22.8	70.2	5.3	1.8
	農林水産業	5	-	2	3	-	-
		100	-	40	60	-	-
	パート・アルバイト	45	-	9	33	3	-
		100	-	20	73.3	6.7	-
専業主婦	105	1	22	74	7	1	
	100	1	21	70.5	6.7	1	
学生	18	-	4	14	-	-	
	100	-	22.2	77.8	-	-	
無職	80	-	16	55	7	2	
	100	-	20	68.8	8.8	2.5	
その他	25	3	3	19	3	-	
	100	12	12	76	12	0	

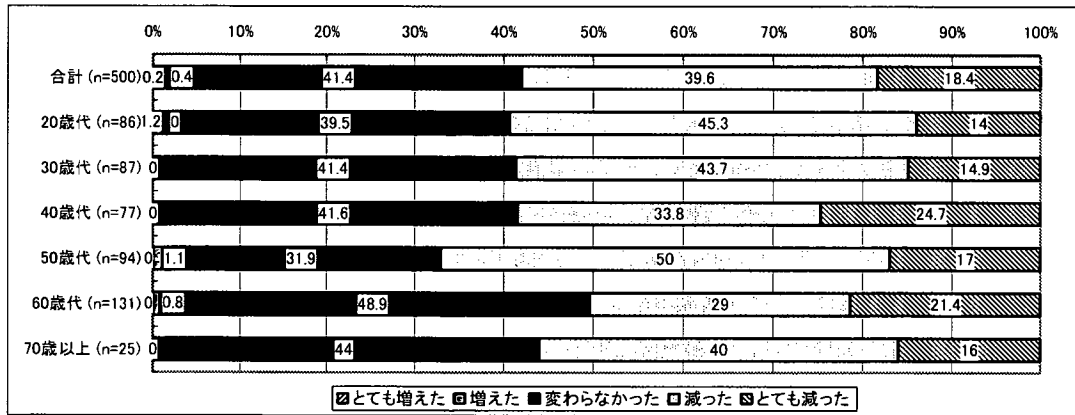


上段:度数 下段:%		Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q25 あなたの お宅の年収(家 族全体で、年金 等も含んだ年 収)は税込みで いくぐらいで しょうか。	合計	500 100	2 0.4	98 19.6	364 72.8	30 6	6 1.2
	200万円以下	43 100	-	5 11.6	32 74.4	5 11.6	1 2.3
	201万～400万 円	121 100	1 0.8	24 19.8	87 71.9	9 7.4	-
	401万～600万 円	130 100	-	23 17.7	97 74.6	7 5.4	3 2.3
	601万～800万 円	91 100	-	22 24.2	66 72.5	2 2.2	1 1.1
	801万～1,000万 円	61 100	1 1.6	15 24.6	41 67.2	4 6.6	-
	1,001万～1,500 万円	38 100	-	8 21.1	27 71.1	2 5.3	1 2.6
	1,501万～2,000 万円	12 100	-	1 8.3	11 91.7	-	-
	2,001万円以上	4 100	-	-	3 75	1 25	-

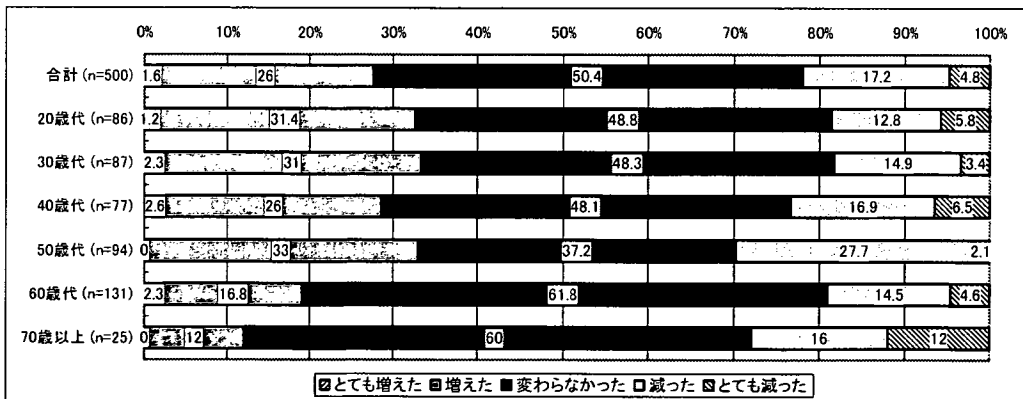


⑤クロス集計結果 (Q20)

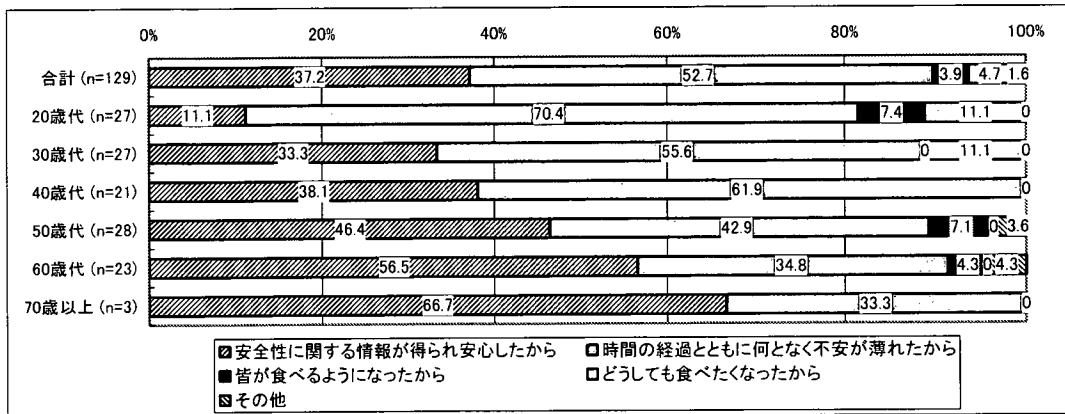
上段:度数 下段:%		Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500 100	1 0.2	2 0.4	207 41.4	198 39.6	92 18.4
	20歳代	86 100	1 1.2	-	34 39.5	39 45.3	12 14
	30歳代	87 100	-	-	36 41.4	38 43.7	13 14.9
	40歳代	77 100	-	-	32 41.6	26 33.8	19 24.7
	50歳代	94 100	-	1 1.1	30 31.9	47 50	16 17
	60歳代	131 100	-	1 0.8	64 48.9	38 29	28 21.4
	70歳以上	25 100	-	-	11 44	10 40	4 16



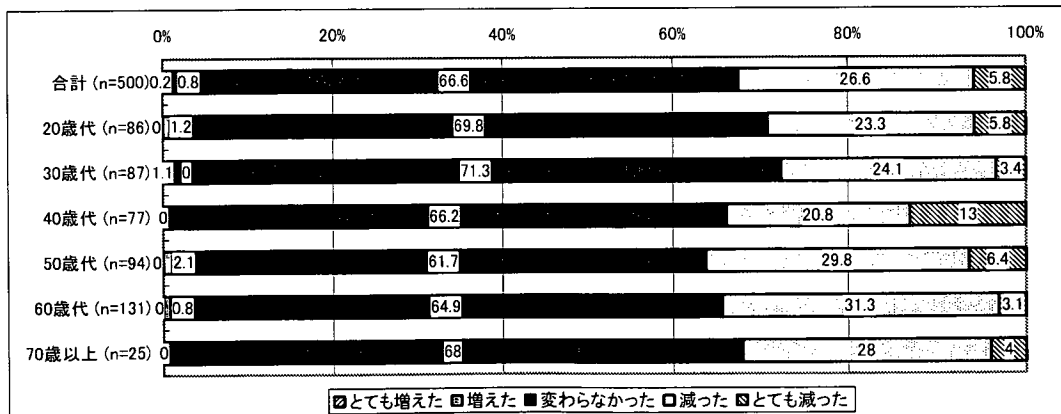
上段:度数 下段:%		Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500 100	8 1.6	130 26	252 50.4	86 17.2	24 4.8
	20歳代	86 100	1 1.2	27 31.4	42 48.8	11 12.8	5 5.8
	30歳代	87 100	2 2.3	27 31	42 48.3	13 14.9	3 3.4
	40歳代	77 100	2 2.6	20 26	37 48.1	13 16.9	5 6.5
	50歳代	94 100	-	31 33	35 37.2	26 27.7	2 2.1
	60歳代	131 100	3 2.3	22 16.8	81 61.8	19 14.5	6 4.6
	70歳以上	25 100	-	3 12	15 60	4 16	3 12



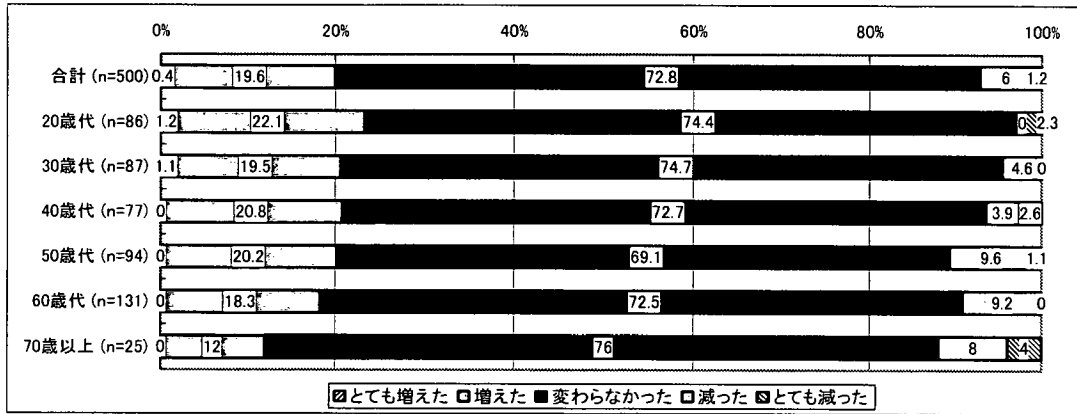
上段:度数 下段:%		Q3 Q1で「減った」「とても減った」かつQ2で「とても増えた」「増えた」をお選びの方に伺います。その答えた理由のうち最も近いものに印をつけてください。					
		合計	安全性に関する情報が得られ安心したから	時間の経過とともに何となく不安が薄れたから	皆が食べるようになったから	どうしても食べたくなったから	その他
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	129	48	88	5	6	2
		100	37.2	52.7	3.9	4.7	1.6
	20歳代	27	3	19	2	3	-
		100	11.1	70.4	7.4	11.1	0
	30歳代	27	9	15	-	3	-
		100	33.3	55.6	-	11.1	0
	40歳代	21	8	13	-	-	-
		100	38.1	61.9	-	-	0
50歳代	28	13	12	2	-	1	
	100	46.4	42.9	7.1	-	3.6	
60歳代	23	13	8	1	-	1	
	100	56.5	34.8	4.3	-	4.3	
70歳以上	3	2	1	-	-	-	
	100	66.7	33.3	-	-	0	



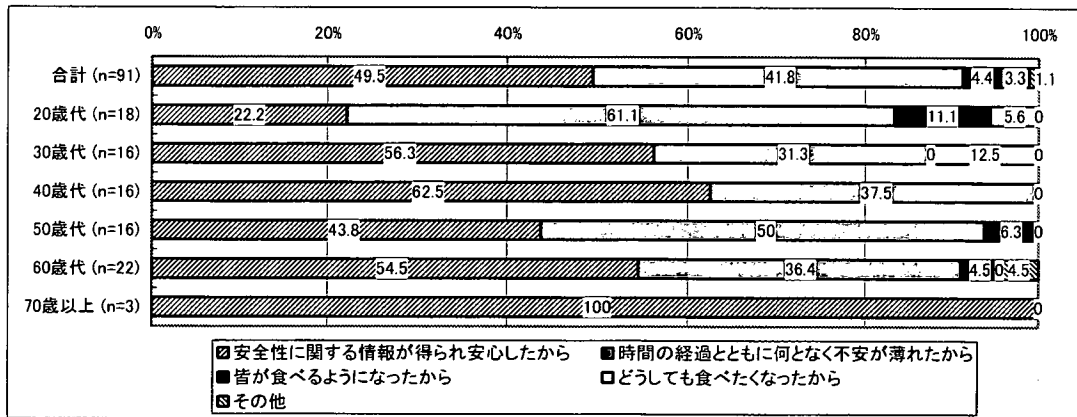
上段:度数 下段:%		Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500	1	4	333	133	29
		100	0.2	0.8	66.6	26.6	5.8
	20歳代	86	-	1	60	20	5
		100	-	1.2	69.8	23.3	5.8
	30歳代	87	1	-	62	21	3
		100	1.1	-	71.3	24.1	3.4
	40歳代	77	-	-	51	16	10
		100	-	-	66.2	20.8	13
50歳代	94	-	2	58	28	6	
	100	-	2.1	61.7	29.8	6.4	
60歳代	131	1	1	85	41	4	
	100	0.8	0.8	64.9	31.3	3.1	
70歳以上	25	-	-	17	7	1	
	100	-	-	68	28	4	



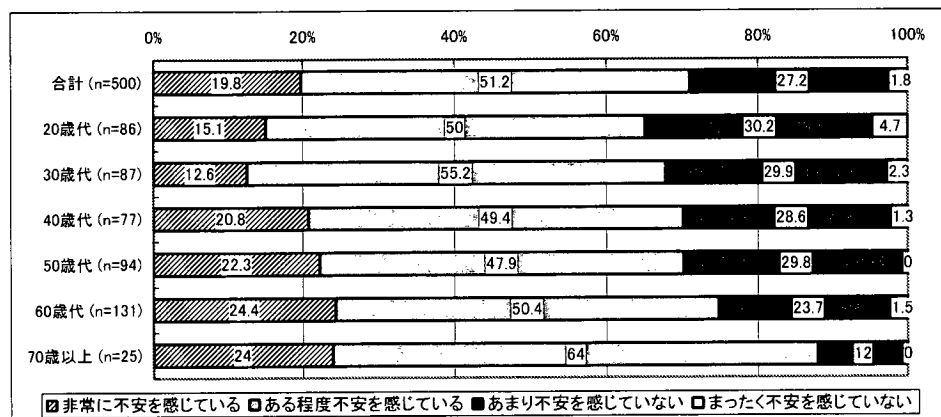
上段:度数 下段:%		Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。						
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った	
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500	2	98	364	30	6	
		100	0.4	19.6	72.8	6	1.2	
	20歳代	86	1	19	64	-	2	
		100	1.2	22.1	74.4	-	2.3	
	30歳代	87	1	17	65	4	-	
		100	1.1	19.5	74.7	4.6	-	
	40歳代	77	-	16	56	3	2	
		100	-	20.8	72.7	3.9	2.6	
50歳代	94	-	19	65	9	1		
	100	-	20.2	69.1	9.6	1.1		
60歳代	131	-	24	95	12	-		
	100	-	18.3	72.5	9.2	-		
70歳以上	25	-	3	19	2	1		
	100	-	12	76	8	4		



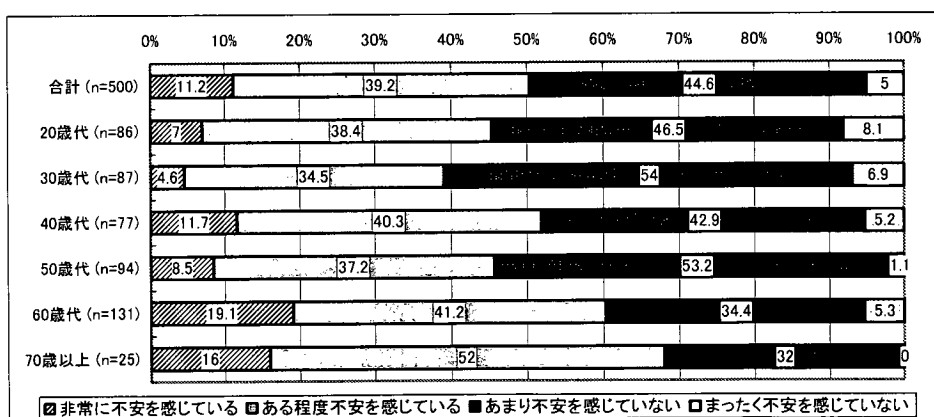
上段:度数 下段:%		Q6 Q4で「減った」「とても減った」、かつQ5で「とても増えた」「増えた」をお選びの方に伺います。その答えた理由のうち最も近いものに印をつけてください。					
		合計	安全性に関する情報が得られ安心したから	時間の経過とともに何となく不安が薄れたから	皆が食べるようになったから	どうしても食べなくなったから	その他
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	91	45	38	4	3	1
		100	49.5	41.8	4.4	3.3	1.1
	20歳代	18	4	11	2	1	-
		100	22.2	61.1	11.1	5.6	-
	30歳代	16	9	5	-	2	-
		100	56.3	31.3	-	12.5	-
	40歳代	16	10	6	-	-	-
		100	62.5	37.5	-	-	-
50歳代	16	7	8	1	-	-	
	100	43.8	50	6.3	-	-	
60歳代	22	12	8	1	-	1	
	100	54.5	36.4	4.5	-	4.5	
70歳以上	3	3	-	-	-	-	
	100	100	-	-	-	-	



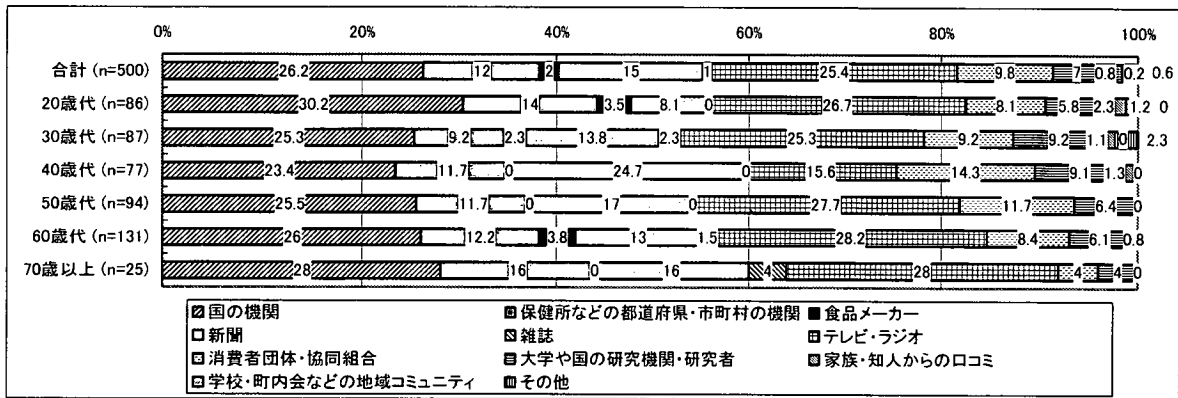
上段:度数 下段:%		Q7-1 あなたはBSEをどの程度不安だと感じていますか。				
		合計	非常に不安を感じている	ある程度不安を感じている	あまり不安を感じていない	まったく不安を感じていない
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500	99	256	136	9
		100	19.8	51.2	27.2	1.8
	20歳代	86	13	43	26	4
		100	15.1	50	30.2	4.7
	30歳代	87	11	48	26	2
		100	12.6	55.2	29.9	2.3
	40歳代	77	16	38	22	1
	100	20.8	49.4	28.6	1.3	
50歳代	94	21	45	28	-	
	100	22.3	47.9	29.8	-	
60歳代	131	32	66	31	2	
	100	24.4	50.4	23.7	1.5	
70歳以上	25	6	16	3	-	
	100	24	64	12	-	



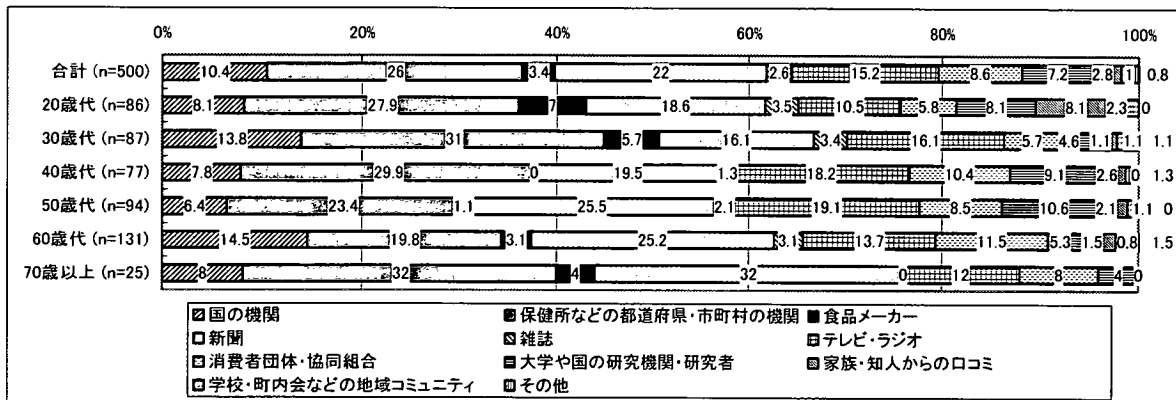
上段:度数 下段:%		Q7-2 あなたは鳥インフルエンザをどの程度不安だと感じていますか。				
		合計	非常に不安を感じている	ある程度不安を感じている	あまり不安を感じていない	まったく不安を感じていない
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500	56	196	223	25
		100	11.2	39.2	44.6	5
	20歳代	86	6	33	40	7
		100	7	38.4	46.5	8.1
	30歳代	87	4	30	47	6
		100	4.6	34.5	54	6.9
	40歳代	77	9	31	33	4
	100	11.7	40.3	42.9	5.2	
50歳代	94	8	35	50	1	
	100	8.5	37.2	53.2	1.1	
60歳代	131	25	54	45	7	
	100	19.1	41.2	34.4	5.3	
70歳以上	25	4	13	8	-	
	100	16	52	32	-	



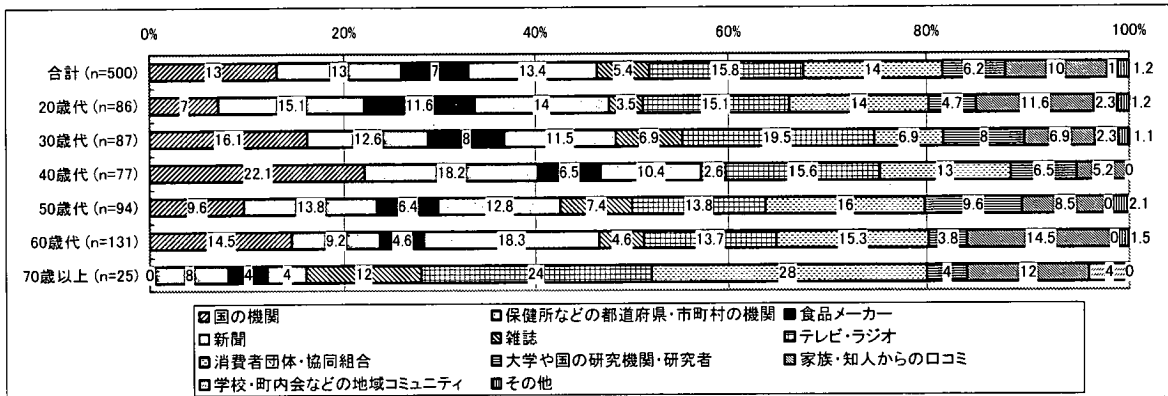
上段:度数 下段:%		Q8-1 食品の安全性に関する情報について、あなたはどこから入手する情報を信頼していますか。以下の選択肢の中から、最も信頼しているものから順番に3位まで選んでください。(1位)											
		合計	国の機関	保健所などの都道府県・市町村の機関	食品メーカー	新聞	雑誌	テレビ・ラジオ	消費者団体・協同組合	大学や国の研究機関・研究者	家族・知人からの口コミ	学校・町内会などの地域コミュニティ	その他
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500	131	60	10	75	5	127	49	35	4	1	3
		100	26.2	12	2	15	1	25.4	9.8	7	0.8	0.2	0.6
	20歳代	86	26	12	3	7	-	23	7	5	2	1	-
		100	30.2	14	3.5	8.1	-	26.7	8.1	5.8	2.3	1.2	-
	30歳代	87	22	8	2	12	2	22	8	8	1	-	2
		100	25.3	9.2	2.3	13.8	2.3	25.3	9.2	9.2	1.1	-	2.3
	40歳代	77	18	9	-	19	-	12	11	7	1	-	-
	100	23.4	11.7	-	24.7	-	15.6	14.3	9.1	1.3	-	-	
50歳代	94	24	11	-	16	-	26	11	6	-	-	-	
	100	25.5	11.7	-	17	-	27.7	11.7	6.4	-	-	-	
60歳代	131	34	16	5	17	2	37	11	8	-	-	1	
	100	26	12.2	3.8	13	1.5	28.2	8.4	6.1	-	-	0.8	
70歳以上	25	7	4	-	4	1	7	1	1	-	-	-	
	100	28	16	-	16	4	28	4	4	-	-	-	



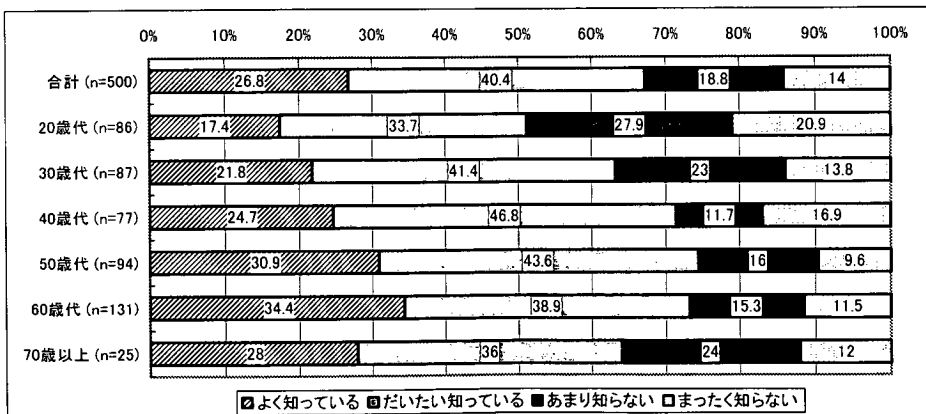
上段:度数 下段:%		Q8-2 食品の安全性に関する情報について、あなたはどこから入手する情報を信頼していますか。以下の選択肢の中から、最も信頼しているものから順番に3位まで選んでください。(2位)											
		合計	国の機関	保健所などの都道府県・市町村の機関	食品メーカー	新聞	雑誌	テレビ・ラジオ	消費者団体・協同組合	大学や国の研究機関・研究者	家族・知人からの口コミ	学校・町内会などの地域コミュニティ	その他
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500	52	130	17	110	13	76	43	36	14	5	4
		100	10.4	26	3.4	22	2.6	15.2	8.6	7.2	2.8	1	0.8
	20歳代	86	7	24	6	16	3	9	5	7	7	2	-
		100	8.1	27.9	7	18.6	3.5	10.5	5.8	8.1	8.1	2.3	-
	30歳代	87	12	27	5	14	3	14	5	4	1	1	1
		100	13.8	31	5.7	16.1	3.4	16.1	5.7	4.6	1.1	1.1	1.1
	40歳代	77	6	23	-	15	1	14	8	7	2	-	1
	100	7.8	29.9	-	19.5	1.3	18.2	10.4	9.1	2.6	-	1.3	
50歳代	94	6	22	1	24	2	18	8	10	2	1	-	
	100	6.4	23.4	1.1	25.5	2.1	19.1	8.5	10.6	2.1	1.1	-	
60歳代	131	19	26	4	33	4	18	15	7	2	1	2	
	100	14.5	19.8	3.1	25.2	3.1	13.7	11.5	5.3	1.5	0.8	1.5	
70歳以上	25	2	8	1	8	-	3	2	1	-	-	-	
	100	8	32	4	32	-	12	8	4	-	-	-	



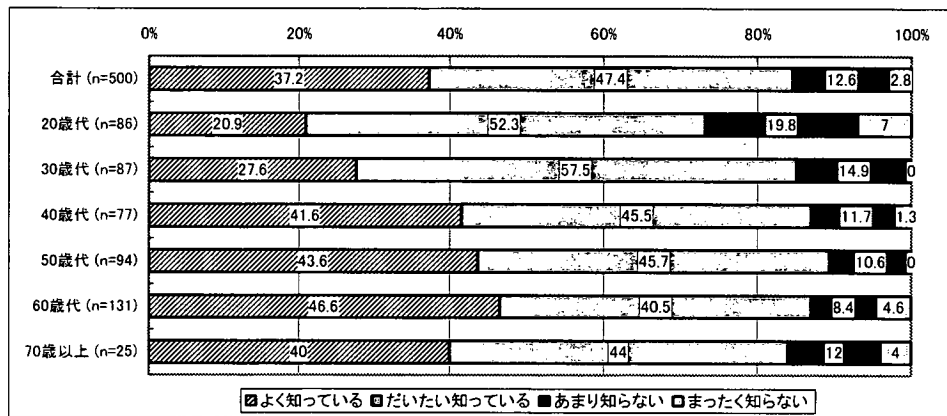
上段:度数 下段:%		Q8-3 食品の安全性に関する情報について、あなたはどこから入手する情報を信頼していますか。以下の選択肢の中から、最も信頼しているものから順番に3位まで選んでください。(3位)											
		合計	国の機関	保健所などの都道府県・市町村の機関	食品メーカー	新聞	雑誌	テレビ・ラジオ	消費者団体・協同組合	大学や国の研究機関・研究者	家族・知人からの口コミ	学校・町内会などの地域コミュニティ	その他
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500	65	65	35	67	27	79	70	31	50	5	6
		100	13	13	7	13.4	5.4	15.8	14	6.2	10	1	1.2
	20歳代	86	6	13	10	12	3	13	12	4	10	2	1
		100	7	15.1	11.6	14	3.5	15.1	14	4.7	11.6	2.3	1.2
	30歳代	87	14	11	7	10	6	17	6	7	6	2	1
		100	16.1	12.6	8	11.5	6.9	19.5	6.9	8	6.9	2.3	1.1
	40歳代	77	17	14	5	8	2	12	10	5	4	-	-
	100	22.1	18.2	6.5	10.4	2.6	15.6	13	6.5	5.2	-	-	
50歳代	94	9	13	6	12	7	13	15	9	8	-	2	
	100	9.6	13.8	6.4	12.8	7.4	13.8	16	9.6	8.5	-	2.1	
60歳代	131	19	12	6	24	6	18	20	5	19	-	2	
	100	14.5	9.2	4.6	18.3	4.6	13.7	15.3	3.8	14.5	-	1.5	
70歳以上	25	-	2	1	1	3	6	7	1	3	1	-	
	100	-	8	4	4	12	24	28	4	12	4	-	



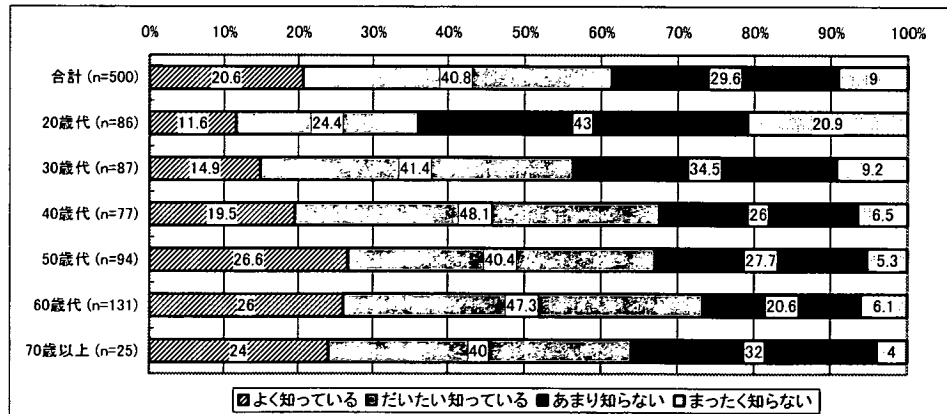
上段:度数 下段:%		Q10-1 以下の項目について、あなたはどの程度ご存じですか、日本では、変異型クロイツフェルト・ヤコブ病(vCJD)の患者発生が1名確認されている				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500	134	202	94	70
		100	26.8	40.4	18.8	14
	20歳代	86	15	29	24	18
		100	17.4	33.7	27.9	20.9
	30歳代	87	19	36	20	12
		100	21.8	41.4	23	13.8
	40歳代	77	19	36	9	13
	100	24.7	46.8	11.7	16.9	
50歳代	94	29	41	15	9	
	100	30.9	43.6	16	9.6	
60歳代	131	45	51	20	15	
	100	34.4	38.9	15.3	11.5	
70歳以上	25	7	9	6	3	
	100	28	36	24	12	



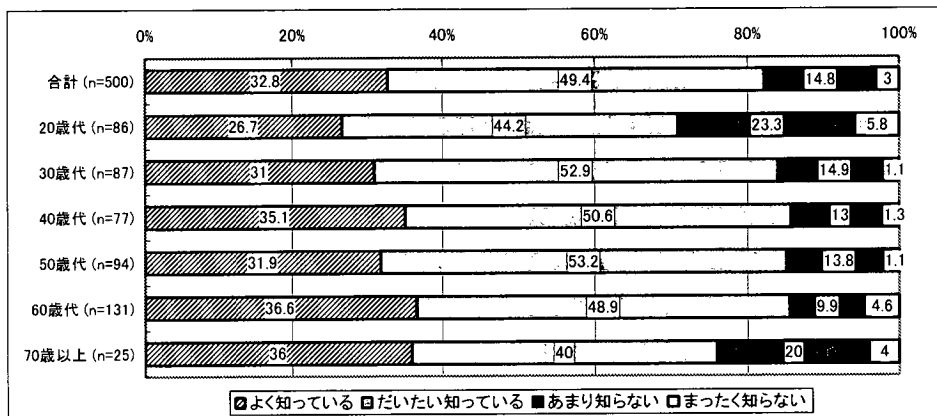
上段:度数 下段:%		Q10-2 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。国産牛は、全てBSEの検査を行っている				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500 100	186 37.2	237 47.4	63 12.6	14 2.8
	20歳代	86 100	18 20.9	45 52.3	17 19.8	6 7
	30歳代	87 100	24 27.6	50 57.5	13 14.9	-
	40歳代	77 100	32 41.6	35 45.5	9 11.7	1 1.3
	50歳代	94 100	41 43.6	43 45.7	10 10.6	-
	60歳代	131 100	61 46.6	53 40.5	11 8.4	6 4.6
	70歳以上	25 100	10 40	11 44	3 12	1 4



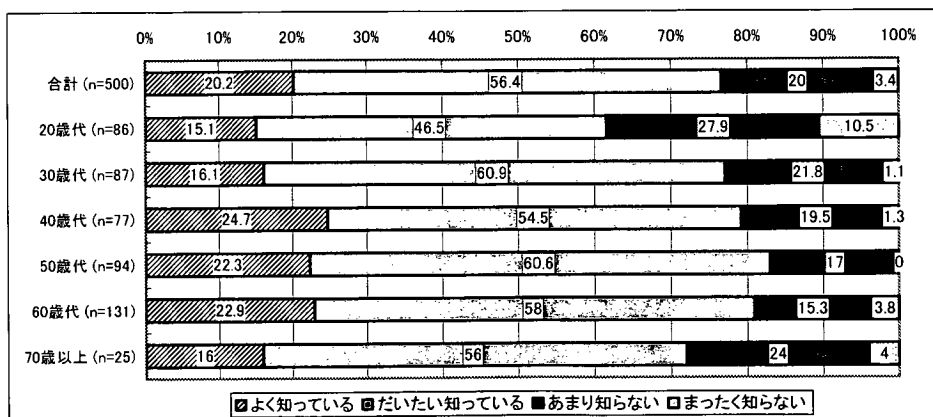
上段:度数 下段:%		Q10-3 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。日本では、牛をと畜した後に、特定危険部位(人が食べると感染の恐れがあるといわれている部分(SRM))が除去されている				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500 100	103 20.6	204 40.8	148 29.6	45 9
	20歳代	86 100	10 11.6	21 24.4	37 43	18 20.9
	30歳代	87 100	13 14.9	36 41.4	30 34.5	8 9.2
	40歳代	77 100	15 19.5	37 48.1	20 26	5 6.5
	50歳代	94 100	25 26.6	38 40.4	26 27.7	5 5.3
	60歳代	131 100	34 26	62 47.3	27 20.6	8 6.1
	70歳以上	25 100	6 24	10 40	8 32	1 4



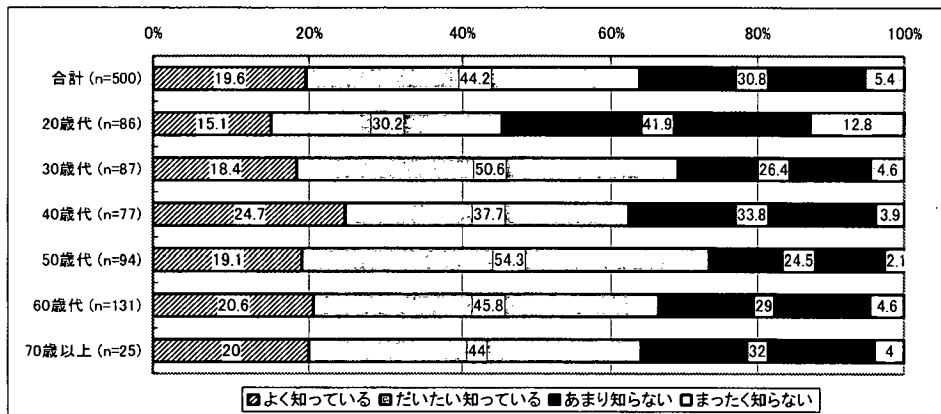
上段:度数 下段:%		Q10-4 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。日本では、BSEの感染源と考えられているえさ(肉骨粉)を牛に食べさせることを禁止している				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500	164	247	74	15
		100	32.8	49.4	14.8	3
	20歳代	86	23	38	20	5
		100	26.7	44.2	23.3	5.8
	30歳代	87	27	46	13	1
		100	31	52.9	14.9	1.1
	40歳代	77	27	39	10	1
		100	35.1	50.6	13	1.3
50歳代	94	30	50	13	1	
	100	31.9	53.2	13.8	1.1	
60歳代	131	48	64	13	6	
	100	36.6	48.9	9.9	4.6	
70歳以上	25	9	10	5	1	
	100	36	40	20	4	



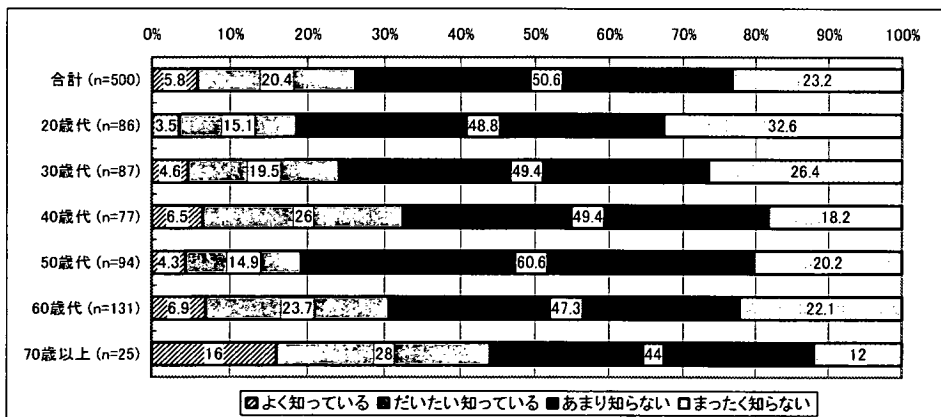
上段:度数 下段:%		Q10-5 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。通常、鳥インフルエンザに感染した鳥と濃厚に接触しない限り、鳥から人に感染することはない				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500	101	282	100	17
		100	20.2	56.4	20	3.4
	20歳代	86	13	40	24	9
		100	15.1	46.5	27.9	10.5
	30歳代	87	14	53	19	1
		100	16.1	60.9	21.8	1.1
	40歳代	77	19	42	15	1
		100	24.7	54.5	19.5	1.3
50歳代	94	21	57	16	0	
	100	22.3	60.6	17	0	
60歳代	131	30	76	20	5	
	100	22.9	58	15.3	3.8	
70歳以上	25	4	14	6	1	
	100	16	56	24	4	



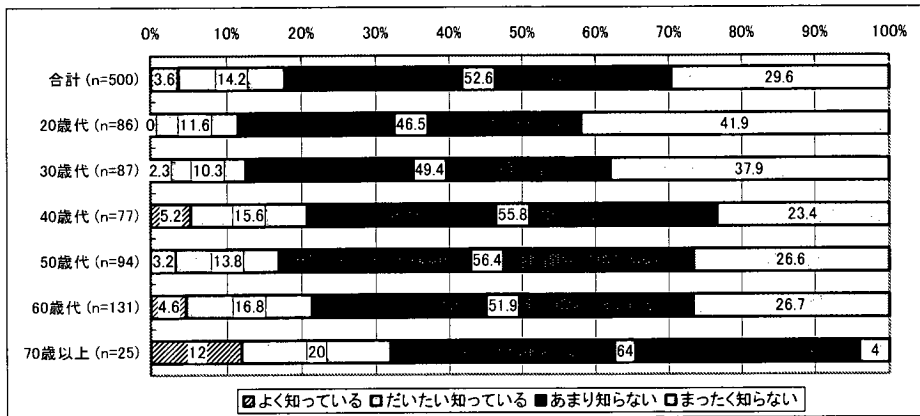
上段:度数 下段:%		Q10-6 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。鳥インフルエンザウイルスは、通常の調理温度で容易に死滅する				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500	98	221	154	27
		100	19.6	44.2	30.8	5.4
	20歳代	86	13	26	36	11
		100	15.1	30.2	41.9	12.8
	30歳代	87	16	44	23	4
		100	18.4	50.6	26.4	4.6
	40歳代	77	19	29	26	3
		100	24.7	37.7	33.8	3.9
50歳代	94	18	51	23	2	
	100	19.1	54.3	24.5	2.1	
60歳代	131	27	60	38	6	
	100	20.6	45.8	29	4.6	
70歳以上	25	5	11	8	1	
	100	20	44	32	4	



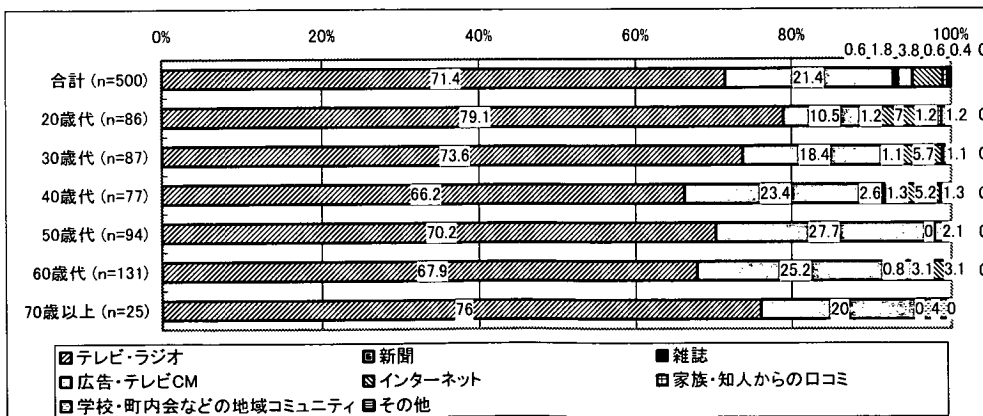
上段:度数 下段:%		Q10-7 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。通常、国産の鶏卵は、殺菌剤で洗卵されている				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500	29	102	253	116
		100	5.8	20.4	50.6	23.2
	20歳代	86	3	13	42	28
		100	3.5	15.1	48.8	32.6
	30歳代	87	4	17	43	23
		100	4.6	19.5	49.4	26.4
	40歳代	77	5	20	38	14
		100	6.5	26	49.4	18.2
50歳代	94	4	14	57	19	
	100	4.3	14.9	60.6	20.2	
60歳代	131	9	31	62	29	
	100	6.9	23.7	47.3	22.1	
70歳以上	25	4	7	11	3	
	100	16	28	44	12	



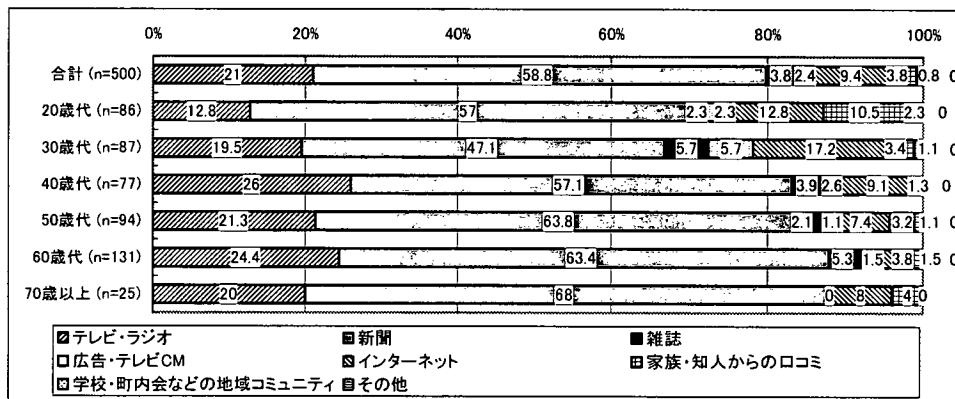
上段:度数 下段:%		Q10-8 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。通常、国産の鶏肉は、食鳥処理場で脱羽され、冷水で洗浄されている				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500 100	18 3.6	71 14.2	263 52.6	148 29.6
	20歳代	86 100	-	10 11.6	40 46.5	36 41.9
	30歳代	87 100	2 2.3	9 10.3	43 49.4	33 37.9
	40歳代	77 100	4 5.2	12 15.6	43 55.8	18 23.4
	50歳代	94 100	3 3.2	13 13.8	53 56.4	25 26.6
	60歳代	131 100	6 4.6	22 16.8	68 51.9	35 26.7
	70歳以上	25 100	3 12	5 20	16 64	1 4



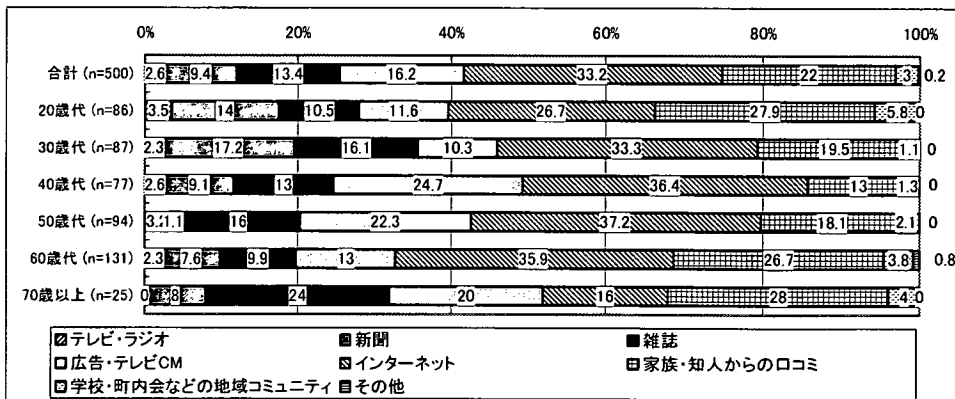
上段:度数 下段:%		Q11-1 あなたはBSEや鳥インフルエンザなどをはじめとした食品の安全性に関する情報を、普段どのような手段で得ていますか。以下の選択肢の中から、よく利用するものから順番に3位まで選んでください。(1位)							
		合計	テレビ・ラジオ	新聞	雑誌	広告・テレビCM	インターネット	家族・知人からの口コミ	学校・町内会などの地域コミュニティ
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500 100	357 71.4	107 21.4	3 0.6	9 1.8	19 3.8	3 0.6	2 0.4
	20歳代	86 100	68 79.1	9 10.5	-	1 1.2	6 7	1 1.2	1 1.2
	30歳代	87 100	64 73.6	16 18.4	-	1 1.1	5 5.7	1 1.1	-
	40歳代	77 100	51 66.2	18 23.4	2 2.6	1 1.3	4 5.2	1 1.3	-
	50歳代	94 100	66 70.2	26 27.7	-	2 2.1	-	-	-
	60歳代	131 100	89 67.9	33 25.2	1 0.8	4 3.1	4 3.1	-	-
	70歳以上	25 100	19 76	5 20	-	-	-	-	1 4



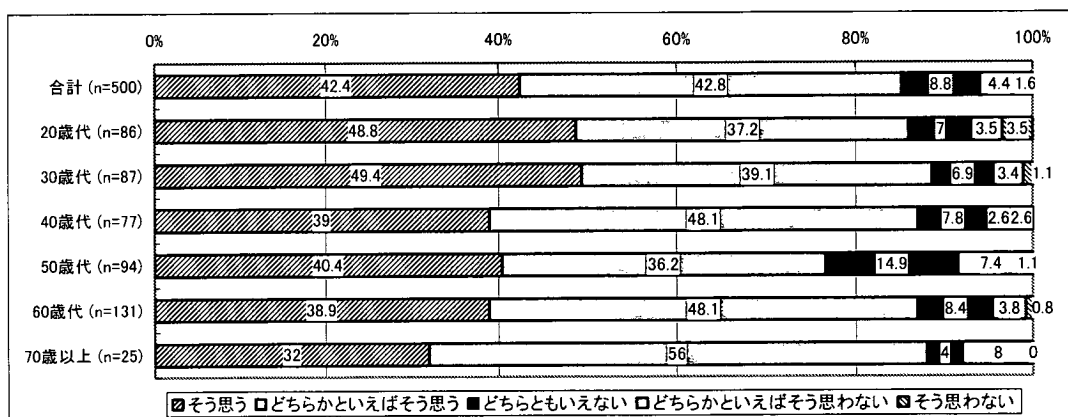
上段:度数 下段:%		Q11-2 あなたはBSEや鳥インフルエンザなどをはじめとした食品の安全性に関する情報を、普段どのような手段で得ていますか。以下の選択肢の中から、よく利用するものから順番に3位まで選んでください。(2位)								
		合計	テレビ・ラジオ	新聞	雑誌	広告・テレビCM	インターネット	家族・知人からの口コミ	学校・町内会などの地域コミュニティ	その他
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500 100	105 21	294 58.8	19 3.8	12 2.4	47 9.4	19 3.8	19 0.8	4 -
	20歳代	86 100	11 12.8	49 57	2 2.3	2 2.3	11 12.8	9 10.5	2 2.3	-
	30歳代	87 100	17 19.5	41 47.1	5 5.7	5 5.7	15 17.2	3 3.4	1 1.1	-
	40歳代	77 100	20 26	44 57.1	3 3.9	2 2.6	7 9.1	1 1.3	-	-
	50歳代	94 100	20 21.3	60 63.8	2 2.1	1 1.1	7 7.4	3 3.2	1 1.1	-
	60歳代	131 100	32 24.4	83 63.4	7 5.3	2 1.5	5 3.8	2 1.5	-	-
	70歳以上	25 100	5 20	17 68	-	-	2 8	1 4	-	-



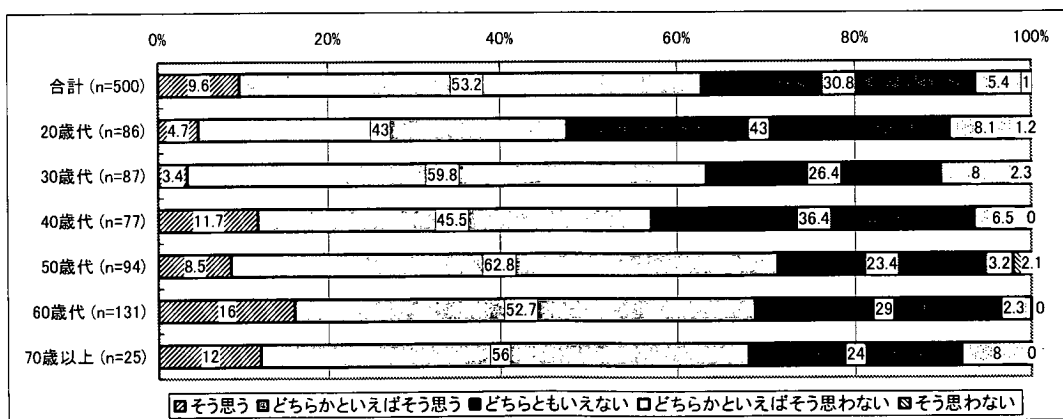
上段:度数 下段:%		Q11-3 あなたはBSEや鳥インフルエンザなどをはじめとした食品の安全性に関する情報を、普段どのような手段で得ていますか。以下の選択肢の中から、よく利用するものから順番に3位まで選んでください。(3位)								
		合計	テレビ・ラジオ	新聞	雑誌	広告・テレビCM	インターネット	家族・知人からの口コミ	学校・町内会などの地域コミュニティ	その他
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500 100	13 2.6	47 9.4	67 13.4	81 16.2	166 33.2	110 22	15 3	1 0.2
	20歳代	86 100	3 3.5	12 14	9 10.5	10 11.6	23 26.7	24 27.9	5 5.8	-
	30歳代	87 100	2 2.3	15 17.2	14 16.1	9 10.3	29 33.3	17 19.5	1 1.1	-
	40歳代	77 100	2 2.6	7 9.1	10 13	19 24.7	28 36.4	10 13	1 1.3	-
	50歳代	94 100	3 3.2	1 1.1	15 16	21 22.3	35 37.2	17 18.1	2 2.1	-
	60歳代	131 100	3 2.3	10 7.6	13 9.9	17 13	47 35.9	35 26.7	5 3.8	1 0.8
	70歳以上	25 100	-	2 8	6 24	5 20	4 16	7 28	1 4	-



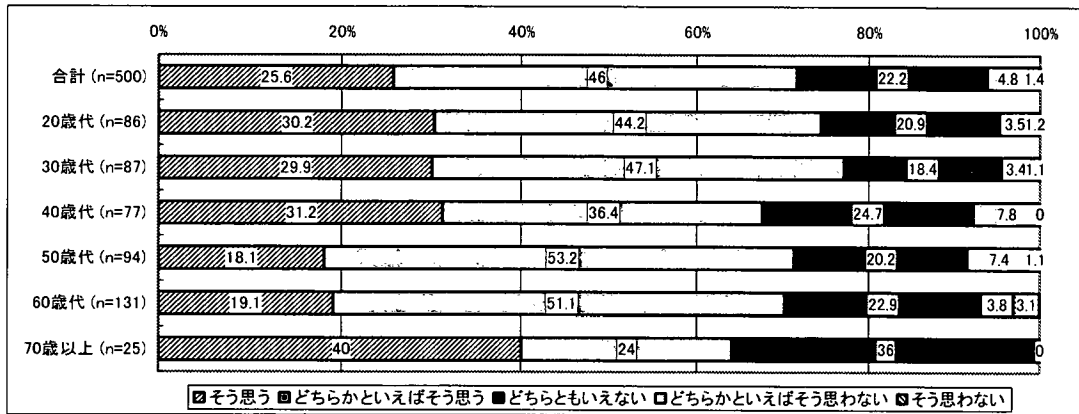
上段:度数 下段:%		Q13-1 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。 100%安全な食品は世の中には存在しない					
		合計	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q20 あなたの 年齢をお答え下 さい。	合計	500 100	212 42.4	214 42.8	44 8.8	22 4.4	8 1.6
	20歳代	86 100	42 48.8	32 37.2	6 7	3 3.5	3 3.5
	30歳代	87 100	43 49.4	34 39.1	6 6.9	3 3.4	1 1.1
	40歳代	77 100	30 39	37 48.1	6 7.8	2 2.6	2 2.6
	50歳代	94 100	38 40.4	34 36.2	14 14.9	7 7.4	1 1.1
	60歳代	131 100	51 38.9	63 48.1	11 8.4	5 3.8	1 0.8
	70歳以上	25 100	8 32	14 56	1 4	2 8	- 0



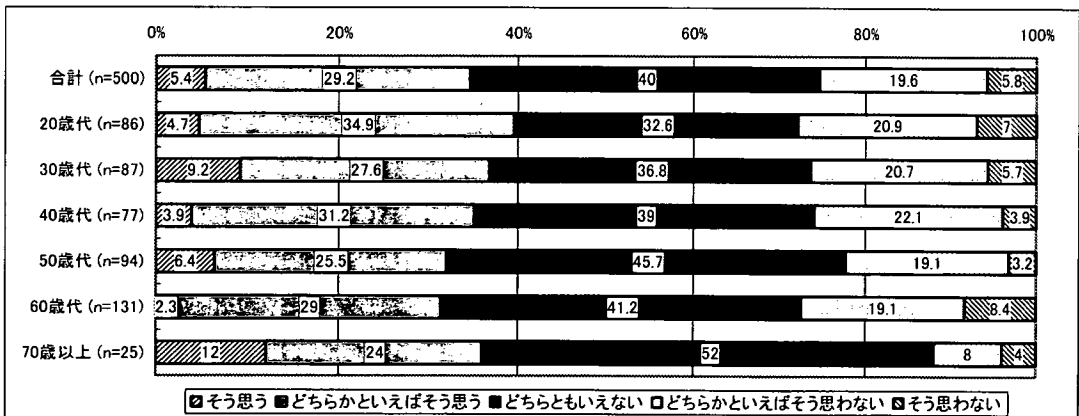
上段:度数 下段:%		Q13-2 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。現 在流通している国産の牛肉は安全である					
		合計	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q20 あなたの 年齢をお答え下 さい。	合計	500 100	48 9.6	266 53.2	154 30.8	27 5.4	5 1
	20歳代	86 100	4 4.7	37 43	37 43	7 8.1	1 1.2
	30歳代	87 100	3 3.4	52 59.8	23 26.4	7 8	2 2.3
	40歳代	77 100	9 11.7	35 45.5	28 36.4	5 6.5	- 0
	50歳代	94 100	8 8.5	59 62.8	22 23.4	3 3.2	2 2.1
	60歳代	131 100	21 16	69 52.7	38 29	3 2.3	- 0
	70歳以上	25 100	3 12	14 56	6 24	2 8	- 0



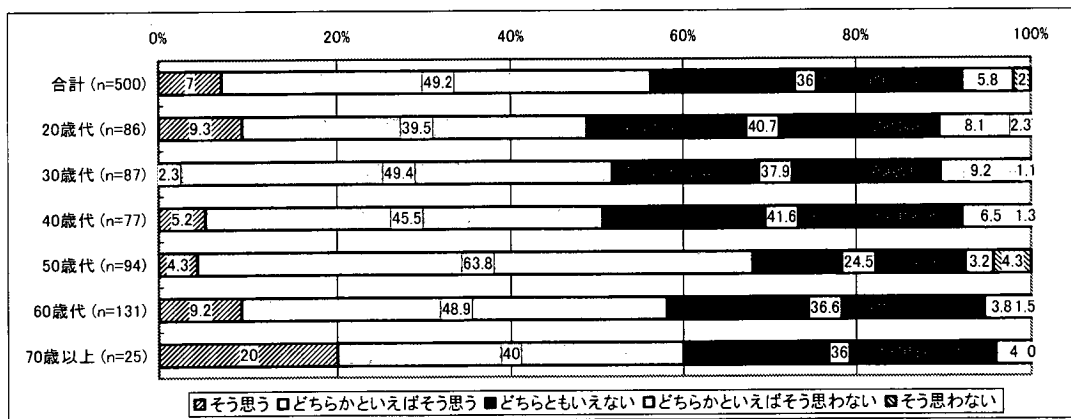
上段:度数 下段:%		Q13-3 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。国内でのBSE発生は、日本経済に大きな影響を与えている					
		合計	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q20 あなたの 年齢をお答え下 さい。	合計	500 100	128 25.6	230 46	111 22.2	24 4.8	7 1.4
	20歳代	86 100	26 30.2	38 44.2	18 20.9	3 3.5	1 1.2
	30歳代	87 100	26 29.9	41 47.1	16 18.4	3 3.4	1 1.1
	40歳代	77 100	24 31.2	28 36.4	19 24.7	6 7.8	0
	50歳代	94 100	17 18.1	50 53.2	19 20.2	7 7.4	1 1.1
	60歳代	131 100	25 19.1	67 51.1	30 22.9	5 3.8	4 3.1
	70歳以上	25 100	10 40	6 24	9 36	0	0



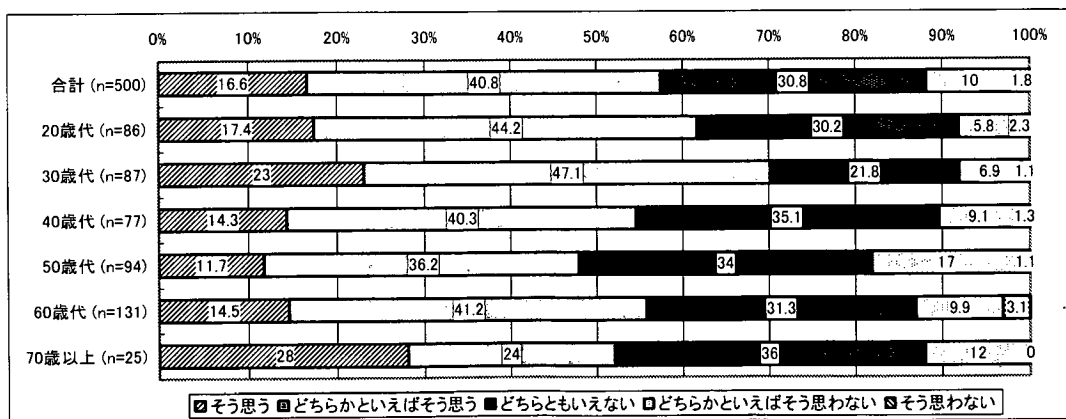
上段:度数 下段:%		Q13-4 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。国内でのBSE発生は、日本人の健康に大きな影響を与えている					
		合計	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q20 あなたの 年齢をお答え下 さい。	合計	500 100	27 5.4	146 29.2	200 40	98 19.6	29 5.8
	20歳代	86 100	4 4.7	30 34.9	28 32.6	18 20.9	6 7
	30歳代	87 100	8 9.2	24 27.6	32 36.8	18 20.7	5 5.7
	40歳代	77 100	3 3.9	24 31.2	30 39	17 22.1	3 3.9
	50歳代	94 100	6 6.4	24 25.5	43 45.7	18 19.1	3 3.2
	60歳代	131 100	3 2.3	38 29	54 41.2	25 19.1	11 8.4
	70歳以上	25 100	3 12	6 24	13 52	2 8	1 4



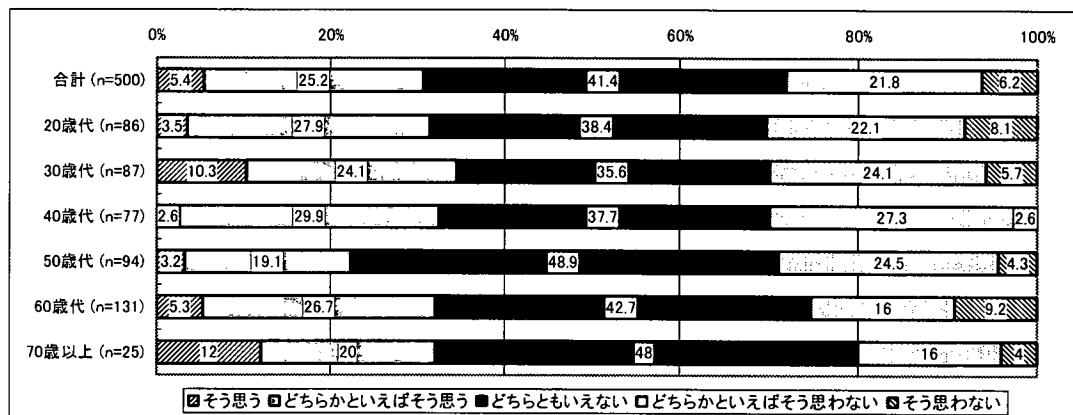
上段:度数 下段:%		Q13-5 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。現在流通している国産の鶏肉や鶏卵は安全である					
		合計	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q20 あなたの 年齢をお答え下 さい。	合計	500 100	35 7	246 49.2	180 36	29 5.8	10 2
	20歳代	86 100	8 9.3	34 39.5	35 40.7	7 8.1	2 2.3
	30歳代	87 100	2 2.3	43 49.4	33 37.9	8 9.2	1 1.1
	40歳代	77 100	4 5.2	35 45.5	32 41.6	5 6.5	1 1.3
	50歳代	94 100	4 4.3	60 63.8	23 24.5	3 3.2	4 4.3
	60歳代	131 100	12 9.2	64 48.9	48 36.6	5 3.8	2 1.5
	70歳以上	25 100	5 20	10 40	9 36	1 4	-



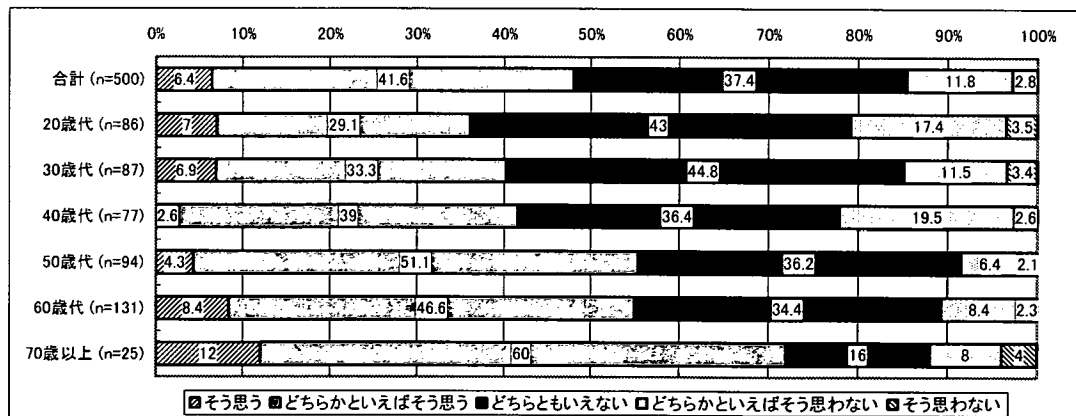
上段:度数 下段:%		Q13-6 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。国内での鳥インフルエンザ発生は、日本経済に大きな影響を与えている					
		合計	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q20 あなたの 年齢をお答え下 さい。	合計	500 100	83 16.6	204 40.8	154 30.8	50 10	9 1.8
	20歳代	86 100	15 17.4	38 44.2	26 30.2	5 5.8	2 2.3
	30歳代	87 100	20 23	41 47.1	19 21.8	6 6.9	1 1.1
	40歳代	77 100	11 14.3	31 40.3	27 35.1	7 9.1	1 1.3
	50歳代	94 100	11 11.7	34 36.2	32 34	16 17	1 1.1
	60歳代	131 100	19 14.5	54 41.2	41 31.3	13 9.9	4 3.1
	70歳以上	25 100	7 28	6 24	9 36	3 12	-



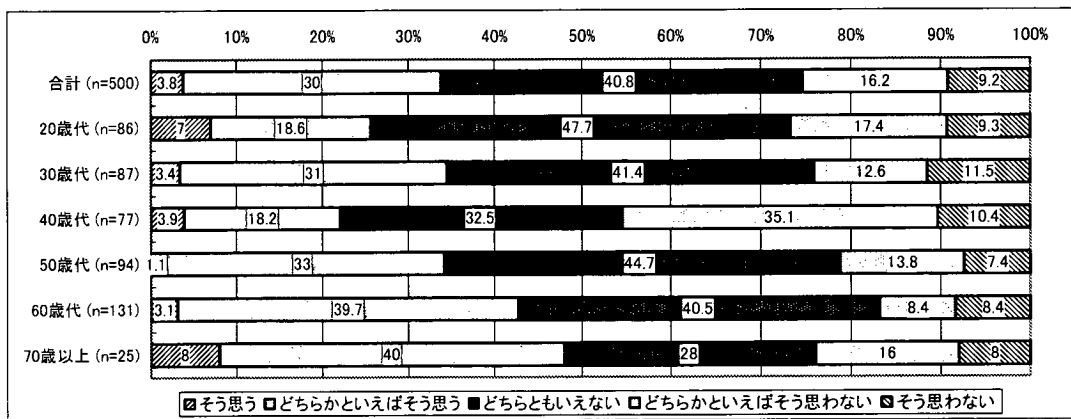
上段:度数 下段:%		Q13-7 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。国内での鳥インフルエンザ発生は、日本人の健康に大きな影響を与えている					
		合計	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらともい えない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q20 あなたの 年齢をお答え下 さい。	合計	500	27	126	207	109	31
		100	5.4	25.2	41.4	21.8	6.2
	20歳代	86	3	24	33	19	7
		100	3.5	27.9	38.4	22.1	8.1
	30歳代	87	9	21	31	21	5
		100	10.3	24.1	35.6	24.1	5.7
	40歳代	77	2	23	29	21	2
		100	2.6	29.9	37.7	27.3	2.6
50歳代	94	3	18	46	23	4	
	100	3.2	19.1	48.9	24.5	4.3	
60歳代	131	7	35	56	21	12	
	100	5.3	26.7	42.7	16	9.2	
70歳以上	25	3	5	12	4	1	
	100	12	20	48	16	4	



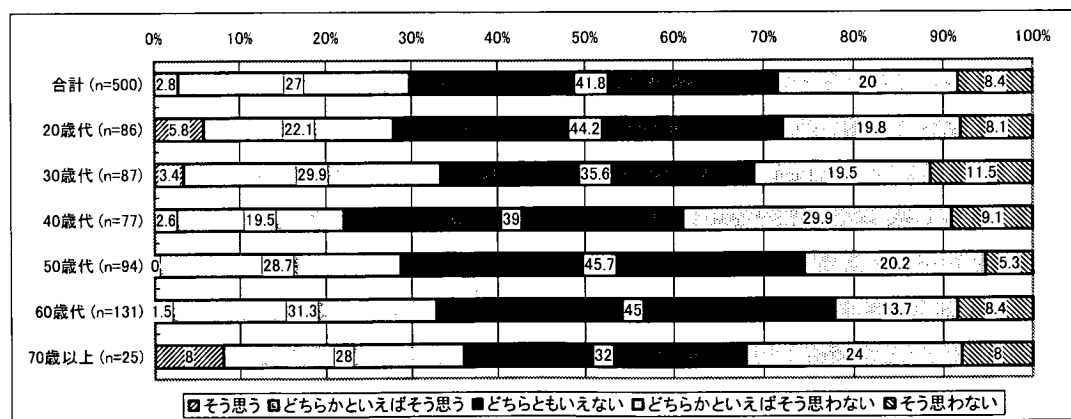
上段:度数 下段:%		Q13-8 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。日本の食品安全への取組は、国際的に非常に優れている					
		合計	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらともい えない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q20 あなたの 年齢をお答え下 さい。	合計	500	32	208	187	59	14
		100	6.4	41.6	37.4	11.8	2.8
	20歳代	86	6	25	37	15	3
		100	7	29.1	43	17.4	3.5
	30歳代	87	6	29	39	10	3
		100	6.9	33.3	44.8	11.5	3.4
	40歳代	77	2	30	28	15	2
		100	2.6	39	36.4	19.5	2.6
50歳代	94	4	48	34	6	2	
	100	4.3	51.1	36.2	6.4	2.1	
60歳代	131	11	61	45	11	3	
	100	8.4	46.6	34.4	8.4	2.3	
70歳以上	25	3	15	4	2	1	
	100	12	60	16	8	4	



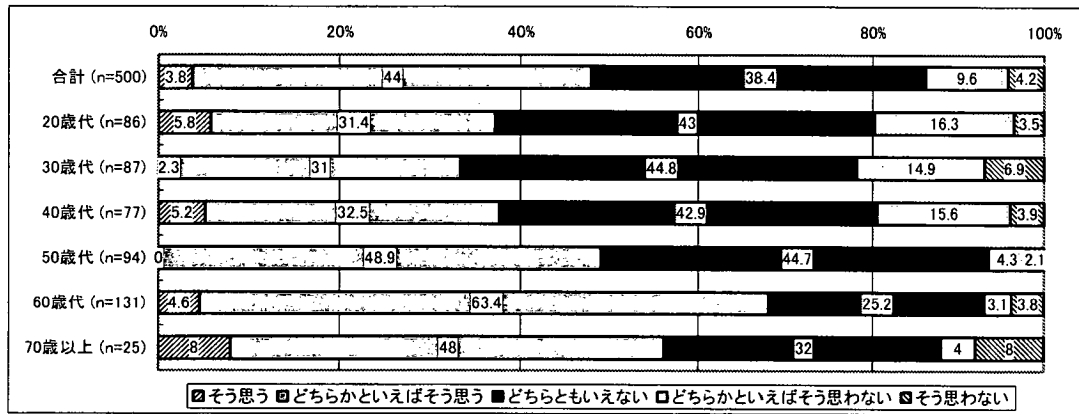
上段:度数 下段:%		Q13-9 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。日本の食品安全行政を信頼している					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500	19	150	204	81	46
		100	3.8	30	40.8	16.2	9.2
	20歳代	86	6	16	41	15	8
		100	7	18.6	47.7	17.4	9.3
	30歳代	87	3	27	36	11	10
		100	3.4	31	41.4	12.6	11.5
	40歳代	77	3	14	25	27	8
		100	3.9	18.2	32.5	35.1	10.4
50歳代	94	1	31	42	13	7	
	100	1.1	33	44.7	13.8	7.4	
60歳代	131	4	52	53	11	11	
	100	3.1	39.7	40.5	8.4	8.4	
70歳以上	25	2	10	7	4	2	
	100	8	40	28	16	8	



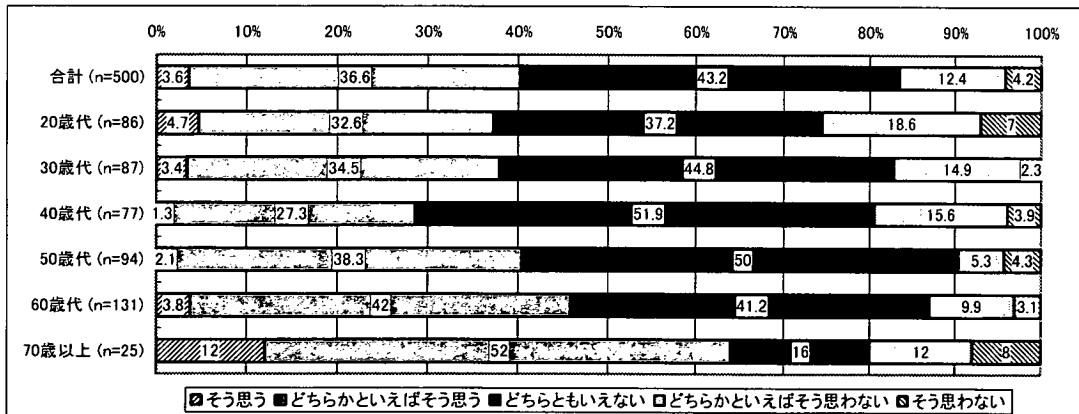
上段:度数 下段:%		Q13-10 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。日本の食品産業の安全対策を信頼している					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500	14	135	209	100	42
		100	2.8	27	41.8	20	8.4
	20歳代	86	5	19	38	17	7
		100	5.8	22.1	44.2	19.8	8.1
	30歳代	87	3	26	31	17	10
		100	3.4	29.9	35.6	19.5	11.5
	40歳代	77	2	15	30	23	7
		100	2.6	19.5	39	29.9	9.1
50歳代	94	-	27	43	19	5	
	100	-	28.7	45.7	20.2	5.3	
60歳代	131	2	41	59	18	11	
	100	1.5	31.3	45	13.7	8.4	
70歳以上	25	2	7	8	6	2	
	100	8	28	32	24	8	



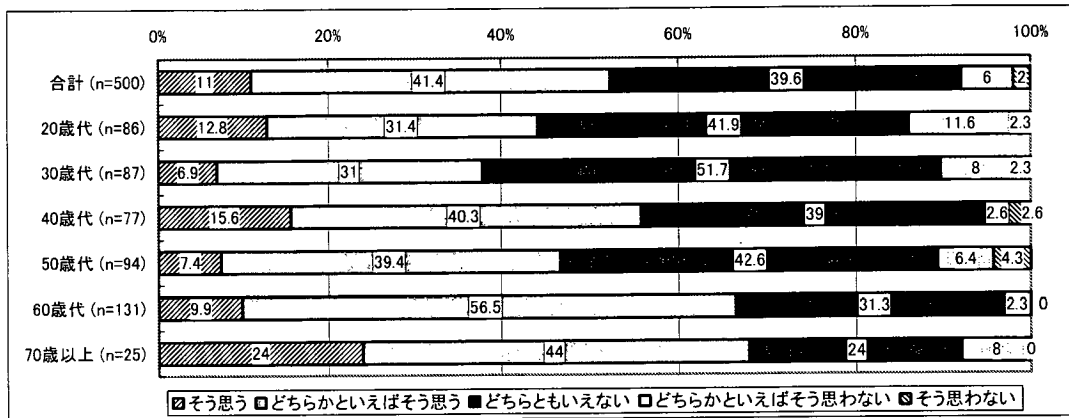
上段:度数 下段:%		Q13-11 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。 BSE発生後、日本の食品安全行政は良い方向に向かっている					
		合計	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q20 あなたの 年齢をお答え下 さい。	合計	500 100	19 3.8	220 44	192 38.4	48 9.6	21 4.2
	20歳代	86 100	5 5.8	27 31.4	37 43	14 16.3	3 3.5
	30歳代	87 100	2 2.3	27 31	39 44.8	13 14.9	6 6.9
	40歳代	77 100	4 5.2	25 32.5	33 42.9	12 15.6	3 3.9
	50歳代	94 100	- -	46 48.9	42 44.7	4 4.3	2 2.1
	60歳代	131 100	6 4.6	83 63.4	33 25.2	4 3.1	5 3.8
	70歳以上	25 100	2 8	12 48	8 32	1 4	2 8



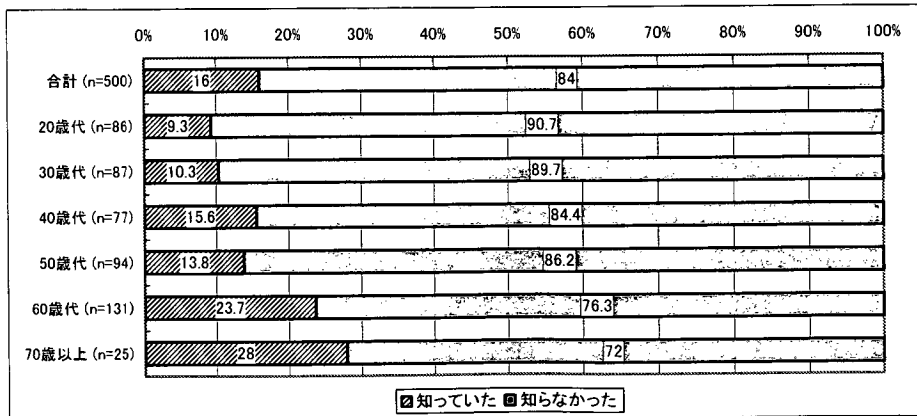
上段:度数 下段:%		Q13-12 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。生 産者や生産方法が明記されている食品は安全である					
		合計	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q20 あなたの 年齢をお答え下 さい。	合計	500 100	18 3.6	183 36.6	216 43.2	62 12.4	21 4.2
	20歳代	86 100	4 4.7	28 32.6	32 37.2	16 18.6	6 7
	30歳代	87 100	3 3.4	30 34.5	39 44.8	13 14.9	2 2.3
	40歳代	77 100	1 1.3	21 27.3	40 51.9	12 15.6	3 3.9
	50歳代	94 100	2 2.1	36 38.3	47 50	5 5.3	4 4.3
	60歳代	131 100	5 3.8	55 42	54 41.2	13 9.9	4 3.1
	70歳以上	25 100	3 12	13 52	4 16	3 12	2 8



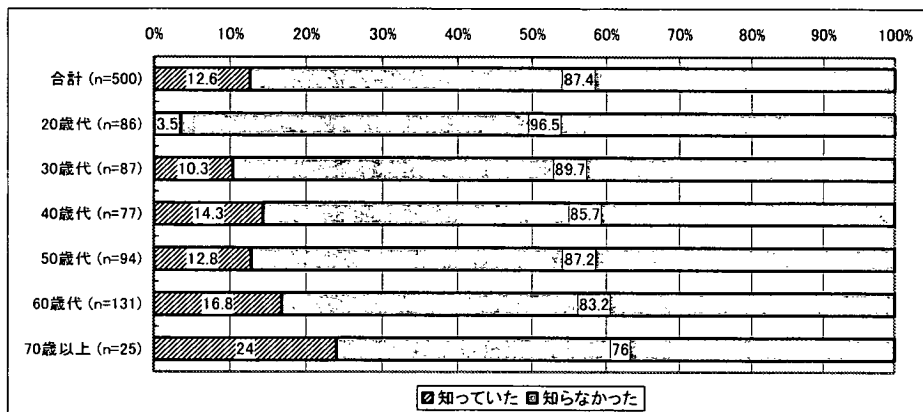
上段:度数 下段:%		Q13-13 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。安全性の高い食品であれば、価格が高くても優先的に購入したい					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500	55	207	198	30	10
		100	11	41.4	39.6	6	2
	20歳代	86	11	27	36	10	2
		100	12.8	31.4	41.9	11.6	2.3
	30歳代	87	6	27	45	7	2
		100	6.9	31	51.7	8	2.3
	40歳代	77	12	31	30	2	2
		100	15.6	40.3	39	2.6	2.6
50歳代	94	7	37	40	6	4	
	100	7.4	39.4	42.6	6.4	4.3	
60歳代	131	13	74	41	3	-	
	100	9.9	56.5	31.3	2.3	-	
70歳以上	25	6	11	6	2	-	
	100	24	44	24	8	-	



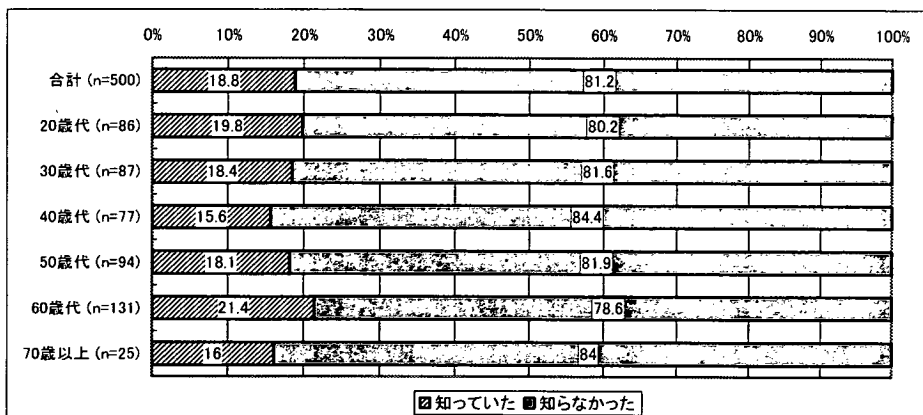
上段:度数 下段:%		Q14 あなたは、平成15年7月の国民の健康の保護を最優先とした食品安全基本法の施行によって、新たな食品安全行政がスタートしたことを知っていましたか。		
		合計	知っていた	知らなかった
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500	80	420
		100	16	84
	20歳代	86	8	78
		100	9.3	90.7
	30歳代	87	9	78
		100	10.3	89.7
	40歳代	77	12	65
		100	15.6	84.4
50歳代	94	13	81	
	100	13.8	86.2	
60歳代	131	31	100	
	100	23.7	76.3	
70歳以上	25	7	18	
	100	28	72	



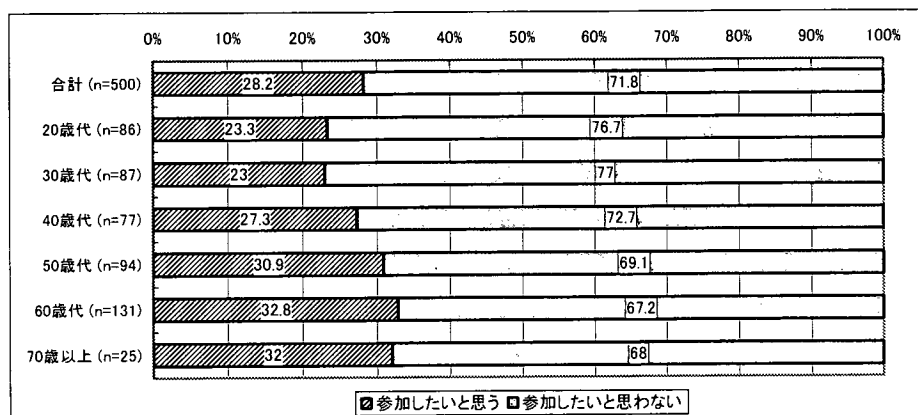
上段:度数 下段:%		Q15 あなたは、『リスクコミュニケーション』という言葉を知っていましたか。		
		合計	知っていた	知らなかった
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500	63	437
		100	12.6	87.4
	20歳代	86	3	83
		100	3.5	96.5
	30歳代	87	9	78
		100	10.3	89.7
	40歳代	77	11	66
		100	14.3	85.7
50歳代	94	12	82	
	100	12.8	87.2	
60歳代	131	22	109	
	100	16.8	83.2	
70歳以上	25	6	19	
	100	24	76	



上段:度数 下段:%		Q16 あなたは、全国各地で、食の安全の分野における意見交換会が開催されていることを知っていましたか。		
		合計	知っていた	知らなかった
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500	94	406
		100	18.8	81.2
	20歳代	86	17	69
		100	19.8	80.2
	30歳代	87	16	71
		100	18.4	81.6
	40歳代	77	12	65
		100	15.6	84.4
50歳代	94	17	77	
	100	18.1	81.9	
60歳代	131	28	103	
	100	21.4	78.6	
70歳以上	25	4	21	
	100	16	84	



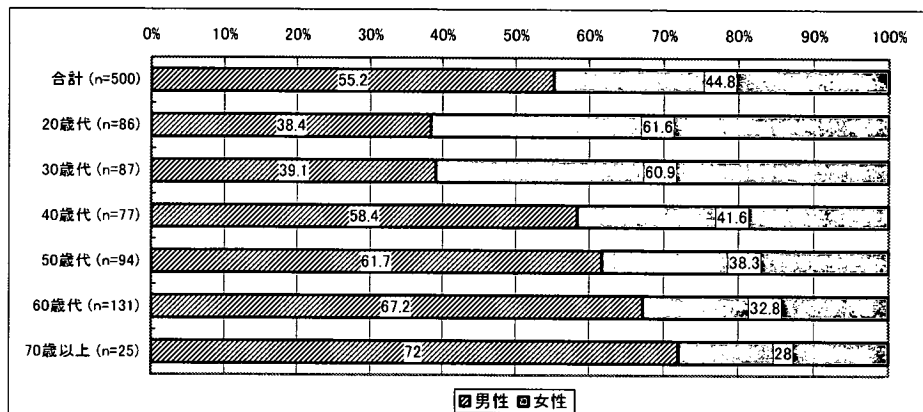
上段:度数 下段:%		Q17 あなたは、今後、食品の安全性に関連したシンポジウムや意見交換会などのイベントに参加したいと思いますか。		
		合計	参加したいと思う	参加したいと思わない
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500 100	141 28.2	359 71.8
	20歳代	86 100	20 23.3	66 76.7
	30歳代	87 100	20 23	67 77
	40歳代	77 100	21 27.3	56 72.7
	50歳代	94 100	29 30.9	65 69.1
	60歳代	131 100	43 32.8	88 67.2
	70歳以上	25 100	8 32	17 68



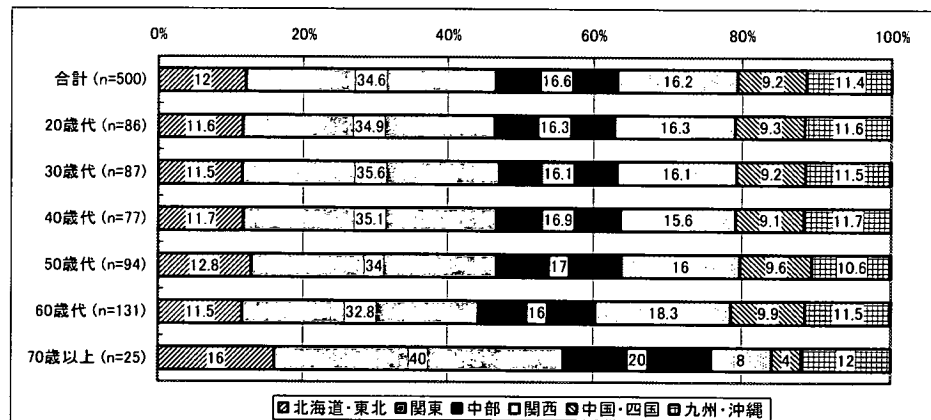
上段:度数 下段:%		Q18 あなたは、今後、食の安全の分野におけるリスクコミュニケーションを進めていく際に、行政機関はどのような取組をすべきだと思いますか。最大2つまで選んでください。									
		合計	シンポジウム・意見交換会を実施する	勉強会などに講師を派遣する	行政機関のホームページを充実させる	広報誌・パンフレットを配布する	テレビCM・新聞などで情報を提供する	専門家がマスメディアなどを通じてわかりやすい説明を行う	リスクコミュニケーションを行う人材を育成する	第三者機関が、行政機関のリスクコミュニケーションの取組を評価する	その他
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500 100	67 13.4	35 7	121 24.2	83 16.6	255 51	218 43.6	57 11.4	117 23.4	7 1.4
	20歳代	86 100	11 12.8	8 9.3	18 20.9	10 11.6	48 55.8	37 43	14 16.3	17 19.8	-
	30歳代	87 100	11 12.6	6 6.9	20 23	8 9.2	47 54	42 48.3	8 9.2	24 27.6	-
	40歳代	77 100	7 9.1	5 6.5	18 23.4	13 16.9	34 44.2	35 45.5	15 19.5	20 26	1 1.3
	50歳代	94 100	15 16	10 10.6	23 24.5	19 20.2	50 53.2	37 39.4	8 8.5	21 22.3	1 1.1
	60歳代	131 100	20 15.3	5 3.8	34 26	29 22.1	65 49.6	56 42.7	10 7.6	29 22.1	3 2.3
	70歳以上	25 100	3 12	1 4	8 32	4 16	11 44	11 44	2 8	6 24	2 8

注：複数回答(MA)のため、グラフは割愛している。

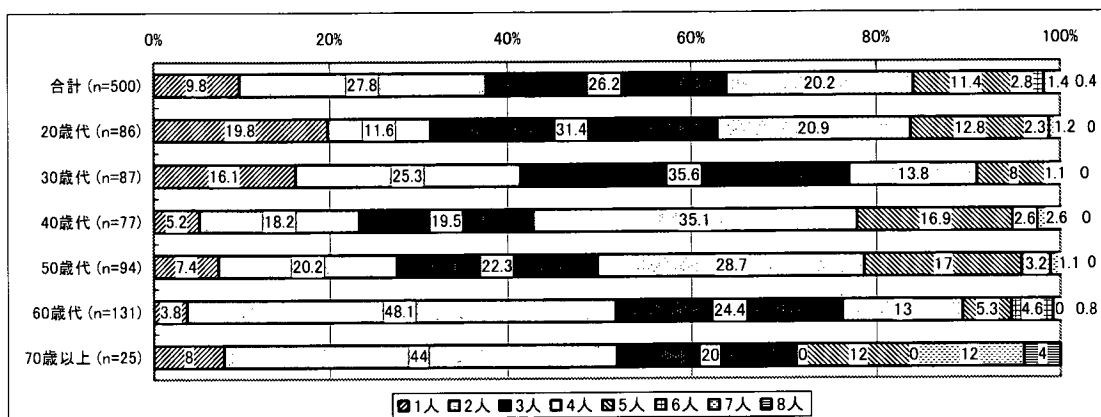
上段:度数 下段:%		Q19 あなたの性別をお答え下さい。		
		合計	男性	女性
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500 100	276 55.2	224 44.8
	20歳代	86 100	33 38.4	53 61.6
	30歳代	87 100	34 39.1	53 60.9
	40歳代	77 100	45 58.4	32 41.6
	50歳代	94 100	58 61.7	36 38.3
	60歳代	131 100	88 67.2	43 32.8
	70歳以上	25 100	18 72	7 28



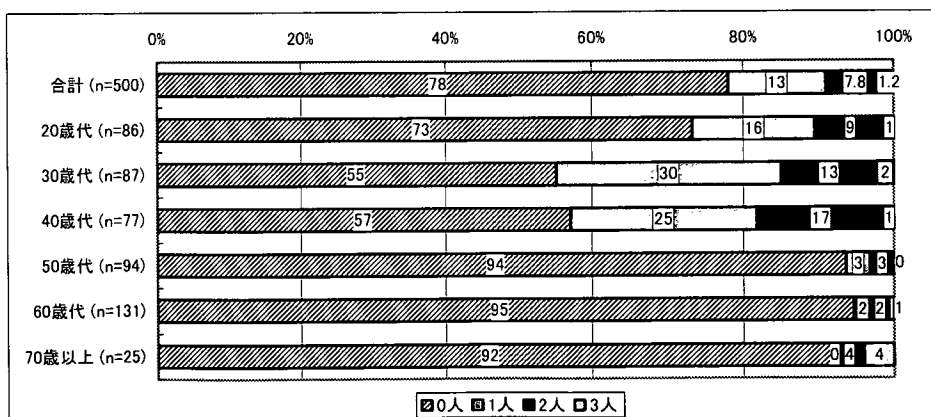
上段:度数 下段:%		Q21 あなたのお住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)						
		合計	北海道・東北	関東	中部	関西	中国・四国	九州・沖縄
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500 100	60 12	173 34.6	83 16.6	81 16.2	46 9.2	57 11.4
	20歳代	86 100	10 11.6	30 34.9	14 16.3	14 16.3	8 9.3	10 11.6
	30歳代	87 100	10 11.5	31 35.6	14 16.1	14 16.1	8 9.2	10 11.5
	40歳代	77 100	9 11.7	27 35.1	13 16.9	12 15.6	7 9.1	9 11.7
	50歳代	94 100	12 12.8	32 34	16 17	15 16	9 9.6	10 10.6
	60歳代	131 100	15 11.5	43 32.8	21 16	24 18.3	13 9.9	15 11.5
	70歳以上	25 100	4 16	10 40	5 20	2 8	1 4	3 12



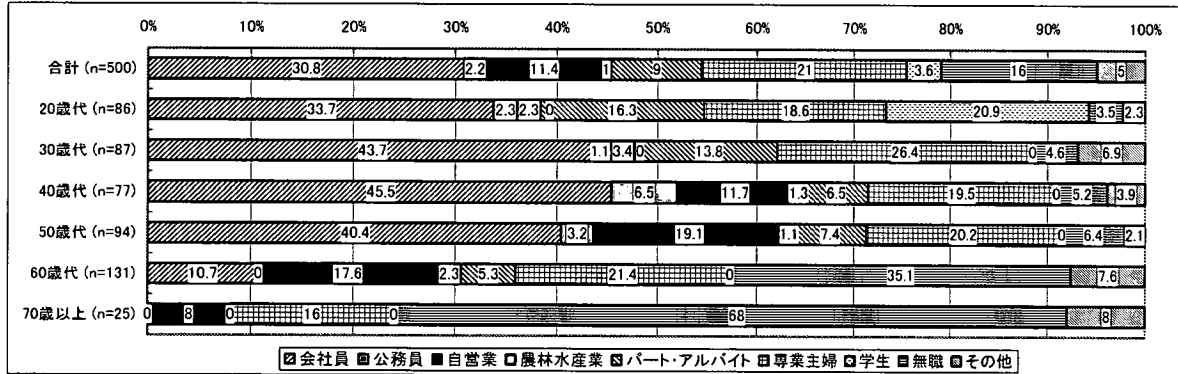
上段:度数 下段:%		Q22 あなたのお宅の世帯員数(あなたを含めて)についてお聞きします。回答欄の中に、人数を記入してください。										
		合計	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人		
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500 100	49 9.8	139 27.8	131 26.2	101 20.2	57 11.4	14 2.8	7 1.4	2 0.4		
	20歳代	86 100	17 19.8	10 11.6	27 31.4	18 20.9	11 12.8	2 2.3	1 1.2			
	30歳代	87 100	14 16.1	22 25.3	31 35.6	12 13.8	7 8	1 1.1				
	40歳代	77 100	4 5.2	14 18.2	15 19.5	27 35.1	13 16.9	2 2.6	2 2.6			
	50歳代	94 100	7 7.4	19 20.2	21 22.3	27 28.7	16 17	3 3.2	1 1.1			
	60歳代	131 100	5 3.8	63 48.1	32 24.4	17 13	7 5.3	6 4.6			1 0.8	
	70歳以上	25 100	2 8	11 44	5 20		3 12		3 12	1 4		



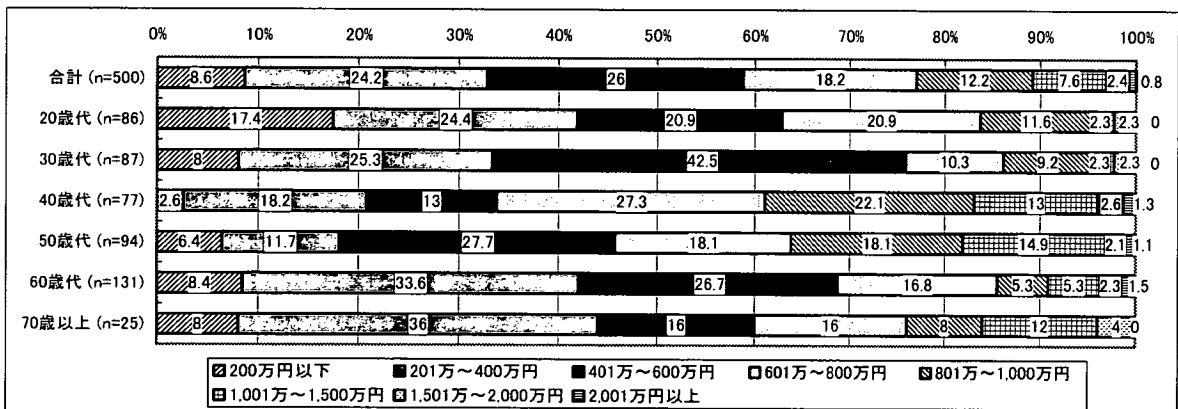
上段:度数 下段:%		Q23 あなたのお宅の世帯員数(あなたを含めて)についてお聞きします。あわせて、小学生以下のお子様の人数を記入してください。				
		合計	0人	1人	2人	3人
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500 100	390 78	65 13	39 7.8	6 1.2
	20歳代	86 100	63 73.3	14 16.3	8 9.3	1 1.2
	30歳代	87 100	48 55.2	26 29.9	11 12.6	2 2.3
	40歳代	77 100	44 57.1	19 24.7	13 16.9	1 1.3
	50歳代	94 100	88 93.6	3 3.2	3 3.2	
	60歳代	131 100	124 94.7	3 2.3	3 2.3	1 0.8
	70歳以上	25 100	23 92.0		1 4.0	1 4.0



上段:度数 下段:%		Q24 あなたのお仕事をお答え下さい。なお、複数該当する方は、主な仕事に印をつけてください。									
		合計	会社員	公務員	自営業	農林水産業	パート・アルバイト	専業主婦	学生	無職	その他
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500	154	11	57	5	45	105	18	80	25
		100	30.8	2.2	11.4	1	9	21	3.6	16	5
	20歳代	86	29	2	2	-	14	16	18	3	2
		100	33.7	2.3	2.3	-	16.3	18.6	20.9	3.5	2.3
	30歳代	87	38	1	3	-	12	23	-	4	6
		100	43.7	1.1	3.4	-	13.8	26.4	-	4.6	6.9
	40歳代	77	35	5	9	1	5	15	-	4	3
		100	45.5	6.5	11.7	1.3	6.5	19.5	-	5.2	3.9
50歳代	94	38	3	18	1	7	19	-	6	2	
	100	40.4	3.2	19.1	1.1	7.4	20.2	-	6.4	2.1	
60歳代	131	14	-	23	3	7	28	-	46	10	
	100	10.7	-	17.6	2.3	5.3	21.4	-	35.1	7.6	
70歳以上	25	-	-	2	-	-	4	-	17	2	
	100	-	-	8	-	-	16	-	68	8	

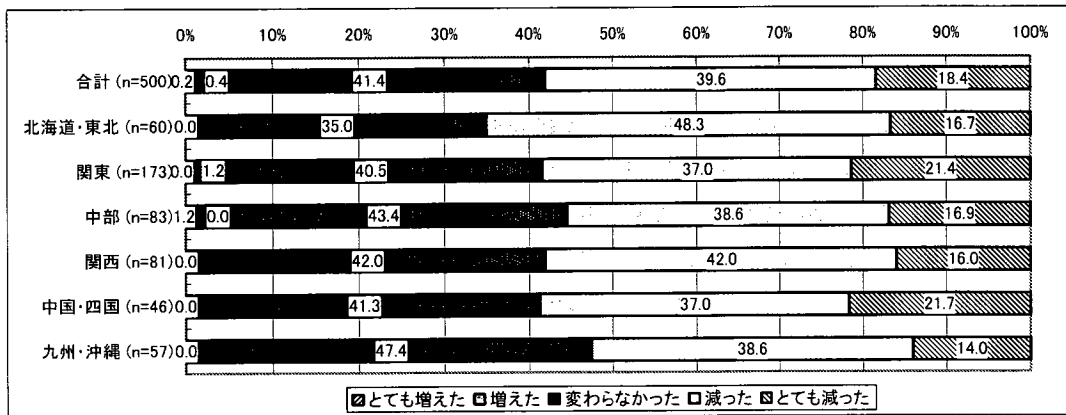


上段:度数 下段:%		Q25 あなたのお宅の年収(家族全体で、年金等も含んだ年収)は税込みでいくらぐらいでしょうか。								
		合計	200万円以下	201万~400万円	401万~600万円	601万~800万円	801万~1,000万円	1,001万~1,500万円	1,501万~2,000万円	2,001万円以上
Q20 あなたの年齢をお答え下さい。	合計	500	43	121	130	91	61	38	12	4
		100	8.6	24.2	26	18.2	12.2	7.6	2.4	0.8
	20歳代	86	15	21	18	18	10	2	-	-
		100	17.4	24.4	20.9	20.9	11.6	2.3	-	-
	30歳代	87	7	22	37	9	8	2	-	-
		100	8	25.3	42.5	10.3	9.2	2.3	-	-
	40歳代	77	2	14	10	21	17	10	2	1
		100	2.6	18.2	13	27.3	22.1	13	2.6	1.3
50歳代	94	6	11	26	17	17	14	2	1	
	100	6.4	11.7	27.7	18.1	18.1	14.9	2.1	1.1	
60歳代	131	11	44	35	22	7	7	3	2	
	100	8.4	33.6	26.7	16.8	5.3	5.3	2.3	1.5	
70歳以上	25	2	9	4	4	2	3	1	-	
	100	8	36	16	16	8	12	4	-	

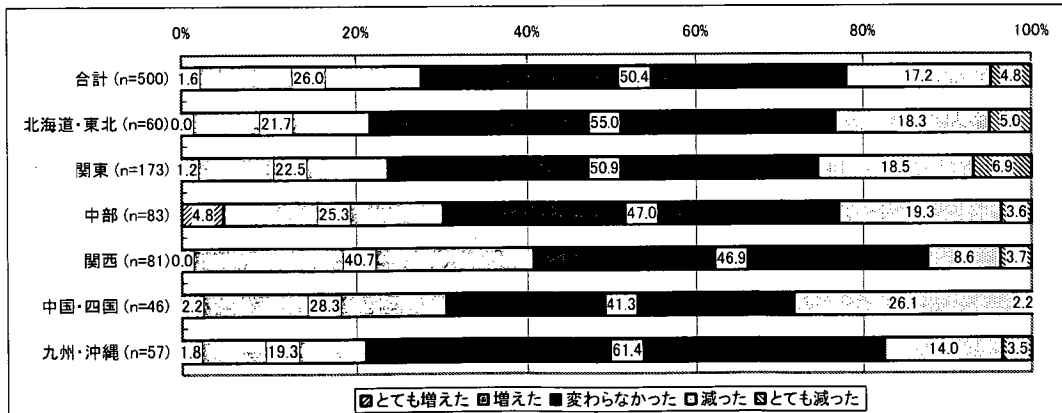


⑥クロス集計結果 (Q21)

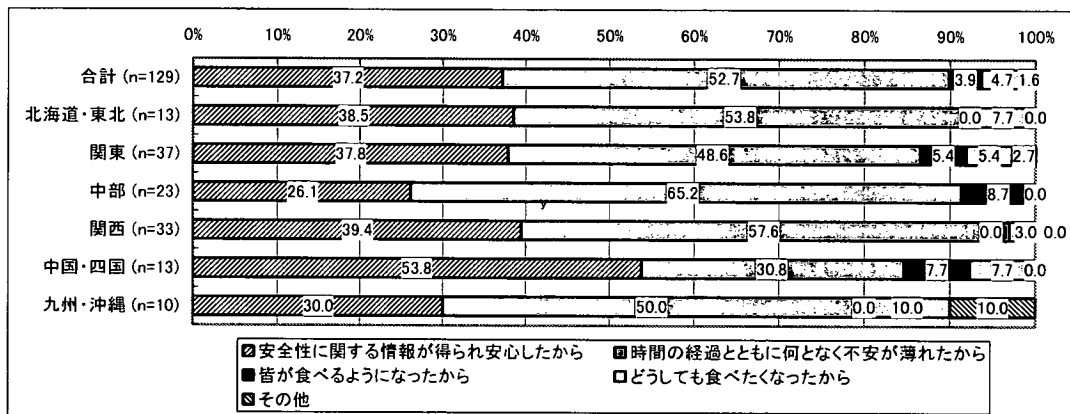
上段:度数 下段:%		Q1 BSE(牛海綿状脳症)がはじめて発生した直後(2001年9月~10月頃)、あなたが牛肉を食べる量に変化はありましたか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	500	1	2	207	198	92
		100	0.2	0.4	41.4	39.6	18.4
	北海道・東北	60	-	-	21	29	10
		100	-	-	35	48.3	16.7
	関東	173	-	2	70	64	37
		100	-	1.2	40.5	37	21.4
	中部	83	1	-	36	32	14
		100	1.2	-	43.4	38.6	16.9
関西	81	-	-	34	34	13	
	100	-	-	42	42	16	
中国・四国	46	-	-	19	17	10	
	100	-	-	41.3	37	21.7	
九州・沖縄	57	-	-	27	22	8	
	100	-	-	47.4	38.6	14	



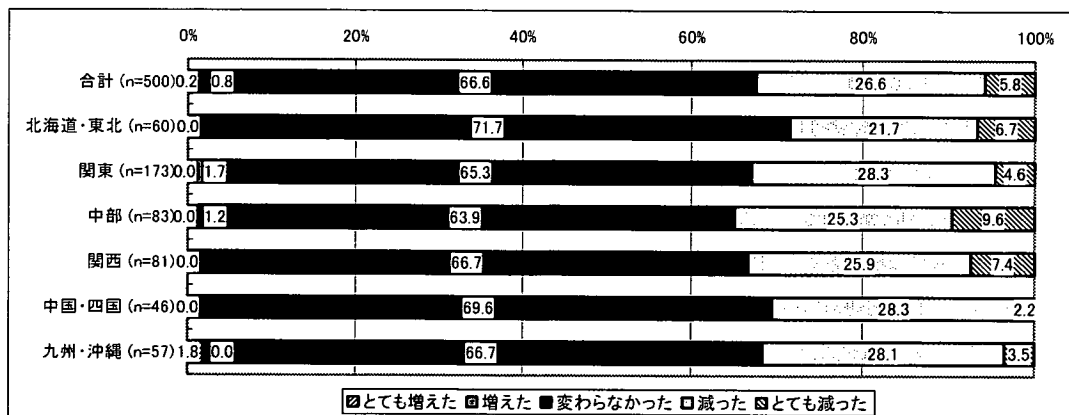
上段:度数 下段:%		Q2 BSEの発生直後と現在を比べて、あなたが牛肉を食べる量に変化はありますか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	500	8	130	252	86	24
		100	1.6	26	50.4	17.2	4.8
	北海道・東北	60	-	13	33	11	3
		100	-	21.7	55	18.3	5
	関東	173	2	39	88	32	12
		100	1.2	22.5	50.9	18.5	6.9
	中部	83	4	21	39	16	3
		100	4.8	25.3	47	19.3	3.6
関西	81	-	33	38	7	3	
	100	-	40.7	46.9	8.6	3.7	
中国・四国	46	1	13	19	12	1	
	100	2.2	28.3	41.3	26.1	2.2	
九州・沖縄	57	1	11	35	8	2	
	100	1.8	19.3	61.4	14	3.5	



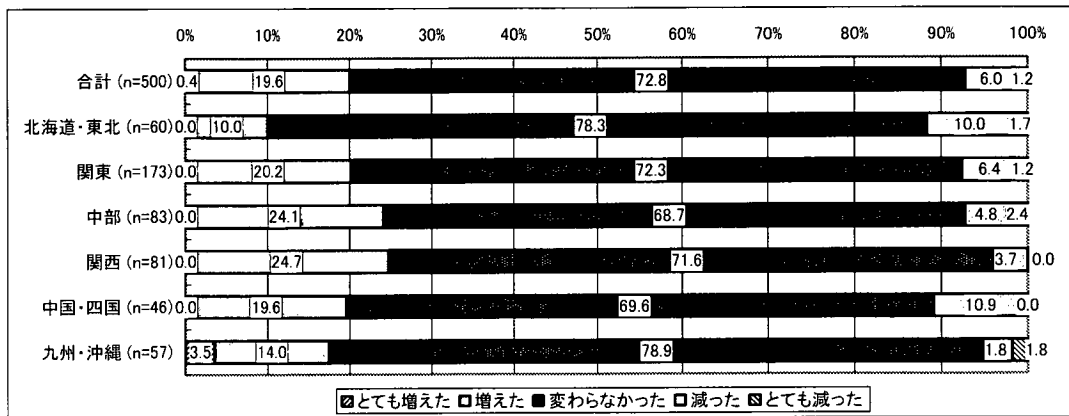
上段:度数 下段:%		Q3 Q1で「減った」「とても減った」、かつQ2で「とても増えた」「増えた」をお選びの方に伺います。その答えた理由のうち最も近いものに印をつけてください。					
		合計	安全性に関する情報が得られ安心したから	時間の経過とともに何となく不安が薄れたから	皆が食べるようになったから	どうしても食べなくなったから	その他
Q21 あなたの お住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	129 100	48 37.2	68 52.7	5 3.9	6 4.7	2 1.6
	北海道・東北	13 100	5 38.5	7 53.8	-	1 7.7	-
	関東	37 100	14 37.8	18 48.6	2 5.4	2 5.4	1 2.7
	中部	23 100	6 26.1	15 65.2	2 8.7	-	-
	関西	33 100	13 39.4	19 57.6	-	1 3.0	-
	中国・四国	13 100	7 53.8	4 30.8	1 7.7	1 7.7	-
	九州・沖縄	10 100	3 30.0	5 50.0	-	1 10.0	1 10.0



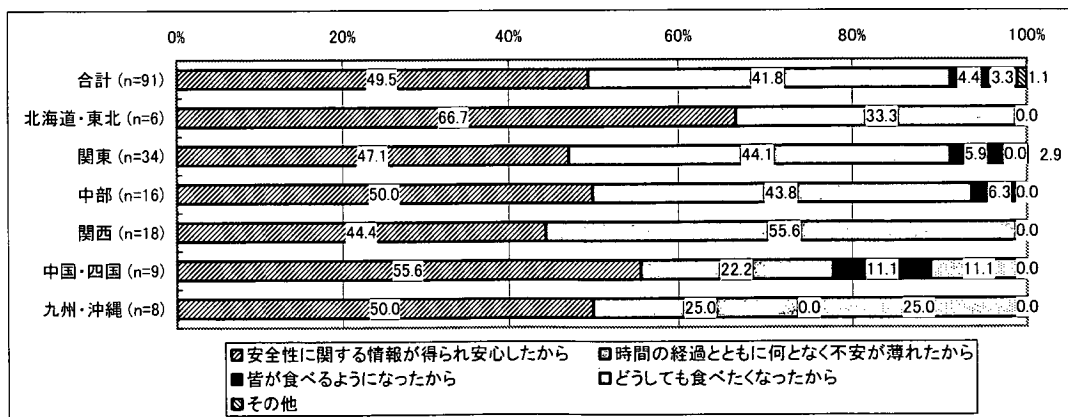
上段:度数 下段:%		Q4 鳥インフルエンザが発生した直後(2004年1~3月頃)、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありましたか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q21 あなたの お住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500 100	1 0.2	4 0.8	333 66.6	133 26.6	29 5.8
	北海道・東北	60 100	-	-	43 71.7	13 21.7	4 6.7
	関東	173 100	-	3 1.7	113 65.3	49 28.3	8 4.6
	中部	83 100	-	1 1.2	53 63.9	21 25.3	8 9.6
	関西	81 100	-	-	54 66.7	21 25.9	6 7.4
	中国・四国	46 100	-	-	32 69.6	13 28.3	1 2.2
	九州・沖縄	57 100	1 1.8	-	38 66.7	16 28.1	2 3.5



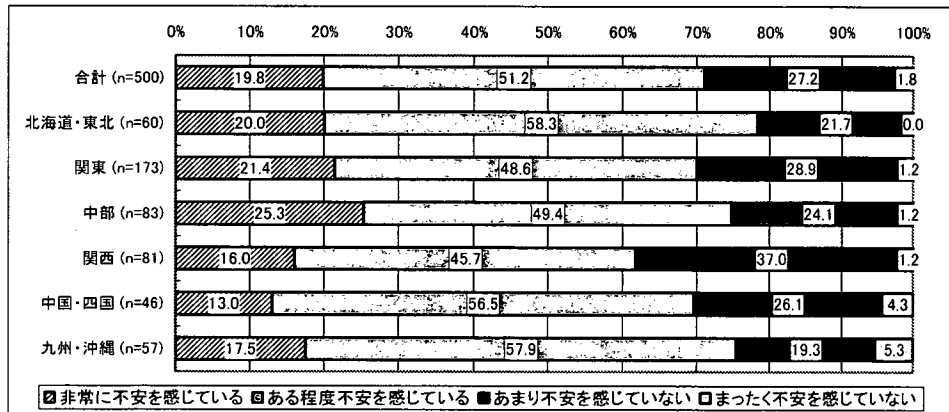
上段:度数 下段:%		Q5 鳥インフルエンザの発生直後と現在を比べて、あなたが鶏肉・鶏卵を食べる量に変化はありますか。					
		合計	とても増えた	増えた	変わらなかった	減った	とても減った
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	500	2	98	364	30	6
		100	0.4	19.6	72.8	6	1.2
	北海道・東北	60	-	6	47	6	1
		100	-	10	78.3	10	1.7
	関東	173	-	35	125	11	2
		100	-	20.2	72.3	6.4	1.2
	中部	83	-	20	57	4	2
		100	-	24.1	68.7	4.8	2.4
関西	81	-	20	58	3	-	
	100	-	24.7	71.6	3.7	-	
中国・四国	46	-	9	32	5	-	
	100	-	19.6	69.6	10.9	-	
九州・沖縄	57	2	8	45	1	1	
	100	3.5	14	78.9	1.8	1.8	



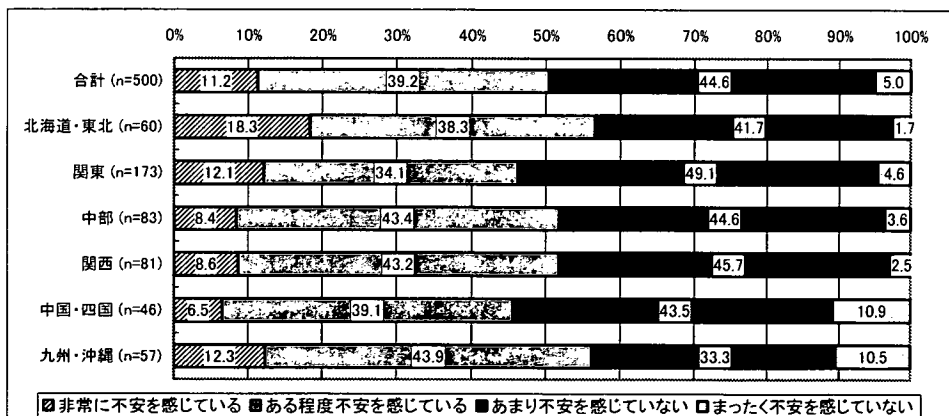
上段:度数 下段:%		Q6 Q4で「減った」「とても減った」、かつQ5で「とても増えた」「増えた」をお選びの方に伺います。その答えた理由のうち最も近いものに印をつけてください。					
		合計	安全性に関する情報が得られ安心したから	時間の経過とともに何となく不安が薄れたから	皆が食べるようになったから	どうしても食べたくなくなったから	その他
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	91	45	38	4	3	1
		100	49.5	41.8	4.4	3.3	1.1
	北海道・東北	6	4	2	-	-	-
		100	66.7	33.3	-	-	-
	関東	34	16	15	2	-	1
		100	47.1	44.1	5.9	-	2.9
	中部	16	8	7	1	-	-
		100	50.0	43.8	6.3	-	-
関西	18	8	10	-	-	-	
	100	44.4	55.6	-	-	-	
中国・四国	9	5	2	1	-	1	
	100	55.6	22.2	11.1	-	11.1	
九州・沖縄	8	4	2	-	2	-	
	100	50.0	25.0	-	25.0	-	



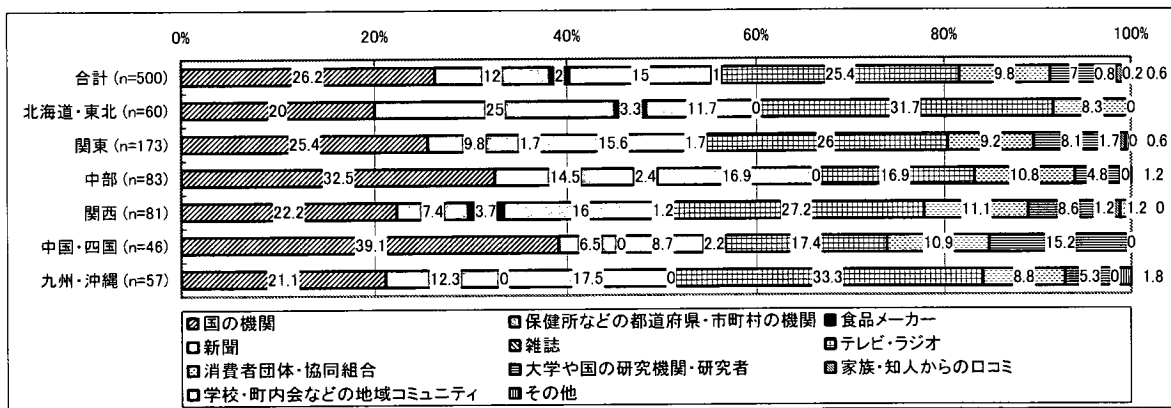
上段:度数 下段:%		Q7-1 あなたはBSEをどの程度不安だと感じていますか。				
		合計	非常に不安を感じている	ある程度不安を感じている	あまり不安を感じていない	まったく不安を感じていない
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	500	99	256	136	9
		100	19.8	51.2	27.2	1.8
	北海道・東北	60	12	35	13	-
		100	20	58.3	21.7	-
	関東	173	37	84	50	2
		100	21.4	48.6	28.9	1.2
	中部	83	21	41	20	1
		100	25.3	49.4	24.1	1.2
関西	81	13	37	30	1	
	100	16	45.7	37	1.2	
中国・四国	46	6	26	12	2	
	100	13	56.5	26.1	4.3	
九州・沖縄	57	10	33	11	3	
	100	17.5	57.9	19.3	5.3	



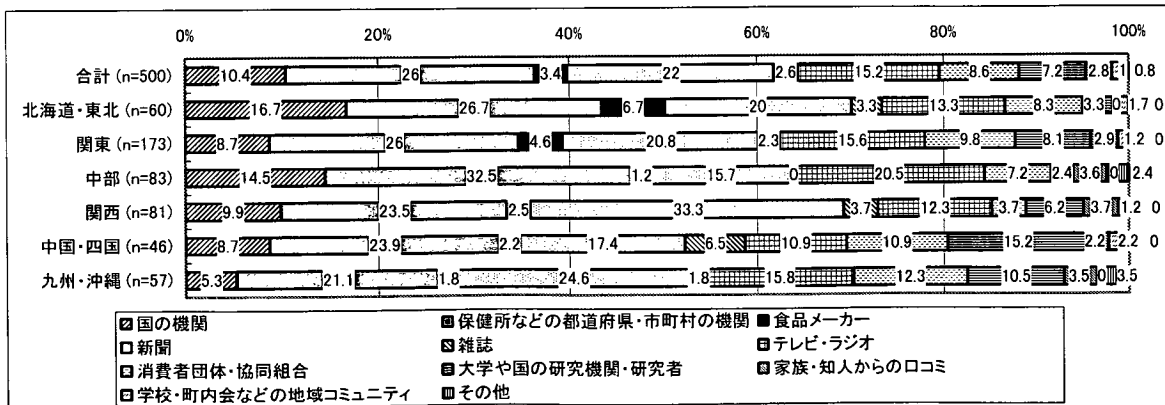
上段:度数 下段:%		Q7-2 あなたは鳥インフルエンザをどの程度不安だと感じていますか。				
		合計	非常に不安を感じている	ある程度不安を感じている	あまり不安を感じていない	まったく不安を感じていない
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	500	56	196	223	25
		100	11.2	39.2	44.6	5
	北海道・東北	60	11	23	25	1
		100	18.3	38.3	41.7	1.7
	関東	173	21	59	85	8
		100	12.1	34.1	49.1	4.6
	中部	83	7	36	37	3
		100	8.4	43.4	44.6	3.6
関西	81	7	35	37	2	
	100	8.6	43.2	45.7	2.5	
中国・四国	46	3	18	20	5	
	100	6.5	39.1	43.5	10.9	
九州・沖縄	57	7	25	19	6	
	100	12.3	43.9	33.3	10.5	



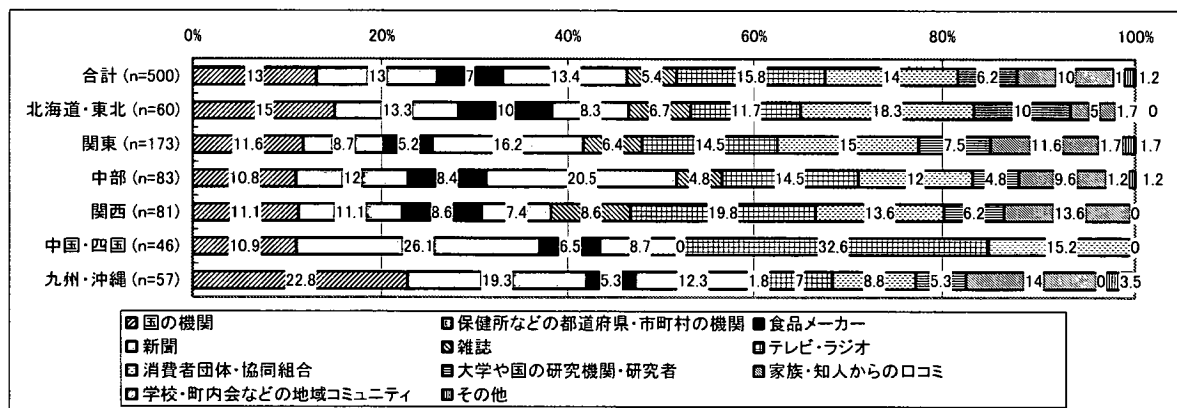
上段:度数 下段:%		Q8-1 食品の安全性に関する情報について、あなたはどこから入手する情報を信頼していますか。以下の選択肢の中から、最も信頼しているものから順番に3位まで選んでください。(1位)												
		合計	国の機関	保健所などの都道府県・市町村の機関	食品メーカー	新聞	雑誌	テレビ・ラジオ	消費者団体・協同組合	大学や国の研究機関・研究者	家族・知人からの口コミ	学校・町内会などの地域コミュニティ	その他	
Q21 あなたの住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500	131	60	10	75	5	127	49	35	4	1	3	
		100	26.2	12	2	15	1	25.4	9.8	7	0.8	0.2	0.6	
	北海道・東北	60	12	15	2	7	-	19	5	-	-	-	-	
		100	20	25	3.3	11.7	-	31.7	8.3	-	-	-	-	
	関東	173	44	17	3	27	3	45	16	14	3	-	1	
		100	25.4	9.8	1.7	15.6	1.7	26	9.2	8.1	1.7	-	0.6	
	中部	83	27	12	2	14	-	14	9	4	-	-	1	
	100	32.5	14.5	2.4	16.9	-	16.9	10.8	4.8	-	-	1.2		
関西	81	18	6	3	13	1	22	9	7	1	1	-		
	100	22.2	7.4	3.7	16	1.2	27.2	11.1	8.6	1.2	1.2	-		
中国・四国	46	18	3	-	4	1	8	5	7	-	-	-		
	100	39.1	6.5	-	8.7	2.2	17.4	10.9	15.2	-	-	-		
九州・沖縄	57	12	7	-	10	-	19	5	3	-	-	1		
	100	21.1	12.3	-	17.5	-	33.3	8.8	5.3	-	-	1.8		



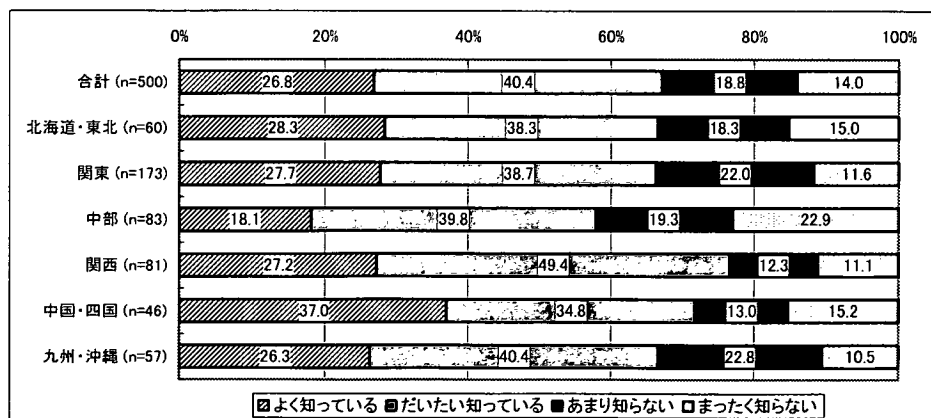
上段:度数 下段:%		Q8-2 食品の安全性に関する情報について、あなたはどこから入手する情報を信頼していますか。以下の選択肢の中から、最も信頼しているものから順番に3位まで選んでください。(2位)												
		合計	国の機関	保健所などの都道府県・市町村の機関	食品メーカー	新聞	雑誌	テレビ・ラジオ	消費者団体・協同組合	大学や国の研究機関・研究者	家族・知人からの口コミ	学校・町内会などの地域コミュニティ	その他	
Q21 あなたの住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500	52	130	17	110	13	76	43	36	14	5	4	
		100	10.4	26	3.4	22	2.6	15.2	8.6	7.2	2.8	1	0.8	
	北海道・東北	60	10	16	4	12	2	8	5	2	-	1	-	
		100	16.7	26.7	6.7	20	3.3	13.3	8.3	3.3	-	1.7	-	
	関東	173	15	45	8	36	4	27	17	14	5	2	-	
		100	8.7	26	4.6	20.8	2.3	15.6	9.8	8.1	2.9	1.2	-	
	中部	83	12	27	1	13	-	17	6	2	3	-	2	
	100	14.5	32.5	1.2	15.7	-	20.5	7.2	2.4	3.6	-	2.4		
関西	81	8	19	2	27	3	10	3	5	3	1	-		
	100	9.9	23.5	2.5	33.3	3.7	12.3	3.7	6.2	3.7	1.2	-		
中国・四国	46	4	11	1	8	3	5	5	7	1	1	-		
	100	8.7	23.9	2.2	17.4	6.5	10.9	10.9	15.2	2.2	2.2	-		
九州・沖縄	57	3	12	1	14	1	9	7	6	2	-	2		
	100	5.3	21.1	1.8	24.6	1.8	15.8	12.3	10.5	3.5	-	3.5		



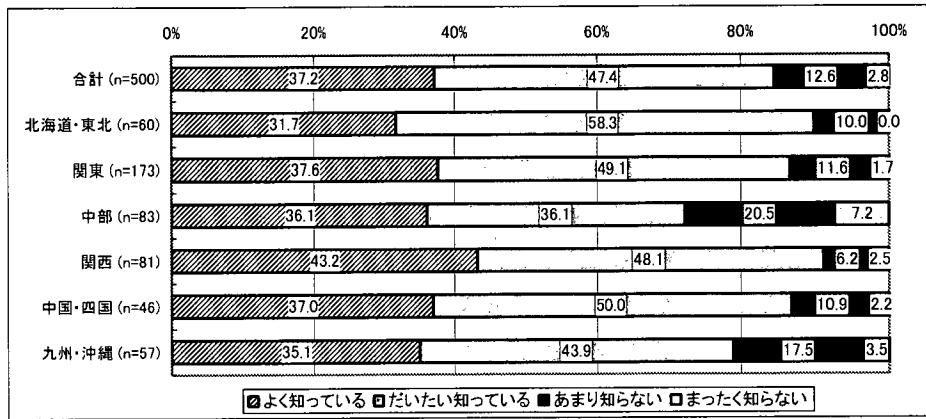
上段:度数 下段:%		Q8-3 食品の安全性に関する情報について、あなたはどこから入手する情報を信頼していますか。以下の選択肢の中から、最も信頼しているものから順番に3位まで選んでください。(3位)											
		合計	国の機関	保健所などの都道府県・市町村の機関	食品メーカー	新聞	雑誌	テレビ・ラジオ	消費者団体・協同組合	大学や国の研究機関・研究者	家族・知人からの口コミ	学校・町内会などの地域コミュニティ	その他
Q21 あなたのお住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500	65	65	35	67	27	79	70	31	50	5	6
	100	13	13	7	13.4	5.4	15.8	14	6.2	10	1	1.2	
	北海道・東北	60	9	8	6	5	4	7	11	6	3	1	-
	100	15	13.3	10	8.3	6.7	11.7	18.3	10	5	1.7	-	
	関東	173	20	15	9	28	11	25	26	13	20	3	3
	100	11.6	8.7	5.2	16.2	6.4	14.5	15	7.5	11.6	1.7	1.7	
	中部	83	9	10	7	17	4	12	10	4	8	1	1
	100	10.8	12	8.4	20.5	4.8	14.5	12	4.8	9.6	1.2	1.2	
関西	81	9	9	7	6	7	16	11	5	11	-	-	
100	11.1	11.1	8.6	7.4	8.6	19.8	13.6	6.2	13.6	-	-		
中国・四国	46	5	12	3	4	-	15	7	-	-	-	-	
100	10.9	26.1	6.5	8.7	-	32.6	15.2	-	-	-	-		
九州・沖縄	57	13	11	3	7	1	4	5	3	8	-	2	
100	22.8	19.3	5.3	12.3	1.8	7	8.8	5.3	14	-	3.5		



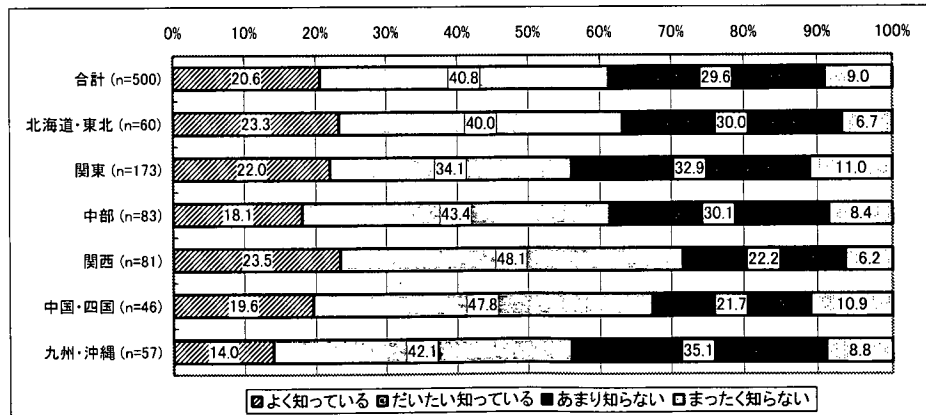
上段:度数 下段:%		Q10-1 以下の項目について、あなたはどの程度ご存じですか。日本では、変異型クローンフェルト・ヤコブ病(vCJD)の患者発生が1名確認されている				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q21 あなたのお住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500	134	202	94	70
	100	26.8	40.4	18.8	14.0	14
	北海道・東北	60	17	23	11	9
	100	28.3	38.3	18.3	15.0	15
	関東	173	48	67	38	20
	100	27.7	38.7	22.0	11.6	19
	中部	83	15	33	16	19
	100	18.1	39.8	19.3	22.9	11.1
関西	81	22	40	10	9	
100	27.2	49.4	12.3	11.1	7	
中国・四国	46	17	16	6	7	
100	37.0	34.8	13.0	15.2	6	
九州・沖縄	57	15	23	13	6	
100	26.3	40.4	22.8	10.5	10.5	



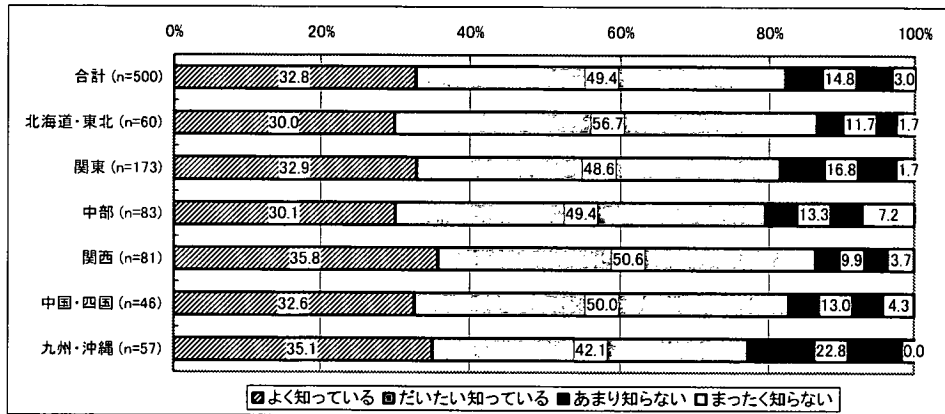
上段:度数 下段:%		Q10-2 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。国産牛は、全てBSEの検査を行っている				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	500 100	186 37.2	237 47.4	63 12.6	14 2.8
	北海道・東北	60 100	19 31.7	35 58.3	6 10	-
	関東	173 100	65 37.6	85 49.1	20 11.6	3 1.7
	中部	83 100	30 36.1	30 36.1	17 20.5	6 7.2
	関西	81 100	35 43.2	39 48.1	5 6.2	2 2.5
	中国・四国	46 100	17 37	23 50	5 10.9	1 2.2
	九州・沖縄	57 100	20 35.1	25 43.9	10 17.5	2 3.5



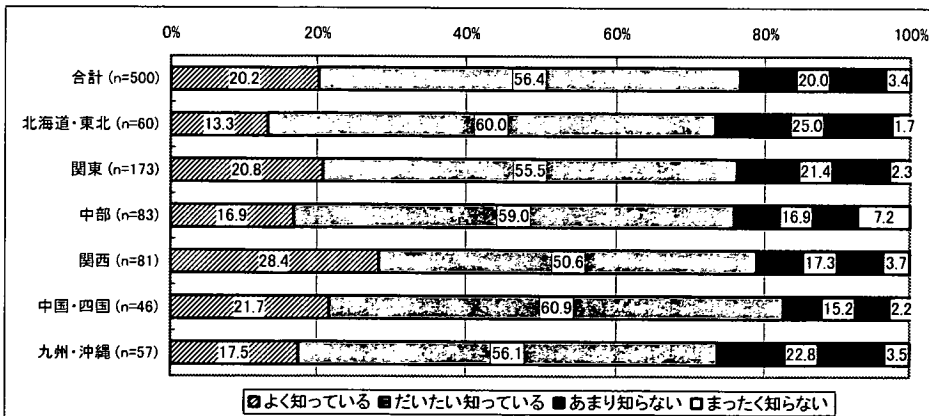
上段:度数 下段:%		Q10-3 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。日本では、牛をと畜した後に、特定危険部位(人が食べると感染の恐れがあるといわれている部分(SRM))が除去されている				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	500 100	103 20.6	204 40.8	148 29.6	45 9
	北海道・東北	60 100	14 23.3	24 40	18 30	4 6.7
	関東	173 100	38 22	59 34.1	57 32.9	19 11
	中部	83 100	15 18.1	36 43.4	25 30.1	7 8.4
	関西	81 100	19 23.5	39 48.1	18 22.2	5 6.2
	中国・四国	46 100	9 19.6	22 47.8	10 21.7	5 10.9
	九州・沖縄	57 100	8 14.0	24 42.1	20 35.1	5 8.8



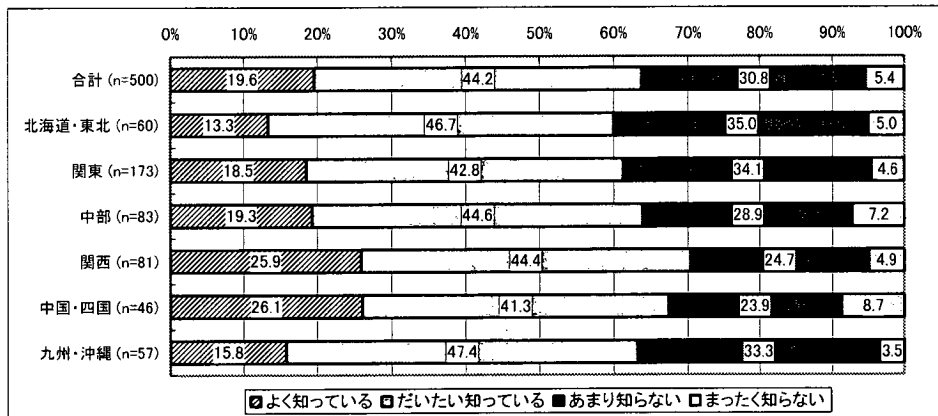
上段:度数 下段:%		Q10-4 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。日本では、BSEの感染源と考えられているえさ(肉骨粉)を牛に食べさせることを禁止している				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	500 100	164 32.8	247 49.4	74 14.8	15 3.0
	北海道・東北	60 100	18 30.0	34 56.7	7 11.7	1 1.7
	関東	173 100	57 32.9	84 48.6	29 16.8	3 1.7
	中部	83 100	25 30.1	41 49.4	11 13.3	6 7.2
	関西	81 100	29 35.8	41 50.6	8 9.9	3 3.7
	中国・四国	46 100	15 32.6	23 50.0	6 13.0	2 4.3
	九州・沖縄	57 100	20 35.1	24 42.1	13 22.8	- 0.0



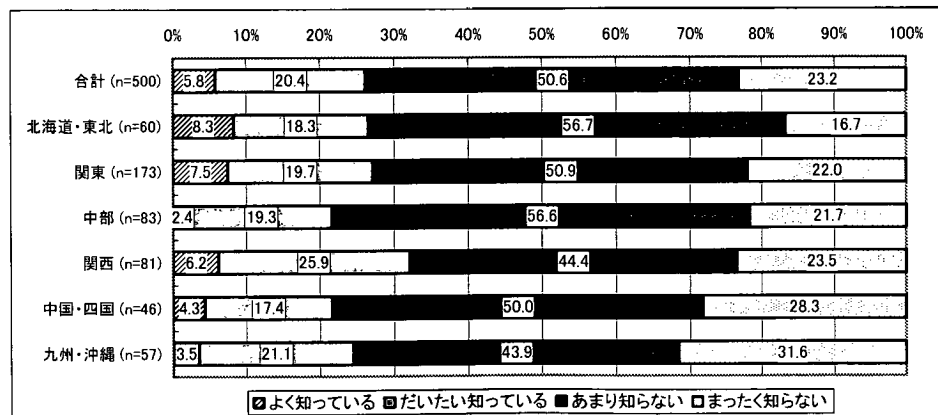
上段:度数 下段:%		Q10-5 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。通常、鳥インフルエンザに感染した鳥と濃厚に接触しない限り、鳥から人に感染することはない				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	500 100	101 20.2	282 56.4	100 20.0	17 3.4
	北海道・東北	60 100	8 13.3	36 60.0	15 25.0	1 1.7
	関東	173 100	36 20.8	96 55.5	37 21.4	4 2.3
	中部	83 100	14 16.9	49 59.0	14 16.9	6 7.2
	関西	81 100	23 28.4	41 50.6	14 17.3	3 3.7
	中国・四国	46 100	10 21.7	28 60.9	7 15.2	1 2.2
	九州・沖縄	57 100	10 17.5	32 56.1	13 22.8	2 3.5



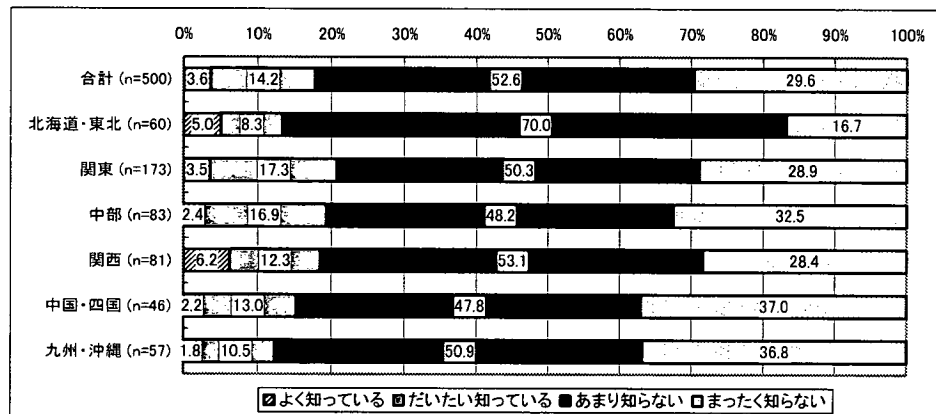
上段:度数 下段:%		Q10-6 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。鳥インフルエンザウイルスは、通常の調理温度で容易に死滅する				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	500	98	221	154	27
		100	19.6	44.2	30.8	5.4
	北海道・東北	60	8	28	21	3
		100	13.3	46.7	35	5
	関東	173	32	74	59	8
		100	18.5	42.8	34.1	4.6
	中部	83	16	37	24	6
		100	19.3	44.6	28.9	7.2
関西	81	21	36	20	4	
	100	25.9	44.4	24.7	4.9	
中国・四国	46	12	19	11	4	
	100	26.1	41.3	23.9	8.7	
九州・沖縄	57	9	27	19	2	
	100	15.8	47.4	33.3	3.5	



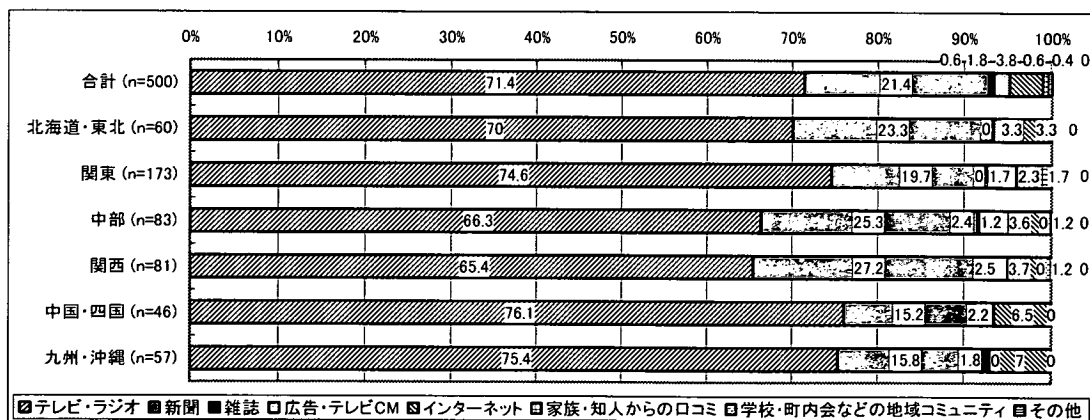
上段:度数 下段:%		Q10-7 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。通常、国産の鶏卵は、殺菌剤で洗卵されている				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	500	29	102	253	116
		100	5.8	20.4	50.6	23.2
	北海道・東北	60	5	11	34	10
		100	8.3	18.3	56.7	16.7
	関東	173	13	34	88	38
		100	7.5	19.7	50.9	22
	中部	83	2	16	47	18
		100	2.4	19.3	56.6	21.7
関西	81	5	21	36	19	
	100	6.2	25.9	44.4	23.5	
中国・四国	46	2	8	23	13	
	100	4.3	17.4	50	28.3	
九州・沖縄	57	2	12	25	18	
	100	3.5	21.1	43.9	31.6	



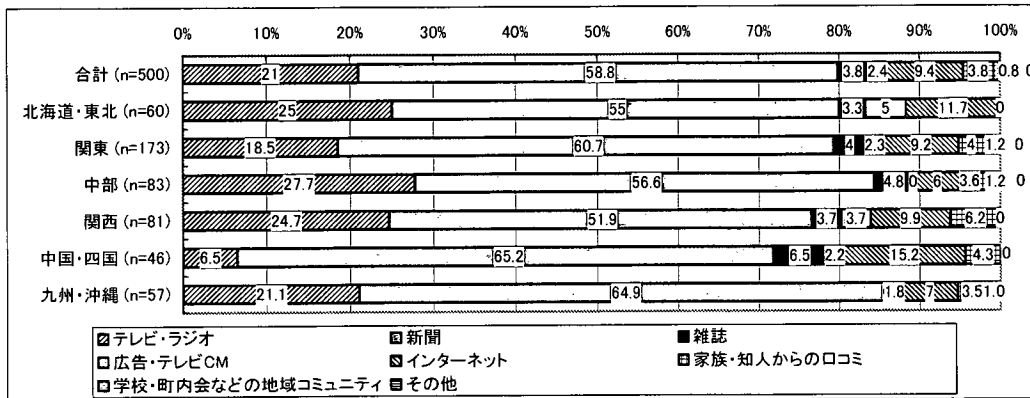
上段:度数 下段:%		Q10-8 以下の項目について、あなたほどの程度ご存じですか。通常、国産の鶏肉は、食鳥処理場で脱羽され、冷水で洗浄されている				
		合計	よく知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない
Q21 あなたのお住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500	18	71	263	148
		100	3.6	14.2	52.6	29.6
	北海道・東北	60	3	5	42	10
		100	5	8.3	70	16.7
	関東	173	6	30	87	50
		100	3.5	17.3	50.3	28.9
	中部	83	2	14	40	27
		100	2.4	16.9	48.2	32.5
関西	81	5	10	43	23	
	100	6.2	12.3	53.1	28.4	
中国・四国	46	1	6	22	17	
	100	2.2	13	47.8	37	
九州・沖縄	57	1	6	29	21	
	100	1.8	10.5	50.9	36.8	



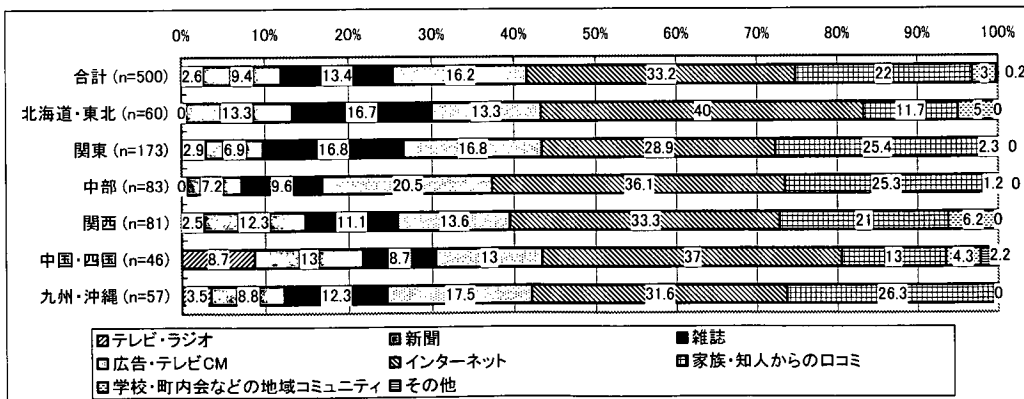
上段:度数 下段:%		Q11-1 あなたはBSEや鳥インフルエンザなどをはじめとした食品の安全性に関する情報を、普段どのような手段で得ていますか。以下の選択肢の中から、よく利用するものから順番に3位まで選んでください。(1位)								
		合計	テレビ・ラジオ	新聞	雑誌	広告・テレビCM	インターネット	家族・知人からの口コミ	学校・町内会などの地域コミュニティ	その他
Q21 あなたのお住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500	357	107	3	9	19	3	2	
		100	71.4	21.4	0.6	1.8	3.8	0.6	0.4	
	北海道・東北	60	42	14	-	2	2	-	-	
		100	70	23.3	-	3.3	3.3	-	-	
	関東	173	129	34	-	3	4	3	-	
		100	74.6	19.7	-	1.7	2.3	1.7	-	
	中部	83	55	21	2	1	3	-	1	
		100	66.3	25.3	2.4	1.2	3.6	-	1.2	
関西	81	53	22	-	2	3	-	1		
	100	65.4	27.2	-	2.5	3.7	-	1.2		
中国・四国	46	35	7	-	1	3	-	-		
	100	76.1	15.2	-	2.2	6.5	-	-		
九州・沖縄	57	43	9	1	-	4	-	-		
	100	75.4	15.8	1.8	-	7	-	-		



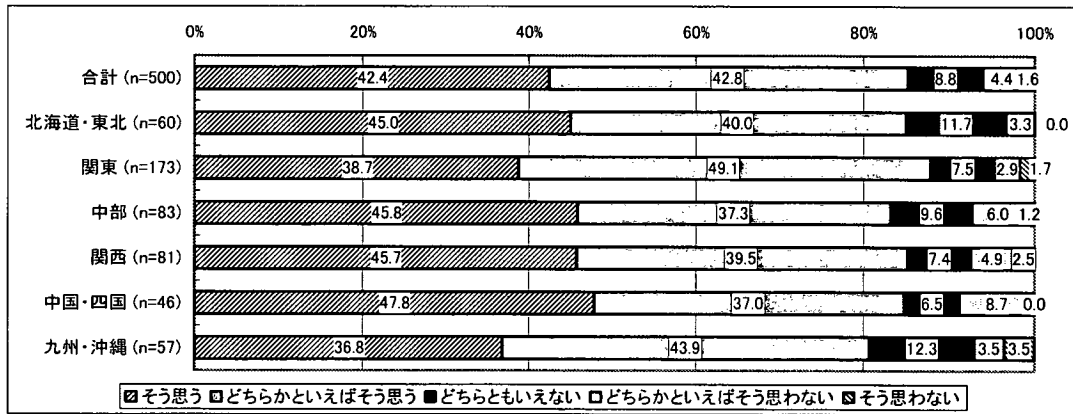
上段:度数 下段:%		Q11-2 あなたはBSEや鳥インフルエンザなどをはじめとした食品の安全性に関する情報を、普段どのような手段で得ていますか。以下の選択肢の中から、よく利用するものから順番に3位まで選んでください。(2位)								
		合計	テレビ・ラジオ	新聞	雑誌	広告・テレビCM	インターネット	家族・知人からの口コミ	学校・町内会などの地域コミュニティ	その他
Q21 あなたの お住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500	105	294	19	12	47	19	4	-
		100	21	58.8	3.8	2.4	9.4	3.8	0.8	-
	北海道・東北	60	15	33	2	3	7	-	-	-
		100	25	55	3.3	5	11.7	-	-	-
	関東	173	32	105	7	4	16	7	2	-
		100	18.5	60.7	4	2.3	9.2	4	1.2	-
	中部	83	23	47	4	-	5	3	1	-
		100	27.7	56.6	4.8	-	6	3.6	1.2	-
関西	81	20	42	3	3	8	5	-	-	
	100	24.7	51.9	3.7	3.7	9.9	6.2	-	-	
中国・四国	46	3	30	3	1	7	2	-	-	
	100	6.5	65.2	6.5	2.2	15.2	4.3	-	-	
九州・沖縄	57	12	37	-	1	4	2	1	-	
	100	21.1	64.9	-	1.8	7	3.5	1.8	-	



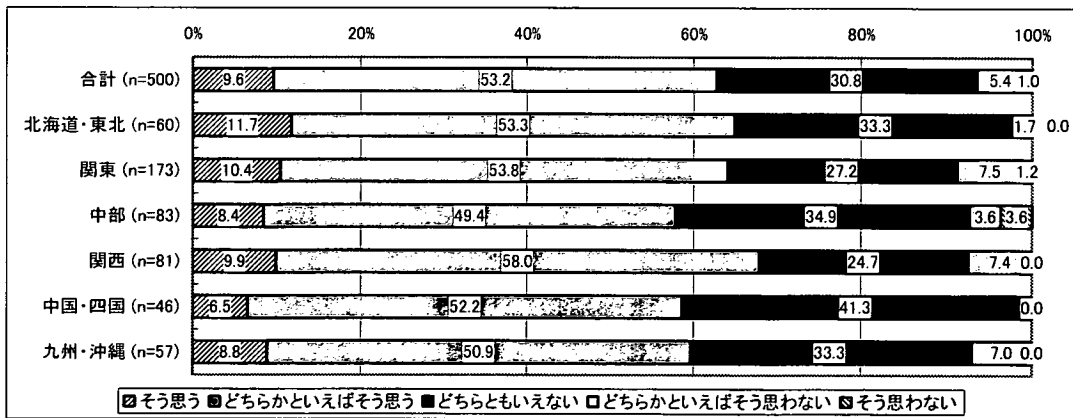
上段:度数 下段:%		Q11-3 あなたはBSEや鳥インフルエンザなどをはじめとした食品の安全性に関する情報を、普段どのような手段で得ていますか。以下の選択肢の中から、よく利用するものから順番に3位まで選んでください。(3位)								
		合計	テレビ・ラジオ	新聞	雑誌	広告・テレビCM	インターネット	家族・知人からの口コミ	学校・町内会などの地域コミュニティ	その他
Q21 あなたの お住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500	13	47	67	81	166	110	15	1
		100	2.6	9.4	13.4	16.2	33.2	22	3	0.2
	北海道・東北	60	-	8	10	8	24	7	3	-
		100	-	13.3	16.7	13.3	40	11.7	5	-
	関東	173	5	12	29	29	50	44	4	-
		100	2.9	6.9	16.8	16.8	28.9	25.4	2.3	-
	中部	83	-	6	8	17	30	21	1	-
		100	-	7.2	9.6	20.5	36.1	25.3	1.2	-
関西	81	2	10	9	11	27	17	5	-	
	100	2.5	12.3	11.1	13.6	33.3	21	6.2	-	
中国・四国	46	4	6	4	6	17	6	2	1	
	100	8.7	13	8.7	13	37	13	4.3	2.2	
九州・沖縄	57	2	5	7	10	18	15	-	-	
	100	3.5	8.8	12.3	17.5	31.6	26.3	-	-	



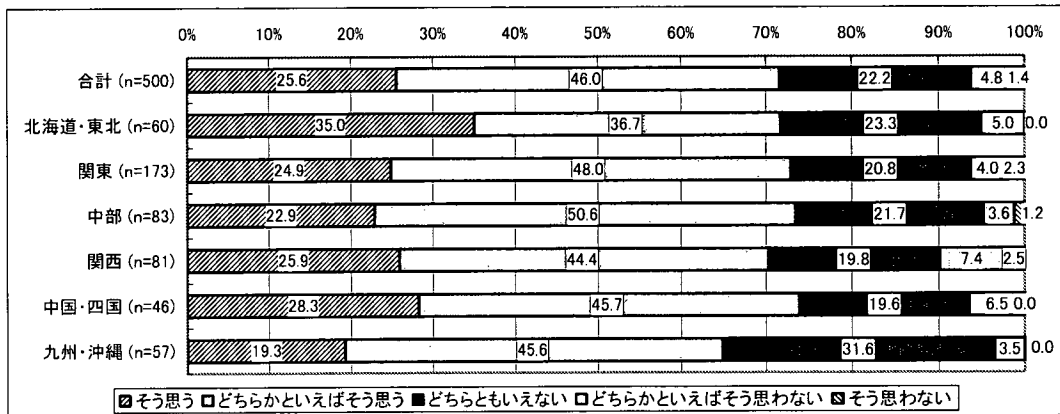
上段:度数 下段:%		Q13-1 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。 100%安全な食品は世の中には存在しない					
		合計	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q21 あなたのお住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500 100	212 42.4	214 42.8	44 8.8	22 4.4	8 1.6
	北海道・東北	60 100	27 45	24 40	7 11.7	2 3.3	-
	関東	173 100	67 38.7	85 49.1	13 7.5	5 2.9	3 1.7
	中部	83 100	38 45.8	31 37.3	8 9.6	5 6	1 1.2
	関西	81 100	37 45.7	32 39.5	6 7.4	4 4.9	2 2.5
	中国・四国	46 100	22 47.8	17 37	3 6.5	4 8.7	-
	九州・沖縄	57 100	21 36.8	25 43.9	7 12.3	2 3.5	2 3.5



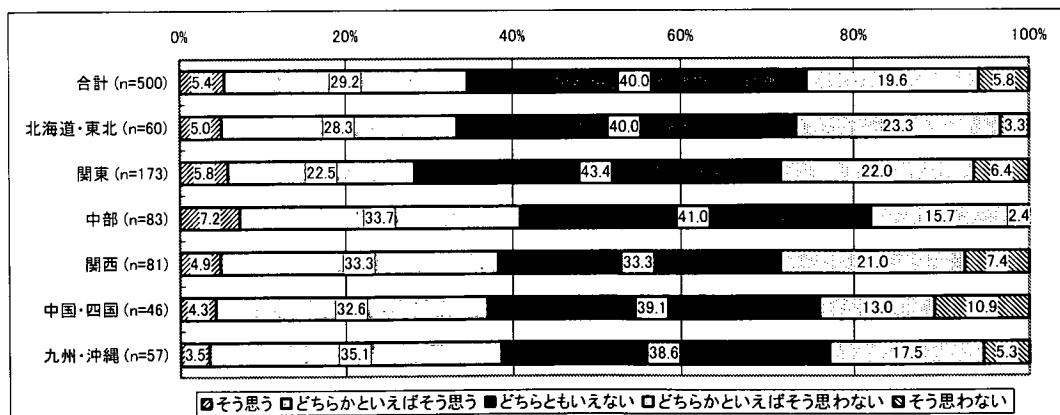
上段:度数 下段:%		Q13-2 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。現 在流通している国産の牛肉は安全である					
		合計	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q21 あなたのお住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500 100	48 9.6	266 53.2	154 30.8	27 5.4	5 1
	北海道・東北	60 100	7 11.7	32 53.3	20 33.3	1 1.7	-
	関東	173 100	18 10.4	93 53.8	47 27.2	13 7.5	2 1.2
	中部	83 100	7 8.4	41 49.4	29 34.9	3 3.6	3 3.6
	関西	81 100	8 9.9	47 58.0	20 24.7	6 7.4	-
	中国・四国	46 100	3 6.5	24 52.2	19 41.3	-	-
	九州・沖縄	57 100	5 8.8	29 50.9	19 33.3	4 7	-



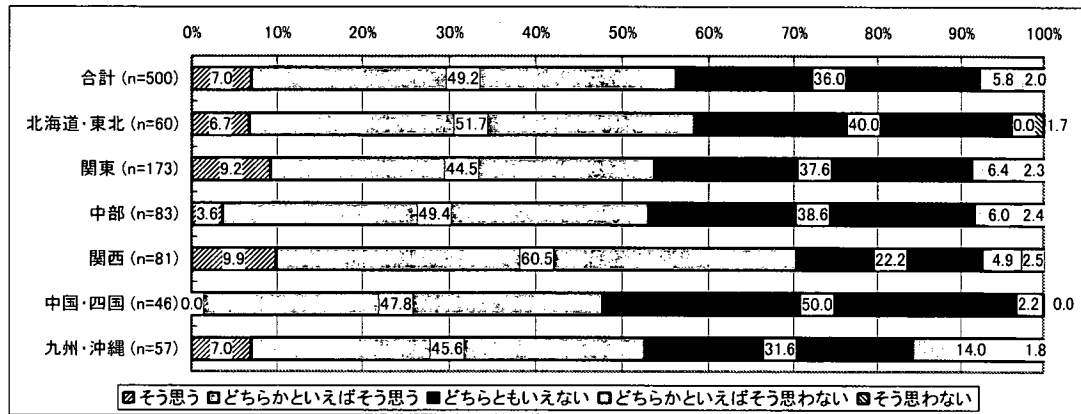
上段:度数 下段:%		Q13-3 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。国内でのBSE発生は、日本経済に大きな影響を与えている					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q21 あなたのお住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500	128	230	111	24	7
		100	25.6	46	22.2	4.8	1.4
	北海道・東北	60	21	22	14	3	-
		100	35	36.7	23.3	5	-
	関東	173	43	83	36	7	4
		100	24.9	48	20.8	4	2.3
	中部	83	19	42	18	3	1
		100	22.9	50.6	21.7	3.6	1.2
関西	81	21	36	16	6	2	
	100	25.9	44.4	19.8	7.4	2.5	
中国・四国	46	13	21	9	3	-	
	100	28.3	45.7	19.6	6.5	0	
九州・沖縄	57	11	26	18	2	-	
	100	19.3	45.6	31.6	3.5	0	



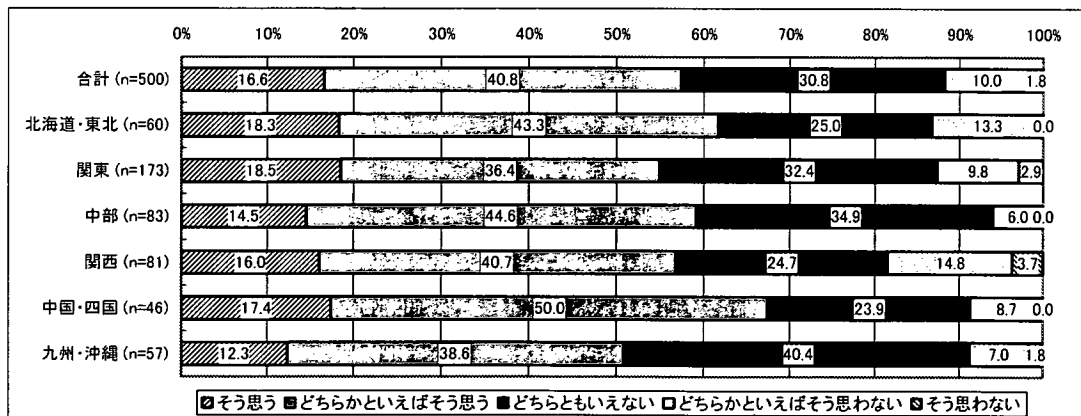
上段:度数 下段:%		Q13-4 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。国内でのBSE発生は、日本人の健康に大きな影響を与えている					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q21 あなたのお住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500	27	146	200	98	29
		100	5.4	29.2	40	19.6	5.8
	北海道・東北	60	3	17	24	14	2
		100	5	28.3	40	23.3	3.3
	関東	173	10	39	75	38	11
		100	5.8	22.5	43.4	22	6.4
	中部	83	6	28	34	13	2
		100	7.2	33.7	41	15.7	2.4
関西	81	4	27	27	17	6	
	100	4.9	33.3	33.3	21	7.4	
中国・四国	46	2	15	18	6	5	
	100	4.3	32.6	39.1	13	10.9	
九州・沖縄	57	2	20	22	10	3	
	100	3.5	35.1	38.6	17.5	5.3	



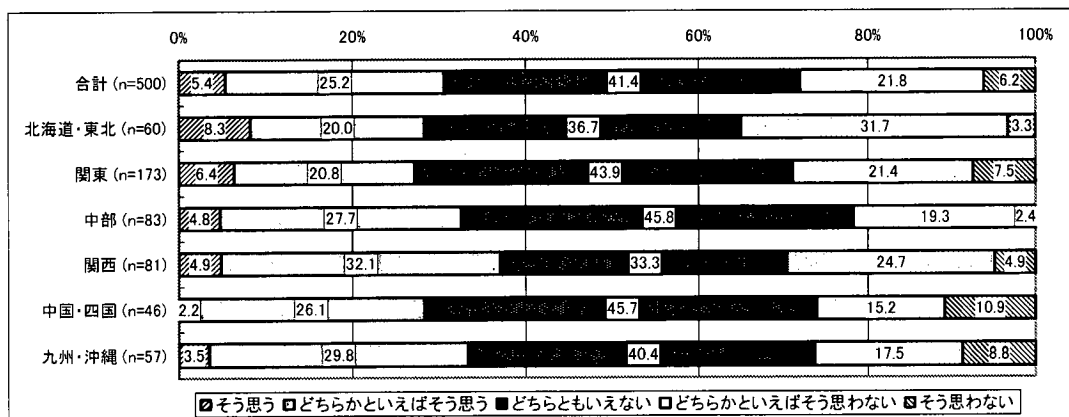
上段:度数 下段:%		Q13-5 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。現在流通している国産の鶏肉や鶏卵は安全である					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q21 あなたの お住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500	35	246	180	29	10
		100	7	49.2	36	5.8	2
	北海道・東北	60	4	31	24	-	1
		100	6.7	51.7	40	-	1.7
	関東	173	16	77	65	11	4
		100	9.2	44.5	37.6	6.4	2.3
	中部	83	3	41	32	5	2
		100	3.6	49.4	38.6	6	2.4
関西	81	8	49	18	4	2	
	100	9.9	60.5	22.2	4.9	2.5	
中国・四国	46	-	22	23	1	-	
	100	-	47.8	50	2.2	-	
九州・沖縄	57	4	26	18	8	1	
	100	7	45.6	31.6	14	1.8	



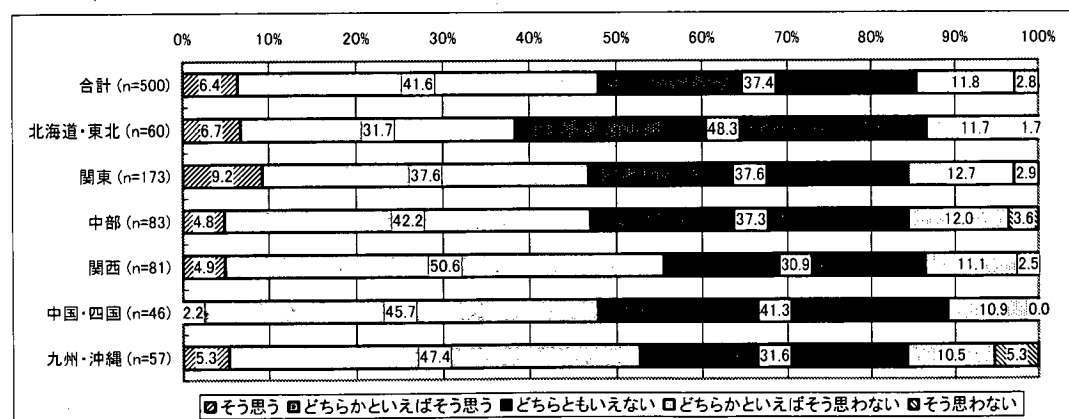
上段:度数 下段:%		Q13-6 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。国内での鳥インフルエンザ発生は、日本経済に大きな影響を与えている					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q21 あなたの お住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500	83	204	154	50	9
		100	16.6	40.8	30.8	10	1.8
	北海道・東北	60	11	26	15	8	-
		100	18.3	43.3	25	13.3	-
	関東	173	32	63	56	17	5
		100	18.5	36.4	32.4	9.8	2.9
	中部	83	12	37	29	5	-
		100	14.5	44.6	34.9	6	-
関西	81	13	33	20	12	3	
	100	16	40.7	24.7	14.8	3.7	
中国・四国	46	8	23	11	4	-	
	100	17.4	50	23.9	8.7	-	
九州・沖縄	57	7	22	23	4	1	
	100	12.3	38.6	40.4	7	1.8	



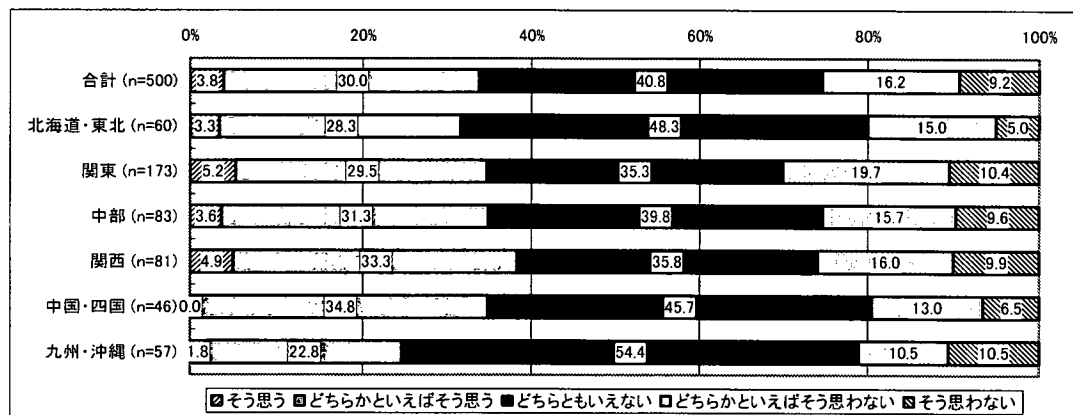
上段:度数 下段:%		Q13-7 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。国内での鳥インフルエンザ発生は、日本人の健康に大きな影響を与えている					
		合計	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q21 あなたのお住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500	27	126	207	109	31
		100	5.4	25.2	41.4	21.8	6.2
	北海道・東北	60	5	12	22	19	2
		100	8.3	20	36.7	31.7	3.3
	関東	173	11	36	76	37	13
		100	6.4	20.8	43.9	21.4	7.5
	中部	83	4	23	38	16	2
		100	4.8	27.7	45.8	19.3	2.4
関西	81	4	26	27	20	4	
	100	4.9	32.1	33.3	24.7	4.9	
中国・四国	46	1	12	21	7	5	
	100	2.2	26.1	45.7	15.2	10.9	
九州・沖縄	57	2	17	23	10	5	
	100	3.5	29.8	40.4	17.5	8.8	



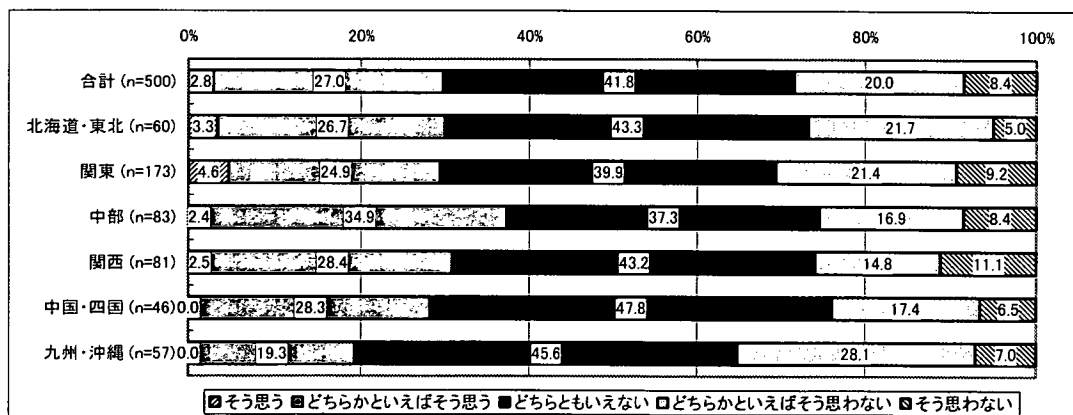
上段:度数 下段:%		Q13-8 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。日本の食品安全への取組は、国際的に非常に優れている					
		合計	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q21 あなたのお住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500	32	208	187	59	14
		100	6.4	41.6	37.4	11.8	2.8
	北海道・東北	60	4	19	29	7	1
		100	6.7	31.7	48.3	11.7	1.7
	関東	173	16	65	65	22	5
		100	9.2	37.6	37.6	12.7	2.9
	中部	83	4	35	31	10	3
		100	4.8	42.2	37.3	12	3.6
関西	81	4	41	25	9	2	
	100	4.9	50.6	30.9	11.1	2.5	
中国・四国	46	1	21	19	5	0	
	100	2.2	45.7	41.3	10.9	0.0	
九州・沖縄	57	3	27	18	6	3	
	100	5.3	47.4	31.6	10.5	5.3	



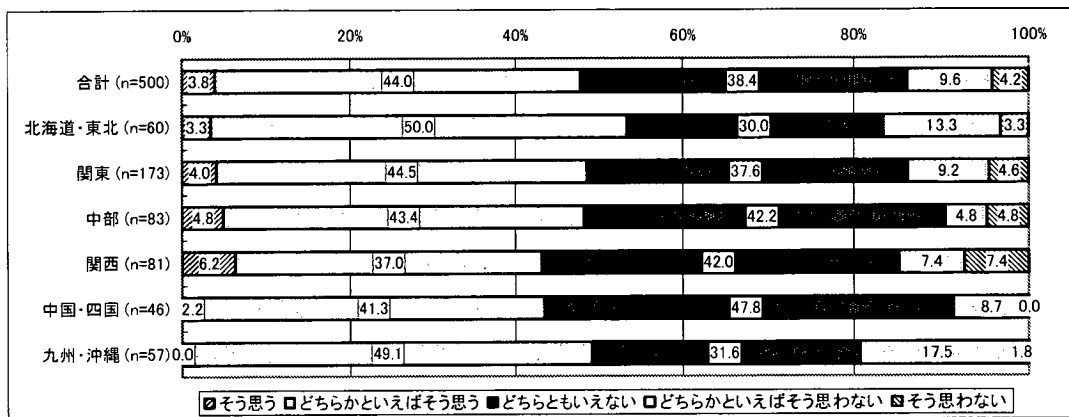
上段:度数 下段:%		Q13-9 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。日本の食品安全行政を信頼している					
		合計	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q21 あなたのお住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500 100	19 3.8	150 30	204 40.8	81 16.2	46 9.2
	北海道・東北	60 100	2 3.3	17 28.3	29 48.3	9 15	3 5
	関東	173 100	9 5.2	51 29.5	61 35.3	34 19.7	18 10.4
	中部	83 100	3 3.6	26 31.3	33 39.8	13 15.7	8 9.6
	関西	81 100	4 4.9	27 33.3	29 35.8	13 16	8 9.9
	中国・四国	46 100	-	16 34.8	21 45.7	6 13	3 6.5
	九州・沖縄	57 100	1 1.8	13 22.8	31 54.4	6 10.5	6 10.5



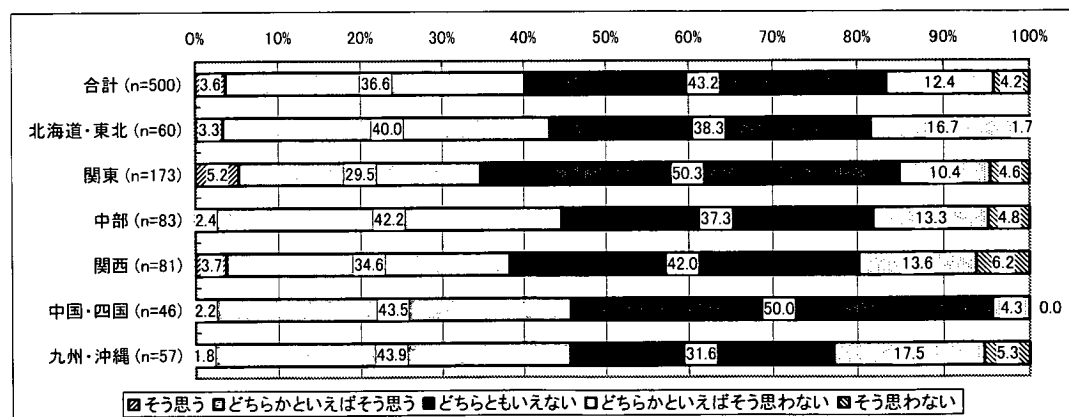
上段:度数 下段:%		Q13-10 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。日本の食品産業の安全対策を信頼している					
		合計	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q21 あなたのお住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500 100	14 2.8	135 27	209 41.8	100 20	42 8.4
	北海道・東北	60 100	2 3.3	16 26.7	26 43.3	13 21.7	3 5
	関東	173 100	8 4.6	43 24.9	69 39.9	37 21.4	16 9.2
	中部	83 100	2 2.4	29 34.9	31 37.3	14 16.9	7 8.4
	関西	81 100	2 2.5	23 28.4	35 43.2	12 14.8	9 11.1
	中国・四国	46 100	-	13 28.3	22 47.8	8 17.4	3 6.5
	九州・沖縄	57 100	-	11 19.3	26 45.6	16 28.1	4 7



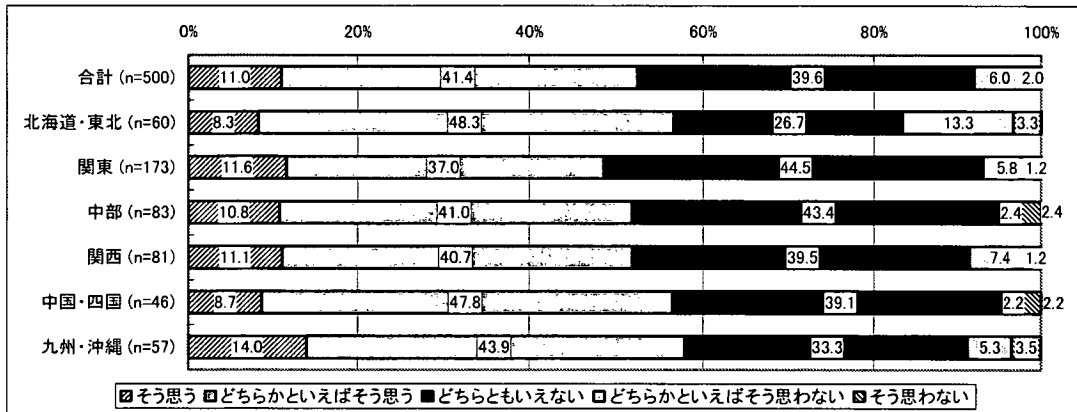
上段:度数 下段:%		Q13-11 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。 BSE発生後、日本の食品安全行政は良い方向に向かっている					
		合計	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	500	19	220	192	48	21
		100	3.8	44	38.4	9.6	4.2
	北海道・東北	60	2	30	18	8	2
		100	3.3	50	30	13.3	3.3
	関東	173	7	77	65	16	8
		100	4	44.5	37.6	9.2	4.6
	中部	83	4	36	35	4	4
		100	4.8	43.4	42.2	4.8	4.8
関西	81	5	30	34	6	6	
	100	6.2	37	42	7.4	7.4	
中国・四国	46	1	19	22	4	-	
	100	2.2	41.3	47.8	8.7	-	
九州・沖縄	57	-	28	18	10	1	
	100	-	49.1	31.6	17.5	1.8	



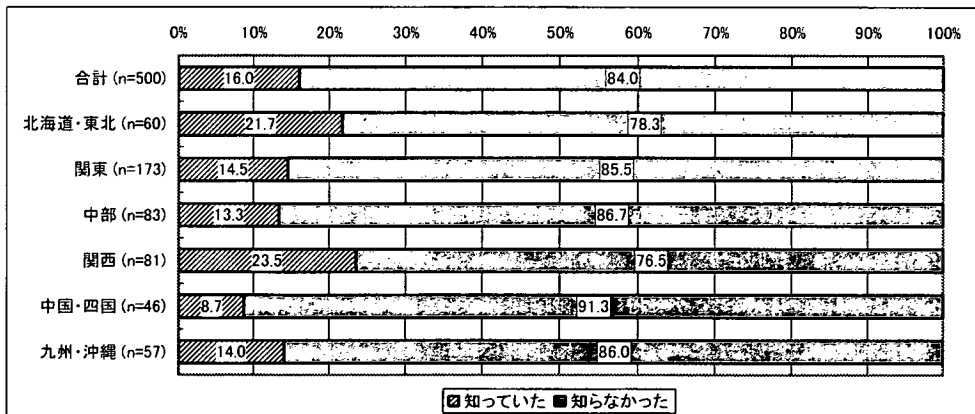
上段:度数 下段:%		Q13-12 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。生 産者や生産方法が明記されている食品は安全である					
		合計	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらともいえ ない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わない
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	500	18	183	216	62	21
		100	3.6	36.6	43.2	12.4	4.2
	北海道・東北	60	2	24	23	10	1
		100	3.3	40	38.3	16.7	1.7
	関東	173	9	51	87	18	8
		100	5.2	29.5	50.3	10.4	4.6
	中部	83	2	35	31	11	4
		100	2.4	42.2	37.3	13.3	4.8
関西	81	3	28	34	11	5	
	100	3.7	34.6	42	13.6	6.2	
中国・四国	46	1	20	23	2	-	
	100	2.2	43.5	50.0	4.3	-	
九州・沖縄	57	1	25	18	10	3	
	100	1.8	43.9	31.6	17.5	5.3	



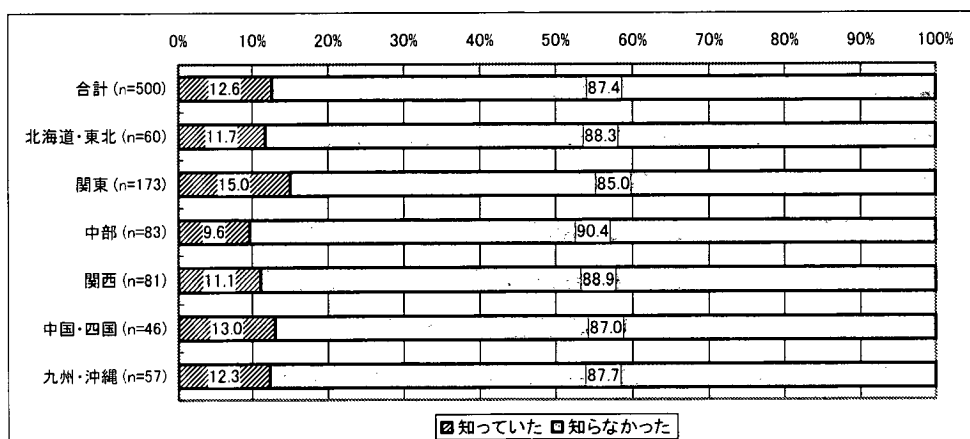
上段:度数 下段:%		Q13-13 以下のそれぞれの意見について、あなたのお考えに最も近いものに印をつけてください。安全性の高い食品であれば、価格が高くても優先的に購入したい					
		合計	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	500	55	207	198	30	10
		100	11	41.4	39.6	6	2
	北海道・東北	60	5	29	16	8	2
		100	8.3	48.3	26.7	13.3	3.3
	関東	173	20	64	77	10	2
		100	11.6	37	44.5	5.8	1.2
	中部	83	9	34	36	2	2
		100	10.8	41	43.4	2.4	2.4
関西	81	9	33	32	6	1	
	100	11.1	40.7	39.5	7.4	1.2	
中国・四国	46	4	22	18	1	1	
	100	8.7	47.8	39.1	2.2	2.2	
九州・沖縄	57	8	25	19	3	2	
	100	14	43.9	33.3	5.3	3.5	



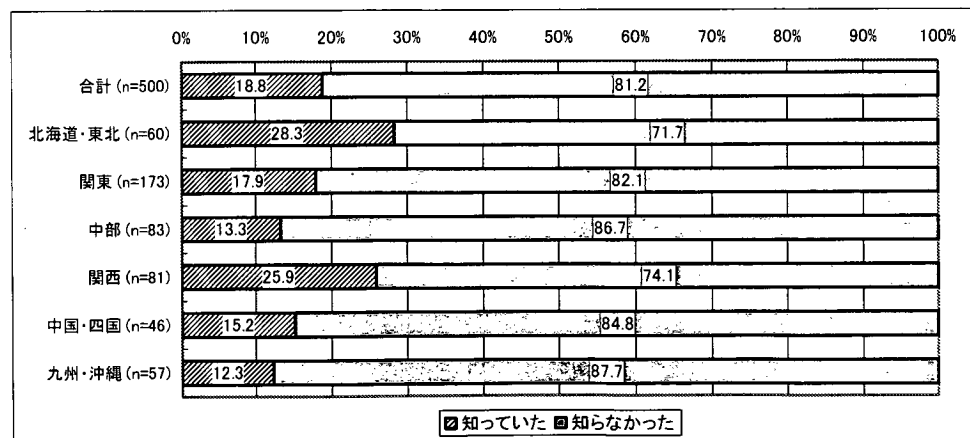
上段:度数 下段:%		Q14 あなたは、平成15年7月の国民の健康の保護を最優先とした食品安全基本法の施行によって、新たな食品安全行政がスタートしたことを知っていましたか。		
		合計	知っていた	知らなかった
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	500	80	420
		100	16	84
	北海道・東北	60	13	47
		100	21.7	78.3
	関東	173	25	148
		100	14.5	85.5
	中部	83	11	72
		100	13.3	86.7
関西	81	19	62	
	100	23.5	76.5	
中国・四国	46	4	42	
	100	8.7	91.3	
九州・沖縄	57	8	49	
	100	14	86	



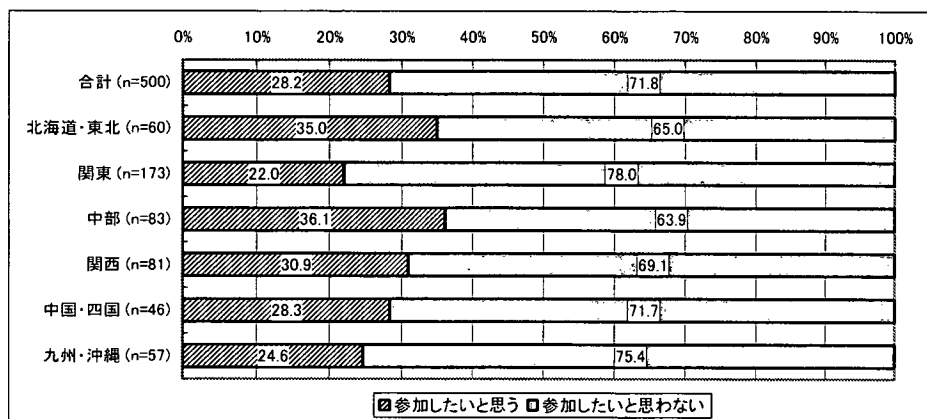
上段:度数 下段:%		Q15 あなたは、『リスクコミュニケーション』という言葉を知っていましたか。		
		合計	知っていた	知らなかった
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	500	63	437
		100	12.6	87.4
	北海道・東北	60	7	53
		100	11.7	88.3
	関東	173	26	147
		100	15	85
	中部	83	8	75
		100	9.6	90.4
関西	81	9	72	
	100	11.1	88.9	
中国・四国	46	6	40	
	100	13	87	
九州・沖縄	57	7	50	
	100	12.3	87.7	



上段:度数 下段:%		Q16 あなたは、全国各地で、食の安全の分野における意見交換会が開催されていることを知っていましたか。		
		合計	知っていた	知らなかった
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	500	94	406
		100	18.8	81.2
	北海道・東北	60	17	43
		100	28.3	71.7
	関東	173	31	142
		100	17.9	82.1
	中部	83	11	72
		100	13.3	86.7
関西	81	21	60	
	100	25.9	74.1	
中国・四国	46	7	39	
	100	15.2	84.8	
九州・沖縄	57	7	50	
	100	12.3	87.7	



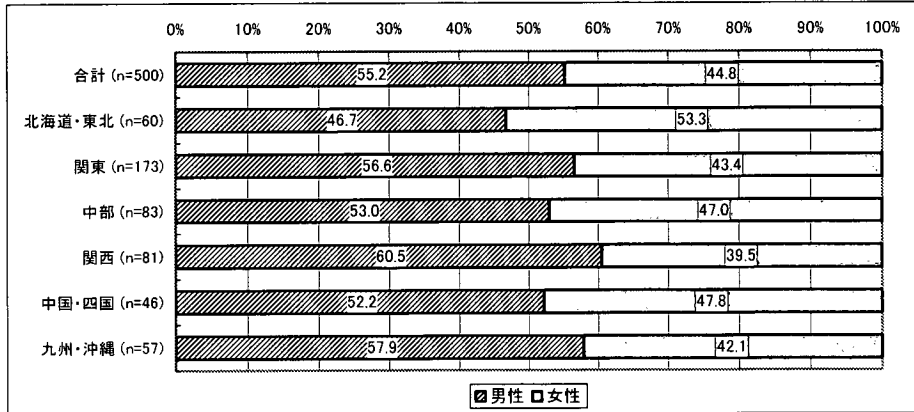
上段:度数 下段:%		Q17 あなたは、今後、食品の安全性に関連したシンポジウムや意見交換会などのイベントに参加したいと思いますか。		
		合計	参加したいと思う	参加したいと思わない
Q21 あなたのお住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500 100	141 28.2	359 71.8
	北海道・東北	60 100	21 35	39 65
	関東	173 100	38 22	135 78
	中部	83 100	30 36.1	53 63.9
	関西	81 100	25 30.9	56 69.1
	中国・四国	46 100	13 28.3	33 71.7
	九州・沖縄	57 100	14 24.6	43 75.4



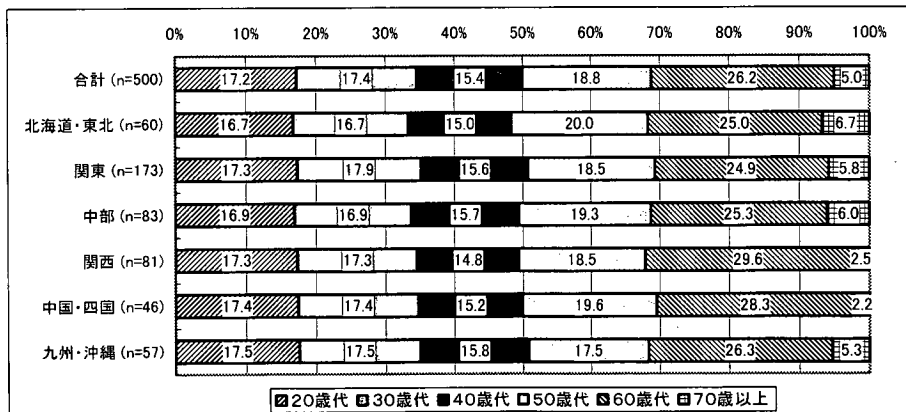
上段:度数 下段:%		Q18 あなたは、今後、食の安全の分野におけるリスクコミュニケーションを進めていく際に、行政機関はどのような取組をすべきだと思いますか。最大2つまで選んでください。									
		合計	シンポジウム・意見交換会を実施する	勉強会などに講師を派遣する	行政機関のホームページを充実させる	広報誌・パンフレットを配布する	テレビCM・新聞などで情報を提供する	専門家がマスメディアなどを通じてわかりやすい説明を行う	リスクコミュニケーションを行う人材を育成する	第三者機関が、行政機関のリスクコミュニケーションの取組を評価する	その他
Q21 あなたのお住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500 100	67 13.4	35 7	121 24.2	83 16.6	255 51	218 43.6	57 11.4	117 23.4	7 1.4
	北海道・東北	60 100	14 23.3	2 3.3	20 33.3	13 21.7	29 48.3	18 30	11 18.3	9 15	1 1.7
	関東	173 100	19 11	13 7.5	40 23.1	29 16.8	89 51.4	78 45.1	18 10.4	44 25.4	3 1.7
	中部	83 100	13 15.7	7 8.4	16 19.3	16 19.3	44 53	35 42.2	5 6	22 26.5	-
	関西	81 100	8 9.9	6 7.4	21 25.9	8 9.9	39 48.1	45 55.6	7 8.6	18 22.2	2 2.5
	中国・四国	46 100	6 13	4 8.7	11 23.9	6 13	19 41.3	21 45.7	7 15.2	14 30.4	-
	九州・沖縄	57 100	7 12.3	3 5.3	13 22.8	11 19.3	35 61.4	21 36.8	9 15.8	10 17.5	1 1.8

注：複数回答(MA)のため、グラフは割愛している。

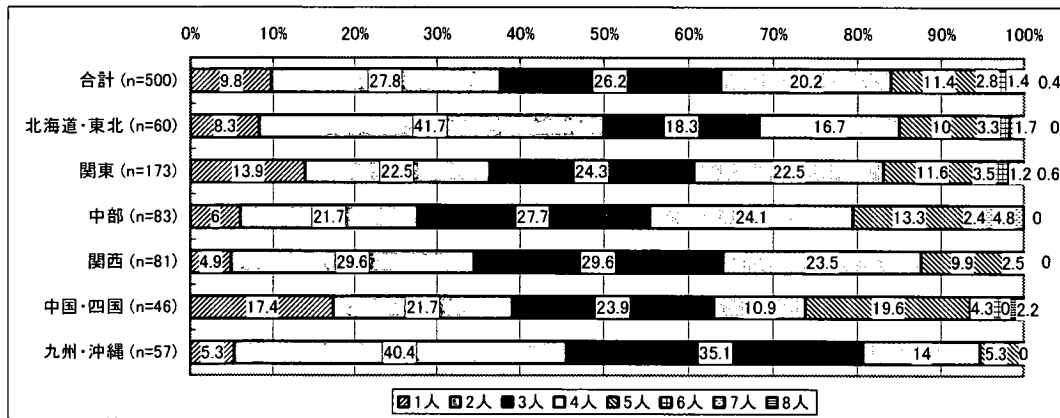
上段:度数 下段:%		Q19 あなたの性別をお答え下さい。		
		合計	男性	女性
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	500 100	276 55.2	224 44.8
	北海道・東北	60 100	28 46.7	32 53.3
	関東	173 100	98 56.6	75 43.4
	中部	83 100	44 53	39 47
	関西	81 100	49 60.5	32 39.5
	中国・四国	46 100	24 52.2	22 47.8
	九州・沖縄	57 100	33 57.9	24 42.1



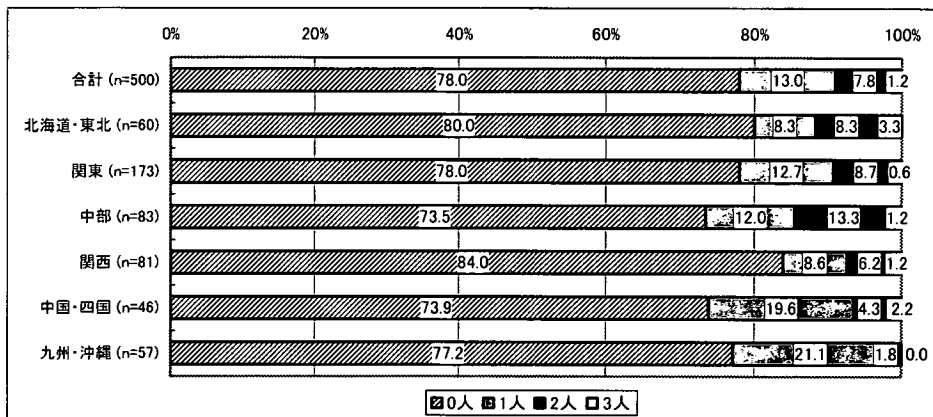
上段:度数 下段:%		Q20 あなたの年齢をお答え下さい。						
		合計	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳以上
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	500 100	86 17.2	87 17.4	77 15.4	94 18.8	131 26.2	25 5.0
	北海道・東北	60 100	10 16.7	10 16.7	9 15	12 20	15 25	4 6.7
	関東	173 100	30 17.3	31 17.9	27 15.6	32 18.5	43 24.9	10 5.8
	中部	83 100	14 16.9	14 16.9	13 15.7	16 19.3	21 25.3	5 6.0
	関西	81 100	14 17.3	14 17.3	12 14.8	15 18.5	24 29.6	2 2.5
	中国・四国	46 100	8 17.4	8 17.4	7 15.2	9 19.6	13 28.3	1 2.2
	九州・沖縄	57 100	10 17.5	10 17.5	9 15.8	10 17.5	15 26.3	3 5.3



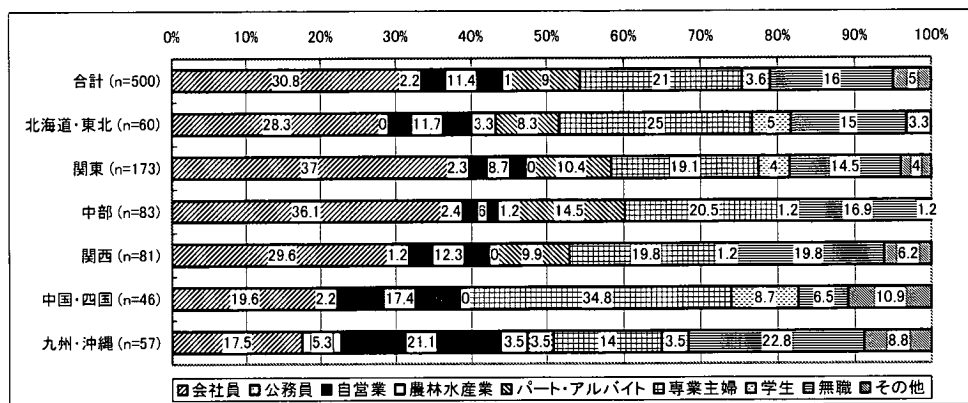
上段:度数 下段:%		Q22 あなたのお宅の世帯員数(あなたを含めて)についてお聞きします。回答欄の中に、人数を記入してください。									
		合計	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	500 100	49 9.8	139 27.8	131 26.2	101 20.2	57 11.4	14 2.8	7 1.4	2 0.4	
	北海道・東北	60 100	5 8.3	25 41.7	11 18.3	10 16.7	6 10	2 3.3	1 1.7	-	
	関東	173 100	24 13.9	39 22.5	42 24.3	39 22.5	20 11.6	6 3.5	2 1.2	1 0.6	
	中部	83 100	5 6	18 21.7	23 27.7	20 24.1	11 13.3	2 2.4	4 4.8	-	
	関西	81 100	4 4.9	24 29.6	24 29.6	19 23.5	8 9.9	2 2.5	-	-	
	中国・四国	46 100	8 17.4	10 21.7	11 23.9	5 10.9	9 19.6	2 4.3	-	1 2.2	
	九州・沖縄	57 100	3 5.3	23 40.4	20 35.1	8 14	3 5.3	-	-	-	



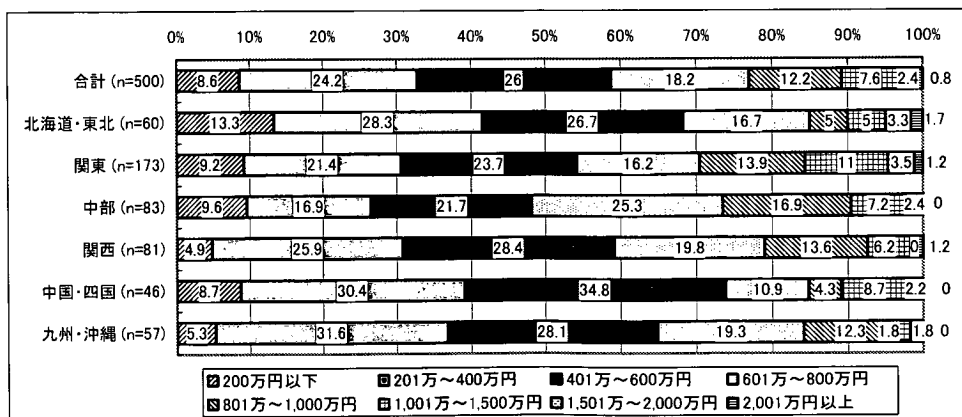
上段:度数 下段:%		Q23 あなたのお宅の世帯員数(あなたを含めて)についてお聞きします。あわせて、小学生以下のお子様的人数を記入してください。				
		合計	0人	1人	2人	3人
Q21 あなたの お住まいの都道 府県名をお答え 下さい。(地域)	合計	500 100	390 78.0	65 13.0	39 7.8	6 1.2
	北海道・東北	60 100	48 80.0	5 8.3	5 8.3	2 3.3
	関東	173 100	135 78.0	22 12.7	15 8.7	1 0.6
	中部	83 100	61 73.5	10 12.0	11 13.3	1 1.2
	関西	81 100	68 84.0	7 8.6	5 6.2	1 1.2
	中国・四国	46 100	34 73.9	9 19.6	2 4.3	1 2.2
	九州・沖縄	57 100	44 77.2	12 21.1	1 1.8	-



上段:度数 下段:%		Q24 あなたのお仕事をお答え下さい。なお、複数該当する方は、主な仕事に印をつけてください。									
		合計	会社員	公務員	自営業	農林水産業	パート・アルバイト	専業主婦	学生	無職	その他
Q21 あなたのお住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500 100	154 30.8	11 2.2	57 11.4	5 1	45 9	105 21	18 3.6	80 16	25 5
	北海道・東北	60 100	17 28.3	-	7 11.7	2 3.3	5 8.3	15 25	3 5	9 15	2 3.3
	関東	173 100	64 37	4 2.3	15 8.7	-	18 10.4	33 19.1	7 4	25 14.5	7 4
	中部	83 100	30 36.1	2 2.4	5 6	1 1.2	12 14.5	17 20.5	1 1.2	14 16.9	1 1.2
	関西	81 100	24 29.6	1 1.2	10 12.3	-	8 9.9	16 19.8	1 1.2	16 19.8	5 6.2
	中国・四国	46 100	9 19.6	1 2.2	8 17.4	-	-	16 34.8	4 8.7	3 6.5	5 10.9
	九州・沖縄	57 100	10 17.5	3 5.3	12 21.1	2 3.5	2 3.5	8 14	2 3.5	13 22.8	5 8.8



上段:度数 下段:%		Q25 あなたのお宅の年収(家族全体で、年金等も含んだ年収)は税込みでいくらぐらいでしょうか。								
		合計	200万円以下	201万～400万円	401万～600万円	601万～800万円	801万～1,000万円	1,001万～1,500万円	1,501万～2,000万円	2,001万円以上
Q21 あなたのお住まいの都道府県名をお答え下さい。(地域)	合計	500 100	43 8.6	121 24.2	130 26	91 18.2	61 12.2	38 7.6	12 2.4	4 0.8
	北海道・東北	60 100	8 13.3	17 28.3	16 26.7	10 16.7	3 5	3 5	2 3.3	1 1.7
	関東	173 100	16 9.2	37 21.4	41 23.7	28 16.2	24 13.9	19 11	6 3.5	2 1.2
	中部	83 100	8 9.6	14 16.9	18 21.7	21 25.3	14 16.9	6 7.2	2 2.4	-
	関西	81 100	4 4.9	21 25.9	23 28.4	16 19.8	11 13.6	5 6.2	-	1 1.2
	中国・四国	46 100	4 8.7	14 30.4	16 34.8	5 10.9	2 4.3	4 8.7	1 2.2	-
	九州・沖縄	57 100	3 5.3	18 31.6	16 28.1	11 19.3	7 12.3	1 1.8	1 1.8	-



2. 意見交換会におけるアンケート調査の企画、設計

(1) アンケート調査結果

BSE に関する意見交換会で実施したアンケート調査結果（50 会場計）の概要を以下に示す¹²。

問2 【意見交換会に参加する前】と【意見交換会に参加して】について

①日本における BSE 感染牛の発生状況について 総数=2822

事後 事前	理解が深まった	変化なし	わからなくなった	無回答
知っていた	1609	894	25	118
知らなかった	83	7	4	5
無回答	4	3	1	69

②異常プリオンが集中している特定危険部位（SRM）の除去や、これまで約350万頭に対して行われていると畜場における BSE 検査について 総数=2822

事後 事前	理解が深まった	変化なし	わからなくなった	無回答
知っていた	1362	987	11	94
知らなかった	243	18	7	11
無回答	5	1	0	83

③肉骨粉への利用が禁止されているなどの日本の飼料規制について 総数=2822

事後 事前	理解が深まった	変化なし	わからなくなった	無回答
知っていた	1453	1032	22	107
知らなかった	108	6	5	3
無回答	4	0	0	82

④食品安全委員会の取組（リスク評価の実施など）について 総数=2822

事後 事前	信頼感が深まった	変化なし	不信感が深まった	無回答
信頼していた	573	499	29	38
信頼していなかった	69	110	51	10
どちらともいえない	373	838	62	52
無回答	5	2	0	111

⑤BSE 対策について 総数=2822

事後 事前	安心感が高まった	変化なし	不安感が高まった	無回答
安心していた	489	723	130	49
安心していなかった	162	282	85	24
どちらとも言えない	221	480	53	32
無回答	4	4	2	82

¹² なお、調査結果の一覧は以下の URL に掲載されている。

http://www.fsc.go.jp/koukan/zenkoku/zenkoku_sou_kekka.pdf

<http://www.fsc.go.jp/senmon/risk/r-dail13/risk13-siryou2.pdf>

■職業別参加回数

	初めて	2回目	3回目	4回目	5回以上	無回答
消費者団体	263	108	67	22	37	4
主婦・学生・無職	208	52	23	10	8	3
生産者	126	20	8	1	3	2
食品関連事業者	241	62	41	9	17	2
マスコミ	3	1	0	0	1	0
行政	881	184	54	16	21	3
食品関連研究・教育機関	36	6	7	3	2	1
その他	163	47	13	4	13	0

■ 問2①日本におけるBSE感染牛の発生状況について

	行政	消費者団体	主婦・学生・無職	食品関連事業者	生産者	マスコミ	食品関連研究教育機関	その他	無回答
安心感が高まった	660	305	232	230	73	3	35	141	18
変化なし	441	144	41	109	76	2	13	74	3
不安感が高まった	5	7	9	1	3	0	0	5	0
無回答	53	45	22	32	8	0	7	20	5

■ 問2②異常プリオンが集中している特定危険部位（SRM）の除去や、これまで約350万頭に対して行われていると畜場におけるBSE検査について

	行政	消費者団体	主婦・学生・無職	食品関連事業者	生産者	マスコミ	食品関連研究教育機関	その他	無回答
安心感が高まった	610	297	216	225	69	3	36	139	15
変化なし	499	147	58	117	85	2	14	79	5
不安感が高まった	1	6	6	1	1	0	0	3	0
無回答	49	51	24	29	5	0	5	19	6

■ 問2③肉骨粉の牛への利用が禁止されているなどの日本の飼料規制について

	行政	消費者団体	主婦・学生・無職	食品関連事業者	生産者	マスコミ	食品関連研究教育機関	その他	無回答
安心感が高まった	646	271	209	200	56	3	33	134	13
変化なし	459	165	60	139	99	2	17	90	7
不安感が高まった	1	13	8	4	0	0	0	1	0
無回答	53	52	27	29	5	0	5	15	6

■ 問2④食品安全委員会の取組（リスク評価の実施など）について

	行政	消費者団体	主婦・学生・無職	食品関連事業者	生産者	マスコミ	食品関連研究教育機関	その他	無回答
信頼感が深まった	401	170	144	143	39	2	26	87	8
変化なし	660	244	111	184	93	3	21	123	10
不信感が深まった	42	34	20	13	19	0	1	12	1
無回答	56	53	29	32	9	0	7	18	7

■ 問2⑤BSE対策について

	行政	消費者団体	主婦・学生・無職	食品関連事業者	生産者	マスコミ	食品関連研究教育機関	その他	無回答
安心感が高まった	321	136	128	145	35	1	18	84	8
変化なし	700	242	105	188	84	4	30	124	12
不安感が高まった	74	81	36	22	29	0	3	24	1
無回答	64	42	35	17	12	0	4	8	5

3. 国際ワークショップの運営、助言の取りまとめ

(1) 傍聴者からのコメント（リスクコミュニケーション専門調査会 三牧国昭 委員）

国際ワークショップ終了後の傍聴者からのコメントを以下に掲載する。

平成17年2月4日（金）

三牧 国昭

国際ワークショップにおけるテーマに関して

1. 信頼

信頼確保としてお客様からのクレーム発生への対応へのコメント

クレーム発生の場合、初期対応の如何でその後の影響が大きく異なる経験をもっている。

よって、まず初期対応を間違わないように実施すべきである。

当社は、食品衛生を“食品からお客様の命を守るあらゆる行為”と定義し、ことにあたって
いる。

繰り返すが、初期対応や迅速対応が不良で一旦疑問や不安・不信が発生すると、その後の対応は極めて難しくなるのが常である。

そこで、当社は初期対応の問題点を解消する為に、有事をレベル（1～5）に区分し、レベルごとの対応を事前に決めて準備している。

レベル1は軽微な問題 レベル4～5は重大問題でレベル4以上は対策本部を設置する。

また、食品衛生に対する方針を明確にするため弊社の対応は、お客様安全性確保を優先にしているが、其の基本姿勢を“逃げるな 隠すな 嘘つくな”と掲げている。

そして、「最悪を想定して次善策で実施」していくという対応方針を確定している。

当社は過去において幾つかの問題を起こしてしまったが、幸いにして、的確な対応を実施することが出来た為か、マスコミに指弾されることはなかった。

問題が発生した際に公表されることは当然である。大事なことは対応をしっかり行う事で被害に遭われた方や消費者の皆様が「きちんと対応している」「誠意を感じている」「良くやっている」と認めていただけるように誠心誠意努めることが信頼につながる。

何も起こらないことが最も重要なことで、発生させてしまった後にどれだけ対応が良くても誉められるべきことではない。問題発生は自主管理体制に問題があったことを意味する。

よって、更なる改善が必要となる。しかしながら、今回はクレームが発生した場合の対応についてとすることで説明させていただいた。

2. 評価

自分達実施の対応が十分効果を出したかどうかの評価方法のコメント

信頼は顧客数(来店客数)によってのみ測れると思う。即ち、信頼されなければお客様は来てくださらない。

同様に、個々の商品についても其の商品の販売量によって評価することが可能考える。要はたくさん売ればよくて売れないとこまると言う一般論は通じると思っている。

BSE の場合も、牛肉販売量が戻れば、それは不安に対して消費者がもういいかもしれないと思っているとも判断できる。

現状の売上げで見る限りでは、牛肉に対する強い不安感や不信感があるとはいえないと思う。

実際的には、牛肉への不安感は関係各位の尽力によって不安が解消されていると見ている。ここにいたるには、食品安全委員会の尽力はなみたいていのものではなかったと思う。

私の知る中ではRC西郷専門官や金子先生 唐木先生のご説明は非常に良く理解できたし、その並々ならぬご尽力の結果も不安の解消に大きく貢献していると思っている。

少し内容が全体的になるが、今回この一連のRC関係各位のご尽力によって、“ゼロリスク”神話という虚像を打ち砕いた功績はきわめて高いと評価している。

3. 手法

消費者は誰なのかと言うことのコメント

当社にとって、従業員がそのまま消費者と考えることも出来る。

当社は従業員が10万人いる。この方の多くは家庭の主婦や女性であり、まさに消費者。

また、従業員の家族も考えればおそらく24万人程度になると思う。

私たちは“事業者”といわれるが、働く多くの方たちは、一般家庭を守る消費者である。

そのような観点で言えば、お客様の要望を直に聞いて対応の結果に対する反応も取れる。

消費者は誰か ということをお客様は誰かと聞き直せば、

『お客様・従業員と其の家族・地域社会』となると思う。

サイレントマジョリティーはどういうかたかと聞かれて

クレームを出していただける方に対して、二度と来てくださらない方がサイレントマジョリティーと考えることができると思う

この件については私見

サイレントマジョリティーが多く存在する場合は、其の問題への対応が、お客様にとっては本当に対応してほしいこと 知りたいことと乖離しているために意見をいただけない場合や逆に周囲が騒ぐほどお客様が重要と思っていないかのどちらかと思われる。

BSEについていえば、一般には不安不信によって非常に大きな問題となった。科学よりも感覚・感情が中心となり、更にマスコミ報道が危機感を募らせた。

その結果、牛肉の安全性自体が問題となり、焼肉やステーキ 牛タン 牛丼店などが非常に深刻な影響を受けている。

しかしながら、多くのお客様は死活問題にはなっていない。

食べたい方は沢山いてくださる。しかし、BSE発生国の牛肉がないからといって、お客様はぎりぎりですぐに困ることはないと思う。

つまり、国内被害は少なく、消費者被害も少ないなかではサイレントマジョリティーが多くなるのではないかと思います。

死活問題になれば、それどころではなくなると思う。

よって、是正措置ではなく予防措置的対応のRCをしていくことが重要かも知れない。

其のとき、より多くの消費者が自らの身に降り注ぐリスクと考えたとき日本人の主食である“米”や“飲料水”がテーマになるRCをやればSMは必ず少なくなる。そこでRC手法を確立して実際の問題発生に備えることが大事ではないか。

以上

4. 「現状と課題」についての諸外国有識者からのコメントの取りまとめ等

(1) 「現状と課題」(英文)

英語翻訳を行った「現状と課題」の本文及び参考資料を次頁以降に掲載する。

The State and Issues of Risk Communication
on Food Safety in Japan

July 2004
Food Safety Commission, Cabinet Office

Preface

In compliance with the Cabinet Office Food Safety Commission's request, this preliminary version of "The State and Issues of Risk Communication on Food Safety in Japan" was prepared and submitted by the Risk Communication Expert Committee on May 13 after discussions in the committee were initiated last year. Based on the previous version, the present document has further incorporated public opinion.

To take appropriate measures to ensure food safety, we need risk communication that allows information and opinions of stakeholders, including consumers, food-related business, pertinent experts and the mass media, to be exchanged and reflected in the policy. This kind of initiative has just been introduced to Japanese society and must be improved through challenges and experiences.

Based on the present report, the Risk Communication Expert Committee tries to clearly present the state and issues of risk communication on food safety in Japan at its early stage, when there are various conflicting opinions with regard to the objectives and methods of risk communication. We would like to express appreciation for the dedication and the will of the members and the expert consultants of the Commission.

The Food Safety Commission plans to implement risk communication more effectively based on this report from now on. We would hope that all the parties concerned read this report for reference and give us straightforward criticisms and opinions.

July 1, 2004

Masaaki Terada,
Chairperson, Food Safety Commission

Table of Contents

Synopsis.....	1
1. The role of risk communication.....	5
(1) Risk Analysis	5
(2) Risk Communication	5
2. Goal of risk communication	6
3. Measures covering methods and means of risk communication	6
II. The present state of risk communication.....	7
1. The state before the enactment of the Food Safety Basic Law	7
2. The state after the enactment of the Food Safety Basic Law	8
(1) Regulations in the related laws	8
① The Food Safety Basic Law	8
② The Food Sanitation Law	9
(2) State of the law enforcement by administrative bodies in the National Government	9
(3) State of law enforcement by local governments	10
(4) Measures taken by food-related business	11
(5) Consumers' activities	12
III. Issues and methodology of risk communication	12
1. Issues	12
(1) Roles, activities and collaboration of parties concerned.....	13
① The National Government	13
② Local governments	13
③ Food-related business	14
④ Consumers	15
⑤ Media	15
⑥ Experts	15
(2) Collaboration with related fields.....	16
① Education.....	16
② Free access to information and the protection of intellectual property rights and privacy	16
③ Risk communication in the case of emergency	17
④ Measures to prevent so-called “damage caused by rumors”	17
2. Measures.....	18
(1) Communication media	18

(2) Public meetings.....	18
(3) Training of specialists and improving skills	18
(4) Improvement of investigation and research.....	19
(5) International risk communication activities.....	19
IV. The Direction of Future Actions	19
Members of Risk Communication Expert Committee, FSC	21

(Appendices)

1. Risk Communication in the Other Fields in Japan
2. Lessons learned from risk communication in other countries
 - (1) The summary of a lecture by Dr. Thomas J. Billy, former chairperson of the Codex Committee, delivered at the exchange of opinion meeting held on 28/10/2003.
 - (2) The summary of a lecture by Mr. Johan F. de Leeuw, director General of The Food and Consumer Product Safety Authority, delivered at the exchange of opinion meeting held on 28/10/2003.
3. About Bovine Spongiform Encephalopathy (BSE), variant Creutzfeldt-Jakob Disease (vCJD) and Highly Pathogenic Avian Influenza
4. Glossary on food safety

Synopsis

What is risk communication?

In order to secure food safety, the concept of risk analysis was proposed by FAO (The Food and Agriculture Organization of the United Nations) and WHO (The World Health Organization). In the risk analysis process, three elements—risk assessment, risk management and risk communication—must be conducted in an integrated manner (see Reference 1 and Figure 1 below).

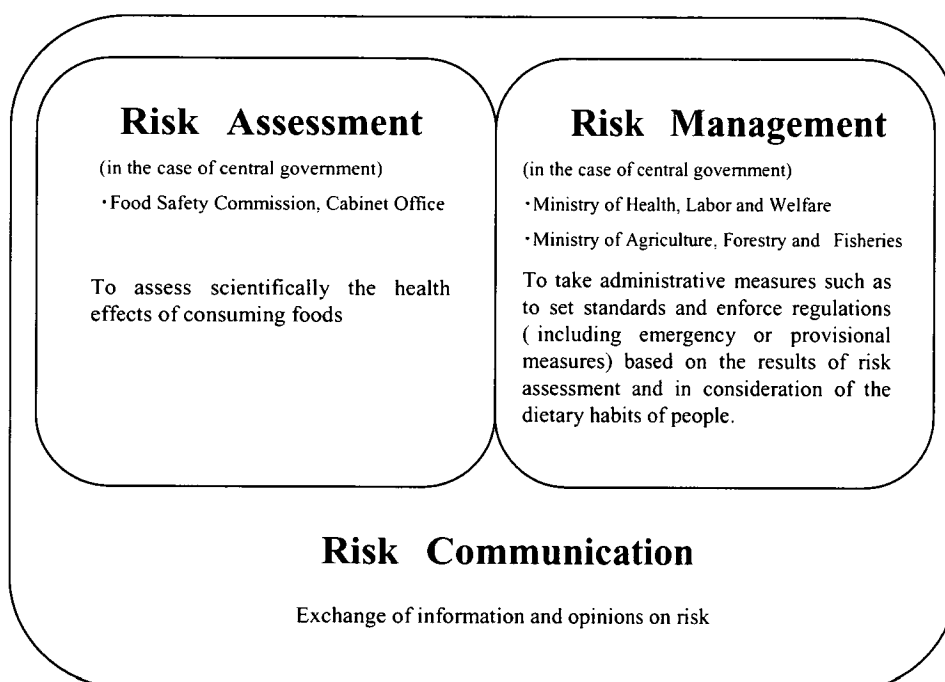


Figure 1 Three elements of Risk analysis

In the past, measures were taken only after an accident occurred in order to ensure no similar accidents would occur. Accustomed to this way of thinking in a dichotomy of safe or dangerous, we tend to judge the safety of the product just by checking whether it satisfies any standards or not, and the date of minimum durability.

In the concept of risk analysis, on the other hand, we should not determine safety just by judging the conformity with standards, but we must also consider the nature, amount and intensity of toxic entities taken from foods. In other words, we conduct “risk assessment” to evaluate the probability and the potential of the risk in order to implement “risk management,” taking measures to minimize the risk as much as possible based on the risk assessment.

A weather forecast, a familiar example of output resulting from scientific assessment,

provides useful information that is reasonably precise and easy to understand. However, earthquake prediction at the present stage cannot be made so precisely, showing that scientific forecasts differ from each other in their precision. Although we make efforts to ensure food safety as much as possible by integrating information obtained from pertinent studies, there still remains much to be understood and many uncertainties to be addressed for us to ensure precise prediction of risk. Nevertheless, we endeavor to obtain the best knowledge from state-of-the-art science to minimize risk in foods. For the matters for which scientific prediction is uncertain, we apply risk management by taking a preventive approach while investigating them.

To ensure food safety, risk assessment is performed by scientists and risk management is conducted by the government bodies, producers and suppliers of food. In order for consumers to get a sense of security, it is important that they participate in these efforts by giving their opinions and conveying their needs. Furthermore, it is also important that producers and suppliers exchange their opinions efficiently and cooperate to achieve objectives in order to take the most appropriate measures, because they also need information from risk assessment and that related to risk management. Risk communication refers to this process and is an important element supporting food safety. The way in which “risk assessment,” “risk management” and “risk communication” (the last of which supports the first two) is performed in an integrated manner is called risk analysis.

Background Circumstances to date

Three years ago, we experienced a sequence of problems related to food safety another such as maladministration of BSE (Bovine Spongiform Encephalopathy) pathogen infection of dairy products and detection of illegal pesticide residues in imported foods. These problems have degraded the confidence in food safety management in our country.

A committee established to investigate the case of the BSE problem reported that top priority should be given to the protection of consumers' health and suggested that it was necessary to introduce a risk analysis principle to ensure food safety. This report also pointed out that communication among administrative bodies and between experts and the administration was inefficient and that administrative bodies did not release information to ensure sufficient transparency sufficiently. Furthermore, the report indicated the lack of accurate and easy-to-understand news reports and inadequate understanding by consumers.

Based on the report, the Food Safety Commission was established in the Cabinet

Office in July 2003 to perform risk communication by itself regarding risk assessment of food as well as to coordinate risk communication regarding risk management of food performed by other administrative bodies concerned.

To perform these tasks, the Food Safety Commission established an expert committee for investigation and deliberation to improve risk communication for food safety. This committee on risk communication held nine meetings between September 2003 and April 2004, while the members of the committee participated in public meetings held in various places. Through these meetings, the committee has discussed how to implement risk communication on food safety in our country, where the practice of risk communication is still in the early stages. The Food Safety Commission asked the Risk Communication Expert Committee to summarize opinions regarding the state and the issues of risk communication on food safety in our country based on the results of the exchanges of ideas on risk communication regarding specific subjects in other countries and pertinent sectors in our country (Reference 2).

Because it has been only several months since the Risk Communication Expert Committee began its activities, the discussion in the committee is still premature. On the other hand, we have encountered various recent events that require risk communication, such as the occurrence of a BSE case in the US and bird flu cases in our own country. Responding to these situations, the committee was asked to summarize “the state and the issues of risk communication on food safety” in our country at this stage as a reference for the parties concerned, based on the discussions held so far in the committee.

Future direction

Up until now, the Food Safety Commission has chiefly promoted the new way of ensuring food safety through risk analysis by way of public meetings.

On this basis, the commission will put much importance on receiving and discussing opinions from the parties concerned on food safety, such as producers, suppliers, consumers, administration and pertinent experts (hereafter referred as “the parties concerned”) regarding problem formulation and management options as well as concerns related to problems.

To put it concretely, the commission plans to train experts supporting risk communication and set up a section to answer questions from the parties concerned. The commission will also coordinate administrative bodies, ensure concerned parties’ participation in problem identification and measures implementation, increase the exchange of information and ideas, encourage cooperation with the mass media, and

establish a forum where the parties concerned can discuss basic problems related to food safety.

In addition, the Risk Communication Expert Committee will make efforts in the following activities: advise the Food Safety Commission and other concerned organizations to conduct risk communication; participate in risk communication of various kinds; exchange ideas with the parties concerned; help other specific committees perform risk communication; survey and introduce cases of risk communication conducted at home and abroad.

The expert committee on risk communication hopes to receive opinions from all quarters and will have deeper discussions so that risk communication on food safety is implemented more efficiently in our country in the future.

We are looking forward to receiving opinions and comments from the parties concerned.

I . Food safety and risk communication

1. The role of risk communication

(1) Risk Analysis

Food is indispensable to our life. However, food can do harm to our health if consumed inappropriately or in inappropriate amounts. In addition, food may become contaminated by pathogenic bacteria and toxic substances, called "hazards" (dangerous factors). The probability and severity of harmful effects to health that these hazards present is called risk. A substance with low toxicity could bring high risk and exert serious effects depending on the way and the amount that it is consumed. On the other hand, a substance with higher toxicity might have low risk and thus have no effect on health if we consume it in only minute amounts.

Risk analysis is composed of three components: risk assessment, risk management and risk communication. "Risk assessment" examines the nature of potential harm and quantitatively estimates the probability of harm that could occur by eating food. "Risk management" is measures to reduce risk that considers the concerns of consumers, the health benefits of the food and the social effects of the risk. "Risk communication" is the exchange and understanding of information and ideas from all parties on the validity of risk assessment and the risk management options, and the collaboration and cooperation for the goal of food safety.

Since risk analysis is useful for preventing accidents and minimizing risk, the Codex Alimentarius recommends the adoption of risk analysis to member countries, and risk analysis is now the internationally recognized principle for food safety. Our country has also adopted risk analysis as a fundamental approach to ensure food safety through the Food Safety Basic Law put into effect in July 2003.

Risk communication can be classified into two types: routine information sharing and public meetings for ordinary problems and information dissemination and guidance in emergency cases in order to keep harm and social damages small (i.e., crisis communication). In this paper, we deal with the former type of risk communication.

(2) Risk Communication

As indicated by the phrase "from farm to table," we can ensure food safety when producers, suppliers, the administration and consumers make efforts at each stage from farm to table. For example, in the recent case of bird flu in chickens, it was shown that every party concerned should play an important role and bear responsibility in problem identification, scientific evaluation of safety and the choice and implementation of the safety management method to be used. Otherwise, we may encounter an irremediable

situation if those who find the problem do not point it out, and we do not understand the measures to be taken against it and cooperate in their implementation. Appropriate risk communication is the basis for understanding and cooperation among concerned parties, which are crucial to implementing measures to ensure food safety based on scientific grounds.

Risk communication is a way to exchange ideas and gain a deeper understanding of those ideas on risk assessment and risk management (see Reference 1).

However, the word “risk communication” has not yet been well acknowledged in the food sector in our country. The word “risk” has been used in the fields of disaster prevention, crisis management and investment, but people may not grasp the concept of “risk communication” in the food sector. Risk communication is a set of activities that include estimating costs and benefits of certain measures scientifically, announcing the scientific measures to the public, exchanging ideas and cooperating with parties concerned on the premise that every food possesses at least some risk depending on the way we consume it and the amount of the intake.

2. Goal of risk communication

Risk communication on food safety is aimed at making sure that the parties concerned share necessary information and that the opinions of concerned parties are reflected in the process of risk assessment and risk management. To achieve this goal, risk communication should be implemented while paying attention to the following points:

- (1) Parties concerned should share information on the safety of each food “promptly, intelligibly, fully and accurately” and ensure transparency in each process. It is important to put “don’t escape, don’t hide and don’t lie” at the foundation of this point.
- (2) All parties concerned should consult with each other regarding the risk of food and the measures to reduce it in order to achieve common understanding, and take part in and contribute to risk communication according to the responsibility and the role of each party.

3. Measures covering methods and means of risk communication

To promote risk communication on food safety effectively, the National government and the parties concerned should put the following points into practice:

- (1) Train pertinent experts for promoting risk communication;
- (2) Set up a working section to answer questions from concerned parties such as consumers;
- (3) Eliminate sectionalism in concerned bodies' organizations in order to effectively collaborate in risk communication;
- (4) Consult with concerned parties to seek the next step and final goal before final decisions are made;
- (5) Promote free access to information and cooperate with the mass media. To do this, establish a place where ideas can be exchanged with the mass media routinely; and
- (6) Establish a consulting committee of the concerned parties in order to identify basic problems in the specific issues.

II . The present state of risk communication

1. The state before the enactment of the Food Safety Basic Law

Before the enactment of the Food Safety Basic Law, the words "risk communication" had been rarely used in the food sector. There had been unidirectional information dissemination to the parties concerned with food safety by the official bodies and wider dissemination by the press to assist consumers in understanding the information. The flow of information and opinions from the opposite direction was limited because the representatives of consumers could express their opinions on the policies only at some councils and other occasions that invited public comments.

A series of events following the first case of cattle suspected to suffer infection from the BSE pathogen in our country in September of 2001 have prompted the government to undertake a drastic reform of food safety administration in our country (Reference 3).

The "Committee Report on the BSE Problem" (submitted on April 2, 2002) proposed basic principles for ensuring food safety. The first principle is that priority should be given to the protection of consumers' health, and the second is the introduction of risk analysis to ensure food safety. This report also points out the following problems related to risk communication:

(1) Lack of communication between administrative bodies:

MAFF, which is in charge of food production administration, and MHLW, which is in charge of food hygiene, did not collaborate efficiently;

(2) Lack of communication between experts and the administration:

A lack of mutual trust between the administration and scientists hindered

efforts to exchange information and communicate with each other;

- (3) Administrative bodies did not release accurate information and ensure transparency sufficiently:

Inaccurate information on the progression of the BSE-infected cattle case was disseminated, plus the background and the policy contents were not explained fully. They also did not pay much attention to how people would accept the information;

- (4) Lack of accurate and plausible press reports:

Some press reports exaggerated the hazard, which may have caused misunderstandings. People in the mass media lacked understanding on food safety.

- (5) Lack of support enabling consumers to achieve appropriate understanding:

The support for deeper understanding by consumers was insufficient, and distrust of administration and food labeling ensued;

- (6) Lack of communication among the parties concerned:

Prompt and appropriate notifications, such as reports at the time when problems were discovered, were not made in some cases.

In July 2003, the Food Safety Basic Law was put into effect, and the Food Safety Commission was newly established. A new framework for risk communication was also built by the new law and organization (reference 4).

To implement risk communication more effectively, it will be important to make appropriate use of this framework and build a practical mechanism to ensure collaboration among concerned parties.

2. The state after the enactment of the Food Safety Basic Law

(1) Regulations in the related laws

① The Food Safety Basic Law

The Food Safety Basic Law is aimed at introducing the risk analysis method in food safety administration. To put it concretely, the law specifies implementation of the assessment of the effect of food on health (risk assessment) and working out of measures based on the assessment (risk management). The law also specifies risk communication in Article 13 (Reference 5). The risk analysis approach is adopted in the whole range of measures to ensure food safety in our country.

In addition, the law states that the task of the Food Safety Commission is “to plan and conduct the exchange of information and ideas among parties concerned” and “to

coordinate work for the exchange of information and ideas among parties concerned regarding activities by related administrative bodies to ensure food safety.” Through these activities, the commission is expected to promote risk communication on food safety.

② The Food Sanitation Law

The Food Sanitation Law contains two regulations related to risk communication. First, when standards are set and monitoring and guidance plans are drawn up, necessary items should be announced, asking for a broad range of opinions from people. Second, the state of policy enforcement on food hygiene should be published regularly, again asking for a broad range of opinions on the policies from people. Concerned administrative bodies should collaborate to implement these activities.

(2) State of the law enforcement by administrative bodies in the National Government

Since the enforcement of the new institution began on July 1 in 2003, The Cabinet Office Food Safety Commission, in collaboration with Ministry of Health, Labor and Welfare, and Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries, have implemented risk communication, principally disclosing the findings of committees and councils, requesting opinions and information from the public regarding food effect assessment and formulating management measures based on it, holding public meetings, setting up a consultation window for concerned persons, and creating monitors (Reference 6).

Owing to these efforts by the concerned parties, some improvements have been achieved in the distribution of information, such as the release, explanation and transmission of information on food safety by the National Government and local governments.

However, we would need more time to assess whether risk communication proves its merits in handling various events such as BSE in the US and the occurrence of bird flu in our country for the first time in 79 years.

On the other hand, while there have been hot debates on the usefulness, ethics and environmental effects of technologies themselves, such as genetic modification technology, we need to discuss the safety of genetically modified foods that are already being produced. We also deal with these kinds of issues through the risk analysis approach and need to make efforts to spread the understanding of the concept of risk in food and responses to it.

(3) State of law enforcement by local governments

The Food Safety Basic Law specifies the responsibility of local governments. Following the law, prefectures and municipalities, which are close to local people and enterprises, have established new organizations and councils and have held participatory discussions on food safety (reference 7).

Many local governments have set up councils composed of parties related to food, such as the administrative bodies, consumers, food-related businesses, people with experience or academic standing, and the mass media, to exchange ideas on specific issues.

Some local governments have also reformed administrative structures to encourage collaboration among entities such as the agriculture, forestry and fishery department, food hygiene department, environment department and living environment department.

For example, the Metropolis of Tokyo, which has a population of 12 million, drew up “The basic policy to ensure food safety in Tokyo (revised on April 2, 1999)”. The policy specifies three routes along which the policy will be implemented: ① the reflection of the opinions of the citizens of Tokyo, ② the promotion of collection, provision and diffusion of information, and the promotion of education, and ③ the encouragement of mutual understanding between consumers and producers. Following this policy, Tokyo has initiated projects such as the strengthening of consultation with citizens, publication of “Kurashi no Eisei (sanitation in life),” holding the “Seminar on Sanitation” and the establishment of the “food and housing sanitation corner” and “gathering for discussions on food and health of Tokyo” in 1990. It also started information provision through the Internet in 1997. Furthermore, it has embarked on new projects since 2003, such as ① the establishment of the Food Safety Information Assessment Committee; ② establishment of “Net Forum on Food Safety” in which people discuss food issues through the internet; ③ holding the “Tokyo Food Safety Forum” where many of Tokyo’s citizens came together to exchange information (Reference 8).

Aomori prefecture, famous for apple production, established a “Food Safety Task Team” in the Health and Welfare department of the prefecture office, through which the entire office takes measures for food safety. At the same time, the Aomori prefecture food safety countermeasures headquarters, which is composed of consumers, producers, and suppliers in the prefecture, drew up the “General Guideline for Food Safety in Aomori Prefecture” by referring to the questionnaire results on producers’ and enterprises’ perception of food safety.

Kumamoto prefecture, where agriculture, forestry and fisheries are very active, worked out, with some input from public comments, the “Kumamoto Basic Policy for

Food Safety” that specifies the basic approach to promote the prefecture’s general policy for consumer food safety and the supporting system of measures. It also held the “Kumamoto Forum for Food Safety” in collaboration with the Kumamoto food safety people’s council and the prefectural university, and adopted an action program in the forum.

Other prefectures and municipalities are building new frameworks for food safety administration at the local level, by preparing communication channels among administrative bodies related to food safety, enacting related regulations, making action plans, establishing investigative and deliberative organizations, and forming councils of concerned administrations and organizations.

(4) Measures taken by food-related business

Food-related businesses, which engage in production, import, or sales of food, additives, appliances, packages including production materials and the products of agriculture, forestry and fisheries, are obliged to take principal responsibility for ensuring food safety (Food Safety Basic Law, Article 8).

Therefore, food-related businesses, ranging from producers to retailers, need to promote effective cooperation and information exchange with each other to ensure food safety.

Food-related businesses actually make efforts in risk communication in which they accept inquiries and opinions from consumers and reflect the feedback from consumers in their products, in addition to ensuring the safety of their products.

For example, a bottling company has publicized the telephone number of the section in charge on their products for 15 or 16 years in order to accept inquiries from consumers and customers precisely. The number has been toll-free for the last 5 or 6 years and operates on a limited basis on holidays. Through these efforts, the bottling company receives 120 to 130 thousand inquiries per year. The contents of the inquiries range from ingredients, efficacy, date of minimum durability and additives to allergies, and those related to food safety have been increasing in recent years. Because the company gave priority to consumers’ safety, some of the inquiries are reflected in warning labels, which led to the improvement of warning labels in the beverage industry as a whole. The principles of risk communication such as transparency and the establishment of communication skills are considered to be common to private companies (Reference 9)

(5) Consumers' activities

Consumers are also expected to play large roles in ensuring food safety by endeavoring to improve their own knowledge and understanding of food safety and by making efforts to express their opinions about policies to ensure food safety (the Food Safety Basic Law Article 9). In fact, a large number of consumer groups regard food safety as one of their major targets and take actions on food safety as follows:

- ① holding study meetings on individual issues related to food safety, such as BSE and chemicals;
- ② exchanging information and ideas with producers, food-related business, and administrative bodies;
- ③ expressing their opinions on the assessment of the effect of food on health and regulations for food safety; and
- ④ initiating the collaboration between consumers and producers to manage both the recycling of organic resources at the local level and food safety.

III. Issues and methodology of risk communication

1. Issues

When we consider food safety, people's perceptions of risk differ from person to person according to the position, experience and knowledge of each person. We need to continue making efforts to understand the reasons and backgrounds of those differences to figure out better methods of ensuring food safety.

For instance, people's perception of the risk of a fire or an earthquake and that of food differ greatly from each other. In addition, although minimizing risk is desirable, costs and manpower that can be spent or mobilized for reducing risk are limited. In such cases, concerned parties need to exchange ideas on how much risk our society can or cannot bear while in the process of sharing information.

In risk communication among concerned parties such as consumers, information should be provided in words and ways of explanation that can be understood if one has knowledge of a compulsory education level. It is also important to create mechanisms by which ordinary citizens can attain a deep understanding and knowledge of ensuring food safety and express their opinions freely, and to steadily increase such opportunities.

Repeated risk communication cannot always enable concerned parties to agree, but it is expected to reduce the harmful effects brought about by dissociation of recognitions, which is caused by the inability of concerned parties to understand the positions and the ways of thinking of one another.

(1) Roles, activities and collaboration of parties concerned

① The National Government

The National Government needs to collect, sort out and provide information for ensuring food safety. Especially, the government needs to prepare and provide materials explaining the question at issue plainly. It is also important to have closer communication with concerned parties, make efforts to prepare and provide requested information and give answers to questions.

In addition, the National Government needs to take the following measures with sufficient transparency: establish a place for exchanging ideas where people can participate easily; iron out the differences of opinions; propose measures to reflect the opinions of concerned parties in policies; point out problems; report hazard information; and establish a consultation window.

Furthermore, it is also important to ensure sufficient communication among concerned parties to preserve the collaboration between risk assessment and risk management organizations, and the collaboration among the National Government, prefectures, and municipalities. It is also essential to present the details of the measures taken and the costs and time required to introduce management measures in response to the results of any assessment of the effect of food on health.

② Local governments

Local governments, which are administrative bodies close to local citizens and food-related businesses, must respond to the food safety issues that bear closely on their respective localities.

Ideally, all citizens should be able to understand each problem and choose foods without worrying about safety, but in reality they cannot. Because the number of people whom we can target, scientific knowledge, individual principles, and the health conditions of citizens are diverse to a large degree, it is important to provide available information in a plain way that is in line with people's daily life. It is also important to take measures that are within their capacity, by, for example, tracking how provided information is accepted by citizens and by reconsidering the methods of information provision at all times.

Because of the geographical expansion of food distribution and the diversity of information dissemination, information in some localities can exert effects not only on the people of the concerned local public bodies, but also on the residents of many other local public bodies. Therefore, it is important for local governments to have closer

communication with the National Government organizations, as well as to collaborate with each other to share information related to risk communication on food safety.

③ Food-related business

Irrespective of production, import and sales, food-related businesses need to act with recognition given to the fact that those who provide food are involved directly in lives and health of customers, and that they must make efforts to collaborate and communicate with all concerned parties.

Recently, we have seen such scandalous events occurring one after another that were caused by food-related business that citizens lost confidence in food safety. Though their legal responsibility was apparent, because their communication with society was inadequate, they caused anxiety within our society and found themselves in serious straits. Therefore, it is important to create mechanisms through which producers and other food-related businesses can participate in risk communication actively as parties concerned with food safety.

As a matter of course, business entities must observe laws. Business entities also need to increase their ability to fulfill their accountability using scientific data. In addition, it is important that labor unions urge companies to fulfill their social responsibilities.

Business entities need to appropriate the cost of tests conducted by the companies themselves in order to ensure safety. However, testing all food is impossible because tested food cannot be eaten. Therefore, it is also important to set sampling ratios that are based on scientific knowledge.

In responding to risk, it is important to address risk first and foremost by applying the “don’t escape, don’t hide, don’t lie” principle, and to additionally “give relief to victims, prevent the spread of damage, and prevent recurrence” promptly. Companies would be able to make the best use of information that is provided in times of necessity if they first win the trust of society and consumers through communication at ordinary times.

People will not care about information provided in the case of emergency if they do not trust in the contents, the methods and the attitude of information provision at normal times. Because companies can conduct smooth and effective emergency communication if they have appropriate communication in ordinary times, it is important to improve organizations, human resources and systems aimed at providing correct information about companies and their products.

Regarding labeling items, we need collaboration among food-related businesses, such as collaboration between food packaging enterprises and manufacturers.

④ Consumers

In order for consumers to exercise their rights to participate in the assessment and management of food risk, they need to demand places and opportunities where they can express their opinions and then express their opinions in those places and opportunities.

In addition, to enable each consumer to think scientifically about the causes of specific events, they also need to exchange information and ideas actively with specialists at local organizations and universities.

It is a prerequisite for smooth communication in the case of emergency that consumers and concerned parties such as producers and retailers building a relationship of mutual trust amongst themselves by sharing information and exchanging ideas on food safety.

Furthermore, it is important to be conscious of why we choose any given food, and to express our preferences through our own consumption activities.

⑤ Media

The media plays a very important role in risk communication on food safety. Especially, the role of the media in providing information to all the concerned parties promptly and extensively is immeasurable. In general, the media try to collect information from administrative bodies, producers and companies steadily so as to urge them to provide that information to receivers.

On the other hand, some media produce inappropriate reports. Some point out that certain reports overstress the nature and the degree of risk. As our food is being diversified, the media is expected to produce reports based on scientific data and insight all the more diligently.

Because information on food safety has a large effect on people's everyday life, the media is required to make efforts to report not only on risk but also on the efficacy of food based on accurate and timely facts. The media also must endeavor to provide appropriate information that allows consumers to carefully choose their food. Furthermore, it is important to increase the number of journalists who have technical knowledge on food safety or the ability to comprehend these issues.

⑥ Experts

Recognizing more deeply that they bear accountability, scientists and researchers need to participate in risk communication on food safety, or directly provide the risk communication to ensure food safety.

It is expected that academic societies be capable of giving simple explanations by, for

example, opening a line of communication that allows consumers and other nonprofessionals to make inquiries easily. In addition, when experts' opinions on food risk differ from each other, academic societies need to make efforts to help the concerned parties understand their differences by clarifying the background and basis of the differences.

It is also important that experts exchange information on the various arguments and reports are made by other countries, international academic societies and societies of other fields in order to contribute to enhancing international cooperation. Experts also need to increase the transparency of scientific discussions by, for example, having open discussion among experts. Training specialists in the field of food risk analysis is also an urgent task.

(2) Collaboration with related fields

① Education

In order for society to respond and act calmly when food causes harm, the following two things are considered to be important. The first is the ability to absorb information from various media and judge scientifically whether the events have effects on their food choice (ability to discern correct information supported sufficiently by evidence and incorrect information in a flood of information). The second is "Education on Food" (a range of activities aimed at acquiring knowledge on food and the ability to select food, effectively rearing persons who can practice sound dietary habits; the Food Safety Basic Law has a provision related to this goal (Reference 5)). Information on food safety is dispatched in various ways. For receivers to gain the ability to judge the information, education from childhood is indispensable.

We also need to take measures to use the information that food-related businesses possesses, even in primary school education.

② Free access to information and the protection of intellectual property rights and privacy

The first step of risk communication on food safety is the sharing of food hazard information, information on the assessment of the effect of food on health and management measures. In principle, this kind of information needs to be open to all the parties concerned. The Food Safety Commission and its expert committee meetings are principally open to public. Secret meetings are held when there is the possibility that privacy and intellectual property rights of companies could be made public and that specific persons might thus receive unfair advantage or disadvantage. Even in this case,

the minutes are published, excluding the names of the speakers. The names of speakers are eventually published, three years after the meeting. Furthermore, it is provided that discussions held on safety shall be made known to all concerned persons (Reference 10).

In risk communication on food safety, it is necessary to disclose sufficient information to the public to enable discussions on safety, while at the same time protecting privacy and intellectual property rights.

③ Risk communication in the case of emergency

Risk communication in the case of emergency has different problems than occur in ordinary times. Approaches to address the problems in the case of emergency also differ from that in ordinary time. These matters are being considered by the expert committee on emergency response.

④ Measures to prevent so-called “damage caused by rumors”

It is natural that consumers take action to protect themselves from health damages, but consumers, retailers and so forth sometimes worry too much when there is insufficient information on food that is actually harmless to health, which might result in social and economic damages to producers and manufacturers providing the food. This is so-called “damage caused by rumors.”

We should not use the term “damage caused by rumors” lightly. Rather, we should examine each situation carefully, because it is generally difficult to specify what degree of the damage is caused by rumors and because the parts of the stories that are rumor are often ambiguous. Nevertheless, there are some cases of damaging rumors that could have been prevented or alleviated if risk communication had worked well. Therefore, it would be important to consider this “damage caused by rumors” as a problem that risk communication should address in the future.

At a retail shop, which is the primary point of contact with consumers, we must give safety the highest priority. However, removing foods that are suspected to cause safety problems from the shelf of a retail shop immediately can convey inaccurate information (rumor) to concerned persons. On the other hand, continuing to sell foods that might be unsafe can seriously damage the trust of consumers. It is necessary to work out measures to reduce these kinds of problems. For example, the establishment of a method to acquire scientifically accurate information swiftly would be one such measure.

2. Measures

(1) Communication media

Public meetings should be held actively from now on, as it is shown by the results of the survey of food safety monitors that people hope for public meetings in which concerned parties can exchange ideas directly. The exchange of ideas and information through the Internet, which emphasizes interactivity, is also anticipated to become increasingly important (reference 11).

However, people living in remote places have difficulty participating in public meetings. Some people do not use the Internet. We need to consider measures to provide these people with opportunities for the interactive exchange of information and ideas.

We should consider using the "Food Safety Line" of the Food Safety Commission, which was established mainly as a consultation service to answer questions from concerned persons, as a channel to accept proposals on what kind of hazard factors should be assessed, what kind of measures should be taken, and so forth. Furthermore, we should consider collaborating more deeply with persons connected with education, medical care and welfare in order to conduct effective risk communication.

(2) Public meetings

It would be appropriate to have public meetings with larger numbers of participants when the meetings mainly cover new institutions. On the other hand, when we discuss individual and concrete subjects, public meetings should be held with smaller numbers of participants so that all of them can speak at the meetings. Besides, it would be beneficial that a limited number of people, ranging from specialists, consumers, food-related businesses and the media participate and discuss intensively in meetings to clarify the point at issue.

(3) Training of specialists and improving skills

The National Government and other concerned parties should make efforts to improve their general communication skills by, for example, training specialists with a detailed knowledge of the measures and the communication skills needed to explain the recent scientific findings precisely and plainly.

The Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries has held training courses and seminars on risk communication for managing staffs and supervisors seven times since August 2002 (Reference 12).

A broad range of ministries and concerned parties should consider holding these kinds of training courses.

(4) Improvement of investigation and research

Practical investigation and research on risk communication is needed while referring to pertinent experts' opinions. For example, we should promote the investigation and research of fields such as the international comparison of risk communication on food safety and the development of methods to assess risk communication. Furthermore, we also need comprehensive and empirical investigation and research on the question of how people react when they notice the existence of risk and when they address unknown risk.

(5) International risk communication activities

As is suggested by the cases of bird flu and the discovery of BSE in US and the ensuing ban on beef imports from US, collaboration and consultation with other countries are also important. We need to provide appropriate information to and exchange ideas with other countries concerning the details of risk analysis in our country. At the same time, we need to endeavor to improve the web sites of the respective ministries concerned, as well as hold explanatory meetings and public meetings so that domestic concerned parties can share information on the discussions held at international organizations and on food safety in other countries.

IV. The Direction of Future Actions

The Risk Communication Expert Committee has put an emphasis mainly on communication for deeper understanding of the concept of risk, and on explanations of new schemes that the National Government has initiated during the last half-year.

The Committee aims to search for the direction of actions that the National Government and the Food Safety Commission should follow from now on. In pursuit of this aim, the Committee will attach a great deal of importance to questioning and talking with concerned parties, such as producers, suppliers, consumers, administrative bodies and pertinent experts, seeking opinions on where problems related to food safety lie. They will be looking for solutions to the problems and questions, as well as opinions on what should be considered as risk and how communication should be conducted.

The Committee also plans to ask all concerned parties for their opinions on specific problems of risk communication and will also solicit proposals in regard to the problems.

It is important that concerned parties make serious efforts and conduct risk communication for ensuring food safety based on a wide range of information and

opinions.

Based on this report, the Risk Communication Committee recommends that we should take the following measures in the future:

1. Advise the Food Safety Commission and related administrative bodies on their risk communication;
2. Send its members to participate in a wide range of public meetings;
3. Exchange ideas directly with concerned parties such as administrative bodies, food-related businesses, consumers, the media, and persons connected with education at any time;
4. Conduct risk communication systematically for items on which concerned parties have very different opinions (including fields in which the difference in the recognition of safety is large among concerned parties, such as pesticides, food additives and genetically modified foods) and for items that concerned parties do not understand sufficiently;
5. Develop a system to conduct swift risk communications;
6. Investigate the causes of so-called “damage caused by rumors” and take measures to prevent it; and
7. Promote risk communication at an international level.

Members of Risk Communication Expert Committee, FSC

- Dr. Jun SEKIZAWA (Chairman)
Professor, Faculty of Integrated Arts and Sciences, The University of Tokushima
- Ms. Mie ISHIZAKI
Housewife * The member selected from a list of applicants
- Ms. Yuriko INUBUSHI
Vice President, Consumption Science Federation
- Mr. Seiichi OGAWA
Head, Division of Food Inspection, Bureau of Public Welfare and Healthcare, Tokyo Metropolitan Government
- Dr. Kiyotoshi KANEKO
Director, Department of Cortical Function Disorders, National Institute of Neuroscience, National Center of Neurology and Psychiatry
- Dr. Hideaki KARAKI
Emeritus Professor, Tokyo University
- Ms. Toshiko KANDA
General of the National Liaison Committee of the Consumers' Organization
- Dr. Toshiko KIKKAWA
Associate Professor, Faculty of Business and Commerce, Keio University
- Ms. Mieko KENJO
Professor, Faculty of Sociology, Aomori University
- Ms. Yasuko KONDO
Executive General Manager, Consumer Communication Department, Suntory Limited

- Mr. Toshihiko SHINKURA
Managing Director, National Federation of Fisheries Co-operative Associations
- Dr. Kuniko TAKAHASHI
Professor, Faculty of Education, Gunma University
- Dr. Momoko CHIBA
Associate Professor, Juntendo University School of Medicine,
- Mr. Naoki NISHIKATA
Chief editor of the Magazine “Nice Wife”, Third Editorial Department,
Syufu-to-Seikatsusya, Co., Ltd
- Mr. Susumu HIRAKOSO
Head Director, Center of Organic Material Recycle, Authorized Nonprofit
Organization * A member selected from a list of applicants
- Mr. Kuniaki MIMAKI
Executive Officer, General Quality Assurance Department, Skylark Co., Ltd
- Mr. Yoshiro KAWADA
CEO, Toho Processing INC, National Federation of Gravure Printing Industry
Co-operative Associations
- Mr. Naoyuki KUBO
Central Executive Committee Member, The Japanese Federation of Textile,
Chemical, Food, Commercial, Service and General Workers' Unions
- Mr. Masami NAKAMURA
Senior Staff Writer, Science and Technology News Department, Editorial
Bureau, Nihon Keizai Shimbun, INC

The State and Issues of Risk Communication on Food Safety in Japan, July 2004

List of References

- (Reference 1) Summary of a Lecture given by Chairperson Sekizawa at the 3rd meeting of the Risk Communication Expert Committee held on December 12, 2000 1
- (Reference 2) The Operational Provisions of the Expert Committee of the Food Safety Commission (excerpt) 3
- (Reference 3) Communication Concerning the BSE incident and Beef Prices 5
- (Reference 4) The Problems Identified by a BSE Investigation Committee Report and the Measures Taken so far 8
- (Reference 5) The Food Safety Basic Law (Extract Law No. 48, May 23, 2003) 11
- (Reference 6) Activities on Risk Communication Conducted by Concerned Ministries 13
- (Reference 7) Activities of the Prefectural Food Safety Administration 19
- (Reference 8) Activities of the Metropolis of Tokyo (based on the paper submitted by Mr. Ogawa, an expert member) 24
- (Reference 9) The Summary of a lecture by Mrs. Kondo, an expert member, at the third meeting of the Special Investigative Committee on Risk Communication held on December 2, 2003 27
- (Reference 10) On the Disclosure of the Food Safety Commission(Decided by the Food Safety Commission of Cabinet Office, on July 1, 2003) 29
- (Reference 11) Survey for Food Safety Monitors:“ Attitudes Toward Food Safety” September in 2003 31
- (Reference 12) The Record of Risk Communication Training Courses for the Officers at the Food Safety and Consumer Affairs Bureau of the Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries 48

(Summary of a Lecture given by Chairperson Sekizawa at the 3rd meeting of the Risk Communication Expert Committee held on December 12, 2000)

Risk communication on food, just as that on nuclear energy, chemicals or the environment, is important to ensure food safety. Food differs from other fields in that it might affect everybody, including children and old people, sick and healthy persons. Though information on food safety is flooding through the mass media and the Internet, it does not always provide appropriate and reliable information that various people want to know.

Risk analysis is recognized as being an important scientific and transparent measure to ensure food safety by international organizations such as FAO and WHO. According to FAO/WHO, risk analysis is composed of three elements: risk assessment, risk management and risk communication. These three elements are defined as follows:

Risk assessment: To synthesize all the data currently available, assess it scientifically, and then propose guidelines.

Risk management: To consider and choose the options of safety management, then implement and monitor them; and provide information for reassessment. To prepare, select and implement options while considering technical feasibility and cost performance.

Risk communication: To guarantee participation of all the concerned parties from production to consumption level, ensuring that information is shared among the parties and each party has its own role; free access to information is not enough.

The positioning of risk communication: it is essential for food safety management to convey and understand information and opinions on the hazard factors of food. The participation of concerned parties such as international organizations, the government, related industries and consumers is needed.

Major issues of risk communication: to establish reliable information sources; to ensure transparency; to share responsibilities; to promote mutual understanding; to establish special communication skills; to confirm the distinction between science and value judgments and the importance of both.

The distinction between risk communication at normal times and that which occurs in an emergency: In an emergency, we need a plan for effective crisis management that should be reviewed after the event, as well as communication channels through which a practical action guideline is provided in order to avoid a panic. At normal times, we

need to not only have scientific information on food safety education and those matters which are always the subject of the issue, but also to promote problem-solving while considering feasibility through the exchange of ideas and mutual understanding among all concerned parties.

As mentioned above, international organizations and Western countries have tried activities related to risk communication as a part of risk analysis, and the results of those activities are reflected in food safety policies. Their experiences are helpful to us in promoting effective risk communication in our country.

The Operational Provisions of the Expert Committee of the Food Safety Commission (excerpt)

The operational provisions of the Expert Committee of the Food Safety Commission
(excerpt)

(decided by the Cabinet Office, Food Safety Commission on July 9, 2003)

Article 1 The establishment of Expert Committees of the Food Safety Commission and the preparation of minutes for all meetings and proceedings shall be provided by this provision.

(the establishment of the Expert Committee)

Article 2 The Expert Committee described below and in the attached table shall be established at the Food Safety Commission.

1 (omitted)

2 Risk Communication Expert Committee

3 (omitted)

2-5 (omitted)

(the duties of the Expert Committee)

Article 3 The Risk Communication Expert Committee shall investigate and deliberate on items related to the coordination of risk communication conducted by the Food Safety Commission and related administrative bodies.

3~ 4 (omitted)

Article 4-6 (omitted)

Items that the Risk Communication Expert Committee is currently required to
investigate and discuss

(decided by the Cabinet Office, Food Safety Commission on September 11, 2003)

Clause 2 of Article 3 of the operational provisions of the Expert Committee of the Food Safety Commission stipulates that “the Risk Communication Expert Committee shall investigate and deliberate on items related to the coordination of risk

communication conducted by the Food Safety Commission and related administrative bodies”.

Based on this provision, the Risk Communication Expert Committee is required to investigate and discuss the following item.

- To collect opinions on the state and the issues of risk communication on food safety in our country. This effort should be based on the results of idea exchange meetings and so forth regarding cases of risk communication about individual subjects, including those in foreign countries as well as other fields in our country.

Communication Concerning the BSE incident and Beef Prices

Year 2001

- August 6 All the milk cows were destroyed after being diagnosed with septicemia at a slaughterhouse in Chiba prefecture.
- August 24 Vacuoles were found through a pathological test performed by the Chiba prefectural Livestock Hygiene Service Center.
- September 10 The Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries (MAFF) announced the first suspected case of BSE-infected cattle in our country. MAFF announced that the cattle concerned should not be served as food but should rather be burned.
- September 12 Chiba prefecture and the Ministry of Health, Labor and Welfare (MHLW) informed MAFF that the cattle concerned were not burned but rendered.
- September 14 MAFF corrected the announcement it had made and announced that the BSE-infected cattle were not burned but rendered.

The wholesale price of beef began to drop beginning on September 18th (at the beginning of next week); 1130 yen on the 17th; 1072 yen on the 18th; 982 yen on the 19th (per kg, ministerial ordinance price, and so forth)

- October 4 MAFF banned the use of meat and bone meal
- October 11 A BSE ELISA test-positive animal was detected at the meat wholesale market in Tokyo. Because the animal from which the specimen was collected was not identified, the Tokyo Metropolis government recalled all meats and the internal organs sold at the same time (the results of a confirmation test were negative).

On the following October 12th, 472 yen; the lowest before the start of blanket testing of cattle for BSE

- October 18 The two Ministers of the MHLW and MAFF announced the commencement of blanket testing of cattle for BSE and a removal requirement for Specified Risk Material (SRM). The mass media reported this announcement as a "Safety Announcement".

October 26 Announcement and initiation of a “Beef buy-back program,” under which the government purchased beef which was stocked before the blanket testing of BSE started.

November 21 Announcement of the second case of BSE-infected cattle.

The wholesale price dropped sharply on the 22nd; 715 yen on the 21st; 579 yen on the 22nd.

November 30 Announcement of the confirmation of the third case of BSE-infected cattle.

The wholesale price continued to drop; 527 yen on the 30th; 475 yen on December 3rd; 532 yen on the 4th; 400 yen on the 5th; 427 yen on the 6th; 351 yen on the 7th.

December 7 Wholesale price reached the lowest point of the year.

351 yen on the 7th.

Year 2002

January 23 The Snow Brand Food Co. announced that it had applied for the “Beef Buy-back program” while disguising Australian beef as Japanese beef.

February 1 the Snow Brand Food Co. was brought up on criminal charges by the chief of the Kinki Regional Agricultural Administration Office.

February 15 Disguised labeling of imported beef as domestic by Kawai, a food processing company, was discovered.

The average wholesale price in February dropped to 360 yen.

March 5 Disguised labeling of imported chicken as Kagoshima chicken by Kumiai Foods, a chicken processing company affiliated with ZENNO (National Federation of Agricultural Co-operative Associations), was discovered.

March 11 Disguised labeling of points of origin by Ibaraki Prefectural Agricultural Co-operative was discovered.

March 12 Disguised labeling of points of origin by an agricultural corporation in Chiba prefecture was discovered.

The average wholesale price in March was 354 yen, which was the lowest of the year.

April 2 An investigative committee on the BSE issue submitted a report of its findings.

April 30 The Snow Brand Food Co. was dissolved.

The average wholesale price in April was 614 yen; after that, prices tended to recover.

May 13 Announcement of the confirmation of the fourth case of BSE.

June 11 A related ministerial-level conference decided on the establishment of the Food Safety Basic Law and the Food Safety Commission, among other measures.

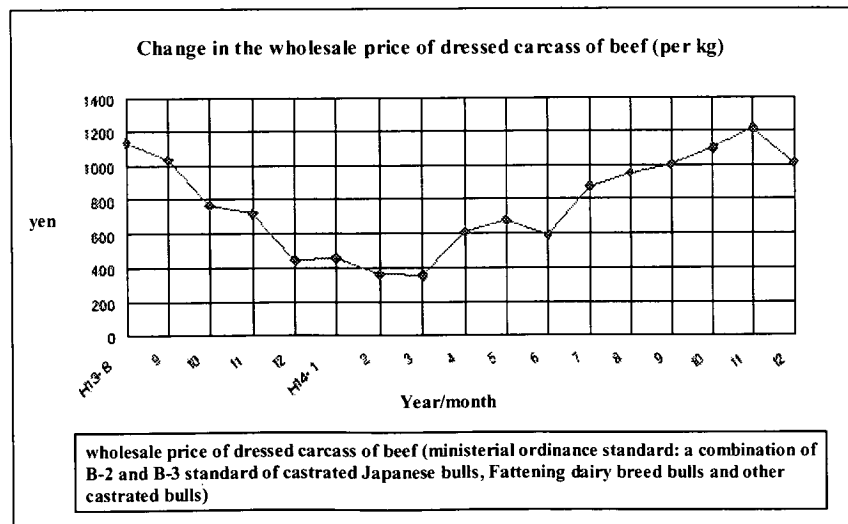
June 28 Disguised labeling of beef by Nippon Shyokuhin was discovered.

The average wholesale price in July was 879 yen, up from 590 yen in June.

August 6 Disguised labeling of the points of origin of beef by Nippon Meat Packers Group was discovered.

August 22 Announcement of the confirmation of the fifth case of BSE.

The average wholesale price in September was 1,005 yen; reaching the 1,000-yen mark for the first time since the outbreak of BSE.



The Problems Identified by a BSE Investigation Committee Report and the Measures Taken so far

“BSE issue report (BSE Investigation Committee, April 2, 2002)”

Part III Future direction of food safety administration

2. Fundamental view of the organization system for ensuring food safety

(2) Constructing an organization system based on risk analysis

③ Establishment of “risk communication”

The following are those problems which have been pointed out by the Committee and the measures which have been taken so far.

Problems pointed out by the BSE issue report	Measures taken in 2003 fiscal year
<ul style="list-style-type: none"> • Need to establish special functions and organizations to promote risk communication systematically. • It is necessary to institutionalize free access to information and idea exchange through the process of risk analysis, including the progress of risk assessment and risk management. • Information on risk assessment and risk management, except information stipulated by the clauses of Article 5 of “the Law of Public Access to Information held by Administrative Bodies,” needs to be open to the public by enabling consumers to access the information freely. 	<ul style="list-style-type: none"> • Special organizations are established at the Food Safety Commission, the Ministry of Health, Labor and Welfare and the Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries. • Provided by the Food Safety Law, Article 13 and so forth. • Meetings such as the Food Safety Commission, its special investigative committees, Pharmaceutical Affairs and Food Sanitation Council, the Council of Food, Agriculture and Rural Area Policies, Agricultural Materials Council, are basically held open to the public.

<ul style="list-style-type: none">• “Public hearings” and “opinion submission” for consumers should be institutionalized. Public hearings should be institutionalized so that the administration actively holds public hearings and that consumers can demand that they be held.• For the free access to and the provision of information on risk assessment and risk management, using examples of Western countries’ experiences, we should provide timely information on changes in institutions via the Internet to persons who desire it.• Risk communication shall be conducted between risk assessment organizations and ministries in charge of risk management, or between these bodies and other stakeholders. We need to establish functions and systems to conduct such risk communication.• An organization which systematically takes charge of risk communication should be established in the administrative body that conducts risk assessment.• Learning from cases in other countries, we need to devise an information provision method tailored for the characteristics of receivers (such as for the general public, or for children).	<ul style="list-style-type: none">• Addressed practically by asking for ideas and opinions, setting up a Food Safety Line and holding idea exchange meetings.• The information is open to the public on the Internet. MAFF has begun to provide the newest information to persons who desire it by e-mail.• Each ministry has established necessary systems.• The Food Safety Commission, which conducts assessments of the effect of food on health, is in charge of the clerical work of coordinating risk communication conducted by concerned administrative bodies.• Each organization has provided plain information to the general public through
--	--

<ul style="list-style-type: none">• To provide detailed information, we need special departments and specialists on information. This is the field where Japan lags behind. It is an especially urgent task to train communicators in charge of public relations.	<p>brochures and the Internet. Information provision for children is conducted by some organizations.</p> <ul style="list-style-type: none">• Each ministry has established a special organization in charge of risk communication. Communicators are being trained on the job. Some are providing training programs.
---	---

The Food Safety Basic Law

(Extract Law No. 48, May 23, 2003)

Last amendment: No. 74. June 11. 2003

(Implementation of assessment of the effect of food on health)

Article 11

In formulating policies to ensure food safety, assessment (hereinafter referred to as the “assessment of the effect of food on health”) shall be made for each policy on the effects that potentially harmful biological, chemical, or physical agents in food or the condition of food have on human health, through the ingestion of the food, provided that this shall not apply to the following cases:

- (1) where the assessment of the effect of food on health is explicitly unnecessary in consideration of the contents of the measure;
- (2) where the contents and degree of adverse effects on human health are clear;
- (3) where there is no time to conduct an assessment of the effects of food on health in advance in cases where the measure is urgently necessary to prevent or control an adverse effect on human health.

2. In cases as cited in (3) of the preceding paragraph, the assessment of the effect of food on health shall be conducted subsequently and without delay.

3. The assessment of the effect of food on health provided in the preceding two paragraphs shall be conducted in an objective, neutral, and fair manner on the basis of the state-of-the-art scientific knowledge of the time.

(Formulation of policies on the basis of the results of the assessment of the effect of food on health in consideration of the conditions of nationals’ dietary habits and other circumstances)

Article 12

In formulating policies to ensure food safety, it shall be conducted for the purpose of preventing and restraining the adverse effect of food ingestion on human health, in consideration of the dietary habits of citizens and other circumstances, and on the basis of the results of the assessment of effect of food on health if conducted in accordance with the provisions of paragraph 1 or 2 of the preceding article.

(Promotion of exchanges of information and opinions)

Article 13

In formulating policies to ensure food safety, necessary measures for promoting the mutual exchange of information and opinions among persons or parties concerned, such as provision of information concerning the policies and the granting of opportunities to comment on those policies, shall be taken to reflect public opinion in the formulation of the policies and to ensure the transparency and fairness of the process.

(Office duties under the jurisdiction of the Commission)

Article 23

The Commission shall take charge of the following office duties:

- (1) to offer opinions to the Prime Minister in accordance with the provisions of Article 21, paragraph 2;
- (2) to conduct an assessment of the effects of food on health in accordance with the provisions of the following article or at its direction;
- (3) to make recommendations to related ministers through the Prime Minister about policies to be implemented for ensuring food safety on the basis of the results of the assessment of the effect of food

on health, which was conducted in accordance with the provisions of the preceding item;

(4) to monitor the implementation conditions of policies that are implemented on the basis of the results of the assessment of the effect of food on health, which was conducted in accordance with the provisions of item (2), and to make recommendations to related ministers through the Prime Minister if necessary;

(5) to examine and deliberate on important matters regarding policies to be implemented for ensuring food safety, and to give opinions to the heads of related administrative bodies if necessary;

(6) to conduct scientific research and study necessary to perform office duties cited in items (2) to (5);

(7) to plan and implement the mutual exchange of information and opinions among persons or parties concerned with respect of office duties cited in items (2) to (6); and

(8) to coordinate office duties conducted by related administrative bodies regarding the mutual exchange of information and opinions among persons or parties concerned with respect to ensuring food safety.

Activities on Risk Communication Conducted by Concerned Ministries

I . Collaborative activities by concerned ministries

To promote risk communication while conducting new food safety administration with a consumers' point of view, the Food Safety Commission, the Ministry of Health, Labor and Welfare and the Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries collaboratively held a number of meetings including idea exchange meetings among consumers, food related business operators and so on across the nation as follows (by the end of March 2004, 31 meetings were held, in which more than 5,000 people participated).

Year 2003

July 4	Toward the enactment of the revised law on food safety	(Tokyo)
July 10	Toward the enactment of the revised law on food safety	(Kobe)
August 12	Meeting for explanation and idea exchange about food sanitation	(Tokyo)
September 10	Policy idea exchange meeting with consumer groups (the first meeting on pesticide residue)	(Tokyo)
September 26	Idea exchange meeting on food safety	(Kanazawa)
September 30	Policy idea exchange meeting with consumer groups (the second meeting on pesticide residue)	(Tokyo)
October 7	Seminar on food safety and reliability	(Kumamoto)
October 24	Public hearing on genetically modified foods	(Tokyo)
October 28	Idea exchange meeting on risk communication	(Tokyo)
October 31	Idea exchange meeting on food safety	(Sapporo)
November 5	Seminar on food safety and reliability in Tokai	(Nagoya)
November 10	Idea exchange meeting on antibacterial substances for farm animals	(Tokyo)
November 11	Regional forum on food safety in the prefecture of longevity, Okinawa	(Naha)
November 18	Idea exchange meeting on food safety	(Sendai)
November 19	Idea exchange meeting on the international risk analysis method for contaminants	(Tokyo)
November 26	Policy idea exchange meeting with consumer groups (food labeling)	(Tokyo)

November 28	Idea exchange meeting on risk communication on food	(Osaka)
December 2	Seminar focused on food safety and reliability (Saitama)	
December 5	Idea exchange meeting on food safety	(Fukuoka)
December 9	Idea exchange meeting on ensuring safety of imported foods	(Tokyo)
December 12	Policy idea exchange meeting with consumer groups (traceability of beef)	(Tokyo)
December 12	Idea exchange meeting on cadmium	(Tokyo)
December 15	Idea exchange meeting on ensuring safety of imported foods	(Osaka)
December 16	Idea exchange meeting on risk communication on food	(Hiroshima)
December 19	Idea exchange meeting on the drafting of standards for safety assessment of genetically modified foods (seed plants)	(Tokyo)
Year 2004		
January 16	Idea exchange meeting on food safety and reliability	(Kyoto)
January 30	Idea exchange meeting on risk communication on food	(Takamatsu)
February 16	Idea exchange meeting on risk communication on food	(Tokyo)
March 13	Lecture meeting on risk communication on food	(Tokyo)
March 17	Policy idea exchange meeting with consumer groups (sanitation management of vegetables)	(Tokyo)
March 19	Idea exchange meeting on avian influenza vaccine	(Tokyo)
March 22	Lecture meeting on risk communication on food	(Kyoto)
March 23	Meeting for explanation and idea exchange about food sanitation	(Tokyo)
March 26	Policy idea exchange meeting with consumer groups (traceability of food)	(Tokyo)

II . Activities of each ministry and commission

1. Activities of the Food Safety Commission

In the 2003 fiscal year, the Food Safety Commission conducted the following activities in collaboration with concerned administrative bodies in order to promote risk communication.

① Ensuring transparency of discussions and providing information

The Food Safety Commission is principally held open to the public. It provides information to the public about discussions covering the results of the assessments of the effect of food on health, and records minutes of the proceedings using its web site.

② Seeking ideas and opinions from the general public

The Commission sought opinions from the public about matters such as the assessment of the effect of food on health regarding “foods derived from birds inoculated with inactive avian influenza virus vaccine”.

(Twenty-six invitations up until the end of March 2004)

③ Holding informal gatherings and lecture meetings

To exchange ideas and opinions among concerned parties such as consumers and food related business operators, the Commission held informal gatherings 14 times.

In addition, regarding problems of deep concern to the people as well as the assessment of the effect of food on health, the Commission held lectures by experts on issues such as BSE and bird flu.

④ Establishing the “Food Safety Dial”

The Commission established the “Food Safety Dial” on August 1 in 2002 in order to receive information, inquiries and opinions on food safety widely from consumers etc. and to let the people acquire deeper knowledge and understanding of food safety. (358 inquiries up to the end of March 2004)

⑤ Comprehending opinions through “Food Safety Monitors”

At the beginning of September 2003, the Commission appointed 470 Food Safety Monitors and conducted an attitude survey on food safety (questionnaire survey). In addition, the Commission receives reports of opinions on food safety administration

at all times. Furthermore, it held Food Safety Monitor meetings at 6 places (7 times) across the country (from December 2003 to January 2004).

2. Activities of the Ministry of Health, Labor and Welfare

MHLW, in collaboration with other ministries, has promoted risk communication by holding idea exchange meetings with concerned parties such as consumers and companies and participating in idea exchange meetings held by other ministries. It also has transmitted information using its web site.

① Information transmission by web site

MHLW provides information on its activities for ensuring food safety through its “Food Safety Information” web page. It also puts a banner displaying “Food Safety Information” at the top of its home page for easy access.

② Receiving ideas and opinions on food safety by email

A mailbox was set up on the “Food Safety Information” web page to accept opinions from the public about the activities and information provision related to food safety administration.

③ Ensuring transparency of discussions and providing information

The Pharmaceutical Affairs and Food Sanitation Council and investigative committees on institutions related to health food are principally open to the public, and information on the discussions and the minutes of the council and committee meetings are provided to the public through a web site.

④ Seeking ideas and opinions from the general public (so-called “public comment”)

MHLW sought ideas and opinions from the public, by, for example, “Invitation for ideas and opinions on Imported Food Monitoring and Instruction Program (draft)”. (Twenty-seven invitations in 2003 fiscal year)

⑤ Holding idea exchange meetings

Since July 2003, MHLW has held idea exchange meetings 8 times nationwide, in which concerned persons such as consumers and companies and administrative officers assembled, and has also conducted questionnaire surveys all across the

country.

In addition, idea exchange meetings on ensuring safety of imported food were held in Tokyo and Osaka.

⑥ Information transmission by government publicity

MHLW provided information on matters related to food safety and reliability, such as information on the revised Food Sanitation Law, the checking of imported foods at their point of entry, and the ministry's activities for food safety, on "Shin-Nippon Tankentai (broadcast on September 7, 2003)" and a government PR brochure "Toki no Ugoki (the October 2003 issue)".

3. Activities of the Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries

MAFF conducted "risk communication on food", especially on issues of deep concern to consumers. It also actively provides easy-to-understand information through its web site, mail magazine and regular informal gatherings with consumers.

① Participation of consumers in councils

The "Consumption and Safety Subcommittee" was established in the Council of Food, Agriculture and Rural Area Policies, and concerned persons including consumers participated in the subcommittee as members.

② Holding idea exchange meetings and informal gatherings including the Minister of Agriculture, Forestry and Fisheries and consumers

These meetings and gatherings were held regularly, beginning in the 2002 fiscal year.

- "Idea exchange meeting between the Minister and concerned parties" (July 7)
- "Regular informal gatherings of the Minister and consumers" (the first time on July 18; the second time on November 13)

③ Holding "Risk Communication on Food"

To reflect the anxiety and opinions of consumers, producers and companies in policies for ensuring food safety, MAFF has held risk communication on food for each subject in collaboration with the secretariat of the Food Safety Commission of the Cabinet Office and MHLW.

- “On pesticide residue” (the first time on September 10; the second time on September 30)
- “On the risk management of antibacterial substances for farm animals” (November 10)
- “On the international view of the risk management of contaminants” (November 19)
- “On easy-to-understand food labeling” (November 26)
- “On the traceability of beef and individual identification of cattle” (December 12)
- “On the drafting of international standards for cadmium and the state of our country” (December 12)
- “Activities of Good Agricultural Practices (GAP) to produce safe agricultural products” (March 17)
- “①On the safety of foods derived from vaccinated birds”
②On the policy of vaccination” (March 19)
- “Food traceability” (March 26)

(Ten meetings covering 9 subjects up to April 8, 2004)

④Activities (such as idea exchange meetings) by Regional Agricultural Administration Offices,

The Regional Agricultural Administration Offices, District Agriculture Offices and Okinawa General Bureau held symposiums and idea exchange meetings, as well as sent panelists and lecturers. (as of the end of February, 2004)

Symposiums and idea exchange meetings : national total 1,130 (since July 2003)

Dispatch of panelists and lecturers : national total 3,228 (since July 2003)

⑤ Information provision by web site and mail magazine

MAFF has provided information on food safety and reliability through its web site and mail magazine. On February 20th, it initiated “Food Safety and Reliability Topics”, which transmits information on food safety and reliability from MAFF as well as the Food Safety Commission and MHLW.

(7,403 receivers of “Food Safety and Reliability Topics (as of April 8, 2004)

Activities of the Prefectural Food Safety Administration (as of March 31, 2004)

Prefecture	Establishment of a liaison conference of food safety-related departments	Enactment of ordinance	Establishment of basic policy	Establishment of action plan
Hokkaido	○	Under consideration	○(Sep. 2002)	○(Mar. 2003)
Aomori	○		○(Jun. 2003)	○(Jun. 2003)
Iwate	○		○(Aug. 2003)	○(Feb. 2004)
Miyagi	○	○(Apr. 2004)	○(Mar. 2003)	○(Sep. 2003)
Akita	○	○(Mar. 2004)		Under formulation
Yamagata			○(Mar. 2003)	
Fukushima	○		○(Nov. 2002)	○(Nov. 2002)
Ibaraki	○		○(Mar. 2002)	○(Mar. 2003)
Tochigi	Scheduled in 2004		○(Mar. 2004)	Under consideration
Gunma	○	○(March 2004)	○(revising)	
Saitama	○	Under formulation	○(Mar. 2000)	○(Jul. 2003)
Chiba	○		Under consideration	
Tokyo	○	○(March 2004)	Repealed due to the enactment of ordinance	Under formulation (planned in Mar. 2005)
Kanagawa	○	Under consideration	○(Mar. 2004)	○(Mar. 2004)
Yamanashi	○		○(Sep. 2003)	○(Mar. 2004)
Nagano	Under consideration		○(Feb. 1995)	
Shizuoka	○		○(Nov. 2002)	○(Mar. 2003)
Niigata	○		○(Aug. 2003)	○(Mar. 2004)
Toyama	○			○(Mar. 2004)
Ishikawa	○		○(Feb. 2004)	○(Mar. 2004)
Fukui	○			○(Mar. 2004)
Gifu	○	○(Dec. 2003)	○(Apr. 2004)	Under formulation
Aichi	○			○(Sep. 2003)
Mie	○		○(Jan. 2003)	○(Jan. 2003)
Siga	○		○(Aug. 2003)	○(Mar. 2004)
Kyoto	○		○(Mar. 2003)	
Osaka	○		○(Nov. 2002)	
Hyogo	○		Under formulation	Under formulation
Nara	○		○(Dec. 2003)	Under consideration
Wakayama	○		○(Jan. 2004)	Under consideration
Tottori	○		○(Mar. 2004)	○(Mar. 2004)

Shimane	○		○(Dec. 2003)	Under consideration
Okayama	○		○(Sep. 2002)	○(Mar. 2003)
Hiroshima	○		○(Mar. 2003)	○(Mar. 2004)
Yamaguchi	○		○(Mar. 2004)	Under formulation
Tokushima	○		Under consideration	
Kagawa	○		○(Mar. 2004)	○(Mar. 2004)
Ehime	○		○(Oct. 2003)	○(Mar. 2004)
Kochi	○		Under consideration	Under consideration
Fukuoka	○		○(Feb. 2004)	Under formulation
Saga	○		○(Jan. 2004)	○(Jan. 2004)
Nagasaki	○	○(December 2003)	○(Feb. 2003)	○(Dec. 2003)
Kumamoto	○	Under consideration	○(Mar. 2003)	
Oita	○	Under consideration	○(Mar. 2002)	Under consideration
Miyazaki	Under consideration		Under consideration	Under consideration
Kagoshima	○		Under formulation	
Okinawa	○		Under consideration	

Establishment of liaison conference of food safety-related departments:

- : Each local government establishes a liaison conference or equivalent conference as a system of communication and information exchange among departments related to food safety.

“Under consideration” : Not established, but preparing for establishment.

blank : Otherwise

Enactment of ordinance, establishment of basic policy and action plan:

- : Established

“Under formulation” : Under a concrete process of formulation

“Under consideration” : Not under a concrete formulation process, but considering establishment.

* Month and year in parentheses are the time of establishment.

Activities of the Prefectural Food Safety Administration (as of March 31, 2004)

Prefecture	Municipality	Establishment of a liaison conference of food safety-related departments	Establishment of basic policy	Establishment of action plan
Hokkaido	Sapporo	○		Under consideration
Hokkaido	Asahikawa		Under consideration	Under consideration
Hokkaido	Otaru			
Hokkaido	Hakodate		Under consideration	Under consideration
Miyagi	Sendai	○		
Akita	Akita	Scheduled in 2004 fiscal year	Under consideration	Under consideration
Fukushima	Koriyama	○		
Fukushima	Iwaki			
Tochigi	Utsunomiya	○	○	Under formulation
Saitama	Saitama	○	Under formulation	
Saitama	Kawagoe			
Chiba	Chiba	○	○	○
Chiba	Funabashi	○	○ (Mar. 2004)	○ (Mar. 2004)
Tokyo	Chiyoda			
Tokyo	Chuo			
Tokyo	Minato			
Tokyo	Shinjuku			
Tokyo	Bunkyo			
Tokyo	Taito			
Tokyo	Sumida			
Tokyo	Koto		Under consideration	Under consideration
Tokyo	Shinagawa			
Tokyo	Meguro	○		
Tokyo	Ota			
Tokyo	Setagaya			Under consideration
Tokyo	Shibuya			
Tokyo	Nakano			
Tokyo	Suginami			
Tokyo	Toshima			
Tokyo	Kita	Under consideration	Under consideration	Under consideration
Tokyo	Arakawa		Under consideration	Under consideration
Tokyo	Itabashi			
Tokyo	Nerima			
Tokyo	Adachi			

Tokyo	Katsushika			
Tokyo	Edogawa			
Kanagawa	Kawasaki	○	○(Feb.2004)	○(Feb.2004)
Kanagawa	Yokohama	○		
Kanagawa	Yokosuka			
Kanagawa	Sagamihara	○		
Nagano	Nagano		Under consideration	
Shizuoka	Shizuoka	○	Under consideration	Under consideration
Shizuoka	Hamamatsu		Under consideration	Under consideration
Niigata	Niigata	○	○(Apr.2004)	○(Apr.2004)
Toyama	Toyama	○		
Ishikawa	Kanazawa		Under consideration	Under consideration
Gifu	Gifu	○		
Aichi	Nagoya	○	Under consideration	Under consideration
Aichi	Toyota		Under consideration	Under consideration
Aichi	Toyohashi			
Aichi	Okazaki	Under consideration		
Kyoto	Kyoto	○		
Osaka	Osaka	Scheduled in 2004 fiscal year		
Osaka	Sakai			
Osaka	Takatsuki			
Osaka	Higashiosaka			
Hyogo	Kobe	○		
Hyogo	Himeji	○		
Hyogo	Amagasaki		Under consideration	Under consideration
Hyogo	Nishinomiya			
Nara	Nara	Scheduled in 2004 fiscal year		
Wakayama	Wakayama			
Okayama	Okayama	○	Under consideration	Under consideration
Okayama	Kurashiki	○	Under consideration	○
Hiroshima	Hiroshima			
Hiroshima	Fukuyama			
Hiroshima	Kure			
Yamaguchi	Shimonoseki			
Kagawa	Takamatsu			○
Ehime	Matsuyama	○	Under formulation	Under formulation
Kochi	Kochi	○	Under consideration	Under consideration
Fukuoka	Kitakyushu	○		

Fukuoka	Fukuoka	○	Under consideration	
Fukuoka	Omuta		Under consideration	Under consideration
Nagasaki	Nagasaki		Under consideration	Under consideration
Nagasaki	Sasebo			
Kumamoto	Kumamoto	Under consideration	Under consideration	
Oita	Oita	○		
Miyazaki	Miyazaki			
Kagoshima	Kagoshima	Under consideration		

Establishment of liaison conference of food safety-related departments :

○ : Each local government establishes a liaison conference or equivalent conference as a system of communication and information exchange among departments related to food safety.

“Under consideration” : Not established, but preparing for establishment.

blank : Otherwise

Enactment of ordinance, establishment of basic policy and action plan :

○ : Established

“Under formulation” : Under a concrete process of formulation

“Under consideration” : Not under a concrete formulation process, but considering establishment.

* Month and year in parentheses are the time of establishment.

Activities of the Metropolis of Tokyo
(based on the paper submitted by Mr. Ogawa, an expert member)

Because Tokyo is not only the center of food distribution and a large food-consuming region but also has a strong interest in food safety, its activities are very influential. Being close to local citizens and companies, local governments are required to take administrative measures that should always be grounded in reality.

Needless to say, due to the importance of previous risk communication, the metropolitan government has taken several measures and improved them each time that events and accidents have happened.

In the past, food sanitation administration was engaged mainly with extension and education programs for food related business operators. However, a direct petition for enactment of a food safety ordinance was submitted with half a million signatures in 1989, and subsequent discussion at the metropolitan assembly led us to recognize the importance of a consumer-oriented policy. As a result, “The basic policy to ensure food safety in Tokyo (revised on April 2, 1999)”, which advocates the importance of information sharing with the citizens of Tokyo, was established on December 19, 1990.

“Kurashino Eisei (Sanitation in life),” an information magazine produced by the Food and Environment Guidance Center of Tokyo, which was established in 1990, has published previously unreleased test data on various kinds of food. Setting a precedent for active information provision, “Kurashino Eisei” is thought highly of by consumer groups and leads consumers to change their perception of Tokyo’s attitude.

In the fiscal year of 1993, the “Tokyo Food and Health Talkfest” was established as a place for directly hearing the opinions and views of representatives of Tokyo’s citizenry, as well as for directly informing businesses and consumers of policies and measures the administration conducted. The Talkfest was held successively and enjoyed a high reputation as a place for practicing concrete risk communication.

In response to E. coli O157 food poisoning in 1996, the following measures were taken to reduce anxiety of Tokyo citizens about food:

- ① Making brochures, videos and poster panels (“What is enterohaemorrhagic E. coli O157? Q&A,” 110,000 copies; “Voluntary Sanitation Management,” a brochure

about sanitation management for enterprises, 5,000 copies; “What is enterohaemorrhagic E. coli O157? Q&A” for foreigners in English, Chinese, Korean, 4,000 copies each);

- ② Newspaper advertisements about the prevention of food poisoning;
- ③ Dissemination of information and education about E. coli O157 through TV or radio programs sponsored by the metropolitan government and public relations magazines;
- ④ Information provision by a special telephone consultation service and the Internet;
- ⑤ Leaflets about the prevention of food poisoning and “Wash your hands” seal (making 40,000 leaflets and distributing them to primary and junior high schools, kindergartens and nursery schools in Tokyo);
- ⑥ Holding panel discussions;

Fortunately, E. coli O157 caused only small damages and no deaths in Tokyo, but that event led the administration to strongly recognize the importance of education and information provision.

Beginning in fiscal year 2003, the metropolitan government started three new programs.

Firstly, it established the Food Safety Information Assessment Committee. The committee consists of 17 or less members who have an academic background and 3 or less citizens selected from among a list of applicants. The objective of the committee is to collect domestic and international information on food safety, analyze and investigate problems that are predicted to cause and spread hazard, and then to propose measures the metropolitan government should take.

Following the propositions, the metropolitan government will conduct effective and efficient monitoring and inspection as well as promote measures to prevent hazards and minimize damages. To inform Tokyo’s citizens of the problems considered, the committee also considers the methods of risk communication for each problem and advises the metropolitan government.

Secondly, the metropolitan government opened the “Net Forum on Food Safety” as a place for idea exchange and discussion on the Internet about various problems related to foods.

Anyone can participate in the Net Forum on Food Safety, discussing subjects the metropolitan government sets. The results of the discussion in this Forum will be used in formulating the food safety measures of the metropolitan government.

Thirdly, the “Tokyo Food Safety Forum” was established as a place for thinking about food safety problems publicly, with the participation of as many Tokyo citizens as possible. The Forum is held twice a year in a symposium and panel discussion format.

(The Summary of a lecture by Mrs. Kondo, an expert member, at the third meeting of the Special Investigative Committee on Risk Communication held on December 2, 2003)

It was 15 or 16 years ago that we put the telephone number of the producer's department in charge on our products. We made it a toll-free number 5 or 6 years ago. Some lines are working even on holidays. We receive 120,000 to 130,000 inquiries a year from consumers and related companies.

The inquiries vary greatly, including questions on where a necktie worn by a star in a TV spot can be bought, periods of validity and so on. Nevertheless, inquiries related to safety have been increasing recently, covering topics such as ingredients, efficacy, calorie content, area of production of ingredients, additives and allergy information. In addition, though we received inquiries mainly from housewives in the past, an increasing number of older men and children inquire about detailed information these days.

One of the recent challenges for us is to determine to what extent we can guarantee the contents and flavor of imported ingredients and food. Information disclosure between companies is also an important problem.

Fruit drinks in recloseable bottles such as PET bottles could cause accidents. If we drink directly from the bottle, the contents can get contaminated with bacteria and ferment. In such cases, the cap of the bottle can be blown off or the bottle can explode under certain states of preservation.

It took a long time and much coordination in the office to provide hazard information directly on our products. Giving the priority to consumers' safety, however, we finally introduced cautionary labelling. Furthermore, our initiative led to caution labeling and educational activities throughout the beverage industry as a whole.

The principles of risk communication, such as establishment of reliable information sources, ensuring transparency, building up communication skills, and identifying receivers, are common to private companies too.

The point of inquiries often changes rapidly depending on how we answer the inquiries.

It is important to make a judgment at the customer service level to determine if the inquiry is an ordinary and casual one, or if the inquirer is in an urgent situation.

Because accepting inquiries is part of a company's service, counseling skills, such as the skill of listening to an inquirer for the long haul, is also necessary.

In addition, to tell our customers what we really want to convey, we should go out to meet and talk with them face to face.

The ease of participation in an idea exchange meeting varies from person to person. We need to hold idea exchange meetings not only on weekdays but also on holiday nights.

Idea exchange in an industry as whole is also important in harmonizing views among the administration and other concerned parties and in making brochures for consumers.

**On the Disclosure of the Food Safety Commission
(Decided by the Food Safety Commission of Cabinet Office, on July 1,
2003)**

1. On the disclosure of the state of the activities of the Commission

The scheduled date and time and the place of the Commission meetings shall be disclosed.

2. On open meetings

The Commission meetings shall be held principally open to the public. However, closed meetings shall be held when open meetings would potentially hinder the Commission members from speaking freely or impede fair and independent deliberation, or reveal the private details of individuals or the intellectual property rights of companies and thus bring unfair advantage or disadvantage to specific persons.

3. On the disclosure of the minutes of the proceedings

(1) The minutes of the Commission meetings shall be disclosed, except in cases in which the disclosure leads to revelation of private details of individuals or intellectual property rights of companies and thus bring unfair advantage or disadvantage to specific persons.

(2) In the case of closed meetings, the minutes, excluding the names of speakers, shall be disclosed immediately, and the entire minutes, including the names of speakers, shall be disclosed three years after the date of the meeting.

4. On the disclosure of the inquiries, advice, assessment results, opinions and submitted materials

(1) Inquiries, advice, assessment results and opinions of the Commission shall be disclosed.

(2) Materials submitted to the Commission shall be principally disclosed. They shall not be disclosed when the disclosure leads to revelation of private details of individuals or intellectual property rights of companies and thus bring unfair advantage or disadvantage to specific persons.

5. Others

- (1) Principally, the above provisions shall also be applied to special investigative committees.
- (2) Other matters necessary for the disclosure of committees shall be decided by committees' chairpersons.

Survey for Food Safety Monitors: “Attitudes Toward Food Safety” [Summary] September in 2003

Food Safety Commission

1 Purpose

The Food Safety Commission asked 470 Japanese consumers to be “Food Safety Monitors” in September 2003 in order for them to report to the Food Safety Commission information and opinions pertaining to food safety. The Commission conducted a questionnaire for Food Safety Monitors along the following four themes:

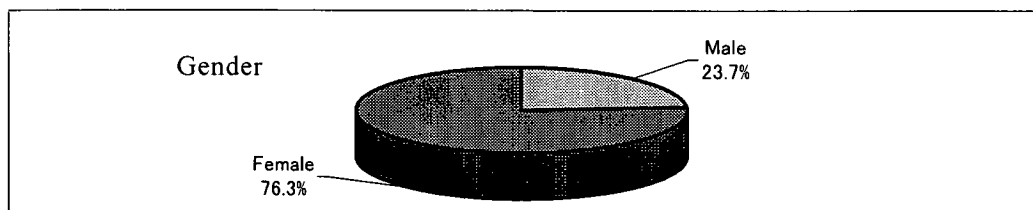
- Ensuring food safety
- Food-borne hazards
- Risk communication
- Emergency response

2 Methodology

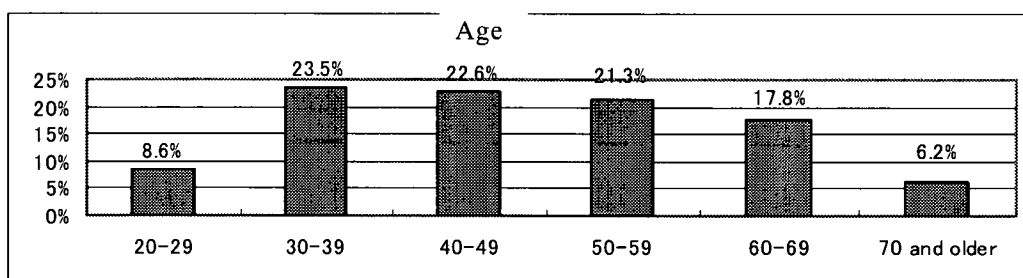
The data for this survey were collected from Food Safety Monitors. The questionnaire sheets were mailed out to the 470 Food Safety Monitors in Japan on September 5, 2003 and the 455 responses were collected by September 19 (for a response rate of 96.8 percent).

Demographic Profile

1) Gender : Male: 108 Female: 347

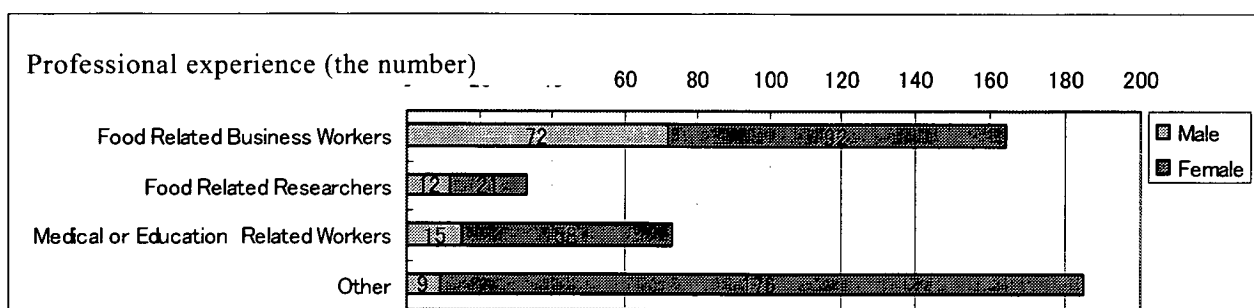
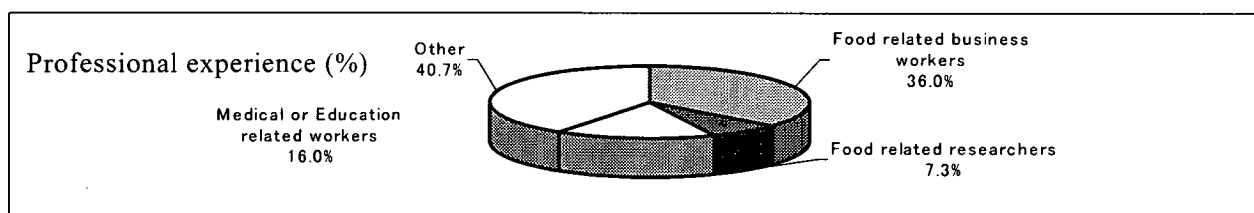


2) Age : 20-29: 39 30-39: 107 40-49: 103
50-59: 97 60-69: 81 70 and older: 28



3) Professional experience :

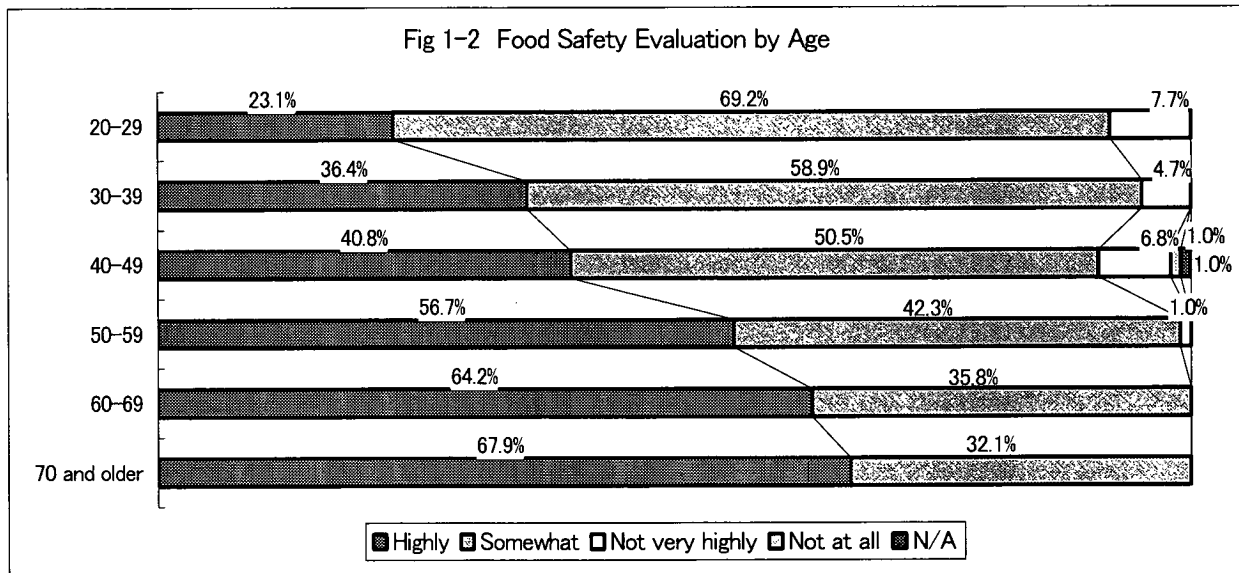
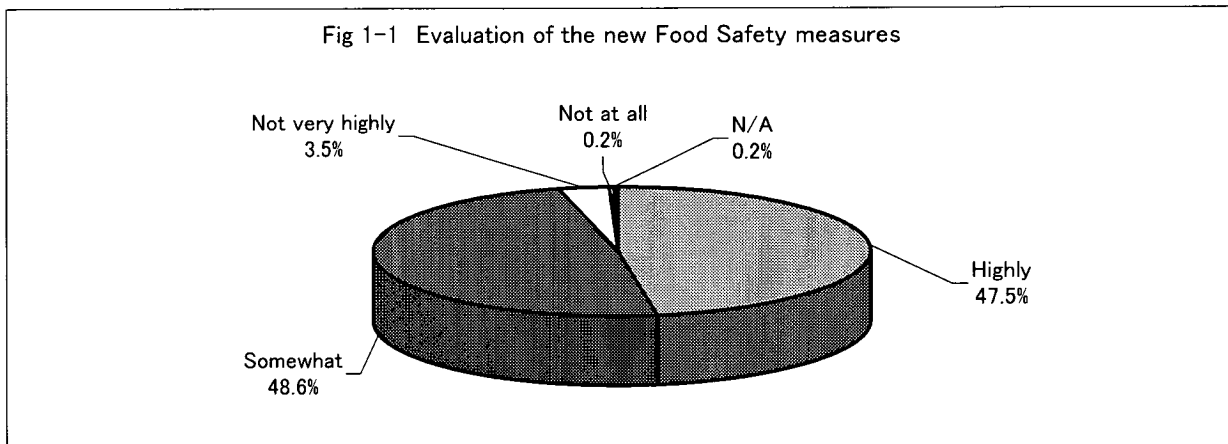
Food-Related Business Workers	<ul style="list-style-type: none"> Those who have worked or had worked for more than five years in a food-related business such as food production, food processing, food distribution, and food retail. Those who have worked or had worked for more than five years in food-related administration. 	164
Food-Related Researchers	<ul style="list-style-type: none"> Food experts who have worked or had worked for more than five years in a research center or a university. 	33
Medical or Education-Related Workers	<ul style="list-style-type: none"> Medical or educational experts who have worked or had worked for more than five years in a medical center, hospital, primary school, junior high school, or high school. 	73
Other	<ul style="list-style-type: none"> Those outside the above three categories 	185



1 Ensuring Food Safety

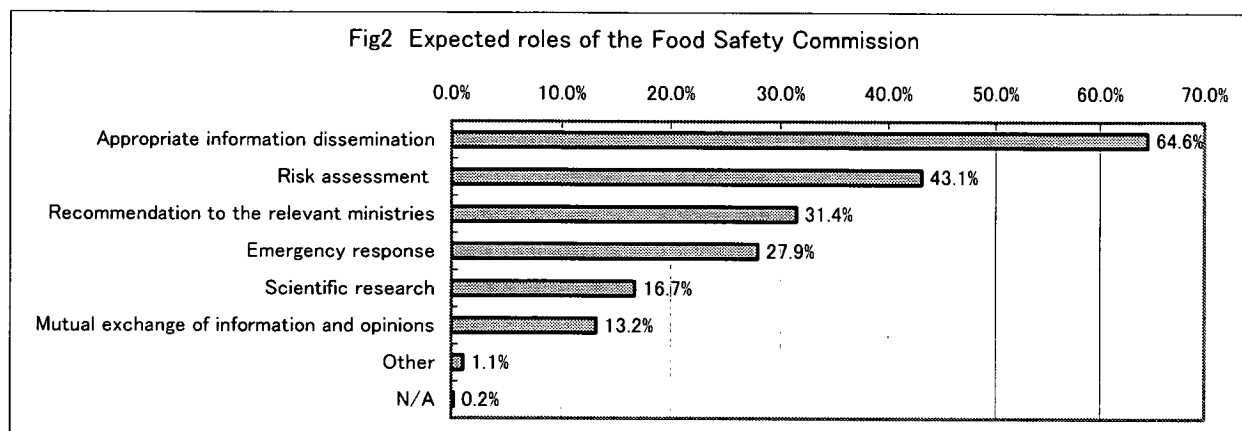
1 Evaluation of the new food safety measures

Q1 Under the Food Safety Basic Law, enforced on July 1, 2003, the Food Safety Commission was established in the Cabinet Office. The government is taking new measures to ensure food safety. How do you evaluate these new measures in relation to food safety? (One choice)



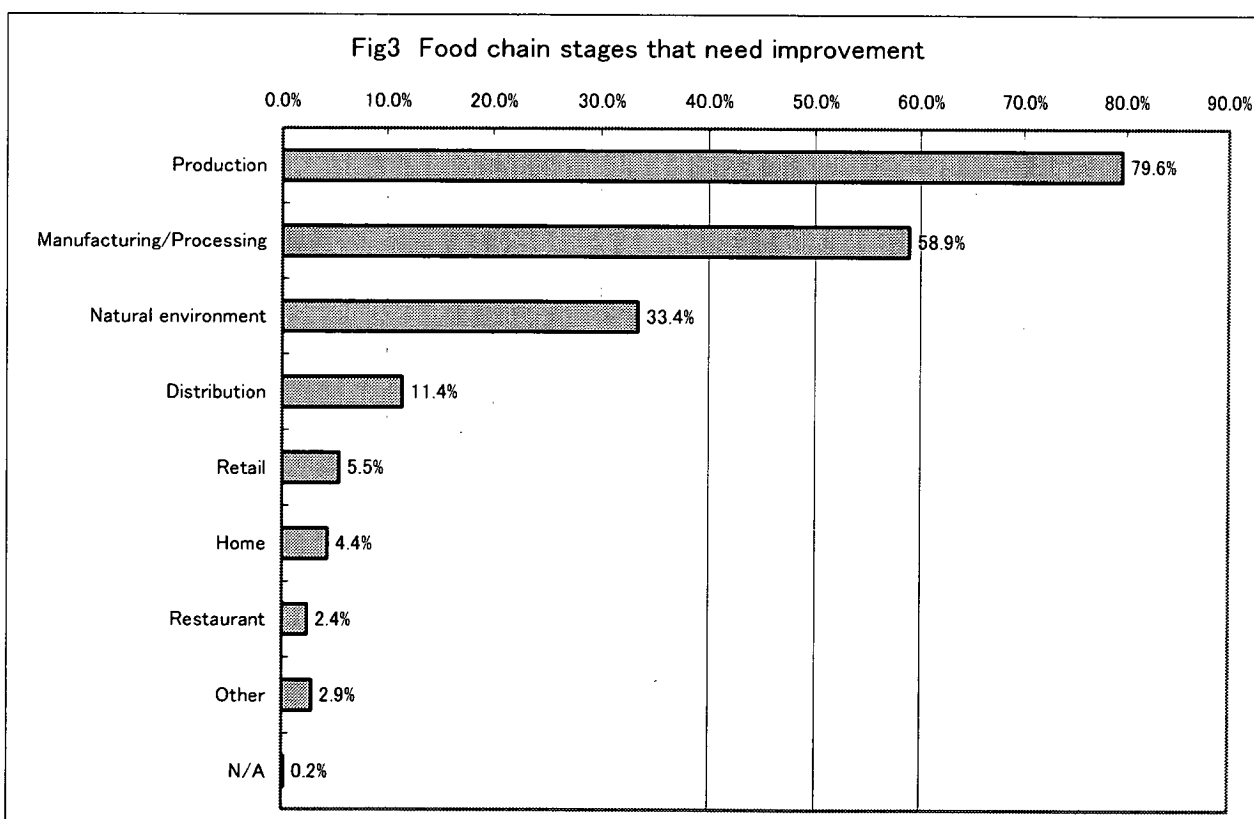
2 Expected roles of the Food Safety Commission

Q2 What do you expect the Food Safety Commission to do? (One or two choices)



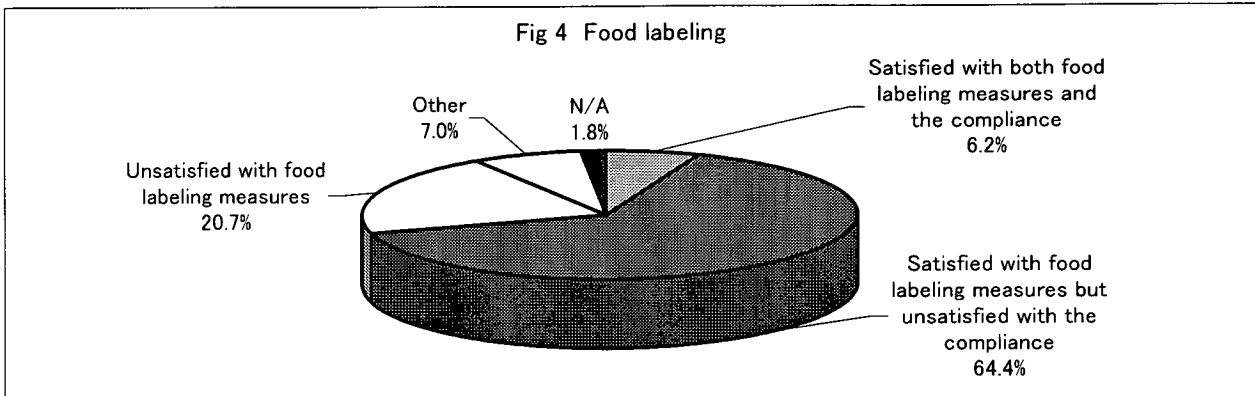
3 Food chain stages that need improvement

Q3 Which stage in the food chain do you think is necessary to improve to ensure food safety? (One or two choices)



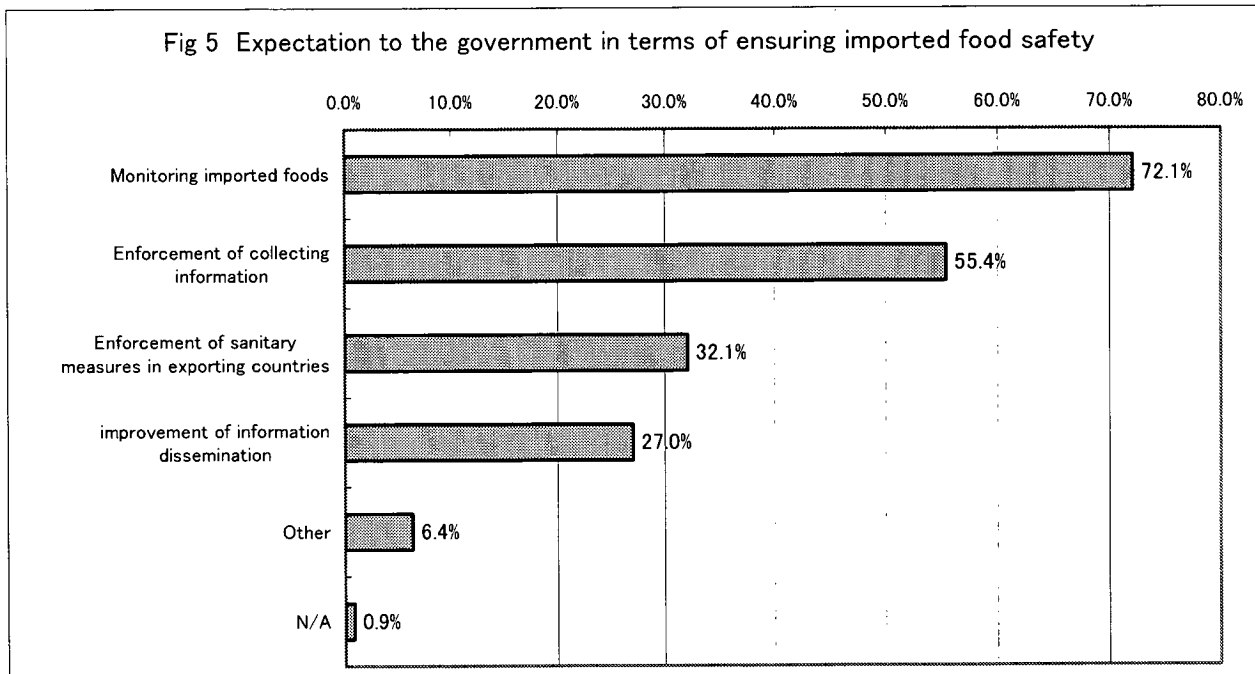
4 Food labeling

Q4 What do you think of food labeling? (One choice)



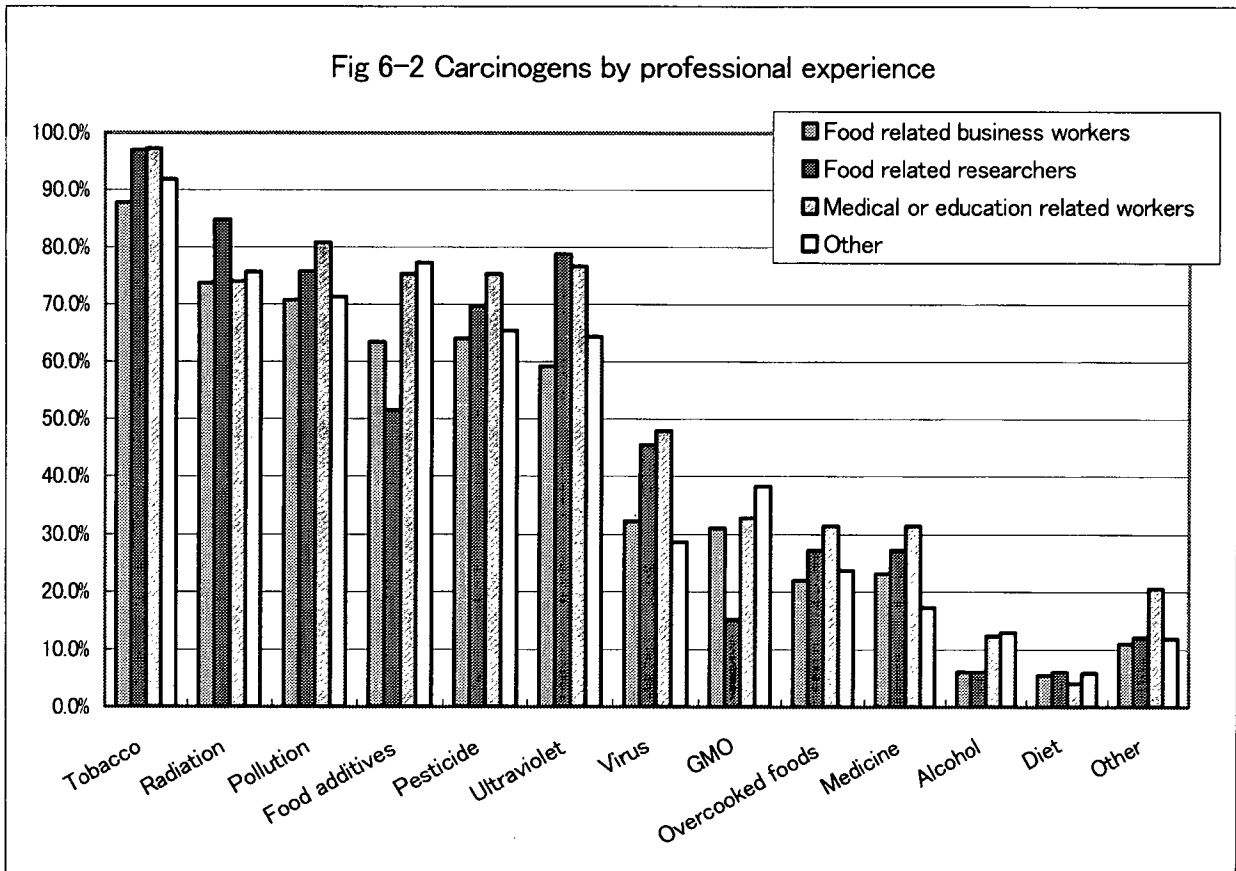
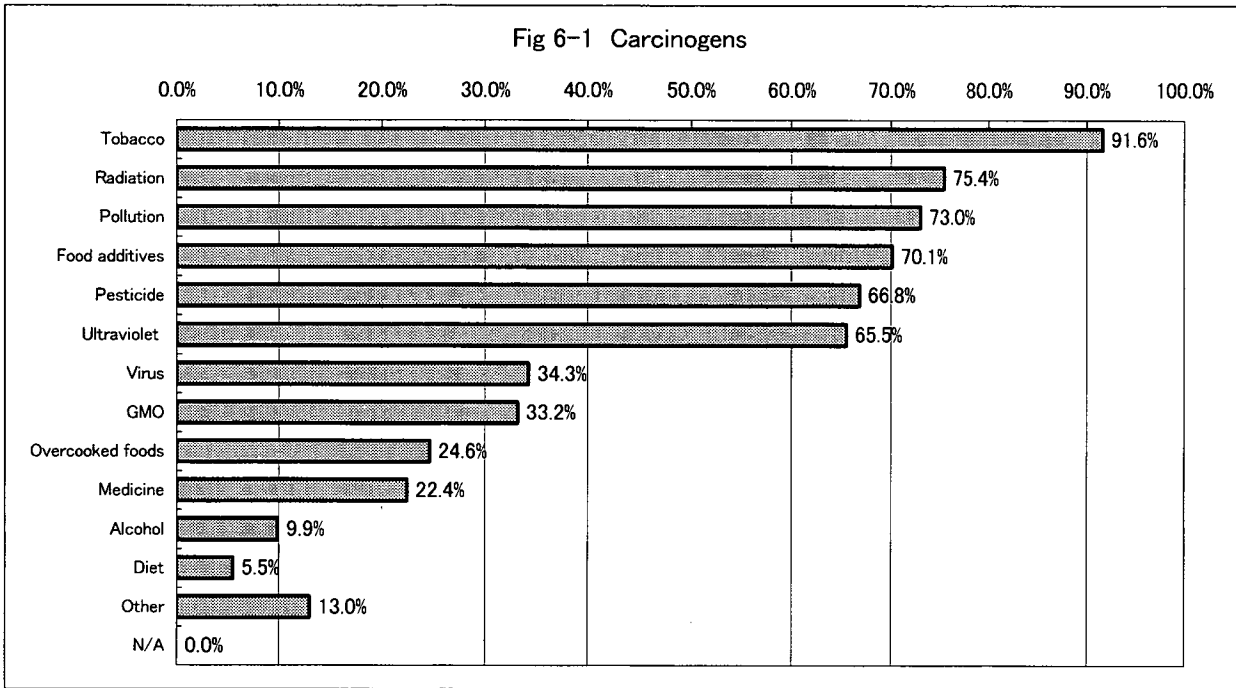
5 Expectation to the government in terms of ensuring imported food safety

Q5 What do you expect the government to do in terms of ensuring imported food safety? (One or two choices)



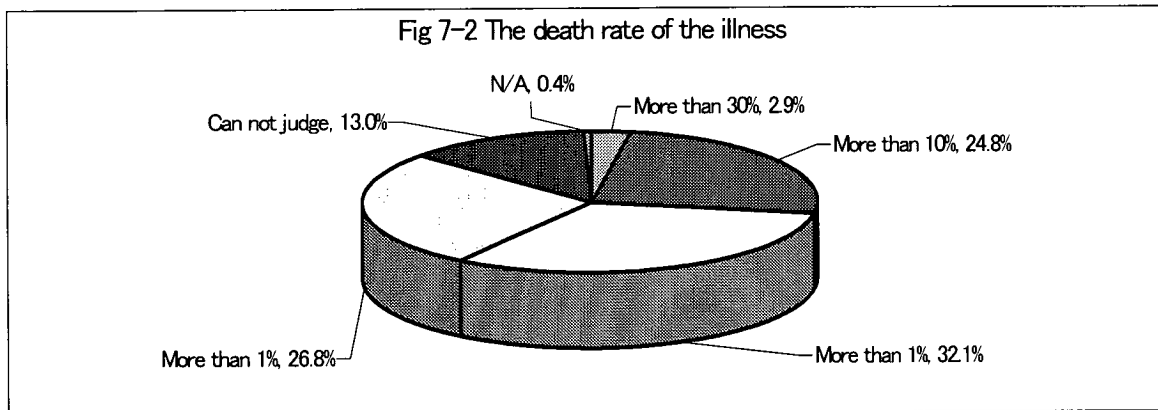
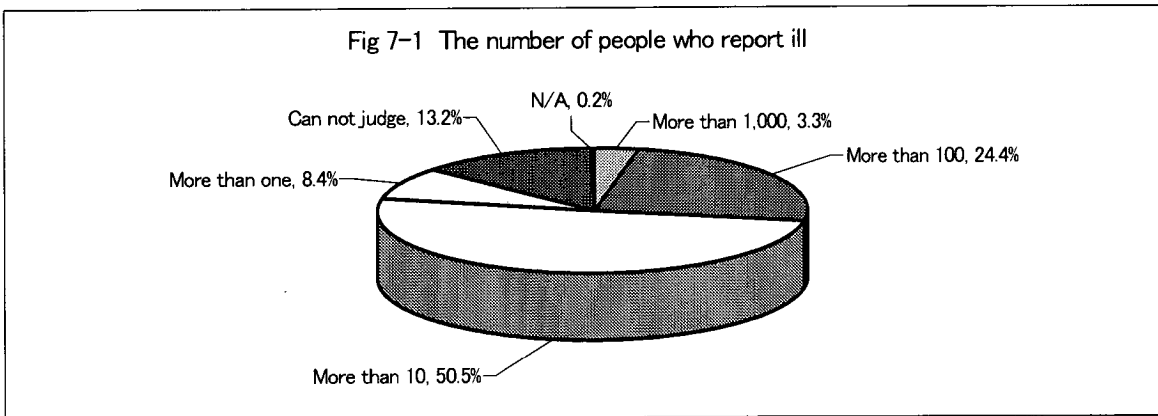
6 Carcinogens

Q6 Which do you consider carcinogens? (Multiple choice)



7 Concerns about your own health at the news of food-borne illness

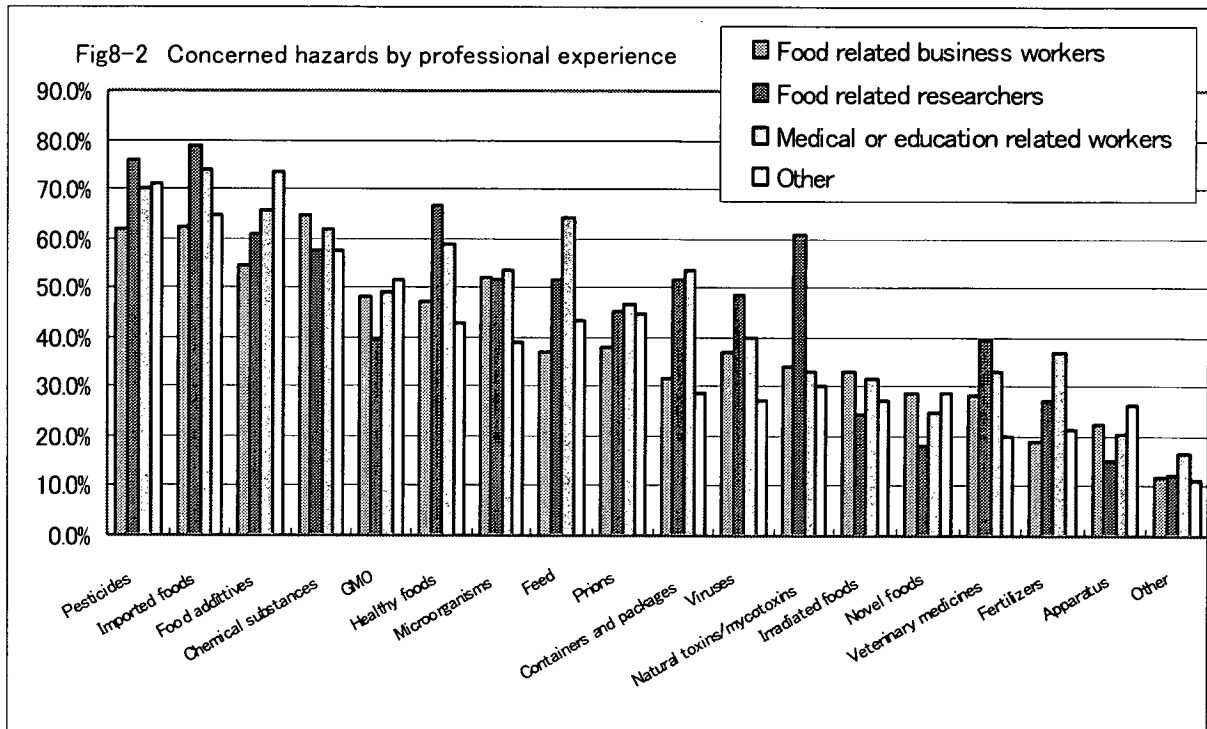
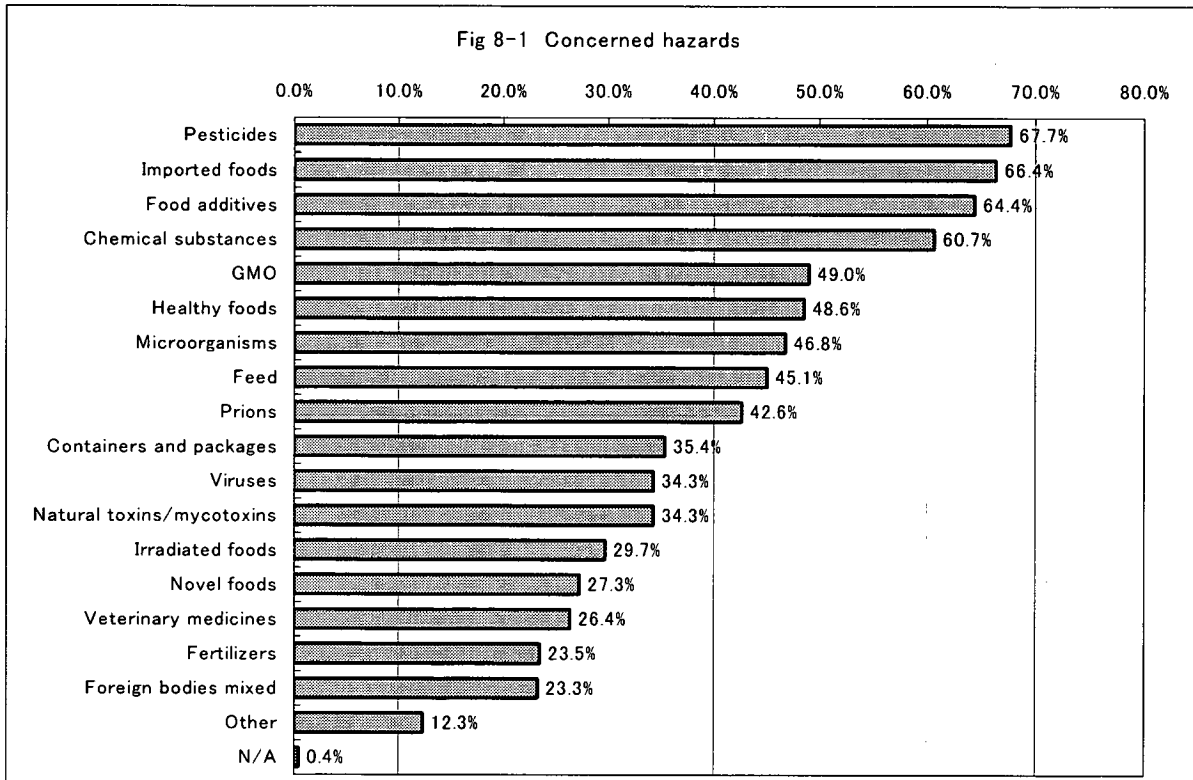
Q7 In which case do you worry about your own health when you hear news of a food-borne illness? Please choose one for each case: the number of people who report ill and the death rate of the illness. (One choice)



2 Food-borne Hazards

8 Concerned hazards

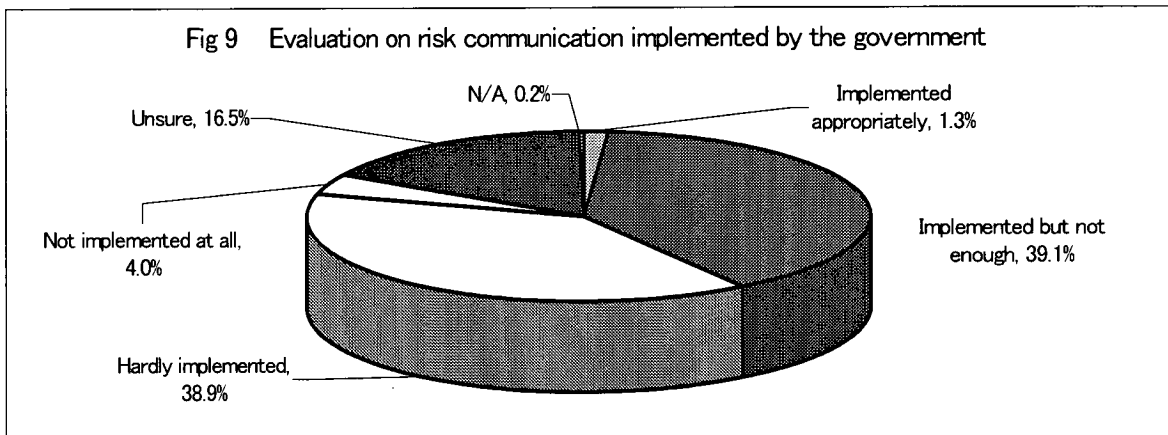
Q8 Which hazards do you find yourself worrying about? (Multiple choice)



3 Risk Communication

9 Evaluation on risk communication

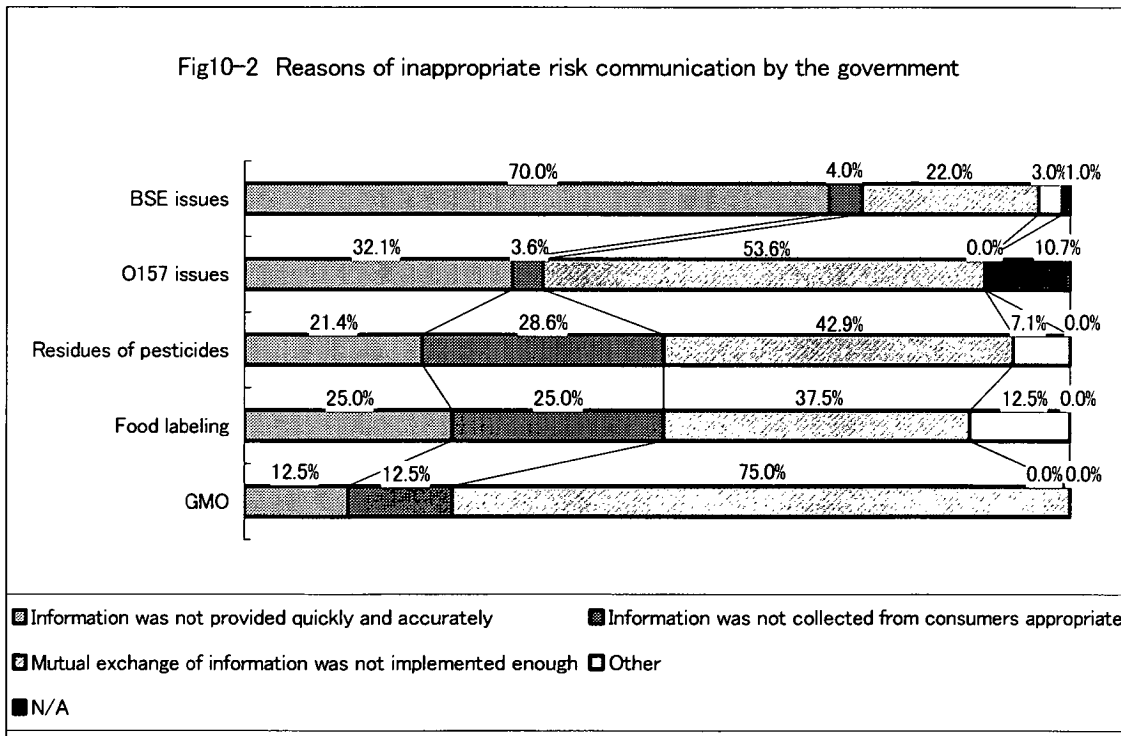
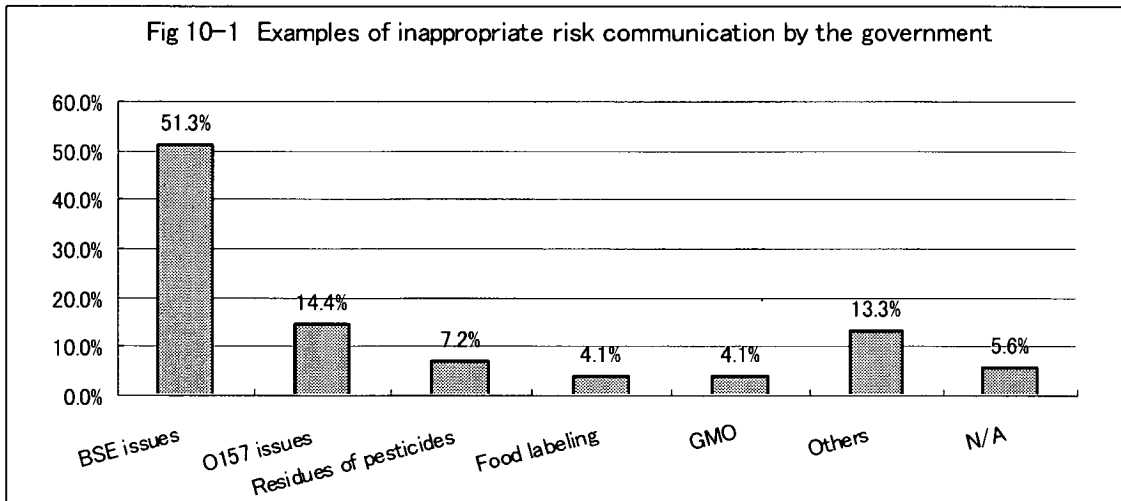
Q9 How do you evaluate the risk communication implemented by the government in terms of food safety? (One choice)



10 Examples and reasons of inappropriate risk communication by the government

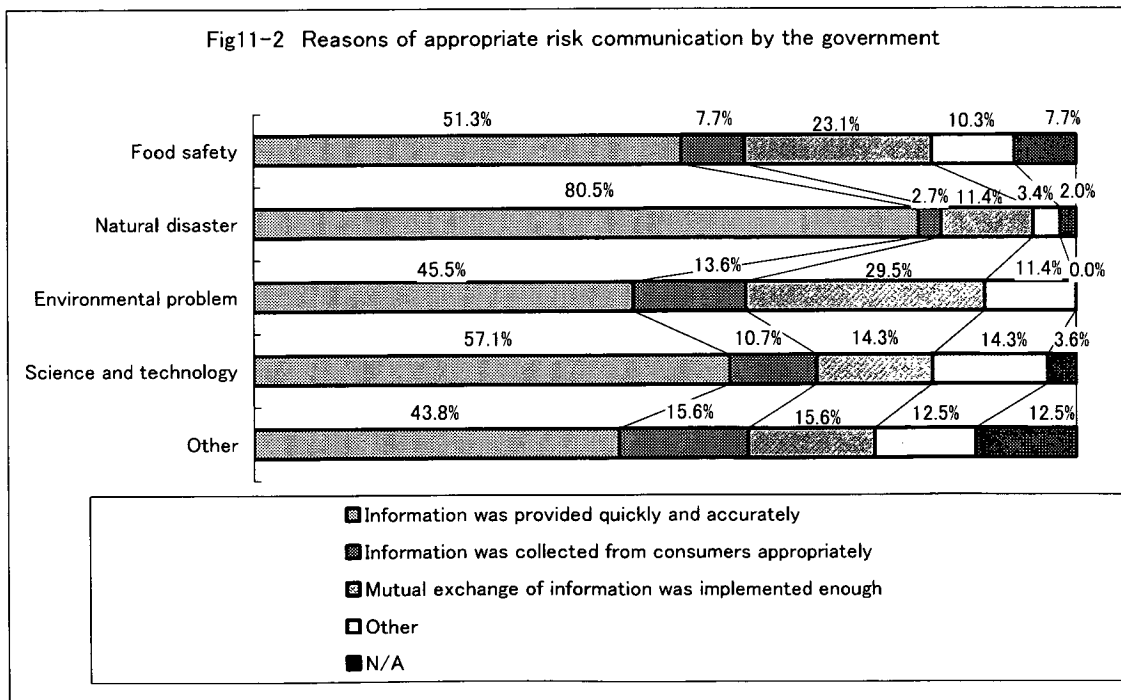
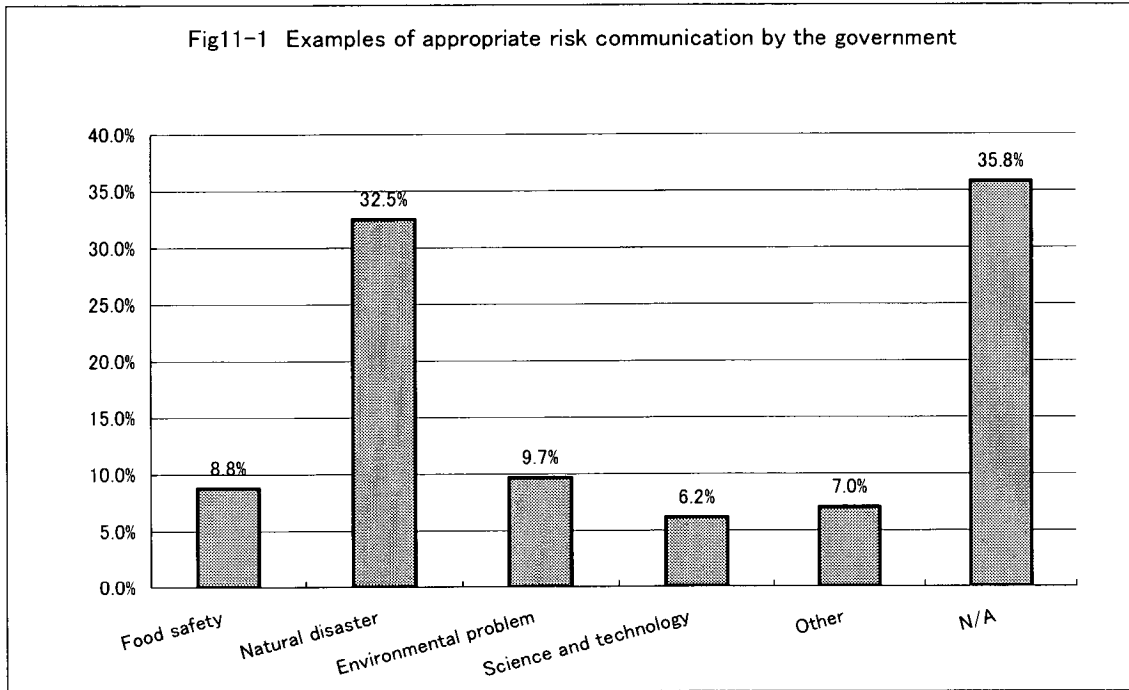
Q10 Describe an example where risk communication was *not* implemented appropriately by the government in the area of food safety. Why do you think that risk communication was *not* implemented appropriately in the example?

Only the persons who chose “Hardly implemented” or “Not implemented at all” in Q 9 may answer Q10 (the number of the sample=195) .



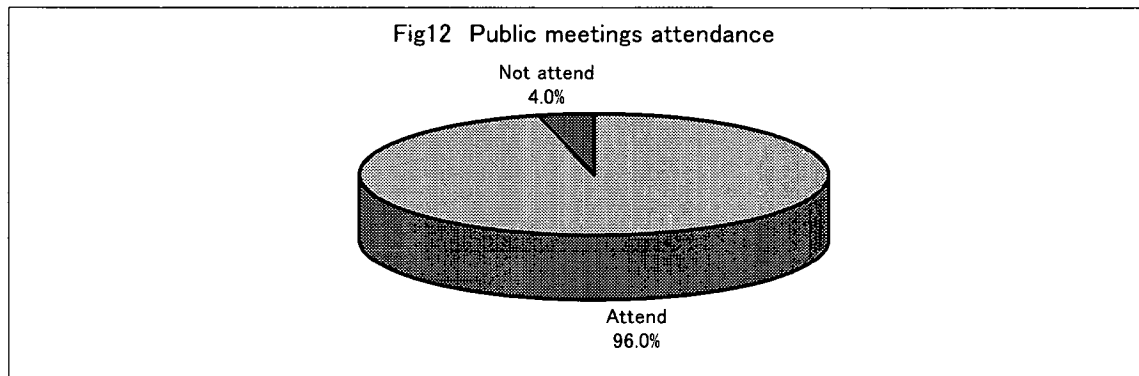
11 Examples and reasons of appropriate risk communication by the government

Q11 Describe an area where risk communication was implemented appropriately by the government, for instance, natural disasters (earthquake, typhoon, etc.), environmental problems (greenhouse effect, etc.), science and technology (nuclear power, etc.). Why do you think that risk communication was implemented appropriately in the area?



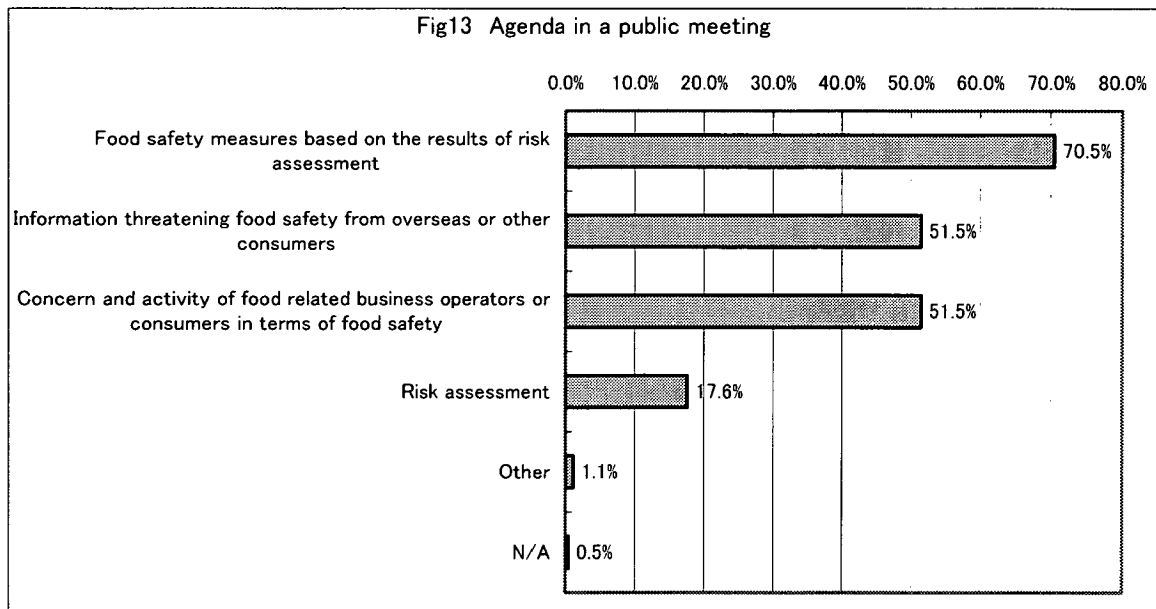
12 Public meetings attendance

Q12 Would you attend a public meeting in your residence area, where stakeholders, such as consumers, food related business workers, and civil servants gather?



13 Agenda in a public meeting

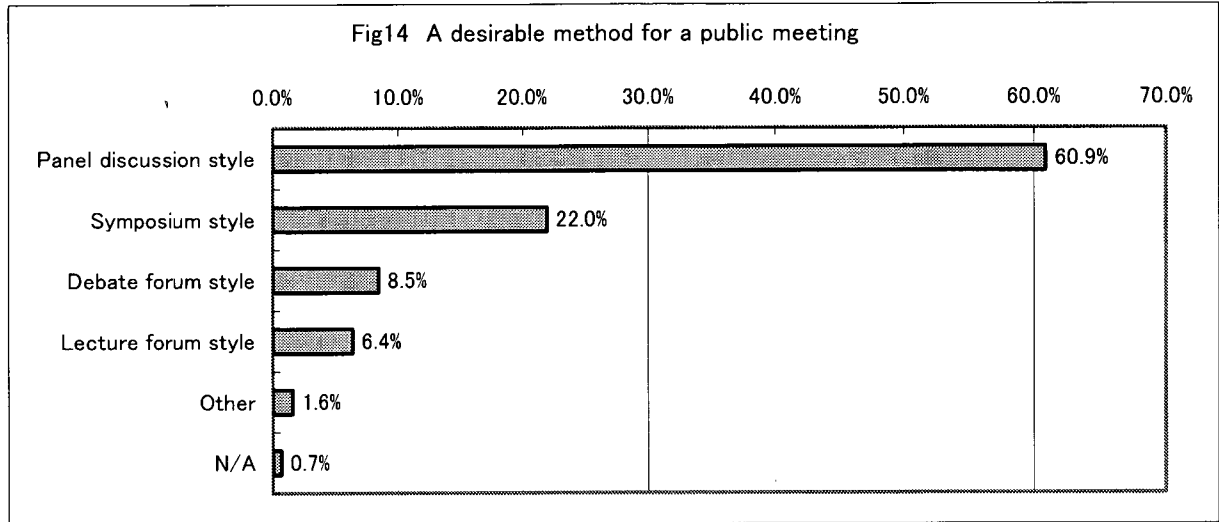
Q13 What agenda would you expect in a public meeting? (One or two choices)
Only the persons who chose "Attend" in Q12 may answer Q13. (The number of the sample=437)



14 Methodology in a public meeting

Q14 What would you think is the best method to organize a public meeting? (One choice)

Only the persons who chose "Attend" in Q12 may answer Q14.(The number of the sample=437)



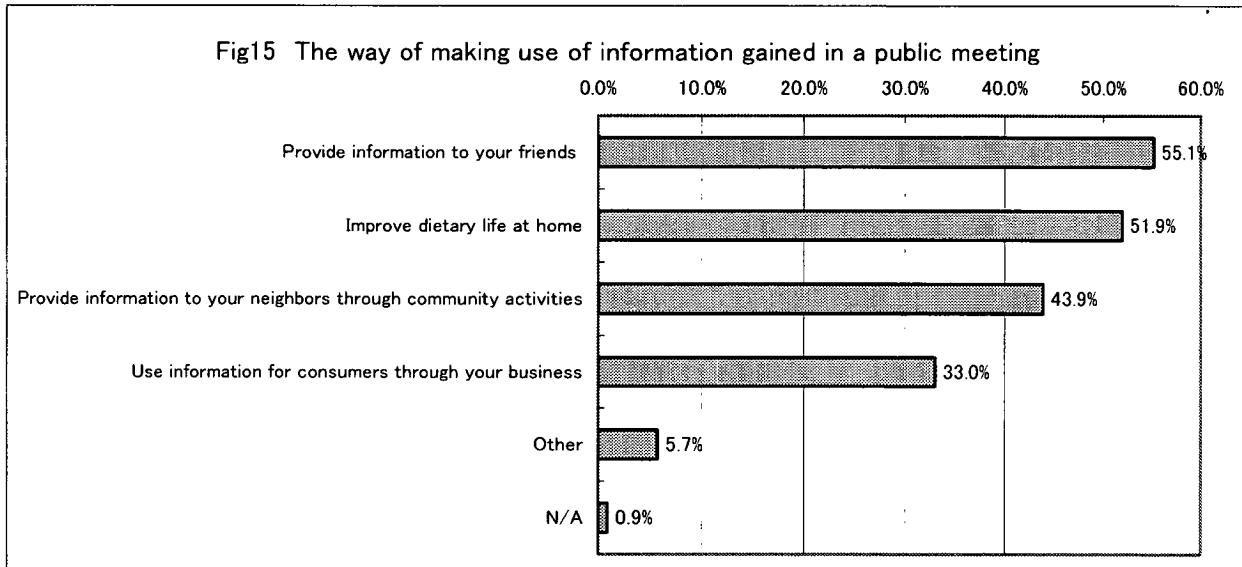
Note

Lecture forum style	After a lecture from one expert, question and answer time is opened.
Panel discussion style	After several experts announce their own opinions and debate, question and answer time is opened.
Symposium style	After several experts announce their own opinions, question and answer time is opened.
Debate forum style	After representatives divided into two groups debate, question and answer time is opened.

15 The way of making use of information you gained in a public meeting

Q15 How would you make use of information you gained in a public meeting? (One or two choices)

Only the persons who chose "Attend" in Q12 may answer Q15.(The number of the sample=437)



16 The way of risk communication other than a public meeting

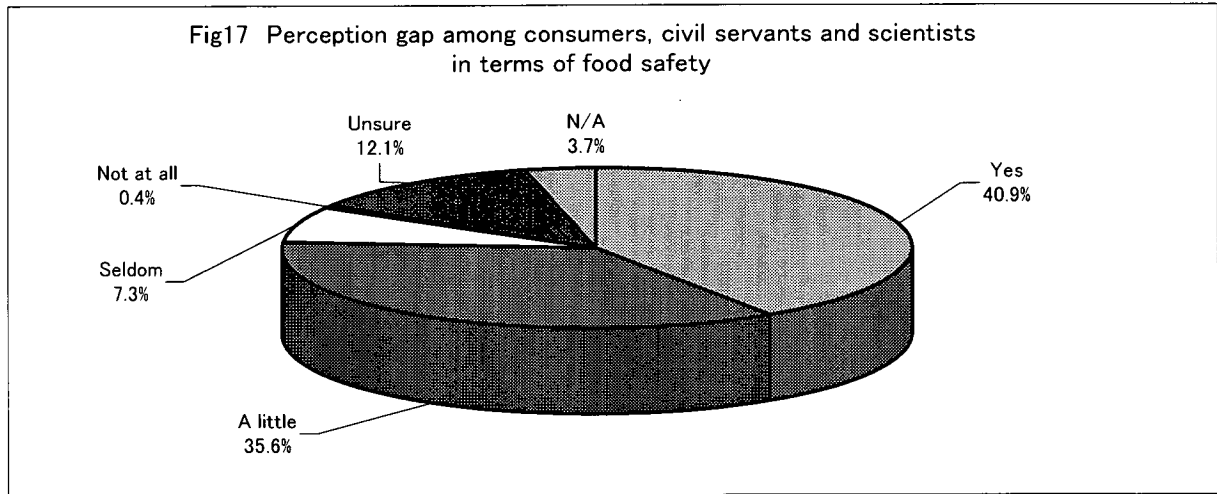
Q16 What is the alternative way to implement risk communication? (Describe)

Only the persons who chose "Not attend" in Q12 may answer Q16. (The number of the sample=18)

- Provide information through newspapers and TV as clearly as possible.
- Provide information through the internet to people who cannot attend a public meeting
- Easier way for a consumer to give one's opinion

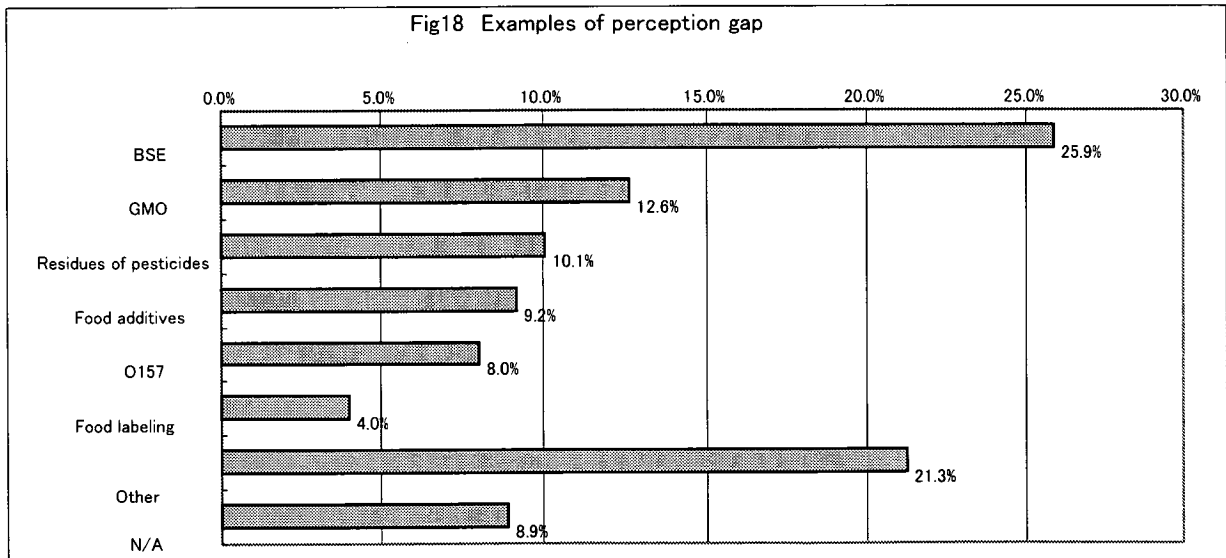
17 Perception gap among consumers, civil servants, and scientists

Q17 Have you ever felt a perception gap among consumers, civil servants, and scientists in terms of food safety? (One choice)



18 Examples of perception gap

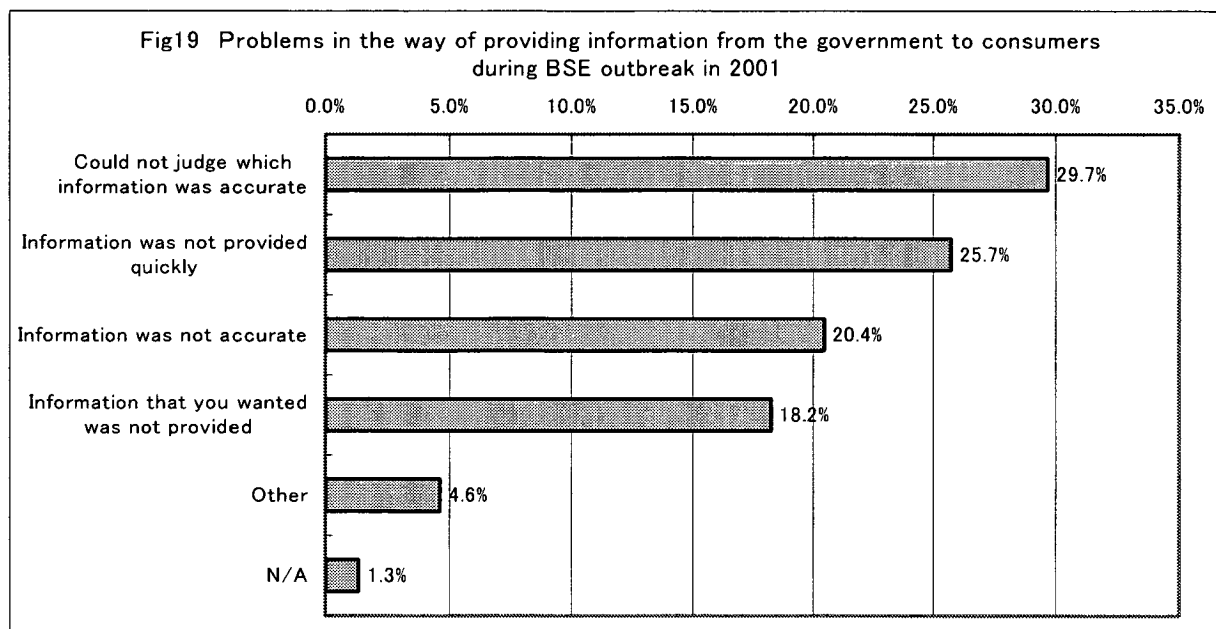
Q18 Describe an example of perception gap.
Only the persons who chose “Yes” or “A little” in Q17 may answer Q18. (The number of the sample=348)



4 Emergency Responses Toward Food Safety

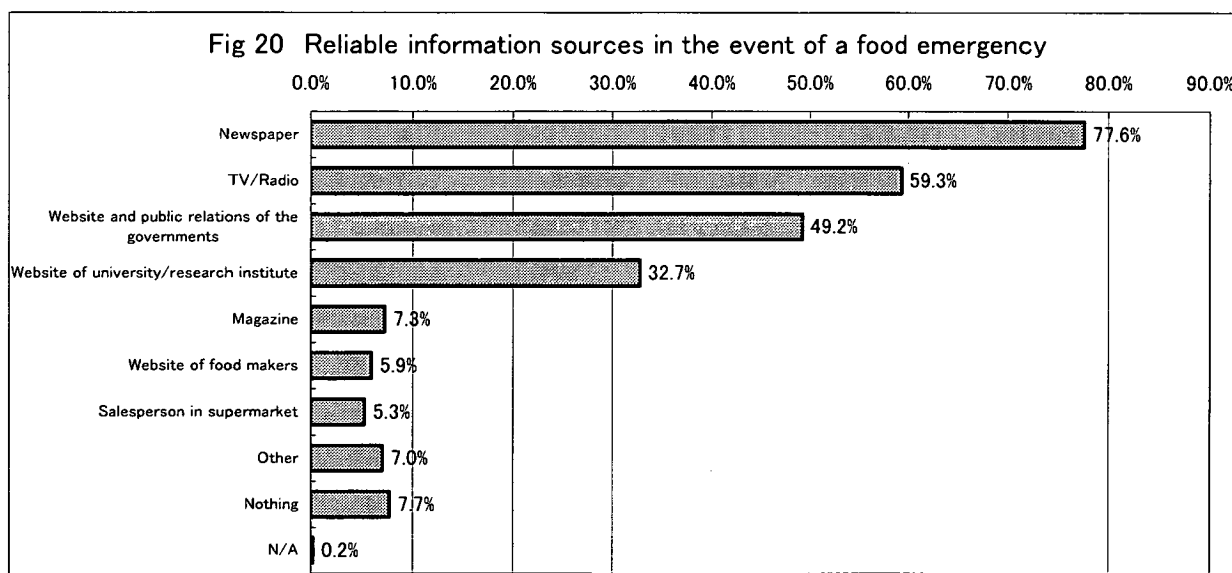
19 Information dissemination from the government during the BSE outbreak in 2001

Q19 What was the problem in the way of providing information from the government to consumers during the BSE outbreak in 2001? (One choice)



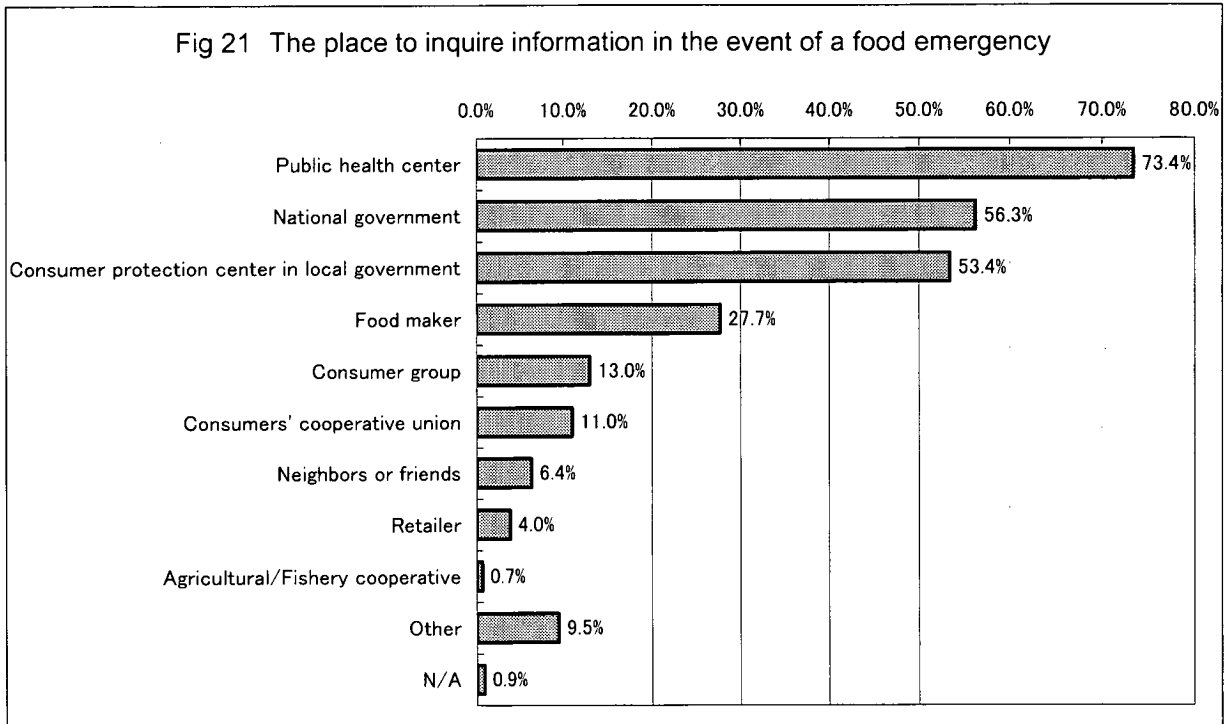
20 Reliable information sources in the event of food emergencies

Q20 What would be reliable information sources in the event of a food emergency? (One, two or three choices)



21 The place to inquire information in the event of food emergency

Q21 Where would you inquire information in the event of food emergency? (One, two, or three choices)



The Record of Risk Communication Training Courses for the Officers at the Food Safety and Consumer Affairs Bureau of the Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries

	Training/seminar	Date	Objectives and contents of training	Lecturers
1	Training for risk communication on food safety	August 2002	Office chiefs or assistant division chiefs in charge of risk management and risk communication learn the basic concepts and practice making press releases and press presentations (lecture and practice)	<ul style="list-style-type: none"> · Mr. Kinoshita, Rector of Koshien University and 4 other persons · Mrs. Yamada, Director for International Affairs (Food Research), National Food Research Institute
2	Seminar for officers in charge of the administration and consumer counseling at Regional Agricultural Administration Offices	May 2003	Officers in charge of the administration and consumer counseling at Regional Agricultural Administration Offices learn the basic concepts (lecture)	<ul style="list-style-type: none"> · Officers in charge of risk communication at the General Food Policy Bureau
3	Expected chief of the Consumer Affairs Division of the District Agriculture Offices	May 2003	Expected chief of the Consumer Affairs Division of the District Agriculture Offices learns the basic concepts and practices of providing plain information (lecture and practice)	<ul style="list-style-type: none"> · Mrs. Tsuchiya, Chief Scientist at Central Research Institute of Electric Power Industry · Officers in charge of risk communication at the General Food Policy Bureau
4	Economic planning training; an introduction to risk communication	July 2003	Assistant division chiefs at the Food Safety and Consumer Affairs Bureau learn the basic concepts and practice making press releases and press presentations (lecture and practice)	<ul style="list-style-type: none"> · Mr. Kinoshita, Rector of Koshien University and 4 other persons

(Reference 12)

5	Seminar for Cadres of the Food Safety and Consumer Affairs Bureau	August 2003	Bureau head, division and office chiefs learn necessary attitude and points of concern, and exchange ideas on what the State should do (lecture & idea exchange)	· Mr. Kinoshita, Rector of Koshien University
6	Seminar for Cadres of the Food Safety and Consumer Affairs Bureau	August 2003	Bureau head, division and office chiefs exchange ideas regarding attitude and points of concern with FDA reports as the subject.	· Mrs. Yamada, Senior Coordinator at the Food Safety and Consumer Affairs Bureau
7	Seminar for general aides and so on of Food Safety and Consumer Affairs Bureau	September 2003	General aides and so on learn the basic concepts, points of concern and how to create easy-to-understand materials.	· Mr. Taniguchi , Senior scientist, and Mrs. Tsuchiya, Chief Scientists at the Central Research Institute of Electric Power Industry